星の雫～太陽の愛　月の恋～

玉紀　直

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
星の雫～太陽の愛　月の恋～

【Ｎコード】
Ｎ６８９３Ｇ

【作者名】
玉紀　直

【あらすじ】
彼女の心には「月」が住んでいる。――小児科医として個人病院に勤め始めた尊は、そこの一人娘でナースである真理に一目惚れをする。やがて尊の想いは通じ、二人は交際を始めるが、真理は体は許しても、決して心は許さなかった・・・。――「太陽」は今でも「月」を愛し続け、「月」は今でも「太陽」を見守り続けている・・・。もう決して結ばれる事の無い愛に縛られた真理の周りで、彼女を想う３人の男達が星の様にめぐる。・・・「太陽の愛月の恋」の「続編」です。真理は、新しい愛を見つける事が出来るのでしょう

か?前作を読んでいなくても解かるように進めて行っていますので、
ご安心下さいね。

プロローグ

「月が綺麗・・・」

雲ひとつ無い、夜空。
星が輝くその空で、ひときわ美しく輝く月。

霞の無い、きれいな、月。

カーテンが引かれていない部屋の窓から、彼女はその月を見上げ、微笑んだ。
何かを愛おしむような、大きく綺麗な瞳。
まるで何かを月に問い掛ける様に、コクッと小首を傾げると、彼女の肩の上で切りそろえられ、顔の輪郭に沿って綺麗にシャギーが入った、彼女自慢の黒髪がさらっと揺れる。

――――真理・・・。

月を見上げる彼女の耳に、「声」が響く。

――――愛してるよ・・・。

彼女は幸せそうに笑顔を作る。
「太陽のような」笑顔。
今でもたった一人の為に向けられる、彼女の最高の笑顔。

「正臣・・・」

幸せそうな声で囁く。

そして、彼女が腰を下ろすベッドの上で、小さな寝息を立てている小さな男の子に目を移した。
男の子は、彼女のたった一人の息子。
起きている時に見せる、くりくりっとした大きな瞳は彼女に良く似ている。
しかし、笑った時の顔や、ちょっと拗ねて怒った時の顔は、「彼」にとても良く似ている。
彼女は、それを見ていると、たまに切なくなる時があった。

彼女――立花真理（たちばなまり）は２２歳。
高校３年生の時に、一人息子の真臣（まさおみ）を身ごもり、卒業してすぐの４月に産んだ。
父親が開業医で、母親が看護師。その環境柄、真理も出産後に学校へ通い、看護師の資格を取り、父親の病院でナースとして働きながら女手ひとつで真臣を育てている。
・・・とは言っても、実家住まいで両親と同居だ。「女手ひとつ」という言葉は少々当てはまらないかもしれない。

真臣の父親は、真臣が産まれる前に死んでしまった・・・。

「パパが、見てるよ・・・」

真理はそう言って、眠る真臣の髪を撫でる。
そしてもう一度、月を見上げて微笑んだ。

――真理・・・。

その声を、幸せそうに聞きながら。

プロローグ（後書き）

こんにちは。玉紀　直です。
今回、玉紀の作品を初めて読むという方、初めまして！
読んだ事がある、という方、今回も有難うございます！

タイトルやあらすじにもありますが、この「星の雫」は、以前玉紀が書いていた「太陽の愛　月の恋」という物語の「続編」です。
多分そちらから続けて読んでくれている方がほとんどだとは思いますが、そちらを読んだ事がないという方にも、まったく別の物語として読んで行って頂けるように書いていこうと思っていますので、安心して読んでくださいね。

さて、ちょっと訳あり風の女性、真理。
月に話しかける彼女。
彼女の行動。彼女の中に響く「声」。
これから色々な出来事を交えて、その意味や彼女の過去が明かされていきます。

読んで下さっている皆さんに楽しんでいただけるように、頑張って書いていきますので、どうぞよろしくお願いします！

今回はプロローグなので少々短めでしたが、次回からは3倍か4倍くらいの長さになります。「メイン」になる「彼」が登場します。
次回は、4月21日更新です！

では、次回！

1　星がひとつ・・・

「じゃぁ、週明けからお願いしますね」
その言葉と共に笑顔が向けられた瞬間、彼、園居（そのい）　尊（たける）は、必要以上に大きな声を張り上げ、驚くほどに張り切って返事をした。
「はいっ！よろしくお願いしますっ！！」
椅子から転げ落ちてしまうのではないかというような体勢にまで頭を下げる。本当に前のめりになってしまい、椅子から落ちそうになった。
逆に今、彼を面接していたこの小児科の院長、立花正孝（まさたか）の方が焦ってしまう。
「だ、大丈夫かい？園居君」
「は・・・はい、すみません」
頭を押さえ、照れ笑いをしながら椅子に座り直す。
心配そうに見ている院長の横で、彼の妻の真澄（ますみ）がクスクスと笑っていた。
病院の看護師用の制服を着ている。どうやら夫の病院でナースとして一緒に働いているらしい。
医者の夫と一緒に、ナースとして妻が同じ職場で働いているのって、何かいいなぁ・・・。自分の理想にちょっと近い院長夫婦。尊は何となく嬉しくなる。
個人病院の立花小児科医院。
尊が通された院長室は、シーンとしていて壁にかけられた時計の音だけが部屋中に響き渡っていた。
実際、もう病院の診療時間も終わっている。病院中がシーンとしているといっても過言ではないのだ。
「でも、本当にいいのかな？君みたいに優秀な人に、ウチの病院なんかに来てもらって」
正孝は、手に持っていた履歴書や職歴書、紹介状などをテーブル

の上へ置き、少々申し訳なさそうに尊を見た。
「今まで君が居た、大学病院の小児科と違って、ウチは小さな個人病院だ。今までのように最新医療に取り組めるわけじゃない。君のように『これから』がある青年を、ウチなどに置いておいていいものか・・・」
　すると尊は、また椅子から滑り落ちてしまいそうなくらいグッと身を乗り出して、力強く、文字通りの「力説」を始めた。
「俺、いえ、自分は、小児科の医者になろうって決めた時から、地域に密着した、子供に親しまれる医者を目指していました。けれど、大学病院のような大きな所ではそれは不可能なんです。・・・立花院長の評判は存じています。とても子供に親しまれる優しい先生だって。ですから、院長の学友である教授に、院長の病院でもう一人医師を欲しがっていると聞いた時、是非自分を推薦してください、と頼み込んだんです！」
　そこまで言ってから尊は、少々照れるように頭を掻いた。
「まぁ、自分のような若輩者が、どれだけ院長のお役に立てるか・・・解りませんが・・・」
　尊があまりにも頑張って力説するので、真澄はクスクス笑いながら、苦笑いをする正孝の肩に触れた。
「一生懸命な方で良かったじゃない？ねぇ、あなた」
「ああ。そうだな。正直、私一人じゃ辛い時もあってね。よろしくお願いするよ」
　正孝にそう言われて、照れつつも尊が大きく頷いた時、
「お父さん、まだ終わらないの？！」
　ノックも無しに、いきなり院長室のドアが開き、一人の女性が飛び込んできた。
　しかし彼女は、椅子に尊が座っているのを見付けると、慌てて口を手で押さえる。
「あっ・・・ごめんなさい。・・・お客様だったの？」
　１５０センチくらいしかないであろう小柄な女性。年のころは２

0~22歳くらいだろうか。肩の上で切りそろえられた綺麗な黒髪が、慌てる彼女の顔の横でサラサラと揺れている。
「真理っ。ノックぐらいしなさいっ」
真澄が咎めるように声を上げるが、正孝は「いいから」と手で妻を制した。
「真理。ちょっとこっちへおいで」
申し訳なさそうに肩をすくめる彼女、真理を手招きして自分の横に立たせると、正孝は、突然の来訪者に目を丸くしている尊の方を向いた。
「園居君。ウチの一人娘の真理だ。今22歳でね。ウチの病院で働いている」
「あっ、はじめましてっ！」
いきなり紹介されて驚いたが、尊は慌てて立ち上がり真理に向かって頭を下げた。
「園居尊です！これから、こちらでお世話になります」
「え・・・？これから、って・・・？」
真理が不思議そうに正孝の顔を見る。
「新しい『先生』だよ。もう一人、医師を増やしたいと言っていただろう」
正孝の目の前に置かれていた履歴書を取り上げて、真理はしげしげとそれを眺めた。
「園居尊さん。27歳。・・・えーっ、大学病院にいらっしゃったんですかー？凄いですね」
真理は顔を上げてニコッと笑う。尊はそれを見て、ドキッとした。
「入った大学の系列病院だったし、小児科希望が自分だけだったんで、それで残れたんですよ。・・・そんなに、凄くはないです・・・」
「そんな事無いです。凄いですよー。頭良いんだー。私、高卒で看護学校に行っただけだから、尊敬します」
お世辞ではなく素直な口調。無邪気に笑う笑顔が、眩しいくらい

に可愛らしい。
「いい人が来てくれて、良かったね。お父さん」
真理のそう言われて、正孝がちょっと寂しそうに笑う。
「・・・そうだな、いつまでも私一人じゃ、やっていけないしな・・・」
尊はさっき、正孝が真理の事を「一人娘」と言った事を思い出し、跡継ぎになるような子供が居ないんじゃ大変だよな、と感じた。
院長夫妻は優しそうで感じがいい。おまけに娘は明るくて可愛らしい。
大学病院では、毎日の忙しさと複雑な人間関係に追われ、自分のやりたい、医者としての仕事が出来ていない気がしていた。
ここなら、本当にやりたい仕事が出来るかもしれない・・・。
尊は何となくわくわくした気持ちと、何故かドキドキしている気持ちを胸に、もう一度頭を下げる。
「よろしくお願いします！」
すると、真理が尊の前まで歩み寄ってきて、同じくぺこりと頭を下げた。
「こちらこそ。よろしくお願いします」
わざわざ自分の前まで来て頭を下げた真理に驚いて、頭を上げると、真理も頭を上げ、自分よりはるかに背が高い尊を見上げた。
「園居先生は、背が高いんですね」
「あ、はい・・・１８０くらいあるんですよ。３兄弟の３番目なんですけどね。兄貴達よりでっかくなっちゃって・・・」
大きくくりっとした真理の目が、一瞬寂しそうに細まった。「え？」っと思ったのも束の間、すぐに真理はまた眩しいくらいの笑顔を作り、からかうように人差し指を立てる。
「病院に来る、若いお母さん方にもてますよー。きっと。・・・今まで『おじいちゃん先生』だったから。こんなに若くてかっこいい先生が来たらー」
「おいおい真理。『おじいちゃん』はないだろう」

真理の言葉に正孝が反論すると、肩を竦めて真理は笑う。
「あら。だって、本当に『おじいちゃん』でしょっ」
院長、５０歳前後くらいだろうから、まだ「おじいちゃん」でもないと思うけど・・・。
そんな事を考えながら、尊の目はずっと、真理を追っていた。

眩しい笑顔。
暗い雰囲気も全て吹き飛ばしてくれそうな・・・。
明るい笑顔を浮かべる真理。

そんな真理から、尊はずっと、目が離せなかった・・・。

星がひとつ

太陽に、魅せられる・・・。――――

1　星がひとつ・・・（後書き）

こんにちは。玉紀　直です。
小児科医として立花小児科へやってきた尊。
一人娘の真理が、気になり始めます。
会ったその瞬間から。
もしかして一目惚れでしょうか？

出会った二人。
さぁ、二人はこれからどうなっていくのでしょう？
次回は、早くも尊が真理の事で悩み始めます。
だって、彼女には・・・。

次回の更新は４月２５日。

では、次回！

2　ショックな事実

「はいー、泣いてるお顔、パシャって撮っちゃうぞぉ」
デジカメを覗きながら立花真理がそう言うと、画面の中でずっと泣き顔を見せていた男の子は、驚いた表情を作り、パッと泣き止んだ。
泣きやんだ隙に先輩ナースの、柳田美鈴が男の子の腕に素早く注射針をプチッと刺す。
「はい、終り」
子供の注射はほんの一瞬。しかし子供にとっては、その一瞬が何より怖い。
それが予防接種であろうと、病気治療の為のものであろうと何だろうと、注射は注射。怖いものは怖い。
立花小児科では、注射を怖がって泣く子供に、カメラを向けて気を逸らすという「騙し手」を良く使う。もちろんそういう事にうるさい親も居るので、予め(あらかじ)親の許可は取る。
数年前からこの病院で行われている「名物」で、１００％成功する訳ではないが、それでもカメラを向けられて、条件反射的に笑ってしまう子供、みっともなく泣き叫ぶ顔を撮られてたまるかと泣くのをやめる子供、など、さまざまだ。
「よく頑張ったね。はい、シール」
注射の後にもらえる「ご褒美シール」。これも、子供達の楽しみだ。
美鈴に新幹線のキャラクターが付いたシールをもらってニコニコしている男の子に、真理が屈んで今撮った画像を見せる。
「ほらー。泣いてないよー。偉かったね。お写真欲しい？」
さっき泣いていた顔などどこへやら。男の子がにっこり笑って頷くと、真理は男の子の頭を撫でながら、この立花小児科のもうひとつの「名物」である笑顔を向ける。

「じゃぁ、帰りにお写真にしたやつ、あげるからね」
そう言ってから、母親に「お会計の時に一緒に渡しますね」と伝える。もちろん完全サービス。プリント代を取ったりはしない。
注射が立て込んで処置室が忙しい時などは、そのまま事務に回してプリントしてもらうのだが、ちょうど今の子で、注射も本日の患者も終わり。真理は「プリントしてきまーす」と美鈴に言って処置室を出た。
その光景を、ずっと感心するように見ていたのは、勤務して3日目の園居尊だった。
「いいアイデアだよね。誰の発案なの?」
そう言いながら、道具を片付ける美鈴に歩み寄る。美鈴は首を傾げて考え込む仕草をした。
「さぁ・・・?私が入ったのは5年前だったけど、その時はもうやっていましたよ」
「へー。じゃぁ、院長かな?やっぱり」
「院長の身内・・・。って、聞いた事がありますけど・・・」
そう言いながら、さっき真理が出て行った、事務室へ繋がるドアのほうへチラッと目を向ける。
あっ、真理さんのアイデアなのかな?そうだよな、何か機転の利きそうな人だし。
何となく真理の事を考えると、顔がほころぶ。
尊は真理を、最初に会った時も明るくて可愛いな、とは思ったが、実際職場でも彼女はとても明るく、子供達にも優しい。
病気の子供でも元気になってしまいそうな明るい笑顔で誰からも好かれ、「太陽みたいな看護師さん」と子供達に懐かれている。
真理の笑顔は、「立花小児科」の名物だ。
やっぱ、あの院長の娘さんだもんなぁ。感じも良いし、子供にも好かれるし。
すっかり、真理を見る時の自分の目が好意的なものになってしまっている事に、尊自身も気付いている。

実際この3日間、新しい職場、という事を除いても、病院に来るのが楽しみでしょうがない。
ここに来れば、真理に会えるから。
・・・本当に俺、一目惚れしたのかな・・・。
真理の笑顔を思い出して口元をにやけさせていると、美鈴にジーッと不思議そうに見られ、ハッとしてちょっと表情を整える。
「え・・・と、柳田さんは、5年もここに居るの？」
「ええ・・・。あっ、スイマセンネー。真理ちゃんみたいに若くなくてっ」
何か悟ったような、少々嫌味の混じる口調。尊は苦笑いをして片手を振った。
「何言ってんの。25歳なんてまだまだ若いよ。柳田さん、綺麗だから、結婚もしないで5年も看護師として勤めているなんて偉いなーって思ってさ」
すると美鈴は、両手を腰に当て、更に責めるように尊を見上げた。
「私、ここに来る前、違うところに1年間いたんで、26なんですー。すいませんねー。結婚もしてなくてー」
「いやっ・・・あのっ・・・その」
尊は焦る。20代の中間地点。25歳を過ぎた頃といえば、まだ若いながらもボチボチ「結婚」の文字を周囲から意識させられる年齢だ。特に女性は。
とっ、歳の話なんてするんじゃなかった！
「あーあ、私も結婚しないで子供だけでも産んどくんだった。そうしたら親だってうるさくなかったのにっ」
「何言ってんの！駄目だよ、未婚の母なんて！子供が可哀想だよ！」
尊が思わずそう言うと、美鈴は「え？」と眉を寄せる。
「だって、あの子だって・・・」
そう言いかけた瞬間、
「みすずちゃーん」
どこからか可愛い子供の声。

尊が声のしたほうへ目を向ける。中待合室から続く処置室のドアの前に、小さな男の子が一人立っている。

歳は4~5歳といったところか。黒目が大きく、瞳が可愛らしい男の子だ。

美鈴の事を名前で呼びかけていた。喘息(ぜんそく)か何かでよく通ってくる常連組なのかもしれない。

尊はそう思って、男の子の前に屈み込むと、子供用の笑顔で話しかけた。

「ぼくは、今来たの?おかあさんは?」

さっきの注射の子で今日の患者は終わりかと思っていたのだが、終了ギリギリで入ったのだろうか?すると男の子は、尊の顔をジーッと見て、

「おじさん、だれ?」

と、子供らしく(?)あからさまに嫌そうな声で訊いてくる。

おじさんと言われては少々へこむが、所詮子供の言う事。気にしてもいられない。

尊は自分が着ている白衣をつまんで、めげずにニコッとした。

「この病院の新しいお医者さんだよ。宜しくね」

「ふーん。おじいちゃんが言ってた人だ」

おじいちゃん?院長の事かな?本当に子供達に「おじいちゃん」って呼ばれているんだろうか?

すると男の子は、尊を無視して美鈴の傍へ駆け寄り、彼女の薄ピンクのナース服のスカートを引っ張った。

「みすずちゃーん。ママはぁ?」

「ママなら、もうすぐ戻ってくるよ。待ってる?」

訳が解らないまま、尊がその光景を見ていると、

「真臣(まさおみ)?!」

という声がして、事務室から戻ってきた真理が、男の子の傍へ駆け寄った。

「どうしたの?おじいちゃんのお部屋で待ってなさい、って言った

でしょ？」
「ぼく、もうあきたー。ねー。かえろーぉ」
「もう少し待ってて。もうすぐ終わるから。ねっ？」
「やぁだぁー。かえろー。ねぇー」
男の子が真理の腕を引っ張る。真理が困った顔で男の子を抱き上げた。
「あの・・・真理さん？その子・・・」
真理さんに「帰ろう」ってごねるって事は、親戚の子か何かかな。
何気なく訊いた言葉に返ってきたのは、尊の思考が止まってしまうほどショックな物だった。
真理は困ったように照れ笑いをしながら、
「私の息子です」
・　・・え？
「たちばな　まさおみ。ですっ！」
男の子、真理の一人息子、真臣は、真理に似た可愛らしい笑顔で、しっかりと自己紹介をした。
・・・むすこ・・・？
え？
こっ・・・子持ちぃぃ？？！！！

2　ショックな事実（後書き）

こんにちは。玉紀　直です。
何となく真理の事が気になって、病院へ来るのが楽しくなっていた尊。
しかし、いきなりの事実に大ショック！
そう、彼女には子供がいるのです。
「子持ち」と思って諦めるか？
それとも・・・？

次回はもう一人、
真理に淡い想いを寄せる青年が登場します。
読んでくれている大半の方は、この青年を知っていると思いますよ・・・。

次回は４月２８日更新！

では、次回！

3　もうひとつの星

「おにぎり一個、ゆで卵、チョコ、お茶。・・・って、何?!この昼ごはん!!」

レジカウンターの中にいた青年は、ちょっと怒った顔で、目の前に立つ真理を見る。

「完全な栄養不足じゃん!」

「卵は『完全栄養食品』だもん」

と、子供の朝御飯に卵かけご飯をひとつ与えて手抜きをする母親のような事を真理が言うと、青年はカウンターの下から野菜サラダのカップを1個取り出し、おにぎりの横に置いた。

「はいっ、ビタミン追加っ」

「あー!お客さんにそういう事していいの?コンビニの店長がっ!」

「店長だから良いの!大体昨日だって、サンドイッチにヨーグルトにストレートティー。って!ダイエット中?おねーさんっ!」

「秋光君ヤラシー!いちいち人が買った物、覚えてるー!」

「心配してんの!看護師さんは忙しいんだから、栄養採んなきゃダメだよっ!」

すると真理は、むっとした顔で手に持っていた小銭入れをグイッと、青年、工藤秋光(あきみつ)の前へ突きつける。

「サラダ買えるだけ、お金持ってきてないもんっ」

「チョコやめなさい」

「やだっ。今日、幼稚園に真臣迎えに行って帰ってくる時、一緒に食べるのっ」

「真臣と?」

その名を聞いて秋光は少々考え込み、「仕方ない」と言うように息を吐く。

「じゃぁ、サラダサービスするから。食べなさい」

「じゃぁ、食べる」

真理がニコッと笑う。秋光はその笑顔にちょっと見惚れてから、おもむろに商品を袋へ入れ始めた。

「ホント。お姉さんのお陰で、ウチのコンビニ潰れるよ」

「あら？だって、秋光君が勝手に入れるんじゃない。バナナとか牛乳とか」

「お姉さんの無茶苦茶な食生活を心配してんの！たまに、プリンとジュースだけ。みたいな訳の分かんない時もあるだろ。・・・ったくぅ。小遣い制のサラリーマンのお父さん方のお昼じゃあるまいし。実家住まいだから、お金節約してる訳でもないだろ」

「そう怒らないの。ほら、お詫び。新しいお客さん、連れてきてあげたから」

そう言いながら真理は、今までの自分たちのやり取りを、後ろでお茶とお弁当を片手にズーッと聞いていた尊を指差した。

「ウチの病院の新しい先生なの。園居先生。いっつも家を出た所のコンビニでお弁当買ってくるっていうから、うちの近くにもありますよって、連れて来たんだからね。感謝してよ」

「どうぞごひいきにー。お酒も置いてますから、仕事帰りもどうぞー」

秋光が商売っ気を出して笑うと、尊が「よろしく」と笑いながら、お弁当をカウンターに置いた。

１０年ほど前までは「工藤商店」という普通の小売店だった。時代の波に乗ってコンビニになりはしたが、昔からの客層は変わらず、近い事もあり立花小児科の看護師や患者などもよく利用する。

彼、工藤秋光は、ここの息子。生まれた時から住んでいるので、病院の事もよく知っている。

真理よりひとつ下の２１歳。実は高校の後輩だ。高校卒業後、実家のコンビニで働き、親がもう１店舗少し離れた場所にコンビニを出店した事もあり、彼がここの店長を務めている。

１６５センチほどの小柄な青年。商売熱心な働き者の店長で、パートやバイトからも信頼されているが、ちょっと明るめに染めた茶

髪が、なんとなく「昔の名残」を思わせる。
「そういえば、『皆』は元気？」
尊の会計をする秋光に真理が訊くと、秋光はちょっと考える。
「多分ね。俺も１０日くらい連絡とってないんだよな。・・・達は、何かもう１店舗任されることになったらしいから忙しいんじゃないかな？腱は、ほら、嫁さんが御懐妊（ごかいにん）だから。仕事終わったら直帰（ちょっき）だよ」
「そうかー。んー・・・真臣がね、最近皆に会ってなくて寂しいって言ってたの」
「真臣が？じゃぁ、連絡しておくよ」
真理の息子、真臣の名前が出てきて、秋光が慌てる。
何か、ご近所さんで仲間内の話し、って感じだけど、楽しそうだな・・・。などと思いながら、尊はずっと二人を眺めていた。

「随分店長と仲が良いんだね」
病院を戻る道を真理と歩きながら、尊は何気なく訊いた。
病院からコンビニまでは５分も歩かない。真理もお昼は毎日通うらしい。
病院と自宅は隣同士だ。真理もお昼は家に帰ればいいのでは？とも思うが、急患が来たらすぐに出られるようにと、病院の休憩室でお昼をとることにしている。
「実は高校の後輩なの。家も近いし」
「もしかして、幼馴染ってヤツ？」
「・・・私の、じゃないけどね」
ちょっと沈む、真理の声。尊は首を傾げる。ご近所で小さい頃からあの場所に住んでいるのなら、幼馴染ではないのだろうか？
そんな尊の疑問を察したかのように、真理は言葉を付け足す。
「真臣の、『父親』の幼馴染かな・・・」
尊はドキッとした。実際真理に子供が居ると知ってから、父親の

存在が気になって仕方がない。
どんな男なんだろう?仕事は何をしているんだろう?真理さんの名前が「立花」のままって事は、一人娘だから婿養子なんだろうか?
真理さんが22歳。真臣君が4歳。・・・と、すると、高校の時か、卒業して19歳になる前に産んだ事になる。
・・・と、すると、高校生の時に妊娠したって事だよな。高校生の真理さんを妊娠させた、って事で・・・。
何となく嫉妬しそうな自分に、少々困る。
いくら若くて可愛いっていったて、人妻で子持ちだぞ・・・。

――――好きになったって、しょうがないだろう・・・。

そう考えると、妙に切ない。
自分が、思う以上に真理の事を好きになってしまっている事に、情けなさを感じる。
そんな事を考え、大きな溜息が出そうになった時、病院の目の前で真理がピタッと立ち止まった。
「園居先生」
「はい?」
「・・・あの、一緒に働いているので、いつかは分かると思うんですけど、・・・だから、今のうちに言うんですけど・・・」
「は・・・はい?」
何だ?そんなに凄い事か?
尊がごくりと生唾を飲み込む。真理の大きな瞳で見詰められて、何を言われるのかと覚悟する反面、尊はドキドキして堪らなかった。
人妻で子持ちでも、やっぱ・・・可愛いものは可愛い・・・。
・・・俺、どうしよう。
そんな彼に告げられたのは、彼の気持ちを更に揺るがす一言。

「私、子供が居るけど、結婚してる訳じゃないんです」

え？

「真臣の父親。あの子が産まれる前に・・・死んだんです・・・」

「そういえば最近、真臣に会ってなかったなぁ・・・」

秋光はそう呟いて、缶ビールの口を開けた。

もちろんまだ仕事中。パートは休憩に上がらせたので、店内には彼一人。昼の忙しい時間も過ぎて、店内には客も居ない。

彼がアルコールを覚えたのは中学の時。彼にとっては勤務中に１本や２本飲んだって、酔うほどの物ではない。

中学の時、先輩にいい気になって飲まされて、足腰立たなくなったっけな。

昔の事を思い出し、秋光はカウンターに寄りかかりながら、クスッと一人笑いを漏らす。

あの時、そうだ「あいつ」が、おぶって家まで連れてきてくれた。

彼の心の中に、今はもう居ない「友人」が蘇る。

ブロンズ系の金髪。左側にグレーのメッシュ。どこか排他的で怖いもの知らず。度胸がよくて腕も立った。

オレはいつも、「あいつ」の横にくっついてたっけ・・・。

「お前、いつまでたってもちっちぇーなーぁ。牛乳飲めよ」１８０センチもあった「彼」は、かろうじて１６０センチを超えた秋光の頭の上に手を置いてよくからかった。

小中高と一緒だった。一緒にバカやって暴れてた・・・。

大切な、「友人」。

その「友人」を変えたのは、真理だった。

――お前、オネーさんに手出しすんなよ。

「友人」がいなくなってからこの４年。彼はいつも「仲間」にそう言われ続けて来た。
「・・・解ってるよ」
秋光は、ちょっと諦めたように呟く。

「あいつ」が、どんなに凄い奴だったか、知ってる。
どんなにお姉さんを好きだったかも知ってる。

どんなに二人が、愛し合っていたのかも知ってる。

だからオレが、「あいつ」の代わりになんてなれるはずがないんだ・・・。

秋光は、あっという間に飲んでしまったビールの缶を、パキッといわせながら潰した。

でも、オレは、ずっと
真理（おねえさん）さんが、好きなんだ・・・。

――太陽の傍に・・・

星が、もうひとつ・・・。――

3　もうひとつの星（後書き）

こんにちは。玉紀　直です。
ええっ！秋光かいっ？！
・・・と、前作を読んだ事がある方が叫んだかどうかはわかりませんが・・・。

真理のことがずっと好きだった秋光。
彼は、真理の「過去」を知っている男性です。
彼の想いは、「友人」に遠慮したまま終わってしまうのでしょうか？

真理の事を「子持ちで人妻」と思い込んでいた尊。
実は「未婚の母」で、相手の男は死んででしまっていると聞いて・・・。

次回の更新は5月2日。
ちょっと怪しげな方々が登場します。

では、次回。

4　真臣の「パパ」達

「・・・眠れなかった・・・」
尊は一人呟きながら、ベッドの中でよいしょっとうつ伏せになり、目の前の置時計を手に取った。
朝４時過ぎ。今からぐっすりなんて寝られるものか・・・。
夜中中、うとうとした覚えはあるが、眠った覚えはない。

――――子供はいるけど、結婚している訳じゃないんです。

昨日言われた真理の言葉が、ずっと頭から離れなかった。
結婚する前に、子供の父親が死んでしまった。と。
未婚の母かぁ・・・。結婚する前、真臣君が産まれる前だろ？・・・辛い思いしたんだろうな・・・。
うつ伏せになって頭を押さえたまま、一人暮らし１ＬＤＫマンションの床に転がったビールの大缶５本を眺める。
昨日の仕事帰り、早速例のコンビニに寄って買った。
「センセー。まさか、これ全部一気に飲むの？ダメだよー。次の日酒臭くて子供達に嫌われるよ」と、店長こと、秋光にからかわれた。
「一気になんて飲まないよ。まさかー」と、言ったものの。・・・一晩かけて、飲んでしまった・・・。
女の事を考えて、一晩中酒飲んで眠れないなんて・・・。２回目、かな・・・？
尊の少々ボーっとした脳裏に、一人の女性が浮かび上がる。
大きな目。ちょっとカラーを入れたこげ茶の髪。いつもひとつにまとめ上げて、大き目のバレッタで頭の上で止めていた。
ベッドで解くと、さらさらして綺麗で、とてもいい香りがした。

――――尊君は・・・セックスしたいだけだったんだよね・・・。

泣いているのに笑いながら、何も言えなくなっていた彼を責めた。

――――私の事、好きだった訳じゃないんだよね・・・。

「・・・ちがうよ・・・」

呟いてから、尊はむくっと起き上がった。

とりあえず頭をスッキリさせたい。足元をちょっとふら付かせながら、尊はバスルームへと向かった。

「園居先生。どうぞ」

ちょっと患者が途切れて、フーっと小さく息を吐いた時、真理が尊の前に、小さな金色の紙に包まれた四角い物を差し出した。

「チョコです。お嫌いですかぁ？疲れているみたいだから」

「いいや。好きだよ。ありがとう」

受け取って包み紙を開くが、真理がニコッと笑って一言付け足した。

「ずっとポケットに入っていたので、溶けているかも知れないですけど」

薄ピンクのナース服。スカート部分のポケットをパンパンッと叩く。

「うんっ。溶けてるっ」

尊もニコッとして、ふざけた口調で返しながらも、上手に包み紙を傾け、溶けかかったチョコを口に入れた。

「園居先生、上手ー」

真理がまるで子供を褒めるように手を叩く。そんな事で褒められると凄く照れる。が、そう言って笑う真理がまた可愛らしくて、ちょっと見惚(みと)れてしまった。

「今日は患者さん、あんまり多くないですね。とりあえずあと1時

間後くらいに、予防接種の予約が5人・・・かな・・・」
尊と真理が担当する第2診察室のドアを開けて、中待合室越しに待合室をのぞいていた真理は、いきなり「あっ！」っという声を上げた。
ん？新患でも来た？そう思いつつ尊は真理に目を移す。と、真理が嬉しそうに手を振っている。・・・常連さんの子供でも来たかな？しかし、聞こえてきたのは子供とは思えない声。
「お久し振りー。真理ネーさん」
何だぁ？！尊が慌てる。無理もない話しで、子供かと思ったその声は、何ともドスの利いた声。
しかし真理は、ニコニコしながら中待合室のほうへと出て行った。
「久し振りー。あらぁ？真臣ぃ、嬉しそうじゃない？」
え？真臣君、一緒？
「うん！だって、達パパのかたぐるま、おっきいんだもん」
たっ・・・たっ、達パパ・・・「パパ」ぁ？？！！！
なんだそれはぁ！！驚きながらも焦りながら、尊も中待合室へ出る。そこに居たのは、赤い開襟シャツに首には金のネックレス。どう見ても堅気の仕事をしている風ではない顔付きの、体格の良い男が、真臣を肩車して真理と親しげに話している。
「おっきくてねー。たかいんだよー。おもしろいのー」
「何だよ真臣っ。じゃぁ、オレのは低くてヤダってーの？」
男の横に、秋光が立っていた。ちょっと怒った顔をして真臣の鼻をキュッとつまむ。
「いたいよー。秋パパのも好きだよーぉ」
「じゃぁ、おいでっ」
秋光が両手を出すと、真臣が男の肩から手を伸ばし、秋光に抱きつく。秋光はそのまま真臣を自分の肩に乗せた。まだ幼稚園の制服姿のままの真臣が、楽しそうにキャッキャッとはしゃいでいる。
それを見ながら、真理が申し訳なさそうに男に言った。
「ごめんね、達也君。真臣を幼稚園まで迎えに行ってもらっちゃっ

て」
「いいよー。何遠慮してんだよネーさん。真臣が会いたがってるって秋光に聞いてよ。こりゃぁいけねぇと思って慌てて会いに来たさ」
「仕事はこれから？時間大丈夫？何かもう一店持たせてもらうんだって？凄いね」
「いやぁ。何か気ぃ掛けてもらえててさぁ。・・・頑張るさぁ」
「最初なんて高校生のバイトだったのにね。凄いよ。頑張りやサンだね」
真理に褒められて、達也と呼ばれた男はしきりに照れている。それを見ながら、尊は目をぱちくりさせた。
な・・・なんだぁ？この異様な光景は？真理さんが、こんなヤクザみたいな男と知り合いなのか・・・？それに・・・「パパ」って何だ？「パパ」ってぇ！
「あっ、センセー、毎度っ！」
秋光が、訳の分からない顔でこの光景を見ている尊に気付き、声を掛けた。それに気付いた達也が、尊の目の前に歩み寄る。
「どうも。秋光に聞いてますが、新しい先生だとか？」
「はい・・・そうですが・・・」
すると達也はズボンのポケットから数枚の小さな紙を出し、尊の手に持たせた。
「真理ネーさんをよろしく。これは、お近づきのしるしです。うちの新しい店の利用サービス券ですので、是非っ、いらして下さいっ」
「・・・ど、どうも・・・」
な、何だろ？バーか何かかな・・・？そう思って、名刺大のそれを見た尊は、思わず苦笑いをした。
・・・そ、ソープ？
「あー、いいなぁ園居先生っ。達也くーん、私にも頂戴っ」
「ネーさんはだめだよっ！何の券だかわかってんの？」
「どうせキャバクラのサービス券でしょ？もー、私がお酒飲めないからってぇ。ケチィ」

・・・お酒飲めても、駄目だと思うよ。尊が心の中で呟く。女性にソープのサービス券を渡す人間も居ないだろう・・・。

と、その時、慌てて息を切らしながら、男が一人飛び込んできた。作業服のようなつなぎ姿。肩にかかりそうな赤茶色の髪をした細身で背が高い男だ。

「真臣っ！」

「あー！健パパだぁ！」

秋光の肩に乗っていた真臣が、嬉しそうに手を伸ばすと、男は真臣を抱き上げて自分の肩に乗せた。

また、「パパ」？尊が固まる。

「健君、久し振りだね」

「お久し振りっス。綾はよくオネーさんに会ってるだろうけど。最近整備工場のほうが忙しくて、なかなか顔出せなくてスミマセン」

「いいのよ。一生懸命仕事しているんだもの。元気だった？綾は悪阻苦しそうにしてない？」

「はいっ。でもたまに機嫌悪くて八つ当たりされるッスよー」

「悪阻の時はしょうがないのよ。勘弁してあげてね」

「はいっ。・・・あっ、そうだ、秋光っ！」

肩に乗っかって、自分の赤茶の髪で遊んでいる真臣をゆすりながら、健は目の前の秋光に向かって渋い顔を作る。

「お前っ！コンビニの軽トラで暴走すんのやめろよなっ！またエンジンがイっちゃいかけてたぞ！今度修理に出したらエンジンチェンジしかないからな！」

「え？そうか？いいじゃん、修理代稼げて」

「アホ！もうちょっと車大事にしろ！そんな事してたら、お前のスカイライン、もう直してやんねーぞ！」

「そう言うなよ～。健ちゃーん」

「本当にお前は！細かくやんちゃなところが全然治んないッスね！！」

仲良く（？）言い争いをする二人を見ながらクスクス笑う真理の

傍に近寄り、尊は小声で聞いた。
「あの・・・、真理さん。彼らは?」
「皆、高校の後輩です。死んだ真臣の父親の『仲間』。真臣が産まれた時から可愛がってくれていて、だから皆のこと『パパ』って呼んでいるの」
「仲間」・・・って事は、死んだ「彼」も「そういう人」だったって事なんだろうか・・・?
尊は呆然としながら、目の前の3人の男と真理を交互に見る。
どう見ても、「不良」と「優等生」。
接点が有りそうにはない・・・。
・・・いったい・・・。
いったい、どういう人だったんだ!真理さんの「彼」はぁ!!
――今夜も、眠れないかもしれない・・・・・。

4　真臣の「パパ」達（後書き）

こんにちは。玉紀　直です。
真理の身辺が気になってしょうがない尊。
でも、彼も、何かありそう・・・。

次回は、真理の息子、真臣君がいっぱいでますよー。
可愛いいたずらっ子が大活躍です。
ほのぼの母子でお楽しみ下さい。・・・って、尊も出ますが。（笑）

次回の更新は、本当なら来週火曜日なのですが、ゴールデンウィーク中はうまく執筆時間が取れそうも無く、（毎日更新の連載だけは何とか出来そうなんですが・・・）申し訳ありませんが、次は５月１１日の更新になります。
１０日くらい空いちゃって、申し訳ありません！

では、次回！

5　ワガママな天使

「あれ？真臣君？」
その日、朝出勤してきた尊は、病院の待合室の壁側の長椅子に、ぺたんと猫座りをして携帯ゲーム機で遊んでいる真臣を見つけた。
今日は平日。普通ならば幼稚園があるはずなのだが、特に幼稚園の制服を着ている訳でもない。
「おはよう。どうしたの？お休みしたのかい？」
白衣を羽織って真臣の前に屈みこむが、真臣は返事もせずにずっとタッチペンを片手に携帯ゲーム機の画面に夢中になっている。
尊が「しょうがないな」という諦め顔でフッと肩で息をつくと、今の会話（？）を聞いていたらしい真理が、中待合室から飛び出してきた。
「真臣！ダメでしょ！先生にちゃんと朝のご挨拶は？！」
すると真臣は、やっと目の前にいる尊の顔を見て、
「おはようございますっ」
と、型どおりの挨拶をして、またゲーム機の画面に目を落とした。
「もぅ・・・」
真理が困ったように真臣を見て、それから立ち上がった尊に目を向ける。
「ごめんなさい。園居先生。真臣が失礼して・・・」
「いや、いいよ。大丈夫。気にしないで」
子供のこんな反応を気にしていては、小児科医などはやっていられない。
尊はまったく気にしていないが、真理は気になって仕方がない。
「今日、幼稚園の開園記念日で、休みなんです。一人で家にも置いておけなくて・・・。診察時間は、院長室か休憩室に入れておいて邪魔にならないようにしますから・・・」
「それじゃ、しょうがないよ。そんなに気にしないでよ。真理さん」

尊は気にさせないように明るく言うが、職場に子供を連れ込んでしまっていることに引け目を感じているのか、真理はずっと申し訳なさそうな顔をしている。

「じゃぁ、ママ、お仕事に戻るからね。事務のお姉さん達が来たら、ちゃんと言う事利くんだよ」

言い聞かせるように真理が真臣に話しかけるが、真臣は顔も上げずに「うん」と返事をしただけだった。

とりあえず真臣をその場に残し、二人で中待合室のほうへ入った時、尊が考えるように真理に話しかけた。

「ねぇ、真理さん」

「はい？」

「あの携帯ゲーム機。真理さんが買ってあげたの？」

「え？ええ。色々なキャラクター物のソフトとかが沢山あって、３歳くらいの時から欲しがっていたから・・・。４月に、入園祝いって言って・・・」

「・・・あまり、感心しないな」

少々厳しい口調で、真理の顔を見る。

「いくら欲しがっても、まだああいう物を持たせても良い歳ではないと思うんだ。携帯ゲームやテレビゲーム、メディア系に小さな頃から慣れてしまうと、まず人とのコミュニケーションが苦手な子になってしまうし、人の話しを聞けない子が増える」

真理はちょっと驚いたように尊を見る。

「まぁ、親にしてみれば、小さな子供がうるさくしないで、大人しくゲームをしたりテレビを観ていてくれれば助かる・・・っていうのはあると思うんだけど・・・」

ついそこまで言ってしまい、尊はハッとした。真理がどこか辛そうな顔で、困ったように下を向いてしまったからだ。

「あっ、でもっ、皆が皆そうだ、っていう訳じゃなくてねっっ！あくまでも児童心理学枠内の見解でっっ・・・！」

「いっ、いいえ・・・いいんですっ！その通りですからっ！」

慌ててフォローを入れるが、真理はそのフォローを否定する。
「本当に・・・その通りですから・・・」
真理は恥ずかしくなってしまった。正直、子供に対してこんな注意を受けたのは初めてだし、尊が言っている事も当たっている。
仕事で疲れている時や、自分の事をしたい時など、真臣がゲームなどをして大人しくしていてくれると、自分にまとわりつかなくて非常に都合がいい。
ゲーム機を与える時も、こんな小さな子供に出来るんだろうか？まだ早いのでは？と、自分自身思った。しかし、父や母は、真臣可愛さに「そんなに心配しなくてもいい」と気軽に言うし、与えたら与えたで「パパ達」は一緒にやり方を教えながら遊んでくれたり、小さな子でもプレイできるキャラ系のソフトをくれたりして、変な話、徹底的に真臣を甘やかす。
周りには真臣を可愛がる人間しかいなくて、たまに真理が困ってしまうくらいワガママに育ってしまった。
さっき尊に話しかけられた時、ゲームに夢中できちんと挨拶も返事も出来なかったのが、何よりの証拠かもしれない。
「ごめんなさい・・・。父親がいない分、しっかりと叱れる人が居なくて・・・。私が叱っても、反対にお母さんとかに『そんなに言わなくてもいいでしょ』なんて怒られたり・・・」
院長夫妻も、たった一人の孫が可愛いのだろう。
だから真理が真臣を叱ると、反対に真理が「キツすぎる」と親に言われてしまう。
真理としては、若くして母親になり、おまけに父親がいない。その分、子供をしっかりと躾ようと頑張っているのだろう。しかし、周りが真臣を甘やかし干渉しすぎて、それも上手くはいっていない。
・・・真理さん・・・。頑張っているのにな・・・。
尊は少々、真理が気の毒になった。

そしてそれは、午後の診療が始まる2時近くに起こった。
予約の診療患者や、もうすでに順番待ちをしている患者のカルテなどを真理がそろえていると、その第2診察室のドアが開き、こっそりと真臣が顔を出したのだ。
「あれ?真臣君。どうしたの?」
それに気付いた尊が、机の上のパソコンから目を離し、クルッと椅子ごと真臣のほうを向く。
が、真臣はそんな尊には目もくれず、その横でカルテ類をそろえていた真理の元へと走りより、グイッとスカートを引っ張った。
「ママー。あきたー。かえろー」
すると真理が、困った顔はするものの、優しく笑って真臣の前へ屈む。
「ママね、これからもう一回お仕事なの。解るでしょ?」
「でも、ぼく、もうあきた。おうちにかえろーよー。ママー」
「おじいちゃんのお部屋でDVDでも観る?このあいだ秋パパがくれた新しいソフトはやらないの?」
何とか真臣の気を他に逸らそうとするが、焦っている時の大人の気持ちに、子供は敏感だ。「自分は何か騙されるのかもしれない」という気持ちが、真臣を更にごねさせた。
「やだっ!テレビもゲームもしない!ママといるっ!!」
「真臣・・・でもね・・・」
「やだ!やだぁ!ママぁ、公園いこー!いっしょにアソボー!」
小さな体を揺れ動かし、首をぶんぶんと振って泣き声で反抗する。すっかり困ってしまった真理を見るに見かねて、尊は椅子に座ったまま腕を伸ばし、真臣を抱き上げると自分の膝の上に乗せた。
「そうだよなー。一日中こんな所にいたら、飽きるなー。センセーも遊びに行きたいよ」
真理が驚いて尊を見る。・・・何を言うつもりなんだろう・・・。
「でもさ、ママは今、お仕事中なんだ。解るだろ?今日は終わるまで大人しく待ってる、って約束で来たんじゃないのかな?」

真臣が黙る。何となくソワソワと横目で真理を見出した。
「真臣君。お約束守れるかな？４歳の男の子なんだから、守れるよね？」
決して怒っている訳ではない。あくまでも優しい口調ではある。それでも、自分は何か注意をされているというのが子供心にも解かるのだろう。
真臣は泣き顔で真理を振り向き、甘えた声で両手を前に出した。
「ママー。ねんねー。ねんねするー」
真理が尊の膝から真臣を抱き上げると、真臣がメソメソしながらグッと真理にしがみつく。頭頂部と体が温かい。「眠い」というのは「本当」らしい。
「先生、ごめんなさい。私、院長室に真臣を寝かせてきますから・・・」
「うん。いいよ。慌てなくていいから。ゆっくり抱っこしていてあげなよ」
「本当にすみません。・・・行っている間、美鈴さんに入っていてもらいますから」
そう言って真臣を抱いたまま診察室を出て行く。ほどなくして美鈴が入ってきた。
「しばらく交代しまーす。若い子じゃなくて申し訳ありませーん」
一言多い・・・。
「そんな事ないよー」と愛想笑いをしながらも、尊はちょっと真臣を泣かせてしまった事を後悔していた。

可愛い一人息子を泣かされて、真理に悪い印象を与えたのではないか、と思ったのだ。

退屈していたところに「注意されてしまう」という、普段なかなか無い経験。それがショックだったのか、真臣は真理が院長室に抱

っこしてつれてくる前に眠ってしまった。
ソファの上に真臣を寝かせ、タオルケットを掛けてやる。その傍らに屈み込み、寝顔を眺めながら黒くて細い髪を撫でた。
「眠った顔は・・・天使みたいなのに・・・」
可愛らしい無邪気な寝顔。子供の寝顔は天使のようだ。親なら誰もがそう思う。
時々手におえないくらいワガママで。でも、凄い甘えん坊で。園居先生みたいに、ちゃんと注意して嗜めてくれる人が居れば、ワガママになんてならなかったのかしら・・・。

――大丈夫だ。生意気言ったら、俺がシメてやる。

まだ真臣がお腹にいた頃。手に負えないような暴れん坊になったらどうしよう、と不安がった真理に、「彼」が言った。
「・・・あなたが・・・生きていてくれれば・・・」
真理の大きな瞳が、悲しそうに細まる。目の前で眠る真臣の寝顔に、「彼」の寝顔が重なった。

不安じゃない訳が無いのだ。――自分一人で子供を育てていく事。
悲しくない訳が無いのだ。――父親に一度も息子を抱いてもらえなかった事。

辛くない訳がないのだ・・・。
愛する人が、今ここにいない事・・・。

「・・・どうして・・・死んじゃったの・・・」

ワガママで甘えん坊。
でも、何よりも愛しい。愛した人の忘れ形見。

そんな天使の寝顔を見ながら、真理は、ちょっとだけ泣いた・・・。

5　ワガママな天使（後書き）

こんにちは。玉紀　直です。
長いことお休みを頂きました。すみません。
（お詫び（？）に今回はちょっと長めでした）
かなり甘やかされて育っている真臣君。
そりゃぁ、ワガママにもなろうってものです。
それじゃなくてもこのくらいの年齢の男の子は生意気ざかりですから！

少々自分の子育てに不安を隠しきれない真理。
「父親が生きていれば」そんな弱気な思いが、時々彼女の心をいっぱいにして、そして今はいない「彼」を思い出させてしまいます。

そんな真理に、次回はやっと尊が動いてくれます！
やっと「恋愛モード」に突入するか？？！（笑）

次回は5月15日更新。

では、次回！

6　星の告白

「え？」
ただでさえ大きな瞳を更に大きく見開いて、その目をぱちくりさせながら、真理は目の前の尊を見た。
そんなに驚いた顔をされるとは思っていなかった尊は、反対に少々戸惑いながら、今真理をキョトンとさせている台詞を繰り返す。
「だから、一緒に食事でもどうですか？って」
「・・・食事なら、今してますが・・・」
そう言いながら、鮭おにぎりにカプッとかぶりつく。
今日、秋光のコンビニでオマケしてもらったおにぎりだ。
本日真理が「お昼ご飯」と言ってレジに出したのは、果肉たっぷりの桃ゼリーとビタミンC入りの清涼飲料水。それを見た瞬間「病人食かっ！！」と秋光に怒鳴られた。
有無を言わせず、袋の中に、大きな鮭おにぎりをひとつ入れられた。
「絶対食べなよ」と、一言付の睨み付き。
昔、少々（？）「悪い子」だった彼は、そういう顔をすると妙に怖い。
秋光君が・・・あんなに世話焼きだとは思わなかったよね・・・。
自分の昼食のセレクトが無茶苦茶なのを棚に上げて、真理は少々心の中で愚痴る。
こんなに大きいおにぎり食べたら、太っちゃうじゃない。
そう思いつつも、パクパクとおにぎりをほおばる真理を見ながら、尊は困ったように頭を掻く。
「だからね、今夜一緒に食事に行きましょう。って意味なんだけど」
「え？」
真理はおにぎりから顔を上げて、再び大きな目を見開いた。
「食事、って？私と？」

「他に誰がいるの？」
　すると真理は、同じく休憩室で昼食を取っていた美鈴の腕を引っ張る。
「美鈴さんとか」
　すると美鈴は、その腕を振りほどいて反抗した。
「ちょっと、真理ちゃん、尊先生は真理ちゃんを誘ってんのよ。男の下心に気付いてあげなさいよ」
「え？」
　「下心」に反応して真理が赤くなると、食べ終えた御弁当の空パックを袋に戻しながら、尊が慌てて片手を振る。
「違う違う『下心』はないって。あったら奥さんの前で言わないよ」
　尊が目を向けた先には、同じテーブルで真理の母である真澄が食事を採っていた。
　病院の看護師達や事務など、外で食事を採るものもいるが、大体が休憩室で取っている。
　真理は尊が入る、第2診察室を主に担当する事が多い。それもあって、尊が来てからこの2週間ほど、お昼はこのメンバーでテーブルに付くことが多かった。
「あらぁ。別にいいわよ。『下心』込みでも。ねぇ、真理」
「おっ、おかあさんっっ」
　真理が真っ赤になって、椅子から立ち上がる。尊はちょっと困ったように笑った。
「いやいや、本当にないですよ。この2週間ずっと自分に付いていてくれて、病院の事とか、お馴染みさんの子供の事とか、いろんな事教えてもらっているから・・・。ちょっとした『お礼』のつもりなんだ。それで、食事でも、と思って」
「そんな・・・。当然の事をしているだけですから、気にしないで下さい。それに私、真臣がいるから・・・夜は・・・」
　真理が断ろうとすると。真澄が口を出した。
「あら、いいわよ。まーちゃんなら私がお迎えに行くし。別に真理

がいなきゃ、ご飯食べない訳でもないし、お風呂に入れないわけでも無いし、眠れない訳でもないし」

それじゃぁ私、要らないみたいじゃないの・・・。真理が少々恨みがましい目で真澄を見る。真澄は御弁当の箸を口元に当て、うーん・・・と考えてから、

「そうねぇ、出かける時間だけ教えておいてくれれば、その時間だけは、まーちゃんを秋光君のところにでも連れて行って誤魔化すわ。小さな子供って、親が出かけるところを見ると愚図ったりするから」

「お、お母さん、秋光君に迷惑・・・」

「だから尊先生。行く時間だけ私に教えて頂戴。あっ、帰ってくる時間は、この際どうでもいいから」

「おかあさんっっ」

勝手に話を進める母に、真理は慌てる。な、何でお母さん！話を進めようとしてるのよぉ！！

慌てている真理が何となく可愛らしくて、尊は真理を見ながらクスクスと笑った。

「解りました。じゃぁ、真理さん、いいよね？」

「え・・・？あのっっ」

「好き嫌い、ある？」

「え？あの、別に・・・」

「じゃぁ、俺、知ってるレストランに予約入れられるか電話で訊いて来るから。それから、時間決めようね」

「お礼」とは自分で言っていたものの、どこか嬉しそうに、尊はそそくさと休憩室を出て行く。後に残された真理は呆然としたままだ。

「何か尊先生、たのしそー」

美鈴がニヤニヤしながら真理を見上げると、真澄は「そうねぇ」と言って、御弁当の続きを食べ始める。

そんな二人を交互に見て、真理は今尊が出て行ったドアのほうを、困った顔で見詰めていた。

「すいません。園居先生」
真理は少々申し訳なさそうに言いながら、尊の横について歩いた。
「いいよー。どうして謝るの？」
「だって、私、お酒が飲めないから・・・」
尊が連れて行ってくれたのは、あまり堅苦しくない感じの、若者が多いイタリアンレストランだった。安価でも、美味しいワインが多く用意されていることで人気のある店だが、実は真理はお酒が飲めない。
食事の後は軽く飲める店を考えていた尊だが、レストランで真理がお酒がダメなのを知って、諦めた。
どうやら真理は、それを察したらしい。「じゃぁ、このまま帰るのももったいないから、少し庭でも歩こうか」と気を遣って言ってくれた尊の横で、さっきから申し訳なさそうな顔をしている。
このレストランは、周囲に作られた庭がちょっとした遊歩道風になっていて小さな公園のようだ。たまに置かれたベンチの上で、恋人同士らしき男女が抱き合っていたりする。それが嫌でも目に入ってしまい、真理は慌てて目を逸らした。
「気にしないでよ。お酒のめるか飲めないか、事前に確認しなかった俺も悪いし」
そうは言われるものの、「まったくお酒が飲めない」という人間のほうが珍しいのではないか？せっかく色々考えてくれていたみたいなのに・・・。真理は余計に申し訳なさを感じる。
「せっかく・・・。園居先生が誘ってくれたのに・・・」
「あのさ、真理さん」
「はい？」
「真理さんは、どうして名前で呼んでくれないの？」
「は？」
あまりにも気にして気を遣う真理を止めるように、尊は話題を変

える。
「とりあえず、半月ほど経つけどさ、皆『尊先生』って呼んでくれるのに、真理さんだけ『園居先生』なんだよね」
「え?あ、あの・・・。だって・・・」
真理はちょっと慌てる。まさかそんな事を言われるとは思わなかった。
「男の人を、そんな気安く名前で呼んじゃいけないと思って・・・」
そう言うと、尊がぷっと吹き出す。
「そっ、そのいせんせいっ?」
「あっ、ごめん・・・。ククッ・・真面目だなー、と思ってさ。さすがに高校の時に3年間も風紀委員をやっていただけの事はあるよね」
真理は高校時代、3年間、風紀委員を務め、3年生の時は委員長も務めた。高校の教師達も一目置く優等生だったのだ。
それをさっき食事のときに話すと、尊は高校の時、朝が弱く遅刻が多くて、よく風紀委員に睨まれていた。そのせいであまり風紀委員に良い思い出がない、という話をして真理を笑わせた。
尊はゆっくりと歩いていた足をフッと止めると、横の真理を見下ろした。
「じゃぁさ、今日から名前で呼んでくれる?俺も、真理ちゃん、って呼ぶから」
「えっ?えっ?あの・・・」
ま・・・真理ちゃん?真理はちょっと赤くなった。そんな呼び方は、病院に来る常連の子供くらいにしかされた事がない。ましてや男性になど・・・。
「病院では『尊先生』でいいかなー。でも、プライベートは、尊さん、か呼び捨てがいいな。本当は」
「・・・え?」
なんでいきなりプライベートの話・・・?
真理が小首を傾げると、そんな彼女を見て尊はクスッと笑い、彼

女の正面に立った。
「真理ちゃん」
「はっ、はい？」
何故か真理は、ドキッとする。
「また一緒に、食事に来てくれる？」
「あの、でも私、お酒飲めないから、つまらないんじゃないかと・・・」
「関係ないよ。そんなの」
「・・・・・」
「食事じゃなくても、真理ちゃんと一緒に居たいんだ」
真理はちょっと目を見開いた。
どういう意味だろう。少々見当は付く。しかし、元々の生真面目な性格のせいか、なんとなく真理の理性がそれを否定する。「そんな訳はない」と。

「一目惚れって、解る？」
「あの・・・」

胸の鼓動が高くなり続ける。
この先の言葉が予想できないほど、子供ではない。

「俺、真理ちゃんが好きなんだ」

真理は更に目を大きく見開いた。

――そんな彼女を、尊の肩越しに、少し霞がかかった月が、覗くように見ていた・・・。

6　星の告白（後書き）

こんにちは。玉紀　直です。
好きだという気持ちを言ってしまった尊。
子持ちだろうと何だろうと、好きなものはしょうがありません。
とりあえずはフリーですから。
でも、「しょうがない」で済ませられないのは真理の気持ち。
彼女の心の中には、まだ「彼」が住んでいるんです・・・。

告白をされる真理を、尊の肩越しから見ていた物・・・。
それは・・・。

次回は、秋光が少々怒ります。誰に？
尊だって、告白だけじゃ終わりません。
さらに、行動に出ます。

次回は、５月１９日更新。

では、次回！

7　戸惑う太陽

「俺、真理ちゃんが好きなんだ」

・・・冗談だよね・・・。

ぱくっ。

「真理」

・・・だって、私に、そんな事言うなんて。

ぱくっ。

「真理っ」

・・・からかわれたんだよ。うん。きっとそうだよ。

ぱくっ。

「まりっ！」

いきなり大きく自分を呼ぶ声。真理はハッとして顔を上げた。

「何ボーっとしているの？そんなにつまんだら、まーちゃんの御弁当の分、なくなるよ」

「あ・・・」

母に言われて目の前を見る。真臣のお弁当用に作った玉子焼きが、6切れ中もう2切れしかない。

「あはっ、ボーっとしてたもんだから。つい・・・」

真理が誤魔化すように笑うと、今まで洗面所に居た真臣が、キッチンでお弁当を詰めている真理のところへ走ってきた。

「ママー。ぼくも、あじみー」

まだパジャマ姿。前髪と顔が濡れたままだ。どうやら顔を洗っている途中だったらしい。

「はい、どうぞ」

菜箸でつまんだ玉子焼きを口元に持って行ってやると、真臣は大きく口を開けてパクッと食いついた。

玉子焼きをほっぺいっぱいに頬張ってモグモグと動かしながら、

ゴクッと飲み込み、にこーぉっと笑う。
「おいしい？」
真理もそんな真臣の顔を見ながら、にこーぉっと笑う。
「おいしい！玉子あまーい」
お砂糖多めの甘い玉子焼きが、真臣は大好きだ。

・・・「あの人」も、甘い卵焼きが好きだった・・・。

そんな事を考えながら、真臣の頭をクリクリッと撫でてポンポンッと背中を叩く。
「ほら。お顔ちゃんと拭いておいで。その後お着替えだよ」
「はーい」
真臣が走って洗面所へ消えて行くと、真理は肩で息をついて再びお弁当を詰め始めた。
「ねぇ、真理」
そんな真理に真澄が話しかける。
「昨夜、何かあったの？」
お弁当を詰める手が、ピクッと止まった。
「・・・なっ、なにか・・・？何か、って、何が？」
慌てた口調になってしまった。真澄がジーッと自分を見ているので、真理はさっと顔を逸らした。
「食事して帰ってきただけよ。私、お酒駄目だから、飲みに行く代わりにちょっとお散歩したけど。・・・それだけっ」
・・・それだけ、じゃ、なかったけど・・・。
「昨夜帰ってきた時、何か慌てて2階に駆け上がって行っちゃったでしょ？しばらく降りてこなかったし。どうしたのかなー、って思ったのよ」
「真臣が心配だったのよ。ちゃんと寝てるかな？って。それだけ」
本当は違う。

「冗談ですよね」
「冗談じゃないよ」
「じゃぁ、からかっているんですよね」
「からかってなんか居ないよ」
「私、子供が居るんですよ」
「それで？」
昨夜、そんな会話を繰り広げた。「好きだ」と言われても、どうも信じる事が出来ない。
目をぱちくりさせて戸惑っている真理を見て、尊はクスッと笑い、
「真臣君のことが気になるだろうから、帰ろうか？」
と言って、真理の肩を抱いて歩き出した。
男性に肩を抱かれるなど、普段はない経験。真理はドキッとしたが、その手を振り払う勇気もなく、そのまま駐車場まで歩いた。
家へ帰って来てから、慌てて2階へ駆け上がった。
本来、真理の部屋である部屋の隣。真臣が寝ている部屋へそっと入り、机の椅子を引きそっと座って大きな息を吐く。
「冗談」だの「からかってる」だの自分で言いながら、真理は胸がドキドキして止まらなかった。
小さな電球だけが点いた部屋の中。肩越しに振り返ると、真臣が眠っている姿が見える。
「ごめんね・・・真臣・・・。ママ、ドキドキしちゃった・・・」
自分が凄く悪い事をしているような気がして、真理はすぐに目を逸らす。
机の上に敷かれた透明のデスクマット。その下に挟まれた写真。
黒髪の「彼」が、こちらを見て笑っている。
「ごめんね・・・」
真理は哀しそうに呟いて、マットの上から「彼」の顔を指でなぞった。

「真理ちゃん！おはよう！！」
いきなり元気いっぱいの声に、「ちゃん」付け呼び。真理はあまりの驚きに、身を竦め目をぱちくりさせた。
病院に入った途端、すでに来ていたらしい尊が、笑顔で白衣片手に走ってくる。
「おっ・・・おはようございますっっ。園居センセイッ」
「アウトッッ！！」
いきなりそう言って指を指される。なっ、何?!人を指差しちゃいけないでしょっ！！
真理が少々びくびくしていると、尊はクスッと笑って両手を腰に当てた。
「園居先生、はやめるって、昨日話しただろ?約束は守ろうよ」
約束?・・・したっけ?
思い出そうと頑張るが、どうも思い出せない。昨夜は「好きだ」と言われた印象が強すぎて、他のことが飛んでしまっている。
「あのさ、真理ちゃん」
考え込む真理を、尊が覗き込んだ。
「俺は、本気だから」
「尊先生?」
「真理ちゃんを好きだ、っていうのは、冗談でもからかっている訳でもない。本気で好きなんだ。・・・出来れば、付き合いたいと思ってる」
真理は驚いて尊を見上げた。
「私は、子供が居るんですよ・・・それにっ」
「だから、何?」
「・・・・・」
「子供が居たら、好きになっちゃいけないのかい?」
真理は言葉が続かない。どう言ったら良いのか、解からない。
「返事は急がないから。どうせ毎日、病院で会えるし」
「あの・・・私・・・」

「でも、俺がこんなこと言ったからって、避けたりするのはやめてくれよ。悲しいから」
冗談めかして言ってから、まだ対処に困る真理を見下ろしてニコッとする。
「だからさ、真理ちゃんの事もっと知りたいし、今夜も食事に付き合ってくれる？」
「え・・・？あっ、あのっ、今日は駄目ですっ。・・・二日も続けて、なんて・・・。私、真臣放っておく事になっちゃうし・・・。母にも・・・」
「奥さんと院長の許可なら、もらったよ」
「は？」
真理はドキドキしながら眉をひそめる。自分の意見は何も通らないまま、話が進んで行っている様な気がする。
「さっき奥さんに会ったから、今夜も誘っていいですか？って訊いたら、『どーぞ、どーぞ』って。院長にも『よろしく頼むよ』って言われちゃって。・・・だから、いいよね？真理ちゃん」
・・・「どーぞ、どーぞ、って・・・？
お父さん！お母さんっっ！！

「どうしたの？お姉さん」
ボーっとしながらレジの前に立つ真理を見て、秋光が声を掛ける。
「いっつも変だけど、これ、本気？」
少々怒った顔で、レジに置かれた商品を指差す。・・・コーヒー牛乳、１パック。
「お弁当でも作ったの？」
「ううん。これ、お昼」
「・・・本気で怒るよ。オレ」
「食欲ないんだもん・・・」
何となく、本当に元気がない。見て悟った秋光は、キュッと寄せ

ていた眉を元に戻して、ちょっと伏せ気味の真理の顔を覗き込んだ。
「どうしたのさ?『太陽さん』らしくないよ・・・。仕事で何かあったの?」
「ううん・・・」
「真臣に『ママ嫌い』とか言われた?」
「ううん・・・。『好き』って言われた」
「じゃぁ、べつに良いじゃん」
「尊先生に・・・『好き』って、言われた・・・」
「・・・・・は?」
秋光は再び眉を寄せ、真理を見た。
心なしか赤い顔をして、困ったように視線を泳がせている。
尊先生・・・って、あの新しい先生だろ・・・?
「好き」って?お姉さんを・・・?

コンビニの裏口。パートに「ちょっと一服してくる」と言って出てきた秋光は、煙草を吸う訳でもなく、突然険しい顔で壁をガンッと殴りつけた!
硬い壁を殴ったりすれば、もちろん手は痛いし赤くなってしまうだろう。彼とて、例外ではない。

「冗談じゃねーぞ・・・。おい・・・」

痛みで赤くなった手を握り締め、秋光は悔しそうに呟いた。

7　戸惑う太陽（後書き）

こんにちは。玉紀　直です。
好きだと言われて戸惑う真理に、容赦なく続く尊の行動。
しかし、両親が何となく積極的なのは何故？
結局今夜も食事に行くことになってしまいました。

真理は何気なく言ったつもりですが、「何気なく」聞けなかったのは、秋光です。
真理の事が好きな彼。気が気ではありません。

尊の行動はエスカレートします。
次回は、ついに・・・。

次回は5月24日更新。

では、次回！

8　4年ぶりのキス

「お前らが悪いんだからな」
恨みがましい顔で何度も言われると、いくら友達でもウンザリする。
「はいはい」
健は適当に返しながら、眉を吊り上げ自分を睨み付けている友人の前に、コーヒーが波々と注がれたマグカップを置いた。
オイルと機械のにおいが漂う、車両整備工場の事務所。
そろそろ帰ろうかと、帰り支度を始めていた健の所へ、あれだけ「暴走するな！」と注意をしておいたのにまったく聞いていない、秋光が勤めるコンビニの軽トラが、激突するのではないかという勢いで突っ込んできた！
「お前な！いい加減にしろよ！！」車はもっと大事に乗れ、っつーのっ！！そんな気持ちで怒鳴ったが、軽トラから降りてきた秋光は、逆に叫んだ。
「お前らのせいだかんな！！！」

「んで？今日も食事に行くって？」
健は赤茶の髪を掻き上げながら、自分のコーヒーに口を付けた。
目の前の秋光はまだムスッとしている。
健が秋光の前に置いたマグカップを指差して「ほれ飲め」のポーズをするので、とりあえず秋光はコーヒーに口を付けたが、一口飲んだ瞬間、血相を変えて立ち上がった！
「てっ・・・てめっっ！！健っっ！！砂糖入れたな！！」
彼は甘いものが苦手だ。
「カリカリした時は、甘い物で血糖値を上げるのがいいッスよ。ウチの綾も、仕事でストレスが溜まると吐くほどケーキバカ食いする

ッス」

「保母さんとオレを一緒にすんな！」

そうは言いつつも、そのかすかに甘いコーヒーに後ろ髪を引かれ、秋光はもう一度カップに口を付けた。

・・・意外に、美味いじゃん・・・。

チラッと、その細工を施した友人を見上げると、「美味いだろ？」という顔をしてニヤニヤしている。むかつくが、自分のためを思って甘いコーヒーを作ってくれたのだ。

秋光はちょっと照れ笑いをしながら、マグカップのコーヒーを飲み干した。

「まっ、食事に行くくらいで、何かした訳じゃないんだから、そんなにカリカリしなくてもいいだろ？」

「『何かした』後じゃ、マズイだろってのっ！！」

一度落ち着きかけたのに、秋光はまた興奮してきた。

「お前らが止めるから！『オネーサンに手出しするなよ』って言うから！俺はずっと、何一つ自分の気持ちも伝えずに、この４年間、真理さんを見てきたんだ！それを・・・、何でまだ２週間くらいしか経ってないようなヒョコッと現れた男に、先を越されなきゃなんねーんだよっっ！！」

「・・・まぁ、こういう事は、時間じゃないし。・・・オレだって、綾に一目惚れして告ったのは２日後だったし・・・」

「自分はそこまで手の早いことしておいて、よくオレにあれこれ言えたもんだよな・・・」

「オレとお前の場合は違うッスよ。・・・じゃぁ、お前、「あの時」の真理さんに、「好きだ」なんて言えたッスか？」

秋光は空になったマグカップを見詰める。

黒いマグカップ。

その黒が、４年前の真理の姿を思い起こさせた。

黒い喪服を、彼女は「彼」の四十九日（しじゅうくにち）が過ぎても脱ごうとはしな

かった。
黒い綺麗な髪と大きな瞳。そこにいつも涙を溜めて。
「彼」の写真の前で、いつも泣いていた。
そんな彼女が心配で、秋光は毎日様子を見に行った。
彼女は「彼の友達だから」毎日お線香を上げに来てくれるんだ。
としか思っては居なかったが・・・。

それは、違う。

――この頃から、秋光は、真理に恋をした。

大切な友人の恋人。
死んでしまった友人の、大切な人。

その頃の秋光に、告白する事を躊躇(ためら)わせていた物は、真理の中に宿っていた「彼」の子供だった。
6月生まれだったはずのその子――真臣は、真理の心労が重なったせいか、4月の「彼」の誕生日に日に産まれた。

本来なら、その日に18歳になるはずだった「彼」。
生きていれば、その日に「婚姻届」を出し、真理と夫婦になるはずだった。

――お前、オネーサンに手出しするなよ。

秋光の気持ちに気付いた健や達也に、必死に止められた。

――オネーサンは「あいつ」の大事な人なんだからな。

だから黙っていた。ずっとずっと、自分の気持ちを抑えて。

なのに・・・。

「なぁ、健・・・」

秋光は空のマグカップを眺めながら、ボソッと呟くように言った。

「あの医者が『何か』したら・・・、オレ、もう我慢しねーからな・・・」

こういう時に、目を開けていてはいけない。

それは知っている。

こういう時は目を閉じるものだ。・・・でも・・・。

頭で解かってはいても、真理の目は、ただでさえ大きいのに、更に大きく見開かれたままになってしまった。

原因は、おそらく、今、尊が行っている行動にある。

唇が、重なっているのだ・・・。

重なっているだけならまだしも、自分の口腔内に舌が入り込み、優しく撫でるように刺激している。

昨日と同じ、レストランの遊歩道。同じく、食事を終えての散歩中。

しかし、昨日と違ったのは・・・。

「真理ちゃん」

「はい？」

いきなり自分の名を呼び立ち止まった尊を見て、どうしたのか、と真理も足を止め彼を見上げた。

「キスしていい？」

「・・・は？」

何を訊かれたのかと、自分自身、認識する間もなく、尊は真理の肩を抱き寄せると、身を屈めて唇を合わせたのだ。
驚いた真理は、目を閉じる事も出来ない・・・。

真理が驚いて目を開けたままな事に気付いた尊は、クスッと笑いながら一度唇を離し、彼女の目の上に片手を当てる。
「・・・目、閉じて・・・」
まぶたを下ろさせ、彼の手が離れた時、唇は再び重なっていた。
今度は誘い出すように、唇を吸い舌を絡める。
ちょっと激しいキスに、真理の体温は上がった。
こんなキスをされるのは、正直、４年ぶり。それを思うと何故か真理は怖くなって、両手で尊の肩を抵抗するようにちょっと強めに押す。しかし尊は、肩を抱いていた腕で更に抱き締めるように真理を引き寄せ、唇を重ね続けた。

どうしよう・・・。私・・・。
どうしよう・・・。

顔の向きを変え、ほんの少し唇が離れた瞬間、真理は薄目を開けて尊の背後を見た。

昨日「好き」と言われた時、尊の背後に見えていた、霞がかった月。
――その月が、今日は見えない。

何故か真理はホッとする。
しかし、何か「隠し事」をしているような気がして、何とも言えない罪悪感が彼女の心を苛(さいな)んだ。

「どうして・・・私なんですか・・・」

やっと唇が離れた時、真理が出した声は震えていた。
突然自分を襲った出来事に、真理自身動揺を隠せない。
本当なら、泣いてしまいそうだ。
しかし、「いい歳してキスくらいで泣いて」と思われるのが嫌で、真理はその涙をグッと堪えた。
「どうして・・・私なんか」
頬を染めて、困ったように尊を見上げる真理。そんな真理の顔を見ると、反対に尊も困ってしまう。
「好きだ、って理由だけじゃ。ダメかな?」
「だって・・・」
「真理ちゃんが昨日言ったような、『子持ち』だ、とか『未婚の母』とかっていうのは、好きになっちゃいけない理由にはなっていないだろ?」
「・・・」
尊の真剣な目を見ているのが、何となく怖い。
真理は尊から視線を逸らした。
「好きな気持ちを、俺は我慢する気はないよ」

真っ暗な夜空。
今日は月が出ていない。
真理はチラッと空を見上げ、もう一度それを確認した。

8　　4年ぶりのキス　　（後書き）

こんにちは。玉紀　直です。
えー・・・秋光が怒ってます。
さっさと告白しとけばよかった。という気持ち。
友達がそれを止めていたせいだ。という気持ち。
でも、大切な友人の大切な人だから。という気持ち。
・・・彼も、色々悩んで可哀想でしたが・・・。
言ってましたね。「何か、したら我慢しない」・・・その「何か」しちゃいました。

尊も、「好きな、気持ちを我慢しない」

我慢しない星が、ふたつ。

キスをされてしまった真理。
月が出ているかを異様に気にしていました。
4年ぶりに受ける行為に、心と体は動揺します。

これが、「それ」に当てはまるかは、ちょっと解からないのですが、次回は一応、玉紀が「性的表現」が入る際に使わせて頂いている「閲覧注意」の予告をさせて頂きます。
玉紀もあまり書いたことの無い行為が入った「閲覧注意」なので、「あ、私こういうの嫌い！」と思われる物でしたら、すぐにスルーして下さいね！

次回は5月30日更新。

では、次回！

9　ひとり遊戯（前書き）

注意

今回は本文中に性的表現が含まれています。
苦手な方、又は、そういう表現が嫌いな方は
その場面にきたらとばすなど。してください。
Ｒ－１５指定はさせて頂いていますが閲覧にはご注意を・・・。
もしかして「閲覧注意」とまでしなくていい行為なのかもしれませんが、こういう種類のシーンがお嫌いな方も居ますので、ご注意させていただきます。
「あ、こういうのダメ！」と思われましたら、絶対スルーして下さい！
「真理ちゃんにこんな事させてぇ！！」と、怒らないで下さいね。
（笑）

9　ひとり遊戯

「あら。お帰り。真理」
考え事をするように、玄関でゆっくり靴を脱いでいると、母の真澄がリビングから出てきた。
「早かったわね。でも、もぅ、まあちゃん寝てるわよ」
時刻は夜の9時半。真臣はもっと小さな頃から、遅くても8時半にはちゃんと眠るように躾けてある。
「気にしないで、もう少しゆっくりして来ても良かったのよ」
本気なのか冗談なのか解からない真澄に、真理はちょっと強い口調でムキになった。
「お母さん・・・どうして、尊先生をけしかける様な事をするの？」
「けしかける？」
「だって・・・だってそうでしょう？2日も続けて、お食事に行ってきなさい、って。『どーぞどーぞ』って言ったんでしょ？お父さんもお父さんよ！『よろしく頼むよ』って、何なのよ！」
そこまで言って、真理は口をつぐんだ。
これじゃぁ、八つ当たりじゃない・・・。今の自分は、間違いなくキスをされて動揺しているのが解かる。
「真理・・・」
真澄は戸惑う娘の肩にポンッと手を置いた。
「もう、4年も経っているのよ・・・」
「！」
真理が息を呑む。
「ちが・・う・・・」
もう・・・？

もう、４年？
「もう」って、何？

「違うわ・・・」
真理の声が震えた。

突きつけられる事実。
過ぎていく時間、という現実。

――――アレカラ４年モ、タッテル・・・、――――

「まだ、『４年しか』経っていないのよ!!」

真理は声を限りに叫ぶと、逃げるように２階へと駆け上がって行った。
そんな真理を辛そうに見ながら、真澄が小さく息を吐く。
「怒らせてしまったかい？」
リビングの中にいた正孝が顔を出した。
「・・・言ってはいけない事だったのかもしれないけど・・・」
真澄は真理の姿が消えた階段を見上げる。
「忘れられないのは、解かるのよ。でも・・・」
真理・・・。
酷い事を言っているのかもしれないけど。
でも、少しずつでも忘れていかなければ、あなたは、幸せにはなれないのよ・・・。

４年も、経った?!
「４年も」・・・違う!!
真理は部屋へ飛び込んだ。後ろ手にドアを閉め、真っ暗な部屋の

中でぺたん、と座り込む。
「・・・違う・・・」
私の心の中は、「あの頃」のままなのに・・・。
電気も点けずに、真理は部屋の中を見回した。
真臣が眠っている部屋の隣の部屋。本来、こっちが、真理の部屋だ。
クローゼットの中や、あちこちに真臣のおもちゃが置いてあるところは変わったが、大部分は学生の時のまま。机もベッドもそのままになっている。
真っ暗な部屋の中。
カーテンが開けっ放しの窓から見える、夜空。
尊と一緒にいた時は、雲に隠れて見えていなかった月が、雲の隙間から顔を出し、覗くように真理を見ている。
――真理・・・。
真理の心の中に、「声」が響く。
月が話しかけてくる。「彼」の声で。
「・・・正・・・臣・・」
真理はふらりと立ち上がると、月を見たまま窓辺へと寄り、傍に置いてあるベッドに腰掛けた。
――愛してるよ・・・。
優しく囁く、「彼」の声が聞こえる。
尊にされたキスの余韻で、その感触が唇に蘇る。
やがてその感触は、尊のものではなく、「彼」のものに変わった。

「・・・正臣・・・」
真理は自分の体をグッと抱き締めた。

体に蘇ってくる・・・。
「彼」の手の感触。
自分に触れる、「彼」の唇。
自分を抱き締める、「彼」の腕。
自分の中で、自分を感じて快感を高めていく、「彼」自身・・・。

「・・・！」
真理は下唇をグッと噛み、目を閉じた。
ひと月に何度か感じる、体の衝動。
自分でも、どうしたらいいのか解からない。体の芯から湧き上がってくる疼き。
恥ずかしいくらいに・・・。

体が熱い・・・。
胸がドキドキして。苦しい。

真理は、ゆっくりとブラウスのボタンを外した。
スルリと肩から落とすと、ブラジャーの上から手を差し込み、包むように胸に触れ、指でキュッと乳首をつまむ。
――――「彼」がしてくれたように・・・。

「あっ・・・」

ぴくんっ。
体が、跳ねるように震える。
じゅんっ、と、下半身に熱いものが込み上げてくるのが解かった。
ゆっくりと胸を揉み込みながら、ベッドへ横たわる。

首を傾けると、覗くように月が真理を見ていた。
月の視線を感じながら、高まる体温を否定する事無く、右手がスカートの中へ入り込み、ショーツの上からその部分をなぞった。
自分でも分かっているが、もうすっかり濡れている。
ショーツの横から指を差し入れ、真理は「彼」を思い出し、自分が「女」である事を思い出させるように濡れ始めたその部分を指でなぞり始めた。

「んっ、あっ・・」

自然と声が漏れる。

いつからだっただろう。こんな行為を覚えてしまったのは。

「彼」が居なくなって2年くらい経った頃からだったろうか。
時々、「彼」とセックスをしている夢を見てしまう自分が居る。
体が火照って切なくなる時、そんな夢を見る。
そんな時、ふいに「彼」を思い出して、自分の手が指が動いた。
控えめな動きではあったが、その行為は自分の体を落ち着かせてくれる。

「あっ・・・ま・・さおみ・・・」

指が満たして欲しい部分に入り込む。
どうしても「彼の名」を呼んでしまうのは、最初から。
真理自身が、入り込んだ自分の指をキュッと締め付ける。
それだけでは足りないかのように、ゆっくりともう1本。指を追加していった。
2本の指をちょっと上げ気味にして最後まで押し込み、擦るように少し引き抜く。

「あぁっ！」

ちょっと大きめの声が上がってしまい、胸に当てていた左手が、グッと乳房を握る。

膝を曲げていた脚がヒクヒクッと震え、一瞬伸びた。

「あ・・は、あぁ・・」

こんな事をしてしまう自分は、どこかおかしいのではないか。

そんなことを思って、悩んだ事もあった。

真理の指は、控えめだが止まる事無く、自分自身を刺激し続ける。

「あ・・っ、あ、正・・臣・・・ぃ」

自分の体は、他の女性よりおかしいのではないか。ちょっと淫乱体質なのではないか。

そんな事で悩んで、友人の綾に相談した事がある。

「何もおかしい事じゃないでしょ？女にだって、性欲、はあるんだから」そう言ってもらって気持ちは軽くなった。

しかし・・・。

「い、や・・・あぁ・・んっ」

自分のしている行為に、否定の言葉が口から出る。

昔から、本質的に真理は真面目な少女だった。

「彼」に抱かれて愛されるようになるまで、性の快感も、女としての悦びも、知らなかった。

自分で自分の体の快感を貪る行為を「自慰行為」と言うのは知っ

ている。
そんな行為を自分がしてしまっているというのが、とても恥ずかしい。
そして、最後には微かな「罪悪感」が自分を襲う。
「だ・・め・・、だめぇ・・・」
そんな行為に及んでしまうのは、いつもこのベッドの上。
初めてここで、「彼」に抱かれた。
ここで「彼」に、沢山愛された。
――――真理・・・。
月が呼んでいる。誘うように。
「まさおみ・・ぃ・・・」
「彼」の名を呼び、だんだんと真理の体が引きつるように伸びていく。
指の動きが円を書くように動き、その動きが早くなった。
今自分を攻め立てているのは、自分ではない。
「彼」が、自分の快感を引き出し、体の火照りを抑えようとしている。
真理の体に、「彼」の体が蘇る。
――――真理・・・。
「まさ・・おみ・・っ、やぁ、ああっっ！」
ビクンッ！

真理の体が一瞬震え、夢中になって動いていた指の動きが止まる。
小さなオーガズムが、体中を包む。
それは、「彼」が与えてくれていた時のような、大きな昂ぶりではないけれど・・・。
それでも、今の真理の体を癒してくれるには充分だった。

小さなオーガズムを感じ、ピクピク震える自分自身が恥ずかしくて、真理は急ぐように指を引き抜く。
胸から手を離して、小さく息を切らし、窓から見える月を眺めた。

「・・・どうして、居ないの・・・？正臣・・・」

小さな罪悪感が、自分を襲う。
「彼」のことを思ってこんな事を繰り返してしまう自分が、とても嫌で悲しかった。

「・・・正臣・・・」

月は黙って、真理を見詰める。
慰めるように、優しく。

――真理・・・。

真理は泣きそうな気持ちを抑えながら、胸元に輝く小さなペンダントを握り締めた。

9　ひとり遊戯（後書き）

こんにちは。玉紀　直です。
すいません、ここまで長いのは、玉紀も初体験です。
「自慰行為」のシーンなんて、ほとんど書いたことが無くて。
「閲覧注意」にするほどの物ではないのかな?でも、一応、「性的表現」の一種なので。
前書きでも書いたのですが、女性の方って、意外と「自慰行為」のシーンが嫌いだ、って方が多いらしいので、出来るだけ綺麗にまとめようと思って頑張ったんですけど・・・。どうでしたでしょうか?
真理ちゃんの切ない「女性の部分」が伝わっていればいいな。・・・と、思っています。

でも、尊さんとキスして「彼」を思い出し、すり替えてしまったんですから、ちょっと尊さん、キッカケにされちゃって可哀想でしたね。

次回は少々、急展開を見せます。
あまり仲良し風ではなかった、尊さんと真臣君が急接近。何で?
次回は6月5日更新。
ゆっくり目でごめんなさい。今、ラストを迎えている連載が1本あるので、ソレが終わったらもう少し早いペースで更新出来ると思います。
内容もじれったくて、本当にごめんなさい!

では、次回!

１０　父親参観日

「あれ？今日は幼稚園、休みじゃないの？」
愛車のレガシィを急停車させて、運転席から尊が顔を出した。
立花小児科は、第１第３土曜日は休みだが、他の土曜日は午前中のみ診療している。
今日は第２土曜日。
尊が車で病院に近付いた時、立花家の門の前に、幼稚園の制服を着た真臣を抱いている真理を見つけた。
土曜日は幼稚園が休みのはずだ。
その土曜日に真理が仕事の時は、真臣も病院の院長室やロビーなどで大人しくしている。
受付のお姉さんや看護師達に構ってもらえるので、午前中くらいなら我慢できるようだ。
「本当は休みなんだけど・・・今日、幼稚園の行事がある日で・・・」
「行事？」
何となく真理が困った顔をしている。真臣は泣きそうな顔で真理に抱きついて、ふくれていた。
「・・・『父親参観日』なんです・・・。本当は、お父さんが行ってくれる筈だったんだけど、今朝電話で、本当に小さい頃からお父さんが診ている喘息（ぜんそく）の子が、調子が悪いから今日診てほしい、って」
「じゃぁ、参観日・・・」
「行けないんです。・・・それを言ったら、朝からわんわんって泣いちゃって。・・・幼稚園行かない。って。もぅ、お迎えのバスも来るんだけど」
自分の話しをされているせいか、真臣は真理の首に抱きついて声を上げて泣き始めた。
今年、幼稚園に入って最初の参観日はもちろん母親である真理が

行った。しかし、「父親参観」となるとそうもいかない。
小さな子供はそういう時に自分の親が居ると思うと、先生の話も聞かないで何度も何度も親のほうを振り返る。
ソワソワと。嬉しそうに。楽しそうに。
そんな中、自分の親は来てくれてはいない、と感じる事がどんなに寂しいか・・・。
やっぱり今日は休ませよう。こんなに嫌がってるし、誰も行ってあげられないなら可哀想だもの。
真理がそう諦め、真臣に「今日はお休みしようか?」と言おうとした時。
「よしっ!じゃぁ、尊先生が行ってあげるよっ!」
いきなり尊が、病院で子供に話しかける時のような口調で、真臣に言った。
真理も驚いたが、真臣も驚いた顔で尊を見る。
「尊先生が、真臣君の元気なところを見に行ってあげるよ!パパやおじいちゃんじゃないけど、先生でもいいかい?先生、ちゃんと見て、ママに真臣君が偉くてかっこ良かった事、教えてあげたいんだ!」
「ホントに?きてくれるの?」
真臣が、真理に抱かれたまま身を乗り出すと、尊は窓からグッと腕を伸ばし右の小指を出した。
「絶対行くっ!指切りしよう。『ゆびきり』解かるかい?」
「ゆびきり」の意味が解からないらしく、キョトンッとしている真臣に真理が付け足す。
「ほら。真臣。『げんまん』だよ」
「げんまん」で分かったらしい。真臣は手を差し出し、小さな指を尊の小指に絡ませた。
「げーんまんっ」
そう言って嬉しそうに笑う。そんな風に自分に笑いかけてくれる真臣は初めてで、尊はとても嬉しかった。

「すまないね。園居君」
「すいません。尊先生」
正孝と真理の「すいません」シャワーを浴びつつ、１０時頃、尊は幼稚園に入った。
だいたい４５分ほどの参観の後、さよならの会をして園児は降園となる。
園バスで帰るか、親と一緒に帰るかは自由なのだが、尊は真臣に、終わったら一緒に病院のほうに帰ろうな。と言ってあった。
真臣が居る年少組のドアを開けると、早々と先に来ていた父親達や席についている園児達が一斉に振り返り、尊は驚きつつも少々照れてしまった。
その中で、中央の一番後ろの席に座っていた真臣が、尊を見て嬉しそうに手を振る。尊も胸の辺りで手を振り返し、何かくすぐったいような照れくささに襲われた。
やっぱ、照れるな・・・。こういうのって。
しかし、その光景を見て目をぱちくりさせたのは、真臣の担任、白石綾だ。

彼女は高校の時からの真理の友人で、真臣が「健パパ」と呼んでいる健の「悪阻（つわり）で具合が悪いと八つ当たりする妻」だ。現在、妊娠３ヶ月。
高校の時に、真理が妊娠をしていた事を知っていた数少ない人間のうちのひとり。
もちろん真臣の父親の事も、よく知っている。

あれ？今日は真理のお父さんが来る、って聞いてたんだけど・・・。この人、誰？
とは思うものの、真臣は嬉しそうに手足をパタパタさせながら尊

のほうを見ている。彼が「父親代わり」なのは間違いがなさそうだ。
「はいー。みんなーぁ。お父さんがきてて嬉しいのはわかるけどー、先生のお顔も見てねー」
「やだー」「せんせいのかお、あきたー」などと、可愛らしい悪態をつく園児達を笑い飛ばしながら、綾はＢ４版ほどの画用紙を配り始める。
「はいっ。今日は、来てくれているお父さんのお顔をかくよー。前に練習したからかけるよねー」
教室内に「はーい」という返事がこだまする中、綾は真臣の事が不安だった。
この日の為に、一度練習させてはいるものの、その時に真臣が描いたのは「おじいちゃん」の顔なのだ。
・・・まぁ、眼鏡かけてるとか、頭が禿げてるとか、決定的な違いはないし、いいか？・・・基本的に、４歳児に詳しい描き分けなど出来ない。
クレヨンを持って、真剣な顔で画用紙に向かっている真臣を、尊はニコニコしながら眺めた。
いい顔するじゃないか。真理ちゃんに我侭言ってベソかいてる時とは大違いだな。
何となく気分がホンワリとして、まるで自分の子供を見ているかのように嬉しくなる。

もし、本当に、真臣君が・・・俺の子供になってくれたら・・・。

一瞬そんな事を考えてしまった。

真理に「好きだ」と告白して、キスまでしてしまったものの、実際まだ返事はもらっていない。
「返事はいつでもいい」と言ったのは自分だ。急かしてはいけないというのは解かってはいるが、真臣のこんな一生懸命な姿を見て

しまうと、それがあまりにも真理に似ていて、ついついまとめて支えてあげたいという衝動に駆られてしまう。

尊は元々、子供好きだ。

3人兄弟の末っ子で、下が居なかったせいもあるが、昔から自分より年下の子をよく可愛がるほうだった。

医大時代の友達などには「小児科志望で子供好きなんて、出来すぎていて気持ちワリー、って。仕事上『子供が好きです』ってくらいにしておけよ」とからかわれた。

数分経って、絵が出来上がった子供達が、次々と立ち上がり自分の父親のところへ行って、その絵を手渡しし始める。

どうやら「お父さんに、似顔絵をプレゼント」という事らしい。

しばらくして真臣も立ち上がり、尊の前に跳ねるようにやってきた。

「たけちゃんっ、あげるっ」

たっ、たけちゃん??

真臣にそんな砕けた呼び方をされるのは初めてだ。尊は凄く嬉しくて、思わずニヤニヤしそうになったが、それを抑え、大人らしくニコッと笑った。

「有難う。本当に俺にくれるの?」

「うんっ!たけちゃんのかおだから!」

元気に答える真臣が描いてくれた画用紙の中身は、長丸の中にぐるぐると塗りつぶした丸いふたつの目。キャラクターのスマイル君のように、にこりと上へカーブした口。髪の毛にあたる部分を黒々と塗りつぶしている。

「うまいなー。帰ったらママにも見せていいかい?」

「うんっ!」

尊が嬉しそうに言うのを見て、真臣も返事を返す。

それを見ていた綾は、「どれどれ?練習の時と同じ顔かな?」と

思いつつ近付き、「こんにちはー」と尊に挨拶をしながら、ひょいっと手元の絵を覗き込んだ。
「真臣君っ。これ、おじいちゃんじゃないね」
見た瞬間驚いて、思わず口から出てしまう。
「うん！だって、たけちゃんが、きてくれたんだもん！」

顔の感じは、練習の時と変わらない。
しかし、真臣が「おじいちゃん」と言って描いた時は、口の横に一本しわの線が描かれていた。
この絵には、それが無い。

真臣は間違いなく、尊を描いたのだ。

「嬉しいよ。真臣君」

尊は本当に嬉しそうに笑った。
真臣との距離が、少し近付いたような気がする。
そして、真理との距離も・・・。

１０　父親参観日（後書き）

こんにちは。玉紀　直です。
ほのぼのでしょ？（笑）
あまりこの二人は、出会った時から「仲良し」ではなかったので、そろそろ「仲良し」になってもらおうと思います。
母親を落とすにはまず子供から・・・ってほど尊さんは腹黒くはない・・・（と、思う）ですが、一生懸命な真臣君の姿を見て父性本能がくすぐられた尊さん。
真理ちゃんごと支えてあげたい、と思い始めました。

さて、そんな尊さんの想いが、次回はやっと・・・。
真理ちゃんが、決心をしますよ。

次回は６月１１日更新。

では、次回！

11　真理の決心

「そんなにソワソワしなくても、大丈夫よ」
事務室の奥で受付分のカルテを出していた真理に、真澄が後ろから声を掛けた。
「え？ソワソワって・・・」
何となく苦笑いで誤魔化すが、カルテを探す手元があても無くさまよっている。第一、「た」行を探さなければならないのに、真理が探している場所は「は」行。

心、ここにあらず。
これを、ソワソワといわず、何と言おう。

「別に、親が何かやらされる訳じゃないのよ。参観なんて子供の様子を見に行くだけだもの。そんなに心配していたら、逆にせっかく行ってくれている尊先生に失礼よ」
真理が手に持っていた3冊を手に取り、そのカルテの束でポンッと頭を叩く。
「それは、そうだけど・・・。真臣、本当に大丈夫かな。って」
真理から見ても、真臣はあまり尊に懐いてはいないようだった。
さっきは「誰かが来てくれる」という嬉しさで笑顔を見せていたけど、本当に大丈夫かしら。「やっぱりおじいちゃんじゃなきゃイヤだ」とかって、泣いたりしてないかしら・・・。
「尊先生は、本当に子供にも優しいし真面目でいい先生よ。真理はいつも尊先生の補助に付いているんだから解かるでしょ？」
それは真理にも良く解かる。尊が声を掛けると具合が悪くてぐずっている1～2歳の幼児でも、泣き止んで笑顔を見せるのだ。
まるで、今朝の真臣のように。
「まさちゃんが尊先生に懐いていないように見えるのは、照れてい

るのよ。まさちゃん、人懐っこいけど、ちょっと照れ屋さんなところがあるでしょ？」

思い出すように、真澄はクスッと笑って真理を見る。

「・・・『パパ』と同じで・・・」

真理の大きな目が、フッと細まり、「思い出」を追う。

ちょっと赤くなって・・・、照れると、ブロンズ系の金髪に染めた髪の毛をぐしゃっと掻き回す。

長めの前髪の隙間から見え隠れしていた目が、照れくさそうに真理を見詰めていた。

・・・正臣・・・。

「子供は本能的に、自分を可愛がってくれる人が分かるわ。表面だけを取り繕って笑顔を見せても、小さな子供は絶対に懐かない。お父さんもそうだけど、尊先生にあれだけ子供が懐いてくるっていう事は、本当に子供が好きな優しい人なんだと思うのよ」

真澄は真理の真横に並ぶと、真理の頭に手を回し、ポンポンッと撫でながら優しく引き寄せた。

「お母さんが真理に、尊先生とお食事に行きなさい、って言ったのはね、少しでもあなたに『違う優しさ』に触れて欲しかったからなのよ」

「・・・お母さん・・・」

「４年・・・。真理は頑張ったわ・・・。まさちゃんや子供達に、相変わらず「太陽さん」って言われるくらい優しい笑顔を振りまいて。――確かに、正臣君の『死の理由』を知っている友達には、沢山の『慰めの優しさ』をもらった。・・・でもね」

誰かに聞かれるのを憚(はばか)るように真澄の声は小さくなったが、それでも真理の耳元で、その言葉は体中に染み渡るくらい大きく響いた。

「『愛してもらう優しさ』から、真理はずっと、逃げていたでしょ

う？」

真理はキュッと、下唇を噛んだ。

――――この４年。真理に言い寄って来る男性が、いなかった訳ではない。

看護学校時代や、病院に勤め始めてからも。

同級生の友達であったり、無理矢理連れて行かれた合コンで知り合った人であったり。患者として来た子供の身内であったり。

しかし、真理は全て持ち前のその笑顔で振り切り、決して誰にも心を開く事は無かった。

交際が駄目なら。と、体の関係だけを求められた事もある。

「未婚の母」は「そういう事」に慣れているだろう。と。

「体が寂しいだろう」と、酷い屈辱を受けたこともあった。

もちろん、一度たりとも、そんな誘いに乗った事は無い。

「尊先生は、真理が好きなんだと思うのよ」

真理がちょっと驚いた目で真澄を見ると、真澄は笑って娘の頭を撫でる。

「解るわよ。そのくらい。真理を食事に誘って良いですか、って訊いてきた時の尊先生、本当に楽しそうで嬉しそうだったもの。・・・娘の母親、っていうのはね、娘に言い寄って来る男の人には敏感になるものなのよ」

真理の頭から手を離し、カルテを胸に抱えて、真澄は言葉を失っている娘を見詰める。

「真剣に考えても、いい頃なのよ。真理。・・・まさちゃんのためにも・・・あなたは、もう一度、幸せになるための事を考えなきゃいけないの」

「真臣の、ため？」

「まさちゃんは、まだあんなの小さいの。『父親の温かさ』を、何一つ知らないわ。・・・いくら、『パパ』って呼べる人達がいても。

だって、彼らは、まさちゃんの父親では無いもの。――まさちゃんが本当に懐いて、真理の事を本当に大切にして思ってくれる人が現れたら、・・・『幸せ』になる事を考えなくちゃいけないんじゃないかしら?」

「お母さん・・・それは」

「あなたはもう、『一人で』生きている訳ではないのよ」

「・・・・・」

「まさちゃんがいるの。あの子を『幸せ』にする事も、あなたが『母親として』考えなくちゃいけない事なのよ」

真理は完全に言葉を失った。

もう、何も言い返せない。言い返す言葉も理由も見つからない。

真澄はポンッと真理の肩を叩くと、「ほら、仕事に戻ろう」と言って、診察室のほうへ歩いて行った。

「幸せ」・・・。真臣の・・・。

私は、真臣の幸せを考えてあげなきゃいけない・・・。

真理は、ナース服の下に隠れたペンダントをキュッと握った。

病院のナース服は、開襟タイプではなく襟元が詰まったタイプだ。

そのせいで見えないが、真理はいつも、ちょうど鎖骨の下辺りに来る長さのペンダントをしている。

真理にとって、とても大切な大切なペンダントを・・・。

「正臣・・・」

ペンダントを、ナース服がしわになってしまうくらいの強さで握り締める。

私は、一人じゃない。「真臣」がいる。

母親として、真臣の事を考えてあげなければならない・・・。

カルテ棚の前に立ったまま、奥の窓に目を向ける。そこからは病院の裏手、病院関係者用の駐車場が見える。

そこに、一台の車が入ってきた。

レガシィＢ４　２．５ＧＴ。サテンホワイトパール。――尊の車だ。

「・・・かえってきた」

確か、真臣も一緒に帰ってくると言っていた。

真臣は泣いていないだろうか？むすっと機嫌の悪い顔をしていないだろうか。「父親」が来ない「父親参観日」。それを寂しくは思っていないだろうか？

「真臣っ・・・」

真臣・・・ごめんね。寂しい思いさせて、ごめんね・・・。

真理は自分が泣きそうになりながら、病院の裏口へ走り出した。

不安な気持ちを抱えて病院の裏口から飛び出し、真理は駐車場に出る。

しかし、そんな彼女の目に映ったのは、あまりにも予想に反した真臣の姿だった。

「すごーい！たかーい！おっきいねーぇ、たけちゃんっ！」

「おぅっ、たけちゃんは背がおっきいからなー。どーだ？いい気分だろ？」

「おとさないでよ！おっかないよっ！」

「どーしよーかなーぁ。ほらっ！！」

尊に肩車をされてハシャぐ真臣。

肩車の手を一瞬はなす振りをして真臣を驚かせ、笑う尊。

「おちるよぉ！たけちゃんっっ！ママに言いつけるぞ！」

「それは勘弁してくれよ。真臣君のママに嫌われたら、俺、泣くぞっ！」

「あーー！たけちゃんっ、ママのこと好きなんだー！」

「大当たりーーー！！」

真臣の足を掴んで、落ちないように2～3回ぐるぐると回って遊びながら、尊は裏口の前で呆然と自分達を見ている真理に気付いた。

「あっ、真理ちゃん・・・」

やばっ！「子供に『好き』とか言わせないで！」って、怒られるかな・・・。

尊が少々気まずい顔をするが、尊の頭に片手で掴まりながら真臣は楽しそうに嬉しそうに、真理に向かって手を振る。

「ママー！ただいまーぁ！」

――――真理・・・。

その真臣の「最高の笑顔」が、「彼」がいつも真理に向けていた笑顔と重なる。

私は、この笑顔を、守ってあげなくちゃいけない。

「おかえり。真臣」

真理は笑顔でそう言いながら、尊の前へ歩み寄った。

「尊先生。有難うございました」

ぺこりと頭を下げる。尊はちょっと照れて、髪をクシャッと掻くと照れくさそうに真理を見詰めた。

「いや・・・あの、俺も、楽しかったよ」

その照れ方が「彼」に似ていて、真理は一瞬ドキッとしてしまった。

「ほらこれ。真臣君が描いてくれたんだ」

折り線が付かないように、大事に二つ折りにしていたＢ４の画用

紙を真理に渡す。真理が開くと、そこには似顔絵らしき顔。
「俺。なんだって」
「ママ！ぼく、じょうず?!」
真理が真臣を見上げる。ニコニコして、嬉しそうな真臣を。
「上手。凄く上手だよ、真臣」
大好きなママに褒められた事が凄く嬉しい。真臣は上機嫌で尊の頭にしがみつく。
尊が「良かったな」と言って、腕を伸ばし真臣の頭をクシャクシャッと撫でた。
真理はそんな二人を、ちょっと切なそうに見詰める。

同じ背の高さ。
同じ照れ方。
同じ、子供好きな人。

正臣も、子供好きだった。
小児科のお医者さんになりたい。って、普段スレた事ばっかりしていたくせに、ひとりで黙って勉強を続けていた。
泣いている子供にカメラを向けて気を逸らして見せたのも、彼の案。
――正臣が生きていたら。真臣を肩車してくれていたら。
・・・こんな感じだったんだろうか・・・。

「尊先生・・・」
呼びかけられて、尊が真理を見る。
真理がちょっと赤くなって、困ったように尊を見ていた。
「どうしたの?」
「あの・・・私・・・」
「ん?」
尊は首を傾げた。

「あの・・・私で、いいですか？」
「え？」
「私なんかで・・・良かったら・・・」
――太陽が、新たに輝きを放ち出す。
月に照らされ。
星の傍で・・・。

11　真理の決心（後書き）

こんにちは。玉紀　直です。

自分は一人じゃない。母親として、子供の「幸せ」も考えてあげなければならない。

母親に諭された真理ちゃんは、尊さんと真臣君の仲の良い姿を見て、決心をします。

でも、この決心は、真理ちゃんの心に、尊さんの心に、明るい光だけをもたらしてくれるのでしょうか？

次回は、ついに二人が・・・。でも、真理ちゃんは・・・。

お察しの通り「閲覧注意」になります。苦手な方はご注意下さい。

次回、6月17日更新。

では、次回！

１２　月の指輪（前書き）

注意

今回は本文中に性的表現が含まれています。
苦手な方、又は、そういう表現が嫌いな方は
その場面にきたらとばすなど。してください。
Ｒ－１５指定はさせて頂いていますが閲覧にはご注意を・・・。

12　月の指輪

「じゃぁ、夕方迎えに来るから」
「はい・・・」
診療時間も終わり、後片付けも済んで、帰り支度を終えた尊が職員用駐車場に繋がる裏口で、嬉しそうに真理に言った。
「じゃぁな。真臣君」
真理に抱き上げられた真臣の頭を、かき混ぜるようにくりくり撫でると、真臣がくすぐったそうに肩を竦め、嬉しそうに笑う。
「うん。ばいばい。たけちゃんっ」
尊が真理に「じゃぁ」と言って軽く手を上げ、車のほうへ走っていく。
真理は尊の車が見えなくなるまで、その場で見送った。
「ねぇ。真臣はさぁ、尊先生の事、好き?」
「うん!ぼく、たけちゃん、好きっ!」
すっかり懐いてしまっている。とても嬉しそうに笑う真臣を、真理は目を細めて見詰めた。

「私でよかったら。よろしくお願いします」さっき真理が、飛び出してきそうな胸の鼓動を抑えながら、尊に言った言葉。

交際をO，Kしただけ・・・。
尊先生なら、交際中でもきっと真臣を可愛がってくれる・・・。

「あのさぁ、真臣。・・・今日、おばあちゃんと、ねんねしてくれる?」
夜、尊と食事に行く約束をした。前回までと同様に、食事をしてから散歩がてら話をして帰ったとしても、真臣がベッドに入る時間までには帰ってこられない。

「うん。いいよぉ！・・・ママはぁ？だれとねんねするのぉ？・・・・たけちゃん？」

真理は驚いて赤くなってしまった。子供の悪気の無い言葉、という物は、たまにドキッとさせられるものがある。

「なっ、何言ってるのっ。ちょっとご用事でお出かけしてくるのっ。ちゃんと真臣とねんねするよっ」

小さな子供相手にムキになる必要も無いのだが、ついムキになってしまった。

もちろん言った真臣は、何故ママが慌てているのか解からずキョトンッとしている。

でも、「交際」Ｏ，Ｋしちゃったって事は・・・。

いつかは「そういう事になる」って事なのかな・・・。

何となく赤くなってしまう。

やだなぁ・・・。経験が無い訳でもあるまいし。こんな事でドキドキして。

などと思うが、元々真理は、そんなに多数の男性と付き合ったことなど無い。ましてや「彼」が死んでからは、ずっと恋愛関係を避けてきたのだ。

無理も無い反応だろう。

「ママ。ぼくね、秋パパのとこに行きたい」

「秋光君の所？」

真臣がニコニコしながらコクコク頷く。尊に遊んでもらったせいか、この上なく上機嫌だ。

「あたらしいゲームのやり方、おしえてもらうのー。秋パパがね、一番じょうずなんだよー」

真臣は「パパ達」の中で、秋光に一番懐いている。

真臣が産まれたばかりの頃から、家が近い事もあるからか、一番

真臣を見に来てくれたり遊んでくれたりしていたのは秋光だった。
真理はにこっと笑って、真臣の頭を撫でた。
「じゃぁ、明日でも行こうか？でも、秋パパがお仕事で忙しかったら駄目だよ」
「うん！わかってる！」
たとえ忙しくても、真理や真臣の為なら仕事を外す。
そんな秋光の気持ちを、真理は知らない。

「このペンダント。いつもしてるよね・・・」
片腕で真理を抱き寄せたまま、尊は真理の首に下がったペンダントを指先でなぞった。
食事を終えた後の、いつもの遊歩道。
話をしながら歩いている時、当然のように尊に抱き締められた。
交際を承知したのは自分だ。「離して下さい」と言うのもおかしいだろう・・・。
真理が黙って体を預けていると、尊がペンダントを見てそう言ったのだ。
仕事ではいつもナース服の下になっている。今までの食事の時も、キッチリと首元が閉まるブラウスを着ていたので、見えてはいなかっただろう。
しかし今日は、首元が開き気味のワンピースを着ている。
ペンダントトップは、かろうじて服の下に入ってしまっているが、プラチナの鎖はしっかりと見えていた。
「首の後ろに、いっつもチェーンが見えていたからさ。・・・ペンダントしてるんだ、って、いつも思ってた」
尊はチェーンをちょっと引いて、ペンダントトップを服の下から取り出すと、それを手のひらに乗せて眺める。
「・・・これは・・・。指輪。じゃないの？」

どう見ても、それは指輪にチェーンを通し、ペンダントにしている物だった。

月の形をした指輪。

プラチナ素材で、月が小さいながらも大小のダイヤを抱いたデザイン。

シンプルだが、とても可愛らしい印象の指輪だ。

「本当は、指輪なんだけど・・・」

「どうして指輪にしないの？」

「デザインリングだから、仕事中はできないでしょう？」

「お気に入りなの？いつもしてるって事は」

真理は黙って頷いた。

いつも一緒に、肌身離さず持ち続けている指輪。

それは、「彼」からの、最初で最後のプレゼントだったのだ・・・。

「ねぇ、真理ちゃん」

指輪の事はさほど気にならなかったのか、尊は再び両腕で真理をグッと抱き締めた。

「・・・いい？」

「え？」

いきなり問い掛けられたが、真理は何の事だか解らない。すると尊が、ちょっと自嘲するような笑みを浮かべる。

「何か・・・。男ってのは、しょうがないなぁ。って感じなんだけどさ。Ｏ，Ｋもらったからって「すぐ」か？みたいで・・・」

「あの・・・」
ちょっと意味が解りかける。真理の胸がドキンと大きく高鳴った。
「・・・君が・・・欲しいんだ・・・」

有線のＢＧＭが、小さな音でかかっていた。
クラシックのチャンネルだろうか。綺麗なピアノの旋律が聴こえる。
「・・・ぁ・・ん・・」
しかし多分、尊が真理の唇を奪う音のほうが大きかっただろう。
その激しさからちょっと逃れようと、真理が喉の奥で呻くと、尊がやっと唇を離した。
少々息が切れる。この間されたキスとはまったく違う、貪るようなキスをされて、真理は頬や体が熱くなってくるのを感じた。
「先に、シャワー使う？」
訊かれて、控えめに頷く。
車庫のような駐車場に入り、そのまま部屋へ入ることが出来るタイプのラブホテル。
真理はこんな所に入ったのは初めてだ。
こういう場所に、過度な装飾で派手な内装のイメージしか持っていなかった真理は、小奇麗な感じのおしゃれな部屋に少々驚いた。

私・・・。尊先生と・・・。

これから起こる事が、当たり前のように解かる。
シャワーの雨を体で受けながら、真理は月の指輪をキュッと握り締め、ちょっと辛そうに顔を歪めると、ペンダントを外した。

――――ごめんね・・・。

ピクンッ・・・。

体に巻いていたタオルを外されて、真理の体が驚くように震える。

大きなベッドの上で真理にキスをしながら、尊は真理の体を隠しているバスタオルを外し、ベッドの外へ投げ捨てた。

「・・・真理ちゃん・・・」

ちょっと興奮気味に上ずる声を発する尊の唇が、真理の首筋を滑り、胸元へ落ちる。

下から持ち上げるように乳房を掴み、硬くなりかけた先端の突起を舌で回すように舐めると、耐え切れず真理の口から甘い声が漏れた。

「あっ・・・あっ、んっ」

その声を聞いた瞬間、尊のボルテージも急速に上がり始める。

会った瞬間、自分の心を奪った女性が発する、今まで聞いた事の無い「女」の声。

「あっ・・・あ、はぁあ・・・」

控えめに、しかし確実に、自分の行為によって漏れる真理の声。

尊はちょっと、強めに真理の乳首を吸い上げた。

「んっ！あは・・っ、ぁんっ！」

「・・・真理ちゃん」

「た・・・尊先・・生・・・。あっ、はぁぁ・・・」

「『先生』は、やめよう・・・。こんな時に・・・」

両手で大きく強く、真理の両胸を揉みしだく。

思わずその両手を掴んでしまうほど、真理は自分の体が反応してしまっているのを感じ、少し慌てた。

「た・・ける、さん・・・。んっ・・んっ、あっ」

久し振りに、体に与えられる刺激。

「自分の手」ではない手が、真理の体中をまさぐり、容赦なく胸を揉み上げ唇が楽しむように愛撫を繰り返す。
「あぁっ！あっ・・や・・・ぁ・・」
下半身に疼きを感じ、両足がもじもじと焦れ動く。
尊は片脚を真理の脚の間に挟み、閉じることを不可能にしたまま、
「何か」を待ちわびる部分へ片手を差し入れた。
「あっ・・・！」
尊の手がその部分に触れたのを感じ、真理の体が今までになくビクンッと震える。
尊は指で、閉じられていたその部分を開き、中指を滑らせる。・・・が。
その指を当てたまま、指に当たる感触に驚き、恥ずかしそうに赤く上気した真理の顔を見下ろした。

「感じてくれてるんだ・・・？真理ちゃん・・・」
「・・・た・・ける・・さん・・・」
尊の中指は、何の抵抗も無く、溢れ出る泉の中へ誘い込まれる。

「凄く・・・濡れてる・・・」

「あっ・・・！あぁぁっ！」

１２　月の指輪（後書き）

こんにちは。玉紀　直です。
半分「真臣のためにＯ，Ｋした」ような交際。
自分の心が定まらないうちに、体を重ねてしまいました。
思い出の「月の指輪」を外して、「彼」にどこか申し訳なさを感じながらも、彼女の体は予想以上に反応します。
このまま彼女は、「彼」を忘れて、昇りつめることが出来るのでしょうか・・・。

次回も「閲覧注意」が続きます。
苦手な方はご注意下さい。

次回は６月２０日更新。（今回は早めです）

では、次回！！

１３　愛される体（前書き）

注意

今回は本文中に性的表現が含まれています。
苦手な方、又は、そういう表現が嫌いな方は
その場面にきたらとばすなど。してください。
Ｒ－１５指定はさせて頂いていますが閲覧にはご注意を・・・。

13　愛される体

「あっ！・・・ダメ、ダメェッ・・・」
尊の指が真理の中で動き回る。
抜き差しする訳ではなく、まるで真理の中を探り取るかのように、前後左右に大きく動き回る。
「た・・けるさ・・・あぁぁ・・」
その動きの激しさに、思わず動き回る指を動かす手を押さえた。
しかしそれは、何の制止にもならない。
「ダ・・・メェェ・・・」
尊は指で真理の中を探りながら、彼女が異様に反応を示す場所を見つけた。
「真理ちゃん・・・ここ？」
指を少し上げ気味にして、上部を強く擦るように動かすと、真理の体が一際大きく震え脚が引きつるように伸びる。
「・・・ここ・・・いいんだ？」
真理が反応するのが嬉しくて、尊はその部分への刺激を続けた。
「はっ・・あっ、あっ、・・・ダメェ・・ッ、あぁっ！」
自分で自分を慰める時、いつも自分で攻める部分。
いつもは控えめに高まりを与えられているが、今それを与えているのは自分ではない。
声を出すたび、体が反応を見せるたび、嬉しそうにより強く、尊の指は動き続ける。
真理が押さえていた手など、もう力は入ってはいない。ただ、添えてあるだけ。
「だめぇっ！・・・尊さ・・んっっ・・！あっ、もぅっっ・・」
喉が反りあがり、哀願するような声が出る。
キュッと大きく締め付けるような感触が指に伝わり、尊は指を引き抜いた。

「・・・ぁ・・あっ・・・・」
余韻を残し、下半身がヒク付くが、それを誤魔化すように両脚をシーツの上ですり動かす。
いつもならそのまま小さなオーガズムを与えられる体。しかし、尊の指はそれを許さなかった。

尊は腕を伸ばし、枕の上方にある室内操作パネル横に置かれた小さな小物入れから、四角い小さな包みを取り出した。
こういった種類のホテルには、必ず、といっていいほど置かれている物。
コンドームだ。
実は尊が真理を「ラブホテル」に連れてきたのには理由がある。
交際をO，Kしてもらった途端に体の関係を求めてしまうのも「どうかな?」と、実際のところ自分でも思っていたし、そのうちにそうなったら自分の部屋にでも連れて行くつもりだった。
しかし我ながら困ったもので、抱き締めた時、自分の腕の中で体を預けてくる真理を感じ、どうにも我慢が利かなかった。

・・・いつかは、そうなるんだし。

そんな思いで、「いい?」と訊いてみた。真理が困ってしまったら諦めよう。そう思ったが、真理は頷いてくれた。
しかし、車を走らせていて、大変な事に気付く。
ある事があって、恋愛や男女の関係から遠ざかっていた彼は、家にも手持ちにも、コンドームのような避妊具の用意がない事を思い出した。
途中でドラッグセンターなどに寄って買ってくるのも、せっかく盛り上がっている気分が冷めてしまうような気がする。
そこで、必ず「そういう物」が置いてある、ラブホテルに入った。
「学生じゃあるまいし。いきなりラブホテル?」と思われないよ

う、自分が知っている限りで一番落ち着きのある、一見して「そういう所」というのを感じさせない雰囲気の所を選んだのだが、部屋に入った途端、意外な内装に驚いたように部屋の中をきょろきょろ見回している真理がちょっと可愛らしかった。

封を切って中身を出した時、真理がジーッと自分の手元を物珍しそうに見ていることに気付く。

・・・どうしたんだろう・・・。別に初めて見る物でもないだろうけど。

「真理ちゃん。・・・つけてくれる？」

冗談まじりに尊が訊くと、真理が驚いて目を見開き慌てる。

「あ・・・あのっ、ごめんなさいっっ。私、そういうの、触ったことないの・・・つけたことなんて・・・なくて・・・」

今度は尊のほうが驚いてしまった。つけた事ない？

しかし真理が、高校の時に妊娠をしてしまっている事を思い出し少々納得するものの、相手の「彼」はそういう事を考えない人だったんだなと感じ、同じ男としてまた少々微妙な気持ちに襲われる。

「ごめんね。冗談だよ」

尊は軽く笑って真理にキスをすると、キスをしながら、もう我慢が出来なくなっている自分自身に準備を施した。

「・・・真理ちゃん・・・」

熱っぽい声で名前を呼ばれ、尊が自分の中へ入ってこようとする気配を感じた瞬間、真理はグッと身を硬くした。

「んっ・・！んっぁぁ・・！！」

久し振りに、体中を貫く挿入感。

自分の指では無い、明らかな男性自身。

「あっ・・はっ、ぁっっ」

真理は尊の両腕を掴み、ちょっと苦しそうに上半身を浮かせた。

「・・・真理ちゃん・・、苦しいの？」
「あっ・・・ふぅ・・ん・・・っっ」
首を振って、息を詰めながら声を絞り出す。
自分の中がいっぱいに満たされる感覚。
苦しいくらいに体中が痺れる。
「たけ・・るさん・・・あぁっ、やさしくして・・・、おね、がい・・・」
別に乱暴にしている訳ではないのだが、真理は泣きそうな目で訴える。
女性も、しばらくセックスをしない時期が続くと、しなやかになり慣らされていた箇所が固くなり、次に男性を受け入れようとする時に、まるで男性を知って間もない頃のような圧迫感を感じることがあるらしい。
「・・・優しくするよ」
尊は囁くようにそう言うと、真理の中でゆっくりと動き出した。
「ああっ・・・あっ・・」
いっぱいに満たされた自分自身が擦り上げられ、体の奥から徐々に引き出される快感。
「んっ！んんっあっ！あっ・・・」
少しずつ、少しずつ。真理の中で動く尊が、もっともっと感じたがって、深く入り込んでくる。
「あっ、あぁぁぁんっ・・！あっ、ああっっ！！」
やがて、快感に縛られ始めた体同士が、更に「もっと」と互いを求め合う。
真理は両手でシーツを握り締め、下半身から体中を駆け巡る快感の波に背中を反り返らせた。

「・・・や・・ああっ！だめぇ・・・っっ！」
久し振りに、誰かの手によって愛される体。
その行為は、昔、何度も何度も愛された記憶を、体に蘇らせる。
「た・・けるさ・・っ、あぁっ！だ・・めっっ！！」
私・・・。もう・・・！
真理自身が苦しいほどに自分を締め付け、尊自身も限界を感じ始める。
尊は真理の耳元に唇を寄せると、愛しそうに彼女の名前を呼んだ。
「・・・真理・・・」
「・・・！」
真理が、ハッと、我に返るように目を見開く。
――真理・・・。
「・・・あ・・・」
――真理・・・。
尊に名前を呼ばれた瞬間、真理の体の中に「彼」が蘇る。
今、自分の体を愛してくれている人。
身長も
体格も
とても似ている人。

「真理・・・」囁いたその声さえも、「錯覚」してしまうほどに・・・。

「真理・・・まりっ・・・」
愛しそうに自分を呼ぶ。その声が・・・。
――「彼」に、聞こえてしまう・・・。

そんなはずは、ないのに・・・。

――真理。

「・・・ま・・さ・・お・・み・・・」

小さな声で呟いてしまうが、その声はもう体中で真理を感じきろうとしている尊には、聞こえてはいない。

正・・・臣・・・。

真理の見開いた瞳から、涙が一筋こぼれる。
もう体は、何も感じることが出来ない。
まるで自分が不感症になってしまったかのよう。ただ尊に貫かれ揺さぶられるだけ。

「彼」に愛され続けた体。
４年経っても・・・。
自分で慰める事があっても・・・。
誰かに愛され、途中まで感じる事が出来ても。

最後の最後まで、感じ昇り詰める事を、許してはくれない。――――

「まりっ・・・！」

勢いよく動き続けていた尊が、一度大きく深く真理の中へ入り込み、そして、止まった。

そのまま覆いかぶさり、息を切らす。

尊の上気した体を自分の上に感じながら、真理は流れる涙をとめる事が出来なかった。

「真理ちゃん・・・？」

尊が顔を上げる。真理が泣いている事に気付いたのだ。

「どうしたの？嫌だった？」

真理は小さく首を左右に振る。尊は体を横に移動させると、真理を抱き寄せ大分乱れてしまった自慢のきれいな髪を指に絡めて、頭を撫でた。

「・・・よかったよ・・・真理ちゃん・・・」

「・・・たける・・・さん・・」

抱き寄せる尊の腕が、違う腕に感じる。

今でも、自分の体は「彼」に愛されているのだと・・・。

真理は切ない気持ちで、いっぱいになった・・・。

１３　愛される体（後書き）

こんにちは。玉紀　直です。
途中までは良かったのですが・・・。
最後の最後に「彼」を思い出してしまい、昇り詰めることが出来なくなりました。
そんな事とは知らず、ただひたすらに彼女を愛し続ける尊さん。
可哀想なのは、真理ちゃん？
それとも、尊さん？

真理ちゃんの心の中に住み続け、体の奥底まで、彼女を愛し続ける「彼」。

真理ちゃんの、心の葛藤が始まります。

尊さんと真理ちゃんの関係に、もうひとつの星が、気付き始めますよ。

次回は６月２３日更新。

では、次回！

１４　抱かれた香り

「あー、ママー、おかえりぃ」
カウンターの中に置かれたパイプ椅子に座り、楽しそうに脚をブラブラさせながら、真臣が嬉しそうな笑顔を真理に向ける。
「おかえり。お姉さん」
その横に屈みこんでいた秋光が、真臣が手にしている小型ゲーム機の画面から顔を上げ、今出入り口から入ってきた真理に目を向けた。
「ただいまっ。いい子してた？」
走ってきたのだろう。息を切らせ、カウンターに手を付いて真臣に笑いかけ、それから秋光を見上げる。
「ごめんね、秋光君。真臣置きっぱなしにしちゃって。お仕事の邪魔にならなかった？」
「ぜーんぜんっ。日曜の昼間って、１週間の中で一番暇だし。こいつ、ちゃんと言う事利くから、邪魔になんてなんないよ」
そう言いながら、真臣の頭をぐしゃぐしゃにして撫でる。当の真臣は「やめてよぉ」とムッとしながら文句を言うが、別に嫌な訳ではない。かえって、甘えているからこういう顔が出来る。
「ママぁ。秋パパね、すごいんだよ。あっというまに、『お店』いろいろ『ロイヤル』にしちゃうんだよ」
「そんなレベルのゲーム。ぬるいぬるい」
「でも、すぐデーター消しちゃうんだよ。せっかく『ロイヤル』になってるのにぃ」
「あたりまえだっ。自分でやらなくてどうすんだよっ」
子供向けキャラクターがお店を大きくしていくゲーム。
秋光に教えてもらいたいから、日曜日に秋光のところへ行きたい、と言われていた。
秋光の都合もあるだろうから、一応電話で行ってもいいか訊いた

のだが「何を水臭い事言ってんの！」と言われ、日曜の昼過ぎに真臣を連れてきた。

店は、どちらかといえば、昔から近所のお馴染みさんの他に、小児科の患者や職員、近くの事務所や店舗で働いている人間などの客層が多い。

そのせいか、日曜などの休みの日が一番暇だ。

平日の昼間は二人いるパートも、日曜は一人だけ。

日曜の昼間に真臣がチョロチョロしていようと、何の邪魔にもならないのだ。

それを知っている真理は、店に来てから秋光にお願いをした。「2～3時間、ちょっと用事で行きたい所があるんだけど、真臣置いていっていい？」と。

もちろん秋光は「いいよ」と答える。真理の頼みだし、真臣は可愛いし。「駄目」という理由は、彼には無いのだ。

しかし・・・その2～3時間の間に、真理が行ってきたのは・・・。

「良かったね。真臣。秋パパに教えてもらえて」

ちょっと切れている息を整えようと、息を吐きながら真理が笑う。汗をかいたのだろう。肩にかかる髪を暑そうに後ろへ流した。

首元が横に大きく開いたカットソー。髪を流した瞬間に、かすかに見えたその「痕」を、秋光は見逃さなかった。

「何？秋光君」

真理がちょっと驚いた声を出す。秋光がカウンターの中から身を乗り出し、真理の顔の横に顔を寄せて、クンクンッと鼻を鳴らして匂いを嗅いでいる。

「ど・・・どうしたの？何か臭う？私」

「・・・ふーん・・・」

真理は驚いているが、秋光はどこか冷たい目をして真理から顔を

離した。
「秋光君？」
秋光のこんな目を見るのは、高校の時「仲間達」や「彼」と暴れまわっていた頃以来だ。
なんだろう？いきなりどうしたんだろう・・・？
真理がドキドキしていると、秋光はカウンターから出て彼女の腕をグッと掴んだ。
「真臣！ちょっとママと話があるから、大人しくしてるんだぞ！―――おーい！ちょっと外すから。客来たら頼むなー！」
カウンターの中の真臣に言ってから、少々時間を持て余し気味に、陳列台の整理を始めたアルバイトの大学生に声を掛ける。
そしてそのまま、店を出た。

「あっ、秋光君？？」
真理の手を引いたまま、秋光は店の横を回り裏側へと歩いていく。
真理はそのまま、ちょっと足をもつれさせながら秋光に引っ張られていった。
「どうしたの・・・？」
不安そうな声。秋光はピタッと立ち止まり、真理を店の壁に押し付けた！
「？！」
真理がビクッとする！秋光が何か怒っているのが見て解かるのだ。
こんな険しい表情の彼を見るのは、高校時代以来ではないだろうか・・・。

「お姉さん・・・。どこに行ってたの？」
「え？」
「こんな『痕』付けて・・・」

秋光が真理の肩にかかる髪をよけ、カットソーの肩口をちょっと引っ張る。
そこから覗いたのは、薄く残る「赤紫色の痕」。
「あ・・・」
真理はビクッとした。よく見なければ解からないくらいの物ではあるが、それは間違いなく、「さっき」尊に吸い付かれた時に付いた痕。

「痕付いちゃう・・・。吸い付かないで・・・」と言った真理に、「ナース服は首まで隠れているから見えないよ」と笑いながら、ドライブがてら走らせていた車の中、一休みに停めた人気のない国道のパーキングで真理を抱いた。

昨日、「明日も会える?」と訊かれたが、日曜は真臣に「秋パパに所に行きたい」と言われていた。
解からないが2~3時間なら大丈夫かもしれない。と返事をしておき、今日店に来てから秋光に「用事があるから」と、お願いをした。
尊は真理に一目ぼれだ。
交際を承諾してもらい、体まで許してもらった。正直な気持ちとして、嬉しくて堪らない。
恋愛関係になったばかりの頃という物は、毎日でも相手に会いたいもの。
一度体を重ねたとなれば、毎日でも相手に触れたい。
それがたとえ、2~3時間でも。
まさか今日も、それも車の中で・・・。とは思ったが、カーセックスなど初めての経験。ちょっとした好奇心もあって、尊を拒みきれなかった。
それと、もしかしたら今日は、ちゃんと最後まで昇り詰める事が出来るのでは無いか、という期待もあった。

昨日は4年ぶりに自分を愛してもらって、あまりにも間が開きすぎていたから、「彼」への想いが強すぎただけ・・・。
「彼」以外の男性に体を預けてしまった。という罪悪感が強すぎたのだ・・・。
そう思い。今日も尊に抱かれた。
――しかし、結果は同じだった。

途中まではちゃんと感じることが出来るのに、昇り詰めようとすると、哀しくて虚しい思いに襲われ何も感じることが出来なくなってしまう。

私・・・。尊さんに凄く悪い事をしているんじゃないだろうか・・・。

尊への申し訳なさで、胸がいっぱいになる。
彼は、そんな事は知らない。
真理が、「彼」の事を思い出しながら、自分に抱かれている事など。
「彼」の事を思い出し、最後まで自分を感じてくれていない事など。

秋光は真理を壁に押し付けたまま、さっきのように真理の顔の横に顔を寄せ、くんくんと匂いを嗅ぐように鼻を鳴らす。
「あ・・・秋光・・・くん・・？」
いつもと違う秋光の雰囲気に、少々怯え気味になっている真理の耳元で、秋光は囁いた。
「・・・セックスしてきたの？」
ビクッ！と真理の体が震える。
「お姉さんから・・・そんな匂いがする・・・」

「・・・あきみつ・・くん・・・」
「知ってる?セックスするとさ、その残り香が体に付くんだ。・・・男と女の・・・体液が混ざったような・・・。生々しい感じのさ・・・。クスッ・・知ってるよね?」
嘲笑するような口調に恥ずかしさを感じ、真理は真っ赤になって下を向いてしまった。
「レイプで一方通行だったとか、し終わった後にしっかりシャワーを使った、とかじゃない限り・・・、その匂いって絶対に体に残るよ。気をつけないと」
秋光は再び、クンクンッと鼻を鳴らす。
「・・・すっごく、感じてました、って匂いがする」
真理は顔が上げられない。
子供を置いて、嘘をついてまで交際相手に会いに行っていたという事実がとても恥ずかしい。
それ以上に、尊と付き合う事にした事実を秋光は知らない。誰だかわからない男と「そういう事」をしてきたのではないかと疑っているだろう。「行きずりで男と寝るような女だったのか?」と彼に思われてしまっただろう。それが、もっと恥ずかしかった。
「どこの男としたの?」
責めるような声が、頭の上から降りそそぐ。
秋光の声が怖くて、自分が恥ずかしくて、真理は顔が上げられない。
「・・・あの先生?」
ビクンッ!大きく真理の体が震える。
それだけで答えが解かったように、秋光は眉を寄せて目を細めた。
「好きなの?」

静かに追及する声。
それはいつもの、真臣と遊んでくれる「秋パパ」の声ではない。

「あの男！好きなのか？！」

１４　抱かれた香り（後書き）

こんにちは。玉紀　直です。
告白も先を越され、おまけにさっさと体の関係まで持ってしまったと気付いた秋光君。
全てにおいて、尊さんに先を越された悔しさが彼の心を覆い尽くします。

尊さんの事を好きなのか、と追及される真理ちゃんですが・・・。
彼女はなんと答えるのでしょう？
よりによって秋光君は、「彼」の親友。

予断ですが、いつも真臣君がやっている小型ゲーム機は「ＤＳライト」です。今回のゲームは「たまごっちのぷちぷちおみせっち・ロイヤル」です。
正直、３歳児でも勘で出来るみたいです。玉紀は苦手です。（笑）
（子供って凄い！）

次回は６月２７日更新予定。

では、次回！

15　間違ったセックス

「好きなのか?!どうなんだよ!」

「秋・・光・・君・・・?」

秋光が必死に追求する口調に、真理は戸惑いを覚えずにはいられない。

どうして・・・?

どうして秋光君は、こんなに必死に私を責めるの・・・?

親友だから?

「彼」の親友だから?

だから、・・・「彼」を裏切って、他の人に抱かれた私が許せないの・・・?

それとも・・・もしかして。

違う可能性を探ろうとする真理の思考。

しかしそれを、真理の理性が止める。

――そんなはずは無い・・・。と・・・。

「ごめん・・・なさい・・・」

真理は下を向いたまま、やっと言葉を口に出した。

自分を壁に押し付ける秋光の両手の指が、痛いくらいに肌に食い込んでくる。

その手は興奮するように熱さを持っていて、秋光がどれだけ怒っ

ているかを真理に知らしめる。
「解らないの・・・」
「解らない？」
「・・・尊さんに抱かれると・・・正臣を思い出すの・・・」
「・・・」
「違うのに・・・」

自分を感じさせようと動く手。唇や体。それは間違いなく尊なのに、昇り詰めようとする時に彼女の体と心を埋め尽くすのは・・・。

――――「彼」への想い。

「だから私・・・尊さんに抱かれても・・・。最後までイケないの・・・」
こんな事を話してしまう自分が恥ずかしい。真理の声はだんだんと小さくなった。
「じゃぁ、やめろよ！そんな事言うなら、何であんな奴とヤんだよ！！」
・・・ムカムカしてくる。
真理が誰かに抱かれた。それを考えるだけで、体中の血が煮えたぎるように腹が立つ。
秋光は興奮して、真理を掴む手により力を入れてしまった。
「・・・っ・・！」
真理がビクッとして、苦痛の声を上げる。
顔を伏せていても解るくらい、少しだけ見える真理の表情は苦痛に歪んでいた。
つい興奮してやりすぎてしまった。秋光がやっと真理から手を離すと、真理は今まで掴まれていた肩口を、自分を抱き締めるように両手で押さえた。
「だって・・・秋光君だって、付き合い始めた女の子が・・・二十

歳も過ぎててデートの時に抱かれるのを嫌がったら『いい歳して』って呆れない？」

赤くなりながら、真理がちょっと顔を上げ上目使いに秋光を見る。その表情は、どこか艶っぽくて可愛らしく、秋光は初めて見る真理のそんな表情にドキッとした。

「そっ・・そんなのっ、『その女』によるだろっ！・・・おっ・・お姉さんだったら、すぐにヤらせてくんなくたって、そんな事思わないよ！付き合ったら、すぐにヤらせなきゃ駄目だ、なんて、そんなのおかしいだろ！」

「お姉さんなら」と、少々願望が入った。「そんなのおかしいだろ」と真理の前だからといってカッコつけて言ってしまったものの、本心かどうか自分で疑ってしまう・・・。

が、真理の言葉に疑問が浮かび、「ん？」っと考える。

「付き合い始めた・・・って？まさか・・・」

真理が恐る恐るこくりと頷く。

「尊さんに、好きだ、って言われて・・・。付き合うことにしたの・・・」

「だって今、好きかどうか解からないって言ったろ？好きかどうか解からない男と付き合う・・・って。なんだよそれ・・・」

「尊さん・・・。仕事熱心で、優しくていい人よ。真臣にも優しいし。真臣も懐いているしね。・・・きっと、真臣の事、可愛がってくれる・・・」

「真臣・・・？」

まるで付き合う事が真臣の為であるかのような言い方に、再び憤りを感じずにはいられない。

何だよ・・・。お姉さんの事好きで、真臣を可愛がっていて、真臣が懐いていればいいのかよ・・・。

だったら・・・。

「おかしいよ。そんなの」

だったらオレでも、受け入れてもらえたのか？

もし、あの先生より、お姉さんに好きだっていう気持ちを伝えるのが早ければ。

「あいつ」に遠慮せず、達也や健が何と言おうと。

自分が思った通りに、お姉さんに「好きだ」って言えていたら。

お姉さん・・・。相手がオレでも、抱かせてくれていたか・・・？

自分の感情のままにそこまで考えるが、多分そんな事は無理だっただろうと、自分で思う。

「彼」と真理が、どれだけ愛し合っていたか。秋光は知っている。

大切な友人であったからこそ。

その友人が残した「大切な人」を奪う事など、きっと、彼には出来なかっただろう・・・。

「お姉さん、正臣の事、忘れてないんだろ?!忘れられないんだろ?!なのに・・・付き合うなんて・・・、それも、さっさとセックスまでしちまって・・・!忘れられないのに、あいつの事、忘れられないのに!そんなモン、セックスしたって感じねーの、当たり前だ!!」

「秋パパのばかぁ!!!」

突然響いたその声に、二人は驚き、声がしたほうへ目を向けた。

「ママをいじめちゃだめぇ!!」

そう叫んで真理に抱きついてきたのは、ちょっと怒ったような秋パパが気になって、「大人しくしてろよ」と言われたものの、つい様子を見に来てしまった真臣だった。

裏口に近付くと、真臣が聞いた事のないような秋光の怒鳴り声が聞こえた。
そっと覗き見たその幼い瞳に映った物は、泣きそうな顔をしている母親の姿。
ママが、いじめられてる！
そう思った真臣は、叫びながら飛び出した！

「なんでママをいじめるの！そんな秋パパ、きらいだよ！」
「真臣・・・」
秋光は困ってしまった。真臣に「きらい」と言われては、彼も辛い。
自分を庇ってくれる為に飛び出してきた、小さな真臣。
その行動の陰に、昔、自分を守るために全てを捨てようとした「彼」の面影が見えて、真理は本当に泣きそうになった。

真理は、真臣の頭を優しく撫でながら、「彼」の面影が残るその瞳を見詰めたまま屈んだ。
「違うよ。真臣。・・・ママね、虐められていたんじゃないよ・・・」
ニコッと笑う。
真臣が大好きな、ママの笑顔。
今でも、誰をも魅了する。「太陽の笑顔」。

「ママね。・・・悪いことしたの。だから、ちょっと、秋パパに怒られただけなのよ」
「ママ。悪い子したの・・・？」
「うん」
真臣は、「キライ」と言われて少々ショックな顔をしている秋光を見上げた。
「秋パパ。ボクもママといっしょにごめんなさいするから・・・。

ママのこと、ゆるしてあげて」
「・・・」
「ごめんなさい」
真臣がぺこりと頭を下げる。
秋光はクスッと笑うと、真臣を抱き上げ肩車をした。
「よぉーし、オヤツの時間だな。今日はプリンにしようかっ」
「プリン」という言葉に、真臣の表情がピクッと動く。
「飲み物はアイスココアでいいかーぁ？」
「プリンもココアも好きーぃ」
あっという間に真臣は満面の笑みだ。オヤツの魔力に抵抗できる小さな子供はいない。

真臣の無邪気さにやられて、すっかり怒る気も失せてしまった。
秋光は諦めたように息を吐くと、真理を見る。
「お姉さんも、プリン食べよっ」
「秋光君・・・」
もしかして秋光は、自分と尊が交際することを分かってくれたのだろうか・・・。そう思った真理だったが、その思いは、秋光が最後にはなった一言に打ち砕かれた。
「でもオレは、認めないから」

真理の目が、悲しそうに細まる。

――私は・・・間違っているんだろうか・・・。

「彼」を忘れられないまま・・・。
違う人を受け入れる。

それが正しいのか、間違っているのか。

真理には、解からない・・・・・。

15　間違ったセックス（後書き）

こんにちは。玉紀　直です。

真理ちゃんがしている事は間違いだと。悔しさも混じって、秋光君は彼女を責めます。

一瞬、秋光君の気持ちに気付きかけますが、彼が自分を好きだなど、真理ちゃんには考えられないことなんです。

真臣君の事や「彼」の事を考えず、真理ちゃんが心から尊さんを愛せる日は本当に来るのでしょうか・・・？

次回は、とにかく真理ちゃんに夢中になってしまっている尊さんが登場します。

はじめっから「閲覧注意」になります。・・・が、「こんな所でなにやってんの?!」かも。（笑）

次回は7月1日更新予定。（まいってなければ大丈夫・・・）

では、次回！

１６　月への罪悪感（前書き）

注意

今回は本文中に性的表現が含まれています。
苦手な方、又は、そういう表現が嫌いな方は
その場面にきたらとばすなど。してください。
Ｒ－１５指定はさせて頂いていますが閲覧にはご注意を・・・。

16　月への罪悪感

「・・・真理・・っ・・」

おねがい・・・。そうやって呼ばないで・・・。

――――真理・・・。

「彼」が、私の体に入ってくるから。

「たっ・・ける、さ・・・あぁっ！いっ、やぁぁっっ！」

ガタン・・・ガタッッ！

尊が一度動くたびに、一緒に真理の体も揺れ動き、後ろ手を付いて体を支えている第2診察室の机が、音を立てて揺れる。

立て続けに起こる小さな揺れに、机の上のペン立てや備品が倒れ、さっきまで処置室に居た急患のカルテは、すでに床の上に落ちてしまっていた。

「あっ・・ぁぁっっ！だめ・・っ、たけるさんっ！」

いつもはきっちりと首元まで隠されたナース服は、腰のベルトの所までボタンが外され肩からずり落ち、フロントホックを外されたブラジャーからこぼれ落ちる両方の乳房を露にする手助けをしているかのよう。

尊は真理の片脚を膝に乗せて、彼女を突き上げながら片腕で腰を支え、もう片方の手で乳房をキュッと回すように揉み込んだ。

「あ、んっ！いっ・・やぁ・・・！！」

まさか、こんな所で？と、思った。

今日は院長である正孝が、学会出席の為に午後から居なかった。

そんな時、診療時間終了間際に入った急患。
診察と処置が済み、後は点滴で様子を見るだけなので、他の者は帰して尊と真理だけが残った。
その後、2時間ほどで点滴も済み、安静を言い渡されて患者も帰った。
――誰も居ない院内。
二人きりの診察室の中で、尊は真理に唇を重ねた。
真理が机に後ろ手を付いて立った体勢のまま・・・。尊は真理の上半身を露にするようにナース服を脱がせ、彼女を愛し始めたのだ。

「た・・けるさ・・・ああっっ！」
腰を支えられているせいか、大袈裟なくらい背が反り返る。
――その胸元で、月の指輪が揺れた。
真理が唇を噛み、声を抑えながら両手を首の後ろへ回しペンダントの止め具を外そうとする。
しかし尊は、揉み込んでいた胸から手を離して、真理の手を押さえた。
「・・・外さなくていいよ・・・。綺麗なのに・・・」
「・・・いや・・いやなのぉ・・・」
さっきから、何度この行為を繰り返しただろう・・・。

尊は不思議に思う。
真理と付き合うようになり、体を許してもらって1ヶ月が経つ。
彼女はいつも月の指輪を通したペンダントを着けているが、セックスの時は必ず外す。
キラキラした綺麗な指輪が胸で揺れて・・・。凄くいいのに・・・。
「このまま着けてなよ・・・。綺麗だよ・・・真理・・」
「いやあっ！あっ、あっ・・・たけるさぁ・・・ん・・・」

真理は、外したかった。
本当はナース服をはだけられた時点で外そうとしたのだ。・・・
しかし、尊に止められた。
胸を愛撫され、耐え切れず声が漏れる。
・・・その声を・・・。
指が感じる部分に入り込み、自分を乱れさせる目的でその部分をかき回す。
・・・その体の高ぶりを・・・。

「彼」に見られているような気がして。

尊に貫かれ体中の快感を高めていく自分を、「彼」の前にさらけ出してしまっているような気がして・・・。

真理は、ペンダントを外したかった。

「たけ・・るさっ！・・・いやぁぁ・・っ・・・・」
真理の目に涙が浮かんだ。
ペンダントを外したくて堪らない。

――正臣が、見てる。

「いやぁ！もうだめぇぇ！！」

悲しくて、苦しくて。心が耐えられない。

「・・・真理・・・っ、まりっ！」
そう呼ばれ尊の体を感じている時点で、真理の心と体には「彼」が入り込み、すでに尊を感じることが出来ていない。

「だめっ・・・！もぅ、だめぇ！！」
泣くようなその声を、尊は絶頂を迎える手前なのだと思い込み、同じくもう最後まで感じたがっている自分を解放するかのように、真理の中に自分を打ち込んでいく。

――――「月」が、見てる・・・。

傾けた涙で滲む真理の目に、ブラインドを下ろしていない窓から、くっきりと浮かぶ月が見える。

――――正臣・・・。

「たけるさんっ！たけるさんっっ！！いや・・っ！あぁぁぁ！！」
真理が両手を机から離し、尊に抱きつく。
尊も真理の体を抱き締め、グッと息を詰め自分を解放すると、そのままの体勢で息を切らした。

大きな瞳いっぱいに溜まっていた涙が、粒になって流れる。
自分が尊に抱かれる姿を、「彼」に見せてしまったような気がして、何とも言えない罪悪感が真理を襲った・・・。

「食事？真臣も一緒に？」
とてもじゃないが、綺麗に直しておかないと母に何を言われるか解らない。というくらいに乱れてしまっている髪の毛を指で梳いて整えながら、真理は尊の言葉に驚き彼を見上げた。
「うん。平日だと遅いから、いつも二人でだけど、休みの土曜日とか日曜日だったら、真臣君も一緒に行けるかな？って」
休憩室で淹れてきた、マグカップに入ったアイスコーヒーを真理

に手渡しながら、尊が笑う。
診察室内にある診察台に腰掛けた真理の前にしゃがみ、自分の分のアイスコーヒーを喉を鳴らしながら一気に飲んでから、照れくさそうな顔をする。
「・・・そろそろ、真臣君を誘っても・・・真理ちゃん、許してくれるかな?って」
「尊さん・・・」
「最初からだとさ、子供まで巻き込んでいい気になってる。って、感じだし。でも、もういいかな?って思って。小さな子供が一緒だからファミレスだけど。ちょっと・・・『親子』に見られてしまうかもしれないけど。・・・嫌じゃなかったら・・・」
「親子に思われるかもしれない」という事は、「夫婦に見られる」という事。自分はもちろん構わないが、真理が嫌だったら・・・。そう思っていたのだ。
「尊さんは、嫌じゃないの?」
真理が恐る恐る訊く。
「どうして?」
「だって、子連れで。・・・それに、真臣は・・・」
・・・あなたの子供じゃないし・・・。
尊は、指で梳いて綺麗に流れる真理の髪を撫で、優しく笑う。
「俺は、真臣君が好きだよ。凄く可愛いと思ってる。――毎日でも、一緒に遊んであげたいくらい」
遠回しに最近感じ始めている願望が入るが、遠回しすぎて、少々真理には伝わっていなかったかもしれない。
「ありがとう・・・」
真理は嬉しそうに笑って、尊が淹れてきてくれたアイスコーヒーをコクコクと喉を鳴らして半分ほど飲んだ。
冷たい液体が、まだ火照った体に気持ちいい。
「明日。どうかな?土曜日」
「明日・・・」

「夕方、いきなり迎えに行ったら、『何でたけちゃん、来たの？』とか言われそうだからさ。午後くらいから少し一緒に遊んでて、その流れで『ご飯食べに行こうか？』って言ったら、さりげないかなー・・・。なんて思うんだけど」

どうやったら真臣も一緒に食事に誘えるか。それも自然に。これを考え出す為に、実は尊は2日間悩んだのだ。

「・・・私、夕方はいいんだけど・・・午後はちょっと行かなきゃならない所があって。・・・1～2時間なんだけど」

真理は言いづらそうに言うが、尊は気にしない。

「真臣君も一緒に行くの？」

「ううん。・・・お見舞いだから、真臣は置いていこうと思ってるの」

「だったら行っておいでよ。俺、真臣君と遊んでいてあげるから」

「でも・・・」

「いいから。病院だろ？お見舞いだったら、小さな子供とかが騒ぐとマズイし。真臣君と遊びながら、真理ちゃんが帰ってくるの待ってるよ。・・・あっ、でも、院長と奥さんには、俺が真臣君と遊んでくれるから、って言っておいてよ。『尊先生、何しに来たの？』って言われるの嫌だから」

真理は少し迷ったが、その言葉に甘える事にした。

「じゃぁ、いい？」

「もちろん」

尊がニコッと笑う。

真理はその笑顔を見て、ちょっと切なくなった。

目を窓の外の月に向けて、マグカップに口を付ける。

・・・「あの人」に、会ってくるからね・・・。

真理は、「月」に向かって話しかけた。

尊は知らない。
明日真理が、誰に会いに行くのか。

明日自分が、
何を知る事になるのか・・・。

16　月への罪悪感（後書き）

こんにちは。玉紀　直です。
「こんなところかい！」でしょ？（笑）
指輪を外させてもらえない真理ちゃんはちょっと可哀想ですが、尊さんは指輪の意味を知りませんから。しょうがないんです。

真臣君込みで食事。
なんとなくほのぼのムードが期待できますが、その前に、真理ちゃんが行く「お見舞い」。
さぁ、「前作」を読んでくれていた方々が「絶対出るでしょ！」と言い続けていた人が登場します。
真理ちゃんの心を、いつまでも苛み続ける事件。その元凶。
真理ちゃんに夢中になり続けていた尊さんの心にも、だんだんと違う「何か」が入り込み始めます。

次回は7月7日更新予定。

では、次回。

＊お礼＊
前回の前書きで「嫌な気分にさせてしまうけど」と思いつつ、一部の方々へコメントさせて頂きました。
その件で、本当に沢山の方々にコメントやメールを頂きました。
ご心配をおかけ致しました事、本当に心からお詫び申し上げます。
「頑張って」と沢山の方に言って頂けた事、本当に感謝の念に耐えません。
これからどうなるか解りませんが、とりあえず前回から今日まで、

ずっと来ていたメールがピタッと治まっています。
　これから物語が「波乱期」に入っていきますので、また何かあったりするかもな・・・。（笑）なんて思っていますが、頑張って書いていきますので、どうぞよろしくお願いします。

17　過去に縛られる星

「真理！来てくれたんだ！」
彼はとても嬉しそうに笑いながら、読みかけの本・・・いや、すでにもう何度も読み返されていると思われる本を放り投げるように小さなテーブルに置き、椅子から立ち上がった。
「こんにちはっ。気分はどうですか？」
部屋の中央まで進み、真理がにこっと笑う。
彼はその笑顔に引き付けられるように真理の正面まで来ると、ちょっと焦点が定まらない目で真理を見ながら、子供のような甘えた声を出した。
「真理に会えたら気分なんて悪いわけがないよ。でもぉ、にゅういんはあきたなぁ。いつまでいればいいんだろう？」
「もう少しよ。ちゃんとお医者様のいう事を利いてね。じゃないと、いつまでたっても退院できないわ」
「いくら『けんさ』って言われたって、もう一週間だよ・・・。あーあ、はやく、がっこうにもどりたい・・・」
「・・・もう少しよ・・・」
「そうしたらまた、朝のあいさつに真理といっしょに立てるな。たのしみだなぁ」

この会話を。
まったく「同じ」会話を。
この４年間、いったい何度繰り返しただろう。

彼は「何も覚えていない」悪意のない笑顔で、真理に笑いかけてくる。
そして真理は、気を抜いたら泣きそうになってしまいそうな気持ちを抑え彼の笑顔を見詰めると、彼に笑いかける唇の奥で、歯を食

いしばる。
「・・・もうすぐよ。・・・井関先生・・・」

「大丈夫ですか？立花さん」
閉鎖病棟の扉を閉めながら、弁護士の今泉（いまいずみ）はいつも真理にその言葉をかけた。
「大丈夫です。ありがとうございます」
真理は元気のない声で答える。これも、いつもの事。

神経精神専門病院の最上階にある、閉鎖病棟。
そこの「保護室」に井関恭吾（いせききょうご）は入院していた。
４年前から・・・。
一般的に、精神病院の閉鎖病棟、しかも「保護室」といえば、凶暴性などが危険視される特殊な患者を収容している。
しかし、彼に凶暴性はない。
かえって、彼は温厚で非常に大人しい。
彼がここに入れられている理由は、ただひとつ。

彼が、「犯罪者」であるから。

「井関さんは、良くなってきているんですか？」
真理が、他に誰も乗ってきていないエレベーターの壁に寄りかかり、１階のボタンを押す今泉の後ろ姿に訊ねる。
今泉はボタンを押し終えた手で重たそうな鞄を持ち直し、真理を振り返ると、彼のせいでは無いのに申し訳なさそうな顔をした。
「相変わらずだそうですよ・・・。彼は『４年前の事件』を何も覚えてはいない。・・・彼の頭の中は、高校の国語教師として教壇に立ち、平和だった頃に戻ったまま。・・・止まっている」

「・・・一生、このままなんでしょうか？」
「そうかもしれません。ただ・・・」
別の希望がありそうな言い方に、真理が今泉を見上げる。
数回、司法試験に失敗して、３０歳でやっと弁護士の資格が取れた。と、前に世間話で聞いた事がある。
もう４０歳に近いらしいが、「精神疾患」がある人間が起こした事件を扱うのは初めてだから、自分も勉強のつもりで出来る限り力になります。と、４年前「彼」の死の原因となった事件に打ちひしがれる真理の前で力強く語った。
「月に一度程度、立花さんが『お見舞い』に来るようになってから、それまで話どころか人の目も見なかった彼が、笑顔を見せたり進歩は無いものの話をしたりするようになりました。・・・それが、数ヶ月前から『お見舞い』の後に薬物治療を試みると、少しですが『事件』があった日の事を口に出すようになったらしいのです」
「思い出している。っていう事ですか？」
「今のところ、その日の朝の、自分の事くらいらしいです。『ナイフを持って家を出た』っていうところまでは言うらしいのですが、その後にパニック症状を起こして、安定剤で落ち着かせるとその後はもう元に戻っているそうです」
その時、一階に到着し扉が開く。数人の見舞い客とすれ違いに、二人はエレベーターを降りた。

「あの人を罪に問う事は、あの人が正気に戻らない限り無理なんですか？」
一階のロビーをゆっくりと歩きながら、真理が訊く。
「今のままでは間違いなく無理でしょう。事件当日、井関恭吾は間違いなく『正常』ではなかった。学校を辞めさせられた頃から、住んでいるマンションの周りを徘徊する姿や、黙って自分の部屋の前の廊下に座り込んでいる姿などが目撃されています。『どこか変だった』と、近所の人間のほとんどが証言していますから」

病院の外へ出て、今泉は短く息を吐き、言いづらそうにその言葉を口にした。
「今、彼を罪に問おうとしても、向こうにも一応弁護士が付きますから。・・・間違いなく、立花さんのご主人が『井関さんに何をしたか』を盾に取られるでしょう」
真理の体が、ちょっとビクッとする。
「井関恭吾の精神が過去に戻ったまま帰ってこられない限り、ここから出られる事もありませんが、自分の罪を認める事もないのです」
・・・私の大切な人を・・・殺したくせに・・・。
真理の心の中に、憎悪にも似た感情が湧き上がる。
大切な人が、この世から居なくなってしまった元凶。
死ななくても良かった人間が、死んでしまった原因を作った男。
その罪を負うことも無く、井関恭吾は「彼の世界」の中で「幸せだった過去」の中に住んでいる。
「どうしてですか・・・」
真理の声は悔しさに震え、ショルダーバッグの紐を両手でグッと握り締めた。
「あの人が・・・正臣を殺したのに・・・」
「たけちゃーんっ。おいしーよぉ」
小さな口の横に生クリームを付けて、両手で持たないと間に合わないくらいの大きなパイシューを手に、真臣はニコニコと笑った。
「美味しいだろー?たけちゃんもコレ好きなんだー。たけちゃんチの近くのお菓子屋さんにあるんだぞ」

少々嘘が入った。正確には少し遠い。どちらかといえば、元務めていた大学病院に近い。

「すまないね。園居君。休みの日に真臣と遊んでもらうなんて。真理が無理を言ったんじゃないのかい？」

土曜日の午後。食事に真臣を自然に誘うための口実として、「真理が留守中、真臣と遊ぶ」為に立花家を訪れた。

リビングに通されたものの、尊は心臓が飛び出てしまいそうなくらい緊張している。

休みの日に、「院長夫妻」に会う、という事もあるが、別の言い方をすれば「彼女」がいない時に「彼女の両親」と一緒なのだ。

そう考えると、毎日病院で会っている院長も「違う人」に見えてしまう。

「無理なんて言ってないですよ。自分が、出かけている間一緒に遊びたい。って言ったんです」

何となく笑いも引きつってしまう。緊張しているのが解かったのか、真澄が尊の前にアイスコーヒーのグラスを置いた。

「どうぞ。喉が渇くでしょう？」

「すいません」

実際緊張で喉が渇いていた。尊はグラスを取り上げて、可愛らしく付いていたストローを使いアイスコーヒーで喉を潤した。

すると、横に座っていた真臣が、食べかけのパイシューを手にしたまま、まだ１０個は入っている洋菓子店の箱の中身をジーッと覗き込んでいる。

「どうしたの、真臣君。まだいっぱいあるから大丈夫だよ。でも食べるなら、今手に持っているやつ、食べちゃってからにしような」

そう言って笑いかけた尊に、真臣は悪気のない笑顔で言った。

「これ、おいしいから、パパのところにもあげてきていい？」

「・・・パパの所？」

尊が首を傾げる。
正孝と真澄が、ハッとするように顔を見合わせた。

17　過去に縛られる星（後書き）

こんにちは。玉紀　直です。
真理ちゃんが行った「お見舞い」。
それは、大切な人を「殺した」人間のところでした。
井関恭吾は精神に異常をきたしています。
大切な人間を殺したのに、罪を償わす事が出来ない。
真理ちゃんは、ずっと苦しんできました。
前作から読んでくれている方々は「やっぱりお前か！」と思われたかと思います。（笑）

一方、真臣君とほのぼのしながら真理ちゃんの帰りを待っている尊さんですが。
この後に彼が知る事は・・・。

次回は7月10日更新予定。

では、次回！！

18　真理の「彼」

「たけちゃん、おいでっ。パパに会わせてあげる」
「え?真臣君・・・」
子供の言葉には、悪気がないものが多い。
しかし、悪気がない分、時々大人が本気で困ってしまうような事を平気で言う。
今もそうだ。
真臣が言っている「パパ」というのは、どう考えても秋光達のような、自分を可愛がってくれている「パパ」の事では無い。

「自分のパパ」に会わせてあげる。と言っているのだ。

真臣の父親は、結婚前に死んでしまったと聞いている。と、いう事は、真理とは正式な夫婦にはなっていない。
子供が産まれているくらいなのだから、きっと相手側の家から分骨でもしてもらって、それで小さな仏壇にでも位牌を収めているのだろうか・・・。尊はそんな事を思いつつも、どうしたものかと考えていた。
「いこっ。あっちのおへやにパパいるから」
自分が食べていたパイシューをテーブルに置いて、新しい物を胸で抱えるように持つと、真臣は真理に似た可愛らしい笑顔で尊の腕をグイッと引っ張る。
尊はチラッと、正面に座る正孝の顔を見た。
いくら「行こう」と言われたからといっても、真臣の父親。恋人が結婚するはずだった相手だ。その仏前に自分が勝手に手を合わせるような事をして良いものか・・・。
すると、遠慮気味に戸惑う尊に、正孝は静かに声を掛けた。
「廊下を出て、向かい側の和室だよ。そこに『いる』から。・・・

手を合わせてきてやってくれるかい？」
「・・・はい・・・」
正孝の口調はとても優しく、それでいて悲しそうで「娘の夫になるはずだった男」の事を口にしているというよりは、まるで自分の子供に対する物のように思える。
よっぽど、家族ぐるみで仲が良かったんだな・・・。
尊がそう思っていると、真臣が更に腕を引く。
「はやくー。たけちゃんー」
「よしっ、じゃぁ、連れてってくれるかい？」
「こっち、こっちっ」
まるで遊び場にでも連れて行くように、真臣は尊の腕を引き、楽しげにリビングを出た。
その後ろ姿を見送って、正孝は諦めるように呟く。
「園居君が、真理とそういう事になっているなら・・・。いつかは気付く事なのかもしれないな・・・」

リビングの向かい側の和室は、タンスなどの他に、真臣のおもちゃなどを入れて片付けておくケースなどがあった。きっと、この部屋でよく遊んでいるのだろう。
真臣は部屋へ入ると尊から手を離し、部屋の奥に置かれた仏壇の前へと走っていった。
「はい。パパ。おいしいよぉ」
仏壇の前に、ペーパーシートごとパイシューを置くと、くるっと尊を振り返る。
「ぼくのパパだよ」
にこっと笑う真臣の真横に見える、仏壇に飾られた写真。
同じく優しげに、にこっと笑った少年の写真。

・・・彼が・・・。真理ちゃんの・・・。

尊はゆっくりと仏壇に近付くと、その写真の少年を見詰めたまま、仏前の座布団の上に腰を下ろした。

「パパね。あまいおかし、好きだったんだって。だからぼくね、オヤツたべるとき、ここでパパといっしょにたべるの」

そう言いながら笑う真臣の表情は、確かに写真の少年に良く似ている。彼が真臣の父親なのは間違いがないようだ。

仏壇は、決して小さな物ではなかった。

「大型」というほどのものでは無いが、人一人用にしておくには充分すぎるほどの「中型」といおうか・・・。

きれいに掃除がされ、一本も枯れていない生仏花が飾られ、お水はもちろん、毎朝替えられているかのように汁椀と茶碗までもが上がっている。

毎朝真理が彼の写真を見ながらその作業をしているのかと思い、尊は何とも言えない気持ちに襲われた。

彼が亡くなってから。
きっと一日も休む事無く・・・。
彼の写真に話しかけながら。
毎日お花をあげ。水を替えて。

真理ちゃん・・・。

尊は、自分の心が少々動揺しかかっている事に気付いた。
優しげに笑う少年を見る自分の目が、故人を見る目というよりも、恋敵を見るような目に変わってしまっている。

何をやっているんだ俺は・・・。亡くなった人に失礼だろう・・・。

そうは思うものの、気持ちは落ち着かない。

少年の写真を見ながら、微笑む真理の姿が思い浮かぶ。
お水やお茶碗を上げながら、笑いかけ話しかける。
そんな真理が、想像できる。
「毎日」真理の一日は、「彼」から始まっている。

真理ちゃんの心の中には、「彼」がいる・・・？
今でも、昔から変わらず。ずっと・・・。

じゃぁ、俺は？
俺は本当に、真理ちゃんの心の中に入ることが出来ているんだろうか。
尊は体中の血が引くように、手先が冷たくなっていくのを感じた。
真理に夢中で、交際をO，Kしてもらったことで浮かれ上がって、今まで気にも留めなかった事実。
真理と居るとき、自分は良く真理に「好きだ」と言うが、その同じ言葉を真理がくれた事はあっただろうか。

真理が自分に「好きだ」と言ってくれた事は、あっただろうか・・・。

尊は写真の少年から目が離せなくなっていた。
見てばかりいるから、こんな事を考えてしまう。しかし、目を逸らそうと思ってもなかなか目を逸らせない。
こんな事を考えては駄目だ・・・。
高校生の時に愛し合って、子供まで出来て、産む決心までした相手。おまけに結婚までする予定だったんだ。

なかなか忘れられないのは、当たり前じゃないか。
その相手が亡くなって寂しい分、俺が支えてやらなきゃ。
何とかそう思い直し、落ち着こうと大きく息を吐く。そして、改めて写真の少年を見た。

あれ？何か・・・。

落ち着いて見ているうちに、尊はある事に気付いた。
「彼」の写真は、確かに真臣に似ている。しかし・・・。

・　・この笑顔・・・。誰かに・・・。

優しく笑顔を作る、黒髪の少年。
その目元と表情が、尊が良く知っている人物に良く似ているのだ。

――立花院長・・・？

「いらっしゃいませー！」
客商売の条件反射。
コンビニのドアが開いた気配がした瞬間、ドアを振り向きながら言葉が出る。
それがたとえ、アルバイトと話が盛り上がっている最中でもだ。
「あれぇ？お姉さん」
ドアの前で立っている真理の姿を見て、秋光は客に向ける以上の笑顔を作った。
「出かけてたの？真臣は？」
真理が普段着ではないワンピースを着ているのを見て、出かけていたのだろうと察したが、真理は一人。真臣は居ない。

それどころか、真理はうつむき加減でその場に立ち竦み、元気のない顔をしている。
「・・・お姉さん?」
ただ事ではないと思った秋光は、カウンターから出ると真理の前に立った。
「どうしたの?何かあったの?」
そう問い掛けた時、真理は秋光の胸にしがみついて泣き出した。
「・・・お姉さん・・?」

１８　真理の「彼」（後書き）

こんにちは。玉紀　直です。
「彼」の仏前にやってきた尊さんですが、真理ちゃんがまだ「彼」への想いで溢れている事に気付きます。
悪い事を考えないように頑張りますが・・・。
もうひとつ、「何か」に気付きかけてしまいます。
この後、彼が知る事は・・・？

そして、お見舞い帰り。
いきなり秋光君に泣きつく真理ちゃん。

尊さんの心に、真理ちゃんの心に、すれ違いにも似た「何か」が芽生え始めます。

次回は７月１４日更新予定。

では、次回！

19　悔しさの真相

「どうしたの？」
胸にしがみ付かれて少々嬉しいような、こんな所で抱き付かれても困るような、複雑な思いを胸に、秋光は真理の両肩に手を置いた。
「・・・あき・・みつ・・君・・・」
まるで我慢していた物が一気に出てきてしまったかのように、真理は大きな瞳から次々に涙をぼろぼろと流し続けている。
秋光は困った顔で頭を掻くと、真理をカウンターの中に入れレジの奥の出入り口へと促した。
「とにかく、こっちに入って。・・・ちょっと、店、頼むな」
バイトに一声かけると、バイトの大学生は「はーい」と返事をしつつ少々にやける。
「何時間くらいですかー？てんちょーぉ？」
「・・・時給減らすぞ・・・」
昔取った杵柄。とばかりに、少々迫のある声で言うと、バイトは一も二もなく黙った。

「ほら。座って」
事務室兼休憩室に使われている部屋。
そこの長椅子に真理を座らせて、秋光はグスグスと泣き続ける真理の横に座りながら、目の前にあるボックスティッシュからティッシュを3枚ほど引き出して真理の手に持たせた。
「ほら。涙拭きなよ。あんまり化粧が崩れた顔で家に帰れないだろ？」
こういう場合はハンカチでも差し出したほうがカッコは良いのかもしれないが、はっきり言って、彼の柄ではない。

真理が押さえるように涙を拭き始めると、秋光は訊きづらそうに口に出した。

「・・・あの先生と・・・喧嘩でもした・・・？」

「大喧嘩した」とでも言ってくれれば彼としても凄く嬉しかったのだが、期待通りには行かないもので、真理は首を激しく左右に振る。

「真臣が、我侭でもして困らせた？」

今度も首を左右に振る。

秋光はちょっと考えた。・・・じゃぁ、何だ？何でそんなに泣いてんだ？

そこで、ハッと気付く。

「あそこ」へ行った日は、真理は必ずここへ来て、秋光と話をして帰る。

「あそこ」へ行った後は、いつも元気がない。しかし、泣いていたのは初めてだ。

秋光と話をして、少々元気を取り戻してから家へ帰る。それかいつもの「お約束」だった。

「『あいつ』に会ってきたの？」

秋光が訊くと、涙を拭き終えたティシュを握り締めて真理は頷く。忌々しそうに髪をぐしゃぐしゃっと掻き混ぜて、秋光は吐き出すように口に出した。

「・・・行くなよ・・・お姉さん。・・・もういいだろ。『見舞い』なんて。どうせあいつ、一生元になんて戻んねーんだろ？そんな奴の為に、お姉さんが泣く必要なんてねーだろ？！」

真理が「見舞い」に行った相手。

井関恭吾が「精神疾患」で入院しているのは、秋光も知っている。

その病状のせいで、自分が犯した罪、を償わせる事が出来ないのも・・・。

「行く度に元気がなくてさ。・・・今日なんて、何を泣かされてきたんだよ。何か言われたのか?」
「・・・言わないよ・・・。何も覚えてないもん・・・」
「じゃぁ、何で泣いてんの?」
「・・・悔しかったの・・・」
「・・・」
「私の大切な人を殺したくせに。・・・どうしてこの人は、こんなに笑顔で笑っているんだろう・・・って」
閉じ込められた、彼の記憶。
幸せな時間で、自分を止めてしまった彼。

あの人は「幸せ」の中で生きているのに、私はいつまでも彼の死から立ち直れない。

「私がお見舞いに行くようになってから、口を利いたりするようになった。っていうから・・・。いつか自分の罪を思い出すんじゃないか・・・って。でも、この4年間、そんな気配はまったくなくて・・・」
悲しくて・・・悔しくて・・・。
もしかして一生このままなのかと思うと、辛くて切なくてやりきれない。

――井関恭吾の時間は、「幸せ」だった時点で止まり続けている。

高校教師として、夢だった教壇に立ち、教師としてではなく一人の男として、生徒であるはずの真理を愛した・・・。あの頃で。

「院長・・・？」
尊の声は、少々呆然としたものに変わっていた。
目の前の仏壇に飾られた少年の写真が、真理の父親である院長の正孝に、よく似ているような気がする。
しかしその思いは、すぐに彼の中で微笑ましい物に変わった。
女の子は、よく父親に似ている人を好きになる子が多い、っていうじゃないか。
院長と真理ちゃんは、凄く仲が良い。
彼が何となく院長に似ているから、それできっと真理ちゃんも好きになったんだ。
父親を敬遠しがちな娘も多い世の中。羨ましいくらいに仲が良い真理と正孝を思って、思わず顔がほころぶ。
それだけ真理ちゃんは、いい子だ、って事だもんな。
好きな女性の「良いところ」を再確認してご機嫌な気分になりながら、手を合わせるだけではなく、お線香の一本でも上げようかと台の上を見回すが、台の上にお線香の類は上がっていなかった。
台の下に小さな引き出しがふたつ付いている。ここに入っているのだろうかと、尊は何気なく両方を同時に開けた。
「ああ。あった」
右の引き出しに、お線香やろうそくの類が入っている。お線香の箱を出そうとして、尊はふと左の引き出しに目を留めた。
左の引き出しには、特に何が入っているという訳ではない。
ただ、Ａ５版ほどの小さなファイルが入っていた。
何気なく手に取ってみると、本当に薄い、１０枚ほどのポケットが付いたクリアファイルだった。
赤いチェックの可愛らしいファイル。真理の物だろう。そう思い、何気なく表紙をめくる。
「・・・新聞記事？」
中には新聞記事の切り抜きが挟んである。何気なく見ていた尊だが、その見出しを見てだんだんと表情は曇っていった。

――クリスマスイブの悲劇――

――元教師が教え子を刺殺――

数紙分の切り抜きが挟まれてはいたが、内容は全て同じだった。

城南高校の元国語教諭、井関恭吾（２４）が、担任を務めていたクラスの男子生徒（１７）を、クリスマスイブの日に道端で刺殺した。

「城南・・・？」

尊は以前、真理に聞いた話を思い出す。

確か真理ちゃんは、城南高校出身だ、って言っていた。

でも、どうしてこんな記事を取ってあるんだろう？自分の高校に関係がある事だから？それにしたって、こんな所に。それもファイルに入れて・・・。

被害者の少年の名前は明かされてはいなかった。

恐らく家族の要望だったのだろう。もちろんだが写真も載ってはいない。

新聞に掲載されたのは、４年半前のクリスマス・・・。

「まさか・・・」

尊はそのファイルを手に持ったまま、少年の写真を見上げた。

以前会った事がある、少年の「仲間」達。真臣の「パパ」達。

「高校の後輩なの」と真理は言っていた。

同じ、城南・・・。

被害者の少年は１７歳。・・・当時で考えれば、真理ちゃんよりひとつ年下。

真理の「彼」が死んだ原因など、訊いた事はなかった。
そんな事、軽々しく訊くものでは無いし、病気や事故だとしても「いつか」という気持ちもあった。
しかし、記事を見て尊の心の中に、何とも言えない覗き見てはいけない物を見てしまった時のような焦りが生まれ始めた。

――教え子を刺殺――

まさか・・・。真理ちゃんの・・・。

１９　悔しさの真相（後書き）

こんにちは。玉紀　直です。
悔しさと切なさを隠せない真理ちゃん。
知らなかった真実が見えてきて、動揺する尊さん。
お互いが知らないところで、重い気持ちを抱え始める二人。

この後、尊さんは更にショックな事実を知ります。
その事実に、彼は耐えられるでしょうか？そして、真理ちゃんの苦しい気持ちを支えて上げられるのは、全てを知った後の尊さんなのでしょうか？
それとも・・・。

次回更新は、７月１８日予定。

では、次回！

２０　月の指輪の秘密

「その本、いたずらしたらおこられるよー」
呆然とファイルの中身を眺めていた尊の後ろから、真臣が声を掛けた。
新聞記事の切抜きを見たまま黙ってしまった尊をよそに、真臣は部屋にあったおもちゃ箱からブロックを出して遊び始めている。
「だいじな本だから、さわっちゃダメなんだよ。ボクもさわったらママにおこられるんだから」
「そうか・・・。ごめんな」
ファイルを閉じ、引き出しの中へと戻す。引き出しを閉めたまま、せっかく見つけたお線香に火を点ける事も無く、尊は身動きできなかった。

――教え子を刺殺――

真理ちゃんの「彼」は、殺された・・・？

新聞記事が頭から離れない。
ファイルを閉じ、引き出しを閉めたって、その事実は尊の目から頭の中へと入って行ってしまった。
すっかり、尊の記憶の中へと入ってしまったのだ。

尊は再び、「彼」の写真を見上げた。
優しげな目をして笑う少年。
真臣の「パパ」達の仲間だと聞いていたので、不良っぽい少年を想像していた尊だが、穏やかそうなその表情や真っ黒い髪からは、そんな気配はみじんも感じられない。
いったい、どんな少年だったんだろう・・・。

尊はチラッと、後ろでブロックをはめて遊んでいる真臣に目を向けた。
「あのさ、真臣君」
子供にこんな事を訊くのは、もしかしてズルイ事なのかもしれない。
それも、まるで探るように。
そう思いながらも、尊は真臣に尋ねた。

「パパって・・・、どんな人だったのか、ママに聞いたことある？」

俺は、何てズルイ男なんだろう・・・。
そう感じて、尊はちょっと胸が痛んだ。
よりによって真理ちゃんが居ない時に、真臣君にそんな事訊くなんて。
訊かれた当の真臣は、キョトンッとしている。
・・・言った意味、あまり解かってないかな・・・？そうだよな。まだ４つなんだし。
尊が返事を諦めようとすると、真臣は無邪気な顔でにこっと笑った。

「あのね！パパはね、『お月さま』なんだよ！」

「え？」
尊はちょっと驚く。
・・・お月さま？？
小さな子供に「死んだ人はお星様になる」という話をする大人はよく居る。
しかし、「お月さま」というのは、同じ「星」にしてもスケールが大きい・・・。

「いっつも、ボクとママを、お空から見てくれてるの！パパが見ててくれるから、ママ、さみしくない、っていうよ！」

寂しくないはずが無い。辛くない訳が無い。
殺されてしまった「彼」。
病気や事故で失った命ではない。
失われなくても良かったはずの命なのだ。

でも真理は、真臣の前で泣く訳にはいかない。寂しい顔を見せる訳にはいかない。
「パパが見てるよ」きっといつもそう言って、真臣に笑いかけていたのだろう。
太陽のような、明るい笑顔で。

「それに、パパはお月さまだから、いっつもママといっしょにいるし」
「そうだね・・・。じゃぁ、曇りの日はパパが見えなくて、寂しいな」
曇りの日や雨の日は月が出ない。何気なく言ったつもりだったのだが、手に持っていたブロックをポンッと投げて、真臣は予想外の言葉を言った。
「なにいってるの。たけちゃんっ。ママはいっつもパパといっしょだよ。いっつもママの、ここ、にいるもん」
「ここ」という言葉を強調しながら、自分の首をポンポンッと叩く。
胸、ではなく、首。
尊は最初、不思議に思ったが、すぐにハッとした。

真理がいつも身に着けているペンダントを思い出したのだ。

月の形をした指輪。
月が大小のダイヤを抱いたデザイン。
チェーンに通して、いつも真理は肌身離さず着けている。
仕事中も。プライベートでも。
「お気に入りなの？」その問いに、ただ寂しそうに笑って頷いた。

まさかあれは、「彼」からのプレゼント？

だから外さないのか？いつも、いつも、身に着けて・・・。

ただ、尊と体を重ねる時だけは、それを外す。
「着けてれば？」そう言っても、首を振って微笑みながら外してしまう。
ただ昨日、診察室で真理を抱いた時、彼女は何度も何度もペンダントを外したがった。
「綺麗だから、着けていればいい」そんな気持ちで、外させなかった。
「いや・・！もうだめぇっ！」泣くように上げた声を、尊はイってしまいそうな体の高まりから上がった物だと、ずっと思っていた。

あれは・・・「彼」だから？
「彼が見てる」・・・そう思うから、ペンダントを外す？指輪を隠す？
自分が他の男に抱かれる姿を、「彼」に見せたくないから？

尊はグッと両手を握り締めた。
その両手に、汗が滲んでくるのが分かる。

真理ちゃんは・・・「彼」を愛し続けている。
たとえ俺に、体を許してくれていても。

心は・・・まだ・・・。

「・・・ずるいのよ。私・・・」

事務室兼休憩室にある小さな冷蔵庫。そこから、店にも並んでいるウーロン茶の紙パックを取り出し、紙コップに入れて真理に渡す。

真理はそれを受け取りながら、自嘲気味に笑った。

「私がお見舞いに行ったら、一瞬でも症状が良くなる。それなら、いつか、全てを思い出すくらいになって欲しい。・・・そう思っちゃうの」

「何がズルイんだよ。・・・あいつの事、心配してるだけじゃん。優しいよ」

紙パックの中身が少ない事を確認して、パックにそのまま口を付け、秋光はウーロン茶を飲み干した。

「違うわ・・・。優しくなんてないのよ・・・」

紙コップの中の薄茶色の液体を、睨むようにジッと見る。

そして真理は、彼女の口から出た物とは思えないような言葉を吐いた。

「全てを思い出して、自分は『殺人者』なんだ、っていう事を確認して、罪の意識に苛めばいい。・・・人を殺した。っていう、心の重さに耐え切れなくなって、傷付いて苦しめばいい。・・・悩んで、悩んで、・・・一生、罪悪感で苦しめばいい・・・」

秋光が驚いたように目を見開いて真理を見る。

こんな、人に、傷付いて欲しい、様な事を言う真理は初めてだ。

こんな、憎々しげな表情をする真理は、初めてだ。

「そして今度は・・・、私の声も聞こえなくなるほど、罪悪感で狂

ってしまえばいい・・・って・・・」

自分が言っている事の恐ろしさで、手が震える。
紙コップのお茶をこぼしそうになって、真理は一気にウーロン茶をあおるように口に入れた。
「そんな事を思いながら・・・。お見舞いに行ってるのよ・・・」

秋光は黙って、真理を見詰める。
止まったはずの涙。しかし、自分が今口に出し、抱き続ける想いが苦しすぎて、再び真理の目からポロポロと涙が流れ出した。
「・・・ひどい・・・でしょ・・・？」
紙コップを見詰めたまま、それを握り潰す真理の声は震えている。
「苦しめばいい、なんて。狂ってしまえばいい、なんて。・・・酷い事思っている。って、思うでしょ？」

こんな事を口に出すつもりは無かった。
残酷な事を考える自分。
優しい性格の真理に、それは自分自身、耐えられる事では無いから。

「私が苦しんだ以上に苦しめばいい、って！私が悲しんだ以上に悲しめばいい、って！思っちゃうの！・・・苦しかった気持ち、悲しかった気持ち、全部、正臣を殺したあの人に返してやる。って！！・・・そんな事ばっかり考えちゃうの！・・・酷いよね？！ズルイよね？！こんなの・・・」

泣き叫ぶ真理。
放っておいたら、このまま真理が狂ってしまいそうで・・・。

「もういいから！！真理さん！！」

秋光は思わず、真理を引き寄せて抱き締めた。

２０　月の指輪の秘密（後書き）

こんにちは。玉紀　直です。
愛する人を殺した人間。行き場の無い憎しみと悲しみ。
どんなに優しい人だって、辛くて辛くてその人間を憎んでしまうのではないかと思います。
真理ちゃんだって、例外では無いでしょう。

４年以上。苦しんで抱え続けてきた想い。
一人でずっと胸を痛めていたもの。
・・・それを受け止めたのは、秋光君でした。

一方。月の指輪の意味に気付いた尊さん。
真理ちゃんの心はまだ「彼」にあると気付き、ショックにも似た気持ちでいっぱいになります。
二人はどうなってしまうのでしょう？
そして、秋光君は・・・？

次回更新は、７月２０日。
大切なシーンなので、ちょっと早めで頑張ります！！

では、次回！！

21　憎しみと嫉妬

「ひどい・・・でしょう・・・？」

秋光に腕を引かれた瞬間立ち上がってしまった真理は、そのまま崩れそうな体勢で秋光に抱き締められた。

「井関さんが・・・あんな風になったのは、・・・正臣を殺してしまうくらい追い詰められたのは、『私たち』にだって、原因はあったのに・・・」

その言葉を聞いて、秋光はグッと下唇を噛む。

彼は知っている。

全てを、知っている。

井関恭吾は、真理が私立城南高校に入学した年に、新任教師として赴任した。

人当たりが良く頑張り屋で、古株の教師達にも気に入られ、まだ若く明るい彼は生徒達にも人気があった。

赴任1年目から、風紀委員顧問、という大役を任された彼。

2年目も任されるが、1年目の時に就いていてくれた前任の顧問は今年から居ない。

一人で大丈夫だろうか・・・。そんな不安で堪らなかった彼に、眩しいくらいの笑顔で声を掛け元気付けたのが、風紀委員2年目の真理だった。

井関恭吾は、生徒である真理に、恋心を抱いた・・・。

しかし、彼は教師。

そんな気持ちを言えるはずもなく、その気持ちは彼の心の中にしまわれ続けていたのだが・・・。

真理が3年生になった年の秋。
彼女が、学校でも問題視されている2年の不良グループに目を付けられ、リーダー格の少年に嫌がらせを受けている事を知る。
井関は、自分の「教師」という立場も投げ打って、真理を庇い守った。

井関の「真理を想う気持ち」は暴走をはじめ、止まらないくらいに真理を愛し始める。

一時期二人は、本当に恋人同士のように、毎日二人きりの時間を過ごしたのだ。

しかし、その裏で・・・。
その少年。正臣も、真理に恋をし始めた。
過去に大きなトラウマを抱え傷付いていた正臣を、真理は「救ってあげたい」と思うようになる。
正臣に係わり入り込んで行くうちに、真理も彼を愛するようになってしまったのだ・・・。

二人はいつの間にか、心から愛し合うようになった・・・。

そうなると井関は、正臣にとってただ邪魔なだけの存在。
正臣は井関に嫌がらせを繰り返し、教師としての彼を追い詰め、とうとう学校を辞めさせられてしまうくらいの立場にまで追い込んだ。
そして真理は、あれだけ自分を庇い愛してくれた井関に、別れを告げた。

その時、真理の体には「命」が宿っていた。

正臣との子供が・・・。

自分を憎み追い詰めた少年の子供を、愛する少女が宿している。
「好きになってくれて、ありがとう・・・」最後に真理に告げられた言葉は、どれだけ彼の神経をズタズタにしただろう・・・。
真理は人間的に、彼を追い込んだのかもしれない。

井関は学校を、そして、教師の職をおわれた。
その時から・・・、彼の心は病み始めたのかもしれない。

そして、クリスマスイブの日。
初雪が舞い落ちる、ホワイトクリスマス。
真理と正臣にとって、初めてのクリスマスだった。

井関は、人通りの多い歩道で、正臣を刺した。

大きなサバイバルナイフを、自分の恨みの全てを込めて、彼の体に中へと押し込んだのだ。

――真理の目の前で・・・。

プレゼント用に、と用意していた「月の指輪」を真理に握らせ、正臣は真理の腕の中で息を引き取った。

――真理と正臣が愛し合ったのは、わずか3ヶ月。

これからもずっと続くと信じられていた時間は、一人の男によって断ち切られたのだ。

――憎しみと嫉妬で、我を忘れた、男によって・・・・・。

「真理さんと・・・正臣のせいだけじゃない・・・」
崩れそうな真理の体を、秋光は抱えるように力を入れて抱き締める。
「井関を追い詰めたのは、オレ達だって同じだ。・・・オレ達だって、あいつが辞めさせられる原因を作ってる」
「でも・・・秋光君達は手伝っただけよ。正臣に言われて・・・手を貸しただけ。・・・直接の原因を作ったのは、私と・・・正臣・・・」
真理は体勢を整えると、自分を抱き締める秋光の腕に手を当てて、くすっと笑った。
「秋光君に・・・、『真理さん』って呼ばれたの・・・。初めてね」
「あ・・・」
秋光は抱き締める腕を離して、真理の両肩に手を置いた。
「何か・・・変な気分」
「ごめん。つい・・・」
「いいのよ・・・。嬉しいわ・・・」
真理は秋光を見上げ、ちょっと切なそうににこっと笑う。
――綺麗な、眩しい笑顔。
ドキドキと胸が高鳴って、自分の感情も高まってくるのが分かる。
コレが昔の自分なら、間違いなく何も考えずに、押し倒してしまっていただろう。

――真理さんが、好きだ。

言ってしまおうか。
今なら、言える。
達也や健に、後から何を言われても。
オレは。

ずっと・・・ずっと、真理さんが好きだった。
この４年間。ずっと。

「真理さん・・・。オレ・・・」
「正直ね・・・」
秋光が言葉を出しかけた時、同時に真理も口を開いた。
「皆に『お姉さん』って呼ばれ続けて、ずっと、思い知らされていたの・・・」
「・・・」

「私と正臣が・・・、本当は愛し合っちゃいけない関係だった・・・こと・・・」

「パパのなまえも、『まさおみ』って、いうんだよー」
可愛らしい声が、無邪気に告げる言葉。
しかしその言葉に、大の大人である尊は、飛び上がるほどにビクッとする。
「ママがおしえてくれたんだ。『かんじ』はちがうけど、おんなじ『まさおみ』ってなまえだったんだって」
「同じ・・・」
「ボクね。このなまえ、大好き。パパとおんなじだもん」
次々と知らされる事実。
次々に思い知らされる。「彼」に込められた、真理の強い想い。

俺は本当に、真理ちゃんの心に、入っていけるんだろうか・・・。
「彼」よりも、真理ちゃんに想ってもらう事は出来るんだろうか・・・。

尊は、「彼」、正臣の写真を見上げた。

真理が愛した。「正臣」。

「俺だって・・・。真理ちゃんを、愛してる・・・」

尊の眉が、キュッと寄った。

彼の心の中に、おかしな感情が湧き上がる。

故人を悼む、のとは違う、おかしな感情。

「君に・・・。もう居ない君に、負ける訳にはいかない・・・」

人はその感情を。

「嫉妬」、と・・・呼ぶのかもしれない・・・。

「俺は・・・生きているから・・・」

21　憎しみと嫉妬（後書き）

こんにちは。玉紀　直です。

真理ちゃん、「彼」、井関さん、この3人の関係性を説明するために、ちょっと前作を説明するような箇所が続いてしまいました。

一応、前作を読んでいない方でも大丈夫なように。と思い、話を進めているので、「知ってるよー」と思われた、前作購読済みの皆さん、ご勘弁下さいね。

ただ、少々井関さんにスポットを当てた書き方にしてみました。

真理ちゃんは、井関さんが自分達の前から居なくなって正臣君を殺してしまうほどの凶行に及んでしまった事を、少なからずとも自分達にも責任はある、と思い悩んでいたんです。

でも、大切な人を殺された事には変わりがない。

感情的に、完全な板ばさみです。

真理ちゃんの気持ちは、「彼」に支配され続けている。

それを知って、がっちり落ち込むかと思われた尊さん。

かえって、ちょっと燃え上がってしまったようです・・・。

でも、変なことにならなきゃいいんですが・・・。

伝えたくても、伝えられない秋光君の気持ち。

彼はどうなる・・・？

次回は7月23日更新予定。

では、次回！！

22　彼の前でするキス

「あ、ママ、おかえりぃ」
真臣のその言葉に「彼」の写真を睨むように見上げていた尊は、飛び上がるほど驚いた。
まるで、学校での喫煙を見つかった高校時代のように、慌てて振り返る。
和室の入り口のところで、真理が大きな目を見開いて尊を見ていた。
――どうして、そこに居るの？そのまま表情が物語る。
「お・・・おかえり。あの、真臣君にさ、パパに会いに行こう・・・って言われて・・・」
何となく言い訳がましい言葉が出てしまう。
嘘ではないのだが、尊は後ろめたい気持ちに襲われた。
「たけちゃんがくれたシュークリームね、すごくおいしかったんだよ。だから、パパにもあげたの。ママもたべなよー。いっぱいあるんだよー」
真臣が、出していたブロックを更に自分の周りに広げて遊びだす。
小さな子供の「これ」を放っておくと、いつの間にやら部屋中におもちゃが広がってしまう。それが分かっている真理は、真臣の頭を指でツンツンッと突っついて「あんまり広げちゃ駄目よ」と言うと、尊の横に座った。
「ごめんなさい・・・。真臣の相手をしていてもらったのに、こんな所に・・・」
申し訳なさそうに言いながらも、真理はチラッと尊の手元に目をやった。
仏壇の小引き出し。右側を開けて止まっている。

・・・左側は・・・開けていないわよね・・・。

「お線香上げようかと思ったんだけど、出てなかったから探してたんだ。・・・これ、使ってもいいのかな?」

右側を開けてすぐに見つけたというような口調に、真理はちょっとホッとして、やっと尊に笑顔を見せた。

「ありがとう。出しておくと真臣がイタズラしてバラバラにしちゃうから、いつもしまってあるの。・・・嫌じゃなかったら、一本、お線香上げてあげてくれる?」

「嫌なんかじゃないよ。何言ってるの」

何も感じてはいない振りをしてお線香を一本取り出すと、真理が横でライターの火をつけた。

「本当はローソクから・・・。だと思うんだけど、いっつもこうやって省略してるの」

チロッと舌を出して悪戯っぽく笑う。その表情が妙に可愛らしく明るいので、「自分の留守中に余計な事をしていた」と思われないだろうかと心配していた尊は、ちょっとホッとした。

お線香をつけ、手を合わせる。

手を合わせている間、何となくさっき、故人に対して抱いてしまった想いを後悔した。

・・・亡くなった人に、何を対抗意識を燃やしてるんだろう・・・。

真面目な顔で手を合わせる尊の横顔を見ながら、真理はちょっと嬉しくなった。

普通、嫌だよね。恋人の「元恋人」に手を合わせるのなんて・・・。

なのに、嫌な顔ひとつしないで・・・。

優しいなぁ・・・。本当にいい人なんだなぁ。尊さん。

ついさっきまで、「彼」に少々嫉妬の念を抱いていた事など、真理に解かるはずも無い。

「それにしても、優しそうな顔してるよね。真臣君に似てるね。やっぱり」

合わせていた手を膝に下ろして、「彼」の写真を見上げる。しかし、その笑顔をジッと見る事が出来なくて、すぐに真理へと視線を移した。

「正直さ、真臣君の『パパ』達の仲間だったっていうから、『コワイ系』を想像していたんだ。そうしたら、凄く優しそうな顔をした『彼』で驚いたよ。髪も真っ黒だし」

それを聞いて、真理がくすっと笑う。

「本当はね。髪の毛、金髪だったのよ」

「金髪？本当に？」

「ええ。ブロンズ系の、重ための金髪。前髪もちょっと長めでね、いっつもおっかない目をしていたわ」

「へ・・・ぇ・・」

「制服の上着なんて、親と一緒に停学処分とかの話を聞きに来る時しか着た事がなくて、２年生の後半になってもピカピカ。授業になんてほとんど出た事がないくせに、成績は良かったのよ。家でコッソリ勉強していたから」

真理は思い出すように笑いながら、楽しげに話す。

「ふぅん・・・。家でコッソリ、なんて、何か『目指してるもの』でもあったのかな」

「ええ。お父さんと同じ、お医者さんになりたい。って」

「彼のお父さんもお医者さんだったの？真理ちゃんと同じだったんだ？」

尊は何気なく言ったのだが、その言葉に真理はハッと大きく目を見開き口をつぐんだ。

「・・・？真理ちゃん・・・？」

真理の反応を、ちょっと不思議に思う。何だろう。親が医者同士でも、別に恥ずかしい事じゃないよな。

「そう・・・なのよ・・・。お医者さん、なの。だから・・・」

真理の口調はたどたどしい物に変わった。

「そうかーぁ。でも、そんな『ワルイ子』をやっていた彼も、真理ちゃんの可愛らしさにヤラレテ真面目になったんだ?」

尊にからかわれて、真理が赤くなる。

「そ・・・れは、あの・・・」

完全に照れてしまっている。赤くなって困っている真理はとても可愛らしく感じるのだが、その原因は「彼の話をしているから」だ。

尊はせっかくさっき、仏前で手を合わせて落ち着いた気持ちになったというのに、再び何か心が熱くなるような思いに駆られた。

「真理ちゃん・・・」

尊は横に座る真理の肩を抱き寄せると、真理の顔を動かないように頭の後ろで押さえて、唇を合わせた。

「・・・!」

目を閉じるどころか、真理の目は大きく見開かれる。

「彼」の仏壇の前。

「彼」の写真の、真正面だ。

真理は動揺して、見開いたままの目をキョロキョロと動かした。

顔を動かせないので、眼球が痛くなるくらいの横目を使って、遊んでいる真臣を見る。

真臣はちょうどこちらに背を向け、ひとりで楽しそうにブロックで大きな車を作り遊んでいる。

その間にも、尊の唇は貪るように真理の唇を奪う。

押し付けたまま向きを変え、音がしないように舌を吸い上げて口

腔内に侵入する。
「・・・ん・・・っ」
いくら後ろを向いていても、いつ真臣が振り向くか分からない。
それにここは、「彼」の仏前だ。
真理は言葉を出せない代わりに、自分を抱き寄せる尊の胸を両手でグッと押した。
しかし、「やめて」という意思表示は伝わっているはずなのに、尊の力は緩まない。

――――正臣が・・・見てる・・・。

仏前に飾られた写真。
見まいとしても、目を開けていると視界の中に入ってしまう。
真理は泣きそうになりながら目を閉じた。

自分を押し戻そうと強張っていた真理の体が、諦めたように抜けたのを感じると、尊はやっと真理から唇を離した。

「真理ちゃん・・・」

・・・俺を見て・・・。
――――「彼」は、もう・・・。居ないから・・・。

「・・・まさおみが・・・、見るから、駄目よ・・・」
尊から目を逸らし、下に視線を落として、真理が小声で呟く。

尊の心の中に、ちょっと意地悪な問いかけが渦巻いた。

・・・どっちの、「まさおみ」？

尊は真理の肩から手を離すと、クルッと真臣を振り返る。
「真臣くーん、もう少ししたらさぁ、ご飯食べに行こうか？」
「えっ？ごはん？たけちゃんと？？」
ブロックを手に、真臣が振り返る。
「うん！いいだろ？美味しい物イッパイある所いこっ！何食べてもいいぞ。何食べる？」
「んーとねーぇ、あかいスパゲッティとねー、ハンバーグとねー、マカロニが入ったグラタンとねー、エビフライとねー」
「まっ、まさおみっっ、駄目よっ。食べきれないでしょっっ」
慌てて真理が止めようとするが、今言った内容だと、間違いなく「お子様ランチ」になりそうだ。
尊は楽しげに笑いながら、膝と肘で這うようにノソノソと真臣に近付き、一緒に悪巧みをするような顔で笑う。
「ママが怒っても、何を頼んでもいいぞ。残したら、たけちゃんが食べてやっから」
「たけちゃん。きらいなものないの？」
「ないないっ。・・・あっ、でも・・・」
尊は少々大袈裟に眉をしかめる。
「しいたけ。駄目かもっ」
それを聞いていた真理の体が、ビクンと震えた！

――俺、しいたけ、ヤダっ。

我侭を言う子供のようにそう言うものの、「食べなさい」と真理に言われ、シブシブと口に入れる「彼」。正臣。
その姿を、フッと思い出したのだ。

いけない・・・。
いけない。こんな事、考えちゃ・・・。

真理は、正臣の写真を見上げた。

尊さんは、こんなに私を想ってくれるのに。
こんなに、真臣を可愛がってくれて。
嫌な顔ひとつせず、正臣の前で手を合わせてくれて。
こんなに、いい人なのに。

なのに私は、いつも正臣の事ばかりを考えてしまう。
抱かれている時さえも・・・。

――お姉さん、正臣の事、忘れてないんだろ?!

いつか言われた、秋光の言葉が脳裏に蘇る。

「・・・・・」

痛み出す想いに、真理は両手で胸を押さえた。

22　彼の前でするキス（後書き）

こんにちは。玉紀　直です。
正臣の思い出話に、ついつい夢中になってしまった真理ちゃん。
しかしそれは、尊さんの「嫉妬心」に火をつけてしまうだけでした。
尊さんを受け入れようとする心は、決して正臣を忘れません。

真理ちゃんは尊さんを心から受け入れる事は出来るのでしょうか。
そして尊さんは、真理ちゃんがまだ正臣を想っている事を、どう思うのでしょう。

親子のように仲良くお食事。
でも、その帰り道、尊さんが自分の気持ちを抑え切れないままちょっと暴走してしまいます。
次回は「閲覧注意」になりますので、お気をつけ下さい。

次回は7月27日更新予定！

では、次回！

２３　いつもと違うセックス（前書き）

注意

今回は本文中に、少々一方的な性的表現が含まれています。
苦手な方、又は、そういう表現が嫌いな方は
その場面にきたらとばすなど。してください。
Ｒ－１５指定はさせて頂いていますが閲覧にはご注意を・・・。

23　いつもと違うセックス

「ごめんなさい。尊さん。重いでしょう？」
真理が申し訳なさそうに言うが、尊は軽く笑う。
「重くなんかないよ。このくらい」
ファミレスを出て駐車場へ向かいながら、尊は自分の腕の中ですっかり眠ってしまった真臣に目を落とした。
「でも、子供って眠っちゃうと何故か重いし」
横を歩きながら、心配そうに言う真理の顔を見て、尊はニッと笑う。
「このくらいで『重い』なんて言っていたら、真理ちゃんを抱っこできないし」
「たっ、尊さんっ！」
からかわれて素直に反応してしまうところは、真理の良いところなのか、困ってしまうところなのか・・・。
今までそんなシチュエーションも、無きにしも非ず・・・。ついつい、そんな時の事を思い出してしまい、真理は赤くなった。
そんな反応を可愛く感じながら、尊は真臣を抱きかかえるもう一方の手で車の後部座席のドアを開け、静かに真臣を寝かせると自分のブレザーを脱いで体の上に軽く掛けてやった。

「真臣・・・。楽しかったみたい」
ドアの外から真臣の寝顔を眺めて、真理が少々しんみりと呟く。
ファミレスなどに食事に来るのは、決して初めてではない。
しかし、真理と二人だったり、時々、正孝や真澄が一緒だったり、数回だが賑やかに「パパ達皆で」という時もあった。
今日のように自分と母親。そして若い男性。一見して本当に親子のような組み合わせで来るのは初めてだったのだ。
父親と一緒に外食に出る。それがどんな気分の物なのか、もちろ

ん真臣には解からない。
それでも本能的に、どこかいつもと違う雰囲気に興奮していたのかもしれない。
いつもはこういう所に来ていても真理の隣に座るのに、今日は尊の横に座り、嬉しそうに笑いハシャイでいた。
沢山食べて、笑って、ハシャイで。・・・まだ夜の8時前だというのにすっかり眠ってしまったのだ。

「尊さん。有難う」
後部座席のドアを静かに閉める尊に向かって、真理がお礼を言う。
尊は振り向いて、真理の顔の高さまで身を屈めた。
「じゃぁ、お礼して」
「え？」
何の事かも解からず、目を閉じる間もないうちに、素早く真理の唇にチュッと音を立ててキスをする。そしてにこっと笑い、助手席のドアを開けた。
「俺も。凄く楽しかった」
本心だった。
何となく3人でいると、本当に「親子」のような気がして・・・。
自分が「守ってあげられる人間」を見つけたような気がして。

「私も、お腹イッパイ」
フーっと息をつきながら助手席に座る。運転席に乗り込んできた尊を、ちょっと咎めるように睨んだ。
「尊さん。真臣に何でも注文させるんだもん。デザート」
プリン・アラ・モード。チョコパフェ。レアチーズケーキ。・・・もちろん真臣が全部食べられる訳もない。全て半分以上真理が食べた。
「女の子は、甘いものは別腹、なんじゃないの？」
「限界ってものがあるのっ」

他の物は尊が引き受けた。もちろん彼のお腹もほぼ限界だ。
「尊さん。『全部たけちゃんが食べてやる』って、言ってなかったぁ？」
チラッと横目で尊を見ると、「降参」とでもいうように彼は両手を上げる。
「甘い物は限界があるなぁ。さすがに」
「・・・甘い物。苦手・・・？」
「嫌いじゃないよ。凄く得意でもないけど」
真理の目が「何か」を思い出すようにちょっと細まり、それに気付いた尊の眉が寄った。

――――「彼」の事、思い出した・・・？

「パパもね、甘いものすきだったんだって」そう言った真臣の言葉を思い出す。
考えてみると、尊と一緒に居る時、真理は時々こういう表情をする事がある。
目をちょっと細めて。何かを思い出すような。切なげな表情。
俺といる時も、真理ちゃんは「彼」を忘れてはいない・・・。

「真理ちゃん」
尊は膝に乗せた真理の手を握った。真理が首を傾げて尊を見る。

「俺の事・・・好き？」

「え？」

いきなりの問い掛けに、真理は戸惑う。
何故、いきなりそんな事を訊くのだろう。

「答えて」
尊は助手席側へ身を乗り出すと、真理の両腕を掴む。
「尊さん・・・？あの・・」
何となく尊の様子がおかしい。真理はちょっと口ごもった。
「・・・俺は、君が好きだよ・・・」
でも君は、一度も言ってくれた事がないね・・・。
「・・・す・・き、よ・・・」
まるで尊の迫力に押されるように、真理が小声で口に出す。
「・・・好き、よ・・・。どうして？」
「本当？」
「好きじゃ、なかったら、・・・お付き合いなんて、しないでしょ・・・？」
ガタンッッ！！
何の予告もなく、いきなり車のシートが倒される！
その衝撃に驚いている真理を更に驚かすように、尊が助手席側に移動して、上から真理を見下ろした。
「尊さん・・・？」
尊の様子がおかしい事に、少々戸惑いを隠せない。
尊はそんな真理のブラウスに手を掛けると、素早くボタンを全部外し前をはだけた。
「どうし・・・たの・・？」
真理の胸元に、ペンダントが光っている。
ペンダントにした。「指輪」が。
尊はその指輪を手にとって、再び真理に問い掛ける。
「もう一度、言って」

チェーンの部分を指でつまんで、指輪を目の前にぶら下げる。
指輪が視界に入って、真理の体は知らずにビクッと震えた！
「俺の事。好き？」
「・・・尊、さん・・・？」
指輪が「彼」からのプレゼントである事を、真理は尊に言ってはいない。尊がどうしてこんな問い詰めるような事をするのか、真理には解からない。
「・・・答えて」

――――この「彼」の前で・・・。

真理は思わず、自分を追及する尊と指輪から顔を逸らした。
「好き、よ・・・」
真理の声が辛そうに震える。

尊は真理の顎を掴んで顔を戻させると、吸いつくように唇を重ねた。
ペンダントから手を離し、急ぐように真理の体をまさぐる。
真理の唇を貪る音が、車内に響いた。
「・・たけ・・る、さ・・・」
真理は顔を逸らそうとするが、両手で顔を押さえられ、それが出来ない。
そのうちに尊の膝が、動揺してその場で足踏みをするように動く真理の両脚を割った。
「だ、めっ、たけるさっ・・・」
やっと唇が離れ、尊の片手がスカートをまくり上げ始める。もう片方の腕は、必要以上に真理が動かないように上半身を押さえつけた。
「だ・・めよ・・・。まさおみが・・・っ」
真理が首を傾かせて、後部座席を見る。

後ろでは、真臣が小さな寝息を立てている。こんな所で行為に及んで、もし途中で目を覚ましでもしたら・・・。

「やめ、て・・・。まさおみが・・・見ちゃったら・・・」

なるべく小声で、慌てて真理が言うが、その瞬間、真理の中に尊が入り込んだ！

「！」

動揺して、まだ「準備」が出来ていない体。

そこに、入り込まれる感触。

そして、かすかに感じる。痛感・・・。

「あ・・・」

――――真理の体が、「過去」を思い出す・・・。

思い出したくない。・・・「過去」の記憶。

「た・・ける・・・さん・・・、いやっ・・・」

大きな声を出さないように、真理は喉の奥で声を抑えながら、両手で尊の体を押した。

「・・・まさ・・おみ、が・・・見る、からぁ・・・」

シートが揺れ動く音が大きく聞こえる。その音がピタッとやむと、尊は真理の耳元で囁いた。

「・・・月が、きれいに出てるよ・・・」

ビクッ！！

シートが大きな音を立ててしまうくらい、真理の体が大きく震える！

「月が、見てるよ・・・。きれいな真理を・・・」
「たけ・・る、さん・・・?」
真理は涙がボロボロとこぼれるように流れ出てきた。どうして尊が、こんな風に自分を抱くのかが解からない。

「やめ・・・てぇ・・。いやぁ・・・あっ・・」
声を出さないように喉の奥で抑えて、時々哀願するような言葉を出す。
尊が自分を突き上げるたびに、シートが音を立てる。
その音で真臣が目を覚ますのでは無いかと、真理は気が気じゃない。

「真臣」の事が気になって、「正臣」が心の中に入ってきて、どうして尊がこんな無理な抱き方をするのか解からなくて、もちろん真理は最初から感じる事などは出来ていない。

「だめ・・・。おねがい・・・ぃ・・」
「真理・・・」
涙を流す真理の顎を押さえて、尊は自分のほうを向かせる。
「・・・俺の事・・・見て・・・」
「・・・たける、さん?」
「俺は、・・・君を、愛しているから・・・」

その言葉を出した瞬間、尊の胸が締め付けられるように苦しくなった。

どれだけ君を好きになればいい?
どれだけ君に「愛している」と言えば、君は俺に心をくれる?
「彼」よりも、俺に・・・。

「まり・・・」
尊の心が泣きそうになる。
いきなり次々と思い知らされた。
重すぎる真理の「彼」への想い。

「愛してる・・・」
君の心には・・・まだ「彼」がいる・・・。

こんな醜い嫉妬は、したくは無いのに・・・。

「た、けるさ・・・あぁぁっ・・・」
真理が泣くような声を上げた瞬間、尊は初めて、真理の中へそのまま自分を解き放ってしまった・・・。

23　いつもと違うセックス（後書き）

こんにちは。玉紀　直です。
嫉妬したってしょうがない。
それは解かっているのに。
いつまでも「彼」の面影を忘れられない真理ちゃんに、自分がその心に入り込めているのかを気にしすぎ、自分を押さえられなくなる尊さん。
いつもは優しい尊さんのいきなりの変わりように、真理ちゃんは戸惑います。

3人で食事をして、楽しい一日になるはずだったのに。
あまりにも色々な事を知りすぎた一日。
この一日は、尊さんの心を、真理ちゃんの心を、どう変えてしまうのでしょう。

今まで、真理ちゃんの過去にばかりスポットが当たっていましたが、次回、尊さんの過去から、今度は真理ちゃんの気持ちに影響を及ぼすものが飛び出します。

次回は7月31日更新予定。

では、次回！

24　記憶の中の彼女

「あれ？柳田さん？」
その朝、第2診察室に準備に入ってきた美鈴を見て、尊はちょっと首を傾げた。
いつも自分の補助には真理が付いている。今日の朝、真理は来ていたので休みという事もない。
不思議そうに自分を見ている尊を、美鈴は呆れた顔で見返した。
「尊先生。今日の朝礼会議で何を聞いていたんですか？今日は『どうしても』真理ちゃんじゃなきゃイヤだ、っていう子供さんの予約が午前中に3人も入ってるんですよ。だから彼女は午前中、処置室担当っ。――聞いていなかったんですか？」
ジッと睨むように見られて、尊は焦る。
「あっ、そうだったね・・・。ごめん、ごめん」
正直、朝礼もよく聞いてはいなかった。
「まぁね。真理ちゃんじゃなくて申し訳ないんですけど」
「そんな事無いよ」
そう言うものの、笑いは引きつる。どうも尊は美鈴が苦手らしい。

「自分の彼女がいいのは解かりますけどね。あまりにもそれが見え見えだと、他の看護師に嫌われますよ」
「えっ？！」
尊が驚いて、診察台のタオルを敷き直している美鈴を振り返る。
・・・彼女・・・。って？真理ちゃんと付き合ってるなんて、病院の人間に言ったことは無いぞ。
それでも、もしかして真理が言ったのだろうか。そう思ったが、美鈴はチラッと尊を横目で見て、再び呆れ声を出す。
「尊先生。結構、あからさまですよね。あれだけ『真理ちゃん』『真理ちゃん』ってベタベタしていれば、皆気付くの当たり前ですよ」

「・・・ベタベタ・・・？」
そんなの・・・。してたかなぁ・・・。
とは思うものの、この病院へ来て2ヶ月。確かにいつも真理の姿ばかり追いかけているような気はする。

我ながら少々苦笑いを漏らしつつ、デスクの上のパソコンを起動させる。
いつもは真理が朝に来て、すぐに起動させ、予約が入っている子供のリストなどを出しておいてくれる。
朝はいつも早めに来ている彼女が、今日は朝礼が始まるギリギリに飛び込んできた。
本当なら尊は今日、朝、真理に言いたい事があったのだが、もちろん二人で話す暇など無い。

色々な事を知りすぎた土曜日。
あの日、後ろで真臣が眠っているというのに、それを気にする真理を気遣ってやることも出来ず、自分の心の中に沸き立ち始めた嫉妬心のままに真理を抱いてしまった。
「やめ・・・て・・。おね・・が、い・・」泣きながら、ひたすら尊を押し戻そうとしていた真理。

それも、俺。・・・ちゃんと「着けて」なかった・・・。
あれじゃ、レイプじゃないか・・・。

ずっとそれが気になって、日曜日に数回、真理の携帯に電話をしたが真理は出なかった。
今日会ったら、とりあえず謝ろう。尊はそう思っていたのだ。
昼時間にでも、話をするか・・・。
とりあえず今は諦めよう。そう思い小さな溜息をついた時、美鈴が後ろから探るように聞いてきた。

「尊先生って、大学病院にいたんですよね？」
「え？うん。そうだけど？」
振り向かないまま答える。
「私の高校時代の先輩も、大学病院にいるんですよ。ひとつ上の。女の先輩ですけど」
「へー。そうなの？同じナースかい？」
「・・・大学病院で、小児科医になっています」
ピクッ・・・。キーボードを叩いていた尊の手が止まった。
「福田若菜（ふくだわかな）・・・って。知っていますよね・・・？」

――尊君・・・。

尊の脳裏に、一人の女性の姿が浮かび上がる。

大きな目。少しカラーリングを入れたこげ茶の髪。肩の下まである柔らかい髪を、いつも大きめのバレッタで止めていた。
その髪をベッドで解くと、サラサラして綺麗で。とても良い香りがした。

――尊君は・・・セックスしたいだけだったんだよね・・・。

「知っているよ・・・。大学も、同じだったから・・・」
尊は静かに答えた。

――私の事、好きだった訳じゃないんだよね・・・。

「優秀な女性だったよ。・・・俺が専攻した、教授の息子さんの婚約者だ」

――私は、・・・尊君が好きだったよ・・・。

・・・好きだったよ・・・。
傷付けることしか、出来なかったけど・・・。

「今年の冬には、結婚するはずだよ。確か」
背を向けたまま、小さな声で呟くように言う尊を、美鈴は背後からちょっと睨み付けた。

「まりちゃん。かれしできたの？」
ちょっと生意気な口調。カールを掛けたふわふわな髪は、まだ４歳の子供だというのに金髪に近い茶色に染められている。
「こらマコ！余計な事、訊くんじゃないよっ！」
横に立っていた母親が、花とレースが付いた可愛いパンツ一枚で体重計に乗る女の子の頭をパンッと叩く。
「あっ、亜子ちゃんっ！叩いちゃダメだよぉ・・・」
屈んで記録を書いていた真理が慌てて言うと、マコと呼ばれた少女は、ピョンッと真理に抱きつき、母親にべっと舌を出した。
その生意気さに母親の亜子がグッと握りこぶしを作るが、真理がマコを抱き上げ仲裁に入る。
「怒らないでね。いいのよ私は。何を訊かれても。――どうして知っているの？マコちゃん」
亜子を制してマコに問い掛けると、マコは少々父親に似たズルイ顔でにやぁっと笑った。
「こないだ、パパと秋兄がはなしてるのきいた。秋兄が、まりちゃんが、おいしゃさんとつきあってる、って、おこってた」
「・・・怒ってた？」

「秋兄」とは秋光の事。「パパ」とは達也の事だ。
マコは達也と亜子の娘で、真臣と同じ歳。
今はもう働いてはいないが亜子は元々キャバクラ嬢で、達也が高校生の時に知り合った。
達也が高校2年の冬に、19歳だった亜子に子供が出来た。達也は学校をやめ、亜子が勤めていた店でバイトとして働き始めたのだ。
その頃に、友人である正臣の事件などがあり、悲しさから逃れるためにも彼は無我夢中で働いた。結果、店を仕切るオーナーなどにも気に入られ、今では店を2件任されるまでになっている。
・・・キャバクラとソープだが・・・。
この8月に4歳になったマコは、今日は幼稚園を休んで「4歳児検診」を受けに来ていたのだが、「まりちゃんじゃないと、いやだからね!」と、予約の際、我侭を言った。

「つきあってるおいしゃさんって、かっこいい?どこのひと?」
小さな女の子というのは、男の子よりもマセテいる。両親的なものもあるが、マコは更に上を行っている。
「マコ!いい加減にしな!・・・ごめんね。ネーさん」
亜子が口を挟み、真理に両手を合わせて謝る。
真理は「いいよ」と言ってから、マコを身長計の上へ下ろした。

「・・・秋兄ちゃん、怒ってたの?」
「うん。じょうだんじゃねーぞ。って。ビールのんでた」
「そう・・・」
以前、正臣の事を忘れていないのに、そのまま尊と付き合っている事を責められた。

・・・まだ、怒ってるんだ。やっぱり。

正臣の事で悲しい事などがあると、どうしても秋光に頼ってしまう自分が居る事を、真理は気付いている。
先日の病院の帰りにしてもそうだ。

正臣の事で悩んでも、尊に言う訳にはいかない。
どうしても、いつも相談に乗ってくれたり、事件の後、一番自分を慰めてくれた秋光を頼ってしまう。

「オレは、認めないから」そう言った秋光を思い出すと、真理はなぜか胸が痛くなった。

２４　記憶の中の彼女（後書き）

こんにちは。玉紀　直です。
美鈴さん、久し振りの登場です。覚えていて頂けていましたでしょうか？（笑）
「何かを知っていそう？」な彼女の口から飛び出した女性の名前。
この女性は４話の回想シーンで出てきていました。
あまりにも間が開きすぎで「そんなこともあったねぇ・・・」って感じですが、これから少々引っかかりを見せます。
彼女は尊さんにとって、どんな存在だったのでしょうか・・・？

真理ちゃんに謝りたい尊さん。
ずっと電話に出てくれなかった。という真理ちゃん。
やっぱり土曜日の事、気にしているのかな？

次回は８月３日更新予定。

では、次回！

25　仲直りの陰で・・・

「たーけるっさんっ」
午前中、最後の患者に少々時間を取られてしまい、フーっと息を吐きつつ処置室へ続く出入り口の方から診察室を出ると、ちょうど通路の正面の壁に寄り掛かって、真理が尊を待っていた。
「真理ちゃん・・・」
尊は少々驚く。てっきりもう昼に入っているだろうと思っていたから。
「お疲れ様です。ちょっと時間かかっちゃったね。お腹すいたでしょ？」
ニッコリと笑って、尊の前へ歩み寄る。
なじみの子供達に「太陽さん」と言われる所以（ゆえん）になっている、太陽のような明るい笑顔で。

「真理ちゃん！」
尊は真理の腕を引き、そのまま診察室の中へ戻ると、ドアを閉めて彼女を抱き締めた。
「・・・良かった・・・。怒ってるかと思った・・・」
我ながら、ちょっと声が情けないかな・・・？真理が声をかけてくれた事にホッとして、つい弱音を吐いてしまう。
「どうして？」
真理が軽く尊の背に両腕を回す。それに反して、尊は苦しいくらいに彼女を抱き締めた。
「昨日・・・ずっと電話に出てくれなかったし。・・・今日も、全然話が出来なくて・・・」
「ごめんなさい。昨日は、真臣が熱を出して一日中ついていたから・・・」
「熱？何？もしかして俺、土曜日に車のクーラー入れすぎてた、と

かで・・・」
思わず体を離して真理を見る。あまりの慌てようにと、真理はくすっと笑った。
「違うのよ。『知恵熱』だと思うわ。土曜日、きっとあまりにも楽しかったのよ。昨日だって『今日はたけちゃん、こないの?』ってずっと言っていたもの」
極度に興奮するような行事やイベントがあると、その興奮から「知恵熱」を出してしまう。小さな子供には良くあることだ。

「だったら、呼んでくれれば、すぐに行ったのに・・・」
真臣が自分に会いたがっていてくれた。というのは、尊にとって、とても嬉しい事だった。
真理は申し訳なさそうに、小さく肩を竦める。
「ゴメンナサイ。2日も続けて真臣に付き合わせるんじゃ、申し訳ないかな。なんて思って」
「そんな事ないよ。変な遠慮はしないでくれ。・・・俺はてっきり、昨日一日『真理ちゃんに嫌われたかな』って、ずっと落ち着かなくて・・・」
「尊さん?」
「・・・あんな事。・・・してしまったから・・・」

車の中で、「彼」の存在に嫉妬して、無理矢理に真理を抱いた。
後ろで眠る真臣が居るというのに。

「じゃぁ、もう、しないでね・・・」
真理は、優しく言って尊を見上げた。
「・・・悲しいし、怖いし・・・それに」
悪戯っぽく笑い、ちょっと舌を出す。
「痛くて・・・。全然気持ちよくないからっ」

尊の胸が痛くなる。
自分がしてしまい悔やんでいた行為を、真理は責めてこない。
かえって、許そうとしてくれている。

「真理ちゃん・・・」
尊はもう一度真理を抱き締めた。
真理は両腕を尊の背中に回し、ポンポンッと叩く。
まるで、真臣が悪戯をして怒った後で、抱き締めて慰める時のように。
「尊さん。お腹すいたね。お昼買いに行こうよ」
真理が優しい声で言うと、尊は真理の腕を取ったまま、嬉しそうな声を出す。
「じゃぁ、今日は俺がおごるよ。真理ちゃんあんまりお昼っておごらせてくれた事ないから」
「駄目よ。秋光君に怒られちゃうわ。『親元にいてお金節約してる訳でもないんだから、お昼くらい自分で食べなさい』って」
真理が絶対するであろう秋光の反応を想像してクスクス笑うと、尊が少々戸惑い気味に笑う。
「・・・仲、良いよね。真理ちゃんと、店長って」
「ご近所さん。だもの。それに、毎日お昼買いに行ってるし」
「ふーん・・・」
「尊さん?」
真理が何気に首を傾げると、尊は自分の反応にハッとして、小さく首を左右に振る。

「マズイ、マズイ。また、やきもち妬くところだった」
「え?」
やきもち・・・って?私と秋光君に?
「尊さんって、やきもち妬き、なの?」

何となく赤くなってしまった真理を目の前に、尊は腕を組んで考え込んだ。
「ん～～。そう・・・かもっ」
少々おどけた様子に真理がプッと吹き出す。冗談にでも真理が笑ってくれる事が、尊はとても嬉しかった。

「店長ってさ、真理ちゃんの事、好きなんでしょ？」
とろろ蕎麦セット、カツサンド、コーラとガム。
・・・何だろう？この「好きな物しか食べません」って感じのセレクトは・・・。
しかし、量的には何の文句も付けようがない。
真理さんも、このくらい食べてくれればなー。と思いつつ会計を始めると、このセレクトの本人。美鈴に、目の前でそう言われた。
「何？いきなり」
少々目をぱちくりさせながら訊きかえす。
いくら他に客がいなくて、パートも傍にいなくて、今レジには二人だけ。っていう状況だからって、そういう確信をつくようなこと訊くか？
そういえば・・・。今日は真理さん、まだ来てないな・・・。

「だから、前から思ってたけど、好きなんでしょ？真理ちゃんの事」
美鈴が、問い詰めるように訊いて来る。
「可愛い女の子、嫌いな男はいないよ。美鈴ネーさんも、美人だし好きですよ～」
秋光がふざけた様子でガムをピッとレジで打つと、美鈴はイライラしているようにカウンターを指先でパンッと叩いた。
「そう言う意味じゃないわよっ」
「そーいうコトをね。気軽に口にしないのっ。オレはっ。・・・は

いっ、８６６円です」
財布から千円札を出し、秋光に渡す。
怒ったような口調だった美鈴だが、その声が少し静まる。

「・・・協力してあげようか・・・。私」
「何を？」
「尊先生と、付き合ってるの、知ってるでしょ？」
「――――・・・はい、１３４円とレシート」
その件に関しては特に返事をせず、お釣りを渡す。
お釣りとレシートを財布に入れてから、美鈴は何かを思い出すように眉を寄せた。

「医者としてはともかく・・・。男としては、最低よ・・・」

「何食べようかなー」
「また、へんなもの選ぶと、店長に怒られるよ」
そんな会話を楽しげにしながら、コンビニへの道を歩く尊と真理。
仲良く並んで歩き、笑い合う。
「秋光君はねー。人の食べるものにうるさく言いすぎ」
「心配してくれているんだよ。本当に真理ちゃん、選ぶ物が無茶苦茶な時が多いから」
「あーっ。男同士でカタもってぇ。」
怒った口調で言う真理の頭に手を置いて、ポンポンッと叩くように撫でながら、尊が軽く笑う。

そんな仲の良い二人の姿。
直進で信号待ちをしている車から、一人の女性が見ている。

大きな目。少しカラーリングを入れたこげ茶の髪。
柔らかそうな髪をひとつにまとめ上げ、頭の後ろで大きなバレッタを使い留めている。

「・・・尊・・君・・・・？」

声が少し寂しそうに聞こえるのは・・・気のせいか・・・。

25　仲直りの陰で・・・（後書き）

こんにちは。玉紀　直です。
真理ちゃん、優しすぎー。
書いてて、玉紀もちょっとそう思うかな・・・。
ただ、真理ちゃんは昔からずーっと優しい子でしたね。
自分の事より人の事を考えてしまうような。
「彼」正臣君の時から、ソレは変わらないんです。
尊さんも、ホッとして嬉しくて堪らないでしょう。
ただ・・・。
誰かが、仲の良い二人を見ていますよ。

そして、美鈴さん。
彼女は尊さんの「何」を、知っているんでしょうか？

次回は8月6日更新予定！

では、次回！！

26　遠回しのプロポーズ

「・・・合格」
雷でも落ちるのか？
カウンターの上に置かれた商品達を見て、秋光は考える。
豚丼と冷たぬきセット弁当、ハムレタスサンド2パック、ヨーグルト、1リットル紙パックのアイスコーヒー。
・　・・これ全部、真理さんが食べるのかな・・・。
目の前でニコニコしながら立つ真理をチラッと見上げ、再び商品達に目を落とした。
でも、ちょっと食い過ぎじゃねー？食い盛りの男子高校生じゃあるまいし。

「あのさぁ、真理さん・・・」
少々疑惑を込めた目で、秋光は何かを隠すように過剰なほどニコニコする真理をじっと見る。
「これ全部、真理さんが食べんの？」
「えっ？」
ドキッとするのが顔に出る。
・・・違うな・・・。秋光の眉が寄った。
すると、レジカウンター傍の書籍コーナーで雑誌をパラパラめくっていた尊が、軽く笑いながら雑誌を手に歩いてきて真理の後ろに立つ。
「さすがに毎日、真理ちゃんの食生活を見ている店長は鋭いよね。それね、俺の分も入っているんだ。真理ちゃんのは、サンドイッチ1パックとヨーグルトだよ」
「アイスコーヒーは？先生、1リットルも飲むの？」
「ん？二人で半分ずつ」
「二人で」という辺り、非常にムカつきを感じた秋光は、無言の

ままセット弁当をカウンター後ろの電子レンジに入れ、くるっと振り向きつつ少々睨むように尊を見る。
「もしかしてっ、お昼、先生のおごり、とか？」
「うん、まぁ、そうなんだけど・・・」
「甘やかしたら駄目だよ。真理さん、親元に居るんだから。お昼くらい自分で食べさせなきゃっ」
あ、やっぱり予想どおりのこと言った。
尊と真理は同じ事を思ったらしい。同時にぷっと吹き出してしまった。

「何？」
「二人同時に」という辺りが、更に面白くない。
秋光は更にムッとする。
すると尊が、取り繕うような笑顔を見せながら、手にしていた雑誌をカウンターに置いた。
「ごめん、ごめん。そう言われるかなー、って思ってたから。つい。・・・実はね、今日俺のおごりなのは『お詫び』なんだ」
「お詫び？」
「ちょっとね、真理ちゃん、困らせるような事しちゃったから」
尊が照れくさそうな顔で真理を見ると、尊を見上げていた真理が、ぽっと赤くなって顔を逸らした。

もちろんそれを見て、３倍面白くないのは秋光だ。

背後でレンジがチーンと音を立てる。温まった弁当を取り出し、秋光は背を向けたまま申し訳なさそうな声を出した。
「センセー、すいませーん、冷たぬきの部分、外さないで一緒に温めちゃいましたー」
本来は「冷」という言葉どおり、うどんの部分のパックを外して、豚丼部分だけを温めなければならない。一緒にレンジへと入れてし

まったので、「冷」ではなく「温たぬき」になってしまった。

・・・もちろん、わざと、なのだが・・・。

少々セコイ仕打ちではあるが、秋光は背を向けたままニッと笑う。
しかし、背後から聞こえた尊の声は、何も気にしていない極めて機嫌の良いものだった。
「いよいいよ。付け汁に氷を入れて食べるよ。釜揚げうどんみたいで美味いかもよ」
何といっても、自分が真理にしてしまった仕打ちに一日悩んで、それを真理が責める事もなく許してくれたばかり。
尊はこの上なく気分が良いのだ。

反して秋光は、・・・4倍、面白くない。

一応平気な顔で振り返りレジへ向かうが、真理をチラッと見ると、上目使いに尊を見上げてまだ赤い顔をしている。
何だよ・・・「困らせた」って・・・「ソッチ」関係か？
なっ、何をしたんだ？！
思わず「セックスの時に女が困ること」を色々想像してしまい・・・。

「面白くない」が、5倍になる。

「それじゃぁ、1ヶ月くらい真理さんのお昼の面倒、見てもらおうかっ」
「あっ、秋光君っ」
あまりの長期間指定に、真理が慌てる。
1ヶ月、って！そんな長期間、尊さんに申し訳ないでしょ！
しかし、慌てる真理とは反対に、尊は商品の代金を支払いながら、

ポロリと本音を出した。

「いいよー。一生でもいいくらいだ」

え・・・？

真理は、大きな目を更に大きく見開いて尊を見る。

言ってしまってから自分が言った言葉の意味に気付き、ハッとして真理に目を向けた尊は、驚いた顔で自分を見ている真理の表情を見て、困ったように髪をぐしゃっと掻き混ぜた。

「いや、真理ちゃん、あのさ・・・」

・・・別に、慌てる必要はないんだ。

だって、本心だし。

いつかは言おうと思っていた事だし・・・。

――でも、コンビニのレジの前。っていうのは、ちょっと違うかぁ？

――秋光。「面白くない」6倍。・・・いや、7倍。

これが昼間のコンビニレジの前じゃなければ、確実にいい所まで進んでいたような気もするが、何か言い出そうとした尊の言葉を、真理は気付かない振りをして外した。

「あ、秋光君！1ヶ月なんて駄目だよ！長すぎるよ！いっつも、お昼くらいは自分のお金で食べなさい。って言うじゃないのっ」

真剣になりそうになった尊を無視して、自分に振ってくれた事が秋光は妙に嬉しい。

7倍に膨れ上がっていた「面白くない」は、一気に消えた。

「だって真理さん、何か『いいこと』で困らされたんだろー？じゃ

ぁ、いいじゃん。1ヶ月くらい豪勢におごってもらいなよー」
ちょっと冷やかすような口調に、真理が赤くなる。
「なっ、何よぉ・・・、『いいこと』って、・・・秋光君のばかぁっ」
「何赤くなってんのさ。オレ、何も言ってないだろ?真理さんヤラシーっ」
「やっ、ヤラシー・・・ってぇっっ」
慌てる真理に、楽しそうに笑う秋光。
「何か、今日の秋光君、意地悪くないっ?!」

ムキになる真理に、秋光は面白さ2倍。

「ごめんな。真理さんっ」
機嫌が良くなったついでに、真理の頭をぐしゃぐしゃっと撫で回す。
「髪の毛ぐしゃぐしゃになるぅぅっ」
「いいじゃんっ。髪の毛さらさらっ。きもちーぃ!」
「やっ、やめてよっ。もぅっっ!」
「やだー」
「あきみつくんっっ」
秋光は撫で回していた手を止めて、両手の指先でぐしゃぐしゃにした真理の髪を梳いた。
「ほら。すぐきれいに直る。真理さんの髪は昔からきれいだもんな」
綺麗なさらさらの髪は、昔から真理の自慢だ。
しかし、秋光にこんな風に髪を触られるのは初めてで、真理は心なしか赤くなる。その顔を見て、秋光はくすっと笑った。
そんな秋光の様子に、いつもと違うものを感じたのは尊だ。

呼び方が「真理さん」になってる?
いつもは「お姉さん」なのに・・・。

この上なくご機嫌だったはずの気持ちの中に、なにかもやもやした物が入ってくる。しかし尊は軽く頭を振って、それをリセットした。

別に「真理さん」でもいいじゃないか。

元々高校の後輩だったっていうし、年下なんだから。

弟な訳じゃないんだから、別に「お姉さん」って呼ぶ必要もないだろう？

「じゃぁ、今日はゆで玉子とチョコ入れておくから。お昼に玉子食べなよ」

「いいよぉ。今日は尊さんにおごってもらったし。それより秋光君こそ、毎日お昼におごってくれてるような物じゃないの？」

「オレはいーの」

ニッと笑って手に持っていた「おまけ」のチョコを、顔の横で振る。

「これ、真臣も好きだからさ。お迎えに行った時にでもやってよ」

「ありがとう。秋光君」

いつも真臣のことを考えてくれる気持ちが嬉しくて、真理は病院で子供たちに「太陽さん」と呼ばれる優しい笑顔を秋光に向ける。

その笑顔を見て、秋光はこの上なく幸せな気持ちになった。

「やっぱり店長。予想通りの事、言ったね」

二人分の昼食が入ったコンビニ袋を提げて病院へ戻る途中、尊が秋光の話を出すと、真理は楽しそうに笑った。

「そうでしょ？秋光君なら、お昼は自分で！って言うと思ったんだ」

「やっぱり、昔からの付き合いだから解かるのかな？」

「んー、なんていうのかなぁ・・・。何となく解かるの」

「ホントに・・・仲いいよね」
少々沈んだ声で呟くように言う尊の様子が気になったのか、真理は尊の前に回りこみ後ろ手を組んで、ひょいっと尊の顔を真下から見上げる。
「やきもち、妬くの？」
可愛らしい口調で言われて、思わず尊は足を止めた。
「秋光君は、私の大事なお友達なの。・・・男の子だけどね」
にこっと笑う。さっき秋光にも見せた「太陽さん」の優しい笑顔。
この笑顔を見ただけで、全て許してしまえる気になるのは何故だろう。
「ごめん。大丈夫だよ」
尊は笑って、真下から自分を覗き込む真理の頭をポンポンッと撫でた。
自分はこんなにも独占欲が強かっただろうか・・・。そう考えると、尊自身が戸惑いを感じてしまう。

「あのさ、真理ちゃん。さっき、ちょっと店で言った事なんだけど・・・」
尊が少々真面目な声で切り出すと、真理が小首を傾げる。
「一生でもいい・・・。って、言った事なんだけど・・・」
冗談ではなく本気だから。そう伝えようとしたのだが、その途端真理は、体を起こしてクルッと前を向き、早足で歩き出した。
「早く行こー、尊さんっ！お腹すいたからぁ！」

まるで話をはぐらかすように、鼻歌混じりに尊の前を歩く。
何となくタイミングを失った尊は、そのまま口をつぐんだ。

・・・もしかして・・・。
はぐらかされた・・・のかな？

事務所兼休憩室の長椅子にごろんと横になり、肘掛に足を乗せて、秋光はフーッと大きく煙草の煙を吐いた。

「私、協力してあげようか?」美鈴の申し出に、特に返事は返さなかった。

しかし、その後で彼女が言った言葉が、妙に頭に引っかかっている。

「男としては、最悪よ」と・・・。

「オレも正臣も、最悪な男、だったけどな・・・」

冗談のように自嘲気味に笑いながら、もう一度深く煙草を吸い込み、溜息のように吐く。

話だけでも聞いてみようか・・・。

真理の笑顔を思い出しながら、秋光はそう考えた。

26　遠回しのプロポーズ（後書き）

こんにちは！玉紀　直です！！！

長らくお休みを頂きまして、申し訳ありませんでした！！
えーと、「再開のお知らせ！ありがとうございます！」という近状報告を「理想の恋愛　完璧な愛」のほうでやらせて頂きました。
こちらの話オンリーの方も、宜しかったら読んでやって下さい！
（赤ちゃんの話とか書いてます）

今回は、尊さん派、秋光君派、両方の方に楽しんで頂けるように、真理ちゃんには両方と「仲良し」してもらいました。
遠まわしにプロポーズ・・・になるのかと思われましたが、何故かはぐらかすような態度を取った真理ちゃん。
美鈴さんの言葉が気になって、何となく動き出しそうな秋光君。
次回は、前回ちょっと出てきて「もしや！」と皆さんに思わせた「彼女」が登場します。

次回は８月２４日更新予定！

では、次回！！

27　「月」のおよめさん

「あー、たけちゃんだぁ」
お預かりルームで、真臣を含む3人の子供達とソフトブロックをして遊んでいた綾は、真臣のその声に顔を上げた。
真臣が窓のほうを見ながら、笑顔で手を振っている。
その視線の先には、以前「父親参観日」に真理の父、正孝の代役として来ていた尊が居た。
あれ？お迎え？でも、真理は？
綾は真理の親友だ。尊と付き合いだした事は、真理本人や夫の健などから聞いて知っている。
綾は窓辺によると、鍵を開け窓を開いて尊に軽く頭を下げた。
「今日は。真臣君のお迎えですか？真理は？」
「実は、診療終了ギリギリになって『真理ちゃん指定』の喘息の子から、今から来たい、っていう連絡が入っちゃってね。先生も奥さんも今日は忙しくてさ。それで俺が代役」
親でもないのに「お迎え」に来るなんておかしいかな？尊は不安に思うが、綾は、ニコニコしながらこちらを見ている真臣を手招きした。
「たけちゃんだー。たけちゃんだー」
真臣は走ってくると、自分の頭ほどの高さがある窓の下に手をかけて、そこから覗き込む尊を見るようにピョンピョン跳ねる。
「真臣君。このお兄ちゃんと帰る？ママね、お仕事で遅くなるって」
「うん。ぼく、たけちゃんとかえるー」
「そっか。じゃぁ、制服の上着と帽子と鞄。もってこようね」
「はーい」
真臣は教室の後ろにある、お預かり園児の制服や鞄が置かれた場所へ走っていった。
そんな真臣の様子を見ながらニコニコしている尊を、綾は探るよ

うに見た。
「お迎え、押し付けられたんじゃないんですか？たまにあるんですよ。真理指定の子供が入って、真理が来られなかったり遅くなったりする事」
「当院名物の『太陽さん』だからね。子供の指名も多いんだ。――――何てったって、『悪い子』を『いい子』に変えちゃった笑顔の持ち主だからね。子供だってやられちゃうよ」
「彼」の事を混ぜながら、尊は何気なく口にしたつもりだったのだが、それを聞いて綾は言葉が止まる。
・・・真理ってば、正臣君の事、話したのかしら？
綾ももちろん正臣の事を知っている。夫の健と同様、二人が出会った頃からずっと二人の事を見てきた。
しかし、真理がどの程度まで話しているのかは分からない。下手に話題には出来ないと思うと、綾はその話には触れられなかった。
「真理ちゃんが来られない時って、真臣君、ずっとここに居るの？」
綾は気にしたが、尊は自分が言った言葉を何も気にしては居ない様子。自分から話を逸らしてくれた。
「あ、大体は。・・・でも、お預かりは7時までだから、それを越しそうな時は・・・そうそう、よく、秋光君が来てくれますよ」
「秋光君？ああ。コンビニの？」
「はい。家が近いせいかな？また頼まれても『いやだ』って言わないんでしょうね、秋光君も。真臣君もやっぱり秋光君に一番慣れているみたいだし。・・・まっ、いいんですけどね、園庭をコンビニの軽トラで爆音立てながら急発進するのはやめてほしいかなー。って」
くすくすと思い出し笑いをしながら話していた綾だが、そこまで言ってハッとする。
「真臣君が一番慣れている」なんて。おまけに違う男の話を、真理の恋人の前でしたらまずいかな？！
しかし尊は相変わらず気にしていない様子で、綾につられるよう

にくすくすと笑った。
「軽トラで急発進か。・・・彼なら何となくやりそうだよね」

「できたー」
その時、制服の上着を着て鞄を斜め掛けした真臣が、制帽を被りながら窓辺へ走ってきた。
「たけちゃん、かえろー」
嬉しそうににっこりと笑う真臣。
その笑顔は、秋光が迎えに来た時に見せる笑顔と同じくらい、嬉しそうだった。

「はい。チョコレート」
尊の車に乗り、助手席に置いた簡易ジュニアシートに座った真臣は、尊が差し出したチョコレートの箱を見て、目を丸くしながら大袈裟なくらい嬉しそうな声を上げた。
「うわぁ。これ、好きー。たけちゃん、ありがとうっ」
すると尊も、大袈裟なくらい困った顔をしてみせる。
「お礼言われて嬉しいけど、残念だなー。それは秋光君からなんだ」
「秋パパ？」
「うん。お昼に預かったんだよ。真臣君にあげてくれ、って」
「じゃぁ、ぼく、かえったら、ママのけいたいでんわから、秋パパにおでんわして、ありがとうするっ」
そう言いながら、「食べていい？」とでも訊く様に、チョコの箱の開け口を指で引っ張るまねをする。
尊が「いいよ」と頷くと、真臣は嬉しそうに開け口を点誠に沿って上手に引っ張った。

「真臣君は、秋光君が好きなんだね」

車のエンジンをかけながら尊が訊くと、真臣は元気に答える。
「うん！ぼく、秋パパ好き」
小さな薄いチョコレートが一枚一枚包まれて、きれいに箱の中で並んでいる。包み紙を一つ開きながら、真臣は今までとは違う寂しそうな声を出した。
「でも・・・、『パパ』じゃないんだよね・・・」
「え？」
「ぼく、秋パパ好きだけど・・・。でも、ぼくのパパじゃ、ないんだよね・・・？」
小さな口の中にチョコを入れて真臣が黙る。笑顔が消えた真臣の横顔を見ながら、尊は胸が詰まる思いがした。
真理の愛情に包まれ、祖父母に可愛がられ、３人のパパ達に懐いてはいても、真臣の小さな胸の中には、いつもひとつの思いがあり続けている。
――ぼくには、パパがいない・・・。
それは、幼稚園の入園式であったり、真臣が遊び場のようにしている病院の待合室であったり。
いろいろな場所でよく見る、自分の傍には居ない大人の男の人。
その男の人は、子供を抱き上げ笑顔を見せたり、子供の頭を撫でたり・・・。
それが「父親」という名前のものだと知ったのは、いつ頃だったろうか？
――ぼくには・・・いない・・・。
小さいから、分からないだろう。

周りが手をかけてやれば寂しくないだろう。
そんな事は無い。
小さな子供でも、ちゃんと解かっている。
――ぼくには「本当の」パパがいない・・・。
ただその寂しさを、うまく表現できないだけ。

「なあ?真臣君・・・」
尊が静かに呼びかけると、真臣がちょっと寂しそうな目をして顔を向ける。
真臣の頭を撫でながら、尊はその目を覗き込んだ。
「俺さ、真臣君のママ、お嫁さんにしてもいいかな?」
チョコの包み紙を開ける真臣の手が止まる。

「そうしたら・・・」
――そうしたら、真臣君の、本当のパパになれるから・・・。
尊はそう言おうとした。しかし真臣は、尊の言葉が出る前に可愛い目でキッと彼を睨み付けたのだ。

「ダメだよ!だってママは、『お月さま』のおよめさんだもん!」
頭を撫でる尊の手が止まる。
「ふたりとはけっこんできないんだよ!ぼく、ようちえんで、あや

先生もマコちゃんもすき、って言ったら、マコちゃん、おこるもん！」

「そうか・・・。そうだよな・・・」

必死な顔で尊に教えようとする真臣を見ながら、尊はちょっと笑った。そしてもう一度、真臣の頭を撫でる。

「お月さま」のおよめさん・・・。か。

考えてみれば、真臣君だってママが大好きなんだから。

これは、手強いかもしれないぞ。

真臣の可愛い発言に、ついつい笑みがこぼれる。

車を発進させようとした尊は、ちょうど目の前に、うっすらと姿を現し始めた月を見つけ、その月を睨むようにジッと見詰めた。

そして・・・。もっと、手強いのは・・・。

「月（かれ）」かもしれない・・・。

「おつかれっ」

最後に来た喘息の子供が帰って処置室の片付けが済むと、美鈴が後ろからポンッと真理の肩を叩いた。

「美鈴さんもお疲れ様です。すいません、付き合ってもらって」

時刻は7時。真理指名の子供の処置に付き合うため、美鈴も残っていたのだ。

「いいのよー。残念ながらデートの予定もないしね」

冗談っぽく言いながら、窓一枚分、開きっぱなしになっているブラインドを下ろそうとするが、それを真理が止めた。

「あっ、そこ、私が閉めますから」

「え？私が閉めちゃ駄目？」

「・・・あの、真臣を迎えに行ってくれた尊先生が、・・・まだ戻

っていないので・・・」
美鈴はブラインド越しに外を見る。ちょうどここからは、病院関係者用の駐車場が見えるのだ。
「いえ！あのっ！尊先生を待っているんじゃなくて、真臣、まだかなー・・・って！」
別に美鈴が何か言った訳ではないのだが、「尊が帰ってくるのを待っている」と思われたのではないかと思った真理は、勝手に慌ててしまった。
・・・私、何も言ってないわよ。美鈴は少々呆れる。
しかし、こんな事で慌ててしまう真理の素直さを見ていると、心なしか真理に同情の気持ちが湧いてきてしまった。

――あんな男に、引っかかっちゃって・・・。
「ねぇ。真理ちゃん」
美鈴はブラインド前のシンクに後ろ手を着くと、安静用ベッドのタオルや毛布を入れ替えする真理に目を向けた。
「コンビニの店長、どう思う？」
「コンビニ？秋光君？どう・・・って？」
「いいと思わない？」
「はっ？」
真理が目をぱちぱちさせながら、美鈴を振り返る。
「何かさ、昔すっごくスレてた分、今更生して一生懸命働いててさ。下手な男より世の中を知っていそう・・、っていうか、・・・何となく、男としての深みを感じる。っていうかさ。・・・年下だけど」
仲の良い異性を、自分以外の同性が褒めていたりすると妙に気になったりする。
美鈴としては真理にその反応を期待したのだが、真理は美鈴の期待には応えてくれなかった。
「紹介しましょうかっ？」
「はっ？」

今度は美鈴が目をぱちぱちさせた。
真理はクリーニング用のタオルを腕に抱えながら、美鈴に詰め寄る。
「秋光君も今彼女居ないと思うし、気になるんなら仲介しますよっ」
「・・・そっ、そのうちね・・・」
駄目だ、こりゃ。あまりにも期待通りではない真理の反応に、美鈴は頭を押さえながら「事務室に行ってくる」と言って、その場を離れた。
「どうしたんだろ？美鈴さん」
美鈴の気も知らず、真理は首を傾げる。
でも美鈴さん、秋光君の事、そんな目で見てたんだ・・・。そう考えると、何となく戸惑いにも似た気持ちが湧き上りそうになる。
真理はその気持ちから逃れるように、ブラインドの外へ目を向けた。

薄暗い空に、はっきりとした月が見え始めている。

何となく月が自分を見詰めている気がして、真理はにこっと微笑んだ。

「太陽の笑顔」で。
それは、病院などで親しまれている「太陽さん」の笑顔とは少し違う。

真理の中でただ一人。
今でも、たった一人にだけ向けられる笑顔。

――お前（まり）も、その笑顔も、俺だけのものでいいんだろ？

自分のものだと誇示するように、そう真理に言った、「彼」。

・・・あなたも、やきもち妬きだったよね。

真理は優しい瞳で月を見詰めた。

「・・・正臣・・・」

――俺の太陽（まり）。

真理は月を見詰めたまま、ちょっと悲しそうな目をする。

「一生」・・・と言った尊。

その話をしようとした尊を、避けるように逃げてしまった。

「私・・・」

月を見詰める。

彼の声が聞こえる。

――俺だけのものでいいんだろ？

・・・と。

「私は・・・」

何かを迷い始める真理の瞳。

そんな真理の目に、駐車場に入ってくる尊の車が目に入った。

27　「月」のおよめさん（後書き）

こんにちは。玉紀　直です。
すいません、前回の予告と違う展開になってしまいました！
噂の「彼女」、次回でます！（間違いないです！ごめんなさい！）

真臣君に、真理ちゃんと結婚していいか？なんて訊いてしまいましたが、アッサリとお断りされてしまいました。
「ママは月のおよめさん」この話の中で、出したかった台詞のひとつです。
ちっちゃな子にここまで言われたら、思わず引き下がってしまいますよね。

本人が出ないまでも、秋光君の話題で持ちきりでしたね。
ちょっと口に出しかかってしまったのをキッカケに、プロポーズの決心をつけ始める尊さん。
彼はその決心のままに突っ走ることが出来るのでしょうか？
・・・どうかなぁ？
だって、次回は・・・。ねぇ？

次回、8月27日更新予定。

では、次回！

28　予期せぬ訪問者

「ただいまぁ」
真臣は元気良く助手席から飛び降りると、病院の裏口から出てきた真理に、飛びつくように抱きついた。
「おかえり真臣。ごめんね、ママ、お迎えに行けなくて」
真理が真臣を抱き上げながらそう言うと、真臣が悪気なく笑う。
「いいよ。ママじゃなくても。たけちゃんがきてくれたし。車にのれたし。秋パパにもらったチョコ、ぜんぶ食べてもおこられなかったし」
「チョコ？全部食べたの？！おうちに帰ったらご飯なのに！ご飯食べられなくなっちゃうでしょ？！」
「たけちゃん、いいよ、って言ったモン」
少々お説教モードに入った母から顔を逸らし、エンジンを停め運転席から出てくる尊に、笑顔を向け手を振った。
尊は車から出て二人の傍へと歩み寄る。
彼としては、きっと真理が申し訳なさそうな可愛い笑顔で「お迎え有難う。ごめんね。頼んじゃって」と言ってくれるだろうと思っていたのだが、可愛い笑顔どころか、彼女は何か恨みがましそうな目で、ジーッと自分を見ている。

「何？真理ちゃん」
何か、まずい事したっけ？
「何でもないです・・・」
考えてみると「全部食べさせないでね」とは言っていなかった。

しょうがない。と考え直し、真理はやっと笑顔を見せる。
「おかえりなさい。ごめんなさい。お迎え、行ってもらって」
「いや。いいよ。真臣君と話が出来て楽しかったし」

別に睨まれるような悪い事をした覚えもないのだが、笑顔を見せてくれた真理に、尊は少々ホッとする。すると真臣が、楽しそうに真理に告げ口をした。

「あのねー、ママ、たけちゃんね、ぼくに、ママのことおよめさんにしてもいい？ってきくんだよー」

「・・・え？」

突然な内容を含む告げ口に真理は驚くが、もっと驚いたのは尊だ。口止めしとくの忘れてた！！

しかし、時すでに遅し。小さな子供の口は止まらない。

「だからぼくね、ダメって言ったんだ。だってママは、お月さまのおよめさん、なんだもんね」

「真臣・・・」

赤くなって困る真理に、この後何を言ったらいいものか・・・。と戸惑う尊。

対処に迷う大人達を救ったのは、迷う原因を作った真臣だった。

「ママ。ぼく、秋パパにありがとうしたい！」

「ん？チョコのお礼？」

「うんっ」

「お電話する？それとも夕ご飯の後に秋パパに会いに行く？」

「あいにいくー。秋パパにあいたい」

電話をする。と尊には言っていた真臣。しかし真理に「会いに」と言われて気が変わったらしい。嬉しそうな笑顔で両手を上げた。

「あれ？電話する、って言ってなかったかい？」

尊が真臣の額を指でツンッと突っつくと、真臣は反抗するようにプッとふくれた顔をする。

「いいのっ。秋パパにあいにいくのっ」

「はいはい」

本当に秋光君に慣れているんだな。そう思い、尊は苦笑いを漏らす。

真臣は真理の腕から下りると「おしっこいってくる」と言って裏口から病院の中へ入って行った。

「尊さん・・・あの・・・」

一応、さっきの告げ口の話に触れておいたほうがいいだろうか・・・。そう思った真理は口を開きかけるが、尊はその話には触れなかった。

「明日さ。二人で食事にでも行こうか？」

「明日？」

「うん。本当は、今日って言いたいけど、昨日真臣君が熱を出していたって言ってたから、今日は様子を見ていたいだろうし。秋光君のところにも行かなきゃならないんだろ？」

「ぅん・・・まぁ・・・」

尊さんに秋光君の事を言われると、何となく後ろめたいのは何故だろう。

真理がおかしな気まずさを感じていると、尊はいきなり真理のナース服の首元から指を入れてきた。

「えっ？たけるさんっ？」

何するの？？！と真理が慌てると、尊は指に真理のペンダントを引っ掛けて服の上に出す。

指輪の部分を指で挟んで身を屈め、その指輪の内側を覗き込んだ。

「うん。O，K」

「何が？」

尊がフフンと笑って指輪から手を離す。そして屈んだまま真理に顔を近付けた。

「食事の後にさ、俺の部屋、おいでよ」

「え？」

「駄目？」
明らかに「誘われている」。別に「駄目」という理由もない。尊の部屋も数回だが行った事はある。

真理は少々赤くなりつつ上目使いに尊を見た。
「じゃぁ、明日は私がご飯作ろうか？」
「え？真理ちゃんが？」
「いっつも食事に連れて言ってもらうのも何だし。・・・どうせ尊さんのお部屋に行くなら、私、お夕飯作るよ。・・・仕事終わってからだから、時間がかかるような物は作れないけど。いい？」
「いい！いい！楽しみだなぁ。嬉しいよ、真理ちゃん！」
すぐ目の前にある真理の大きな目が閉じる暇もない素早さで、尊は真理の唇にキスをすると、上機嫌で身を起こす。しかしその後で、ある不安が頭をよぎった。
「でも真理ちゃん。料理できるの？」
「失礼ねー！私、小さな頃から台所に立っていたから、得意なのよっ！」
「ごめんごめん」
ムキになる真理に笑いながら謝る。
個人病院の一人娘。台所などに立った事は無いのでは。と思ってしまったのだ。
真理はにこっと笑うと、人差し指を顔の横に立てて、得意げに言った。
「尊さんの宿題ね。何が食べたいか、明日の朝までに考えてきておいてっ。私、お昼にでも買い物に行って来るから」
「O，K」
尊はもう一度、真理の唇にキスをする。

服の上に出たままのペンダントを見て、頭の中でもう一度確認をする。

指輪の内側に刻まれていた数字。大抵の指輪にはついている、指輪の号数表示。

この指輪は、９号だった。

尊はキスをしながら真理の左手を握り、無意識のうちに薬指を親指でなぞっていた。

５階建ての１ＬＤＫマンション。そこの２階に尊の部屋はある。

大学を卒業してから、大学病院に近いから、という理由もあってここに移った。

部屋の大きさ的にも、住んでいるのは学生や会社員などの独身者。オートロックなど、女性が欲しがりそうなセキュリティは一切ない。そのせいか、入居者はすべて男性だ。

居心地はいいし快適なので気に入ってはいるが、尊は最近、引っ越そうかと本気で考えていた。

もう少し立花小児科に近いところがいい。という理由もあるが、彼にはもうひとつ引っ越したい理由があったのだ。

階段を上がって、一番最初の部屋が尊の部屋。

角部屋であることも、ここが気に入っている理由のひとつだった。しかし、その部屋のドアの前に誰かが立っている気配がする。尊は階段を上がりきったところで足を止めた。

尊の部屋の前で、彼を待つように立っていた人影。

その人物は尊に気付き、向かい合うように体を向ける。

カラーリングを入れたこげ茶の髪。その柔らかそうな髪をひとつ

にまとめ、頭の後ろで大きなバレッタを使い留めている。
身長は１６０センチ程度なのを、尊は知っている。
真理と同じ様に大きな目が、どこか寂しそうに尊を見詰めていた。

「お久し振り・・・」
彼女が尊に声を掛ける。
立ち竦んだまま自分の傍によってこない尊に、彼女は数歩近付いた。
「元気だった・・・？」
彼女は瞳と同じくらい寂しそうな声で、尊に問い掛ける。
尊は何も答えない。二人は向き合ったまま互いを見詰めていた。

「どうしたんだ・・・？今更・・・」
やっと自分に声を掛けてくれた尊に彼女はまた数歩近付き、尊の目の前に立つと、すがる様に彼を見詰めた。
「・・・土曜日に、近くのケーキ屋さんで、尊君がシュークリームを買っているのを見かけたの・・・」
立花家へ行く時に、手土産に持っていった物だ。シュークリームを買った洋菓子店は大学病院の近くにある。
土曜日だが、大学病院の小児科医である彼女は、その日は当番医として勤務していた。お昼に私用で外へ出た際、通りかかった洋菓子店の前で中に居る尊を見かけたのだ。
「びっくりしたわ。尊君が一人でケーキ屋さんに入る姿なんて初めて見たもの」
尊は無言で彼女の横を通り過ぎ、キーケースから部屋の鍵を取り出しながら、少々彼らしからぬ冷たい声を出した。
「何の用だ？俺に用なんて、今更無いだろう？」
鍵を開けドアノブに掛けられたその手を、彼女は上から握る。
「どうして病院辞めたの？・・・私に何も言わないで・・・」
「言う必要は無いだろう？」

「・・・私が・・・同じ小児科に居るから？だから辞めたの？」
「大学病院より個人病院で子供達を診たい、って。俺が大学時代から言っていたのは君も知ってるだろう？――別に・・・君のせいじゃない」
上から握られた手を振りほどき、尊はドアを開けた。しかし彼女は、言葉からも態度からも、自分を引き離そうとしている事が分かる尊の胸にしがみついた！

「尊君に会いたかった・・・！尊君が辞めてから・・・ずっと会いたかったの！」

「・・・若菜？」

28　予期せぬ訪問者（後書き）

こんにちは。玉紀　直です。
真臣君のポイントは稼いだし、こっそり（？）指輪のサイズは調べたし、真理ちゃんは手料理なんぞ作ってくれるって言うし・・・。
最高潮にご機嫌だったはずの尊さん・・・。
ですが・・・。

部屋の前で待っていたこの女性。
皆さんの予想通り「噂の彼女」です。
この二人には何があったのでしょうか？

次回は尊さんと彼女、若菜さんの関係が明らかになります。
彼女は、別れた恋人か何かなのでしょうか？何となく、彼女は尊さんが好きっぽいですが。
尊さんと真理ちゃんの関係に、影響は出る？

次回は8月30日更新予定。

では、次回！！

29　尊の過去

「でねー、チョコぜんぶたべたら、ママおこったのー」
自分の膝の上に乗っかって、楽しそうに告げ口をする真臣を、秋光は楽しそうに眺めていた。
「だって、ご飯の前だったのよ。だからほら、ちゃんとお夕飯食べられなかったでしょ？今日」
コンビニのレジ横にある、各種チラシやカップ麺用のお湯が入ったポットなどが置いてあるスペース。そこに手を付き、寄り掛かりながらカウンター内のパイプ椅子に腰掛けた秋光の膝に座る真臣に、
「めっ！」という顔をしてみせる。
「だってー。たけちゃんが、たべていいって言ったんだもん。ぼく、わるくないもん」
秋光という味方が傍に居るせいか、真臣の態度は少々大きい。
「そうだよなー。真臣は『いい』って言われたから、食べちゃったんだよなー」
「なー」
秋光が真臣の頭をぐりぐり撫でながら味方につくと、もちろん真臣もそれに乗っかる。
仲間はずれにされてしまった真理は、子供のように口をすぼめてふくれて見せた。

チョコをもらったお礼がしたい。という真臣を連れて、夜８時近くだったがコンビニまでやってきた。
すでに暇な時間帯に入っていて、店には秋光一人しかいない。
真理としては、時間的に真臣を寝かせなければならない時間が近いので、お礼を言わせたらすぐに帰るつもりだった。しかし真臣は、秋光の膝に乗っかったまま離れようとしない。

「そうだ。秋光君ってさ、今付き合ってる女の人とか居ないよね」
少々意味ありげな質問に、秋光は目をパチパチさせる。
「何？いきなり・・・」
「・・・だからぁ・・・。いないよね？」

いるわけないじゃん！！
見てたら解かるだろ！！
秋光は心の中で叫ぶ。
好きな女性にそういった質問をされると、このあと何を言われるのだろうかと、心配と期待が同時に襲う。

「いないよ。朝から晩までコンビニに居るんだよ。そんな暇無いって。・・・でも、何で？」
「ん～・・・美鈴さんがね・・・」
「美鈴ねーさん？」
美鈴が秋光の事を気に掛けている。という事を、秋光に言おうとしたのだが、何故か真理はそれ以上言葉が出なかった。
美鈴は秋光の話を出して真理の反応を見ようとしただけなので、もちろんそれは真理の誤解なのだが、一応「仲介しましょうか？」などと言ってしまっている。
秋光に、真理が知らないまでも、本当に彼女が居ないのか確認しようと思ったのだ。
「どうかしたの？」
言いかけて黙ってしまった真理に、秋光が問いかける。しかし真理は、思い直したように首を振った。
「なんでもない。ちょっと訊きたかったの」
「なんだよー。仲間内で女いないのオレだけだから、『要領悪いな』とか思ってんの？」
「おっ、思ってないわよぉ！だって・・・ほら、えーと・・・」
ちょっと誤解されてる？真理は焦るが、もちろん秋光は、からか

うつもりで言っている。
しかし、焦った真理は、更に彼の気持ちに響くような事を言ってしまった。

「だって、秋光君。昔は分からなかったけど、優しいし、仕事は一生懸命だし、いい人なのに。・・・どうして彼女作らないのかな・・・って。好きな人でも居るのかな・・・って」
「・・・・・」
「そう思っちゃって・・・。ごめんね。余計な事訊いちゃって。大きなお世話だよね」
黙って真理を見詰める秋光を、何となく申し訳ない気持ちで見上げる。

大きなお世話だよね。「彼女いないの?」なんて・・・。
ちょっと失礼だったかな。・・・いくら、友達でも・・・。

秋光は、自分で質問をしておきながら、後悔の表情を見せる真理をジッと見詰めた。

――好きな女(ひと)は・・・居るよ・・・。

「・・・よしてくれ」
尊は小さな声で呟くと、自分の胸にしがみつく彼女、福田若菜の両肩を掴み、引き離した。
「・・・もう会わない。って言ったのは、君だっただろ?」
「・・・」
「会わない。ここへも来ない。病院で顔を合わせても『同僚』でいる。って」

「だって・・・あの時は、尊君が・・・」
自分を責めようとした尊を、若菜は逆に責め返そうとした。しかし、その言葉を尊が引き継ぐ。
「そうだよ。・・・俺が悪かったんだ・・・」
若菜が驚いたように尊を見上げる。まさか彼が、そんな事を言うとは思わなかったのだ。

「男として・・・女性にさせてはいけない事をさせた。・・・小児科医として、信じられない選択をした。・・・俺が悪いんだよ・・・」
尊は若菜から手を離す。彼の目は、マンションの廊下を照らす外灯に浮かんだ、彼女の大きな目を見詰めていた。
「大学の同期で居なきゃならなかったんだ。・・・君を・・・抱くべきじゃなかった。君には婚約者が居たのに」

２人は大学の同期だった。
共に子供好きで、共に小児科医になるという目標を持っていた。学生時代を、なんでも相談できる仲の良い友人。として過ごした。２人とも児童心理学が好きで、よく尊の部屋で一晩中そんな話をしていた。
一晩中２人きりでも、決して男女の関係になる事は無い。完成された「男女の友人関係」がそこにはあった。その間、尊にたびたび「彼女」と呼ぶような女性の陰が見えても、若菜は気に掛けてはいなかったのだ。
その関係が変わってしまったのは、大学を卒業した頃から・・・。
研修医として大学病院での勤務が始まった若菜に、２人が専攻し、当時も世話になっていた教授の息子が声を掛けた。
彼は５つ年上で、大学病院で外科医として働いている。
彼と交際を始めた若菜は、教授の勧めもあって彼と婚約した。

しかし、婚約してから気付いたのは、彼は少々「女癖」が悪いこと・・・。
たびたび病院のナースなどと問題を起こしそうになる。
そのたびに手を掛けてきた教授は、婚約させて身を固めさせれば、その癖も治まるかと思っていたらしい。
女性問題で彼ともめる事が多くなった若菜は、尊に相談をするようになった。
女友達より誰より、尊に相談するのが一番安心出来たから。
毎晩2人で色々な話をした。
病院の話、患者の話、思い出話。時に、若菜の相談事・・・。
ビールを飲みながらテーブルで向かい合いつつ話されていた会話は、・・・気が付くと、ベッドの中でされるようになっていた・・・。

二人の関係は、今年の初めまで続いた。
――ある事件が、起こるまで・・・。

「結婚するんだろ?12月に。クリスマスに」
尊がそう言うと、若菜は下を向いた。
「こんな所に、来ていたら駄目だろう?」
「尊君・・・。私・・!」
何かを言いかけた若菜を横によけて、尊は部屋のドアを開いた。

「『友人』なんて・・・、いい面の皮だ・・・。俺は、彼のことで悩んで弱くなっていた君を、その気持ちを利用して・・・抱いたんだ・・・。それだけだよ」
「尊君!」
引きとめようとする若菜の声を振り切って、尊は部屋へ入りドアを閉めた。

ドアを閉め、鍵を掛けてドアに寄り掛かる尊の耳に、まだ立ち去らず、ドアの前で泣きそうになっている若菜の声が聞こえる。
「私は・・・それでも良かったよ。・・・尊君に会えるなら・・・。それでも、良かったよ・・・」
尊は両手で額から頭を押さえ、宙を仰ぐ。

「尊君・・・。あんなことが無かったら・・・、私達、まだ一緒にいられた？ねぇ・・・」
若菜の声は、すでに泣き声に変わっていた。

「・・・無理だよ・・・」

尊は、そう呟いて目を閉じる。

閉じた瞼に、真理の姿が浮かんだ。

――俺の心には今、「太陽」がいるから・・・。

29　尊の過去（後書き）

こんにちは。玉紀　直です。
真理ちゃんのところは、ほのぼの路線ですが・・・。
尊さんのところは、ちょっと深刻な事になってますよ。

「元カノ」というよりは、彼女は婚約者もち。
早い話が「他人のもの」。
悩み事を聞いているうちにデキちゃう・・・。
よく聞くパターンです。
でも若菜さんは、今でも本気？
「あの事件」って、何でしょう？

次回は何と、真理ちゃんと若菜さんが・・・？！

次回は9月2日更新予定。

では、次回！！

30　見知らぬ女性

「先に部屋に行ってて」
尊はそう言うと、笑顔で真理に部屋の鍵を渡した。
「俺、駐車場に車入れてくるから。先に行ってて。荷物も俺が持っていくから置いて行っていいよ」
車は今、マンションの入り口前で停まっている。駐車場はマンションの裏手。
「うん。じゃぁ、先に行ってるね」
真理は自分のバッグだけを手に、助手席から降りた。
車が駐車場に向かってゆっくりと走り出すのを見送ってから、マンションの入り口を入り、2階へ続く階段を上がる。上がりながら渡された鍵に目を移した。
スペアキーなのだろう。あまり使われていない感じでキー自体もきれいだ。
もしかして・・・、わざわざ作ってくれた。とか・・・。
別にもらった訳ではないのだが、「部屋の鍵」を渡されると何となく変な気分だ。

初めて食事を作ってあげると約束した今日。
昼に近所のスーパーに買い物に行ってあったので、病院が終わってすぐ、2人で尊のマンションにやってきた。
真臣のお迎えは、母の真澄に頼んだ。
真澄も、真理が尊と上手くいっているのが嬉しいらしく、真理が尊と会う約束をしている時は、真臣の世話を喜んで引き受けてくれる。
ちょっと、お母さんに甘えすぎかな・・・？

とも思うのだが、尊と居ると自分も楽しい。

誰かに正面から頼らせてもらえる。

言葉や態度から現れる、自分に対する愛情。

それを感じる事が、とても気持ちよくて安らげる。

「彼」を失ってから、自分がずっと忘れていたものを、尊がもう一度与えてくれているような気がするのだ。

「んーと、とりあえず、お味噌汁のダシとって・・・」

階段を上がりながら、とりあえず尊が食材を持って戻ってくるまでにやっておく事を口に出す。

診療時間が終わってから、急いで後片付けをして急いで病院を出た。が、何だかんだで7時は過ぎている。

あまり時間がかかる物は今日は無理という事で、焼き物、にした。

「お肉を漬けている間にサラダとお味噌汁、つくって・・・」

男の人って「豚の生姜焼き」とか好きな人が多いよね。と考えたりしていたので、昨夜電話がきた時に尊に訊いてみた。

「いいよー。生姜焼き好きだし。学生時代に近くの食堂で、ハマッて1ヶ月ずっと食べていたことがあるよ！」と楽しげに話してくれた。

電話をかけてきた時、何となく尊の元気がないように感じたのだが、話しているうちにいつもに彼の口調に戻っていた。

・・・気のせいだったのかな？電話じゃ顔が見えないしね・・・。

部屋の鍵を手の中でキュキュッと握る。

付き合っている人の部屋に自分で鍵を開けて入る。というのは初めて。何となくドキドキした気分だ。

2階へ続く階段を上がりきったところから、一番最初のドアが尊の部屋。
上がりきる直前、目に入った通路に誰か人が立っているのが見えた。
壁に寄り掛かって足元に視線を落とし、明らかに誰かを待っている風の女性。寂しそうな表情が妙に目を引いてしまう。
誰だろう・・・。
このマンションは男性ばかりだと聞いていた。ならば隣の部屋の住人の彼女か恋人・・・。
そう思っても不思議ではないのだが、真理にはその女性が、尊のところに用があるのだろう、という事がすぐに解かった。
その女性は、尊の部屋のドアに寄り掛かっていたのだ。

「あの・・・」
真理が恐る恐る声を掛ける。
誰だろう?保険とか、車屋さんとか、そういう関係の人かな?
色々と考えるがそういう仕事の人間が、寂しそうな表情で留守中の部屋のドアに寄り掛かっているとも思えない。
「何かご用ですか?」
そう言ってしまってからハッとする。
別に自分が住んでいる訳でもないのに「ご用ですか?」って、おかしかったかな?!
うまい言い方が見つからなくて焦る真理の顔をジッと見て、その女性、若菜は、ハッと目を見開いた。

「あなた・・・」
昨日車の中から尊を見付けた時、一緒に居たナース服を着た女性だと気が付いたのだ。
「・・・もしかしてあなた、尊君が居る病院の?」
「あっ、はい・・・。ナースをしています。・・・あの・・・」

この人、誰なんだろう・・・。

「尊君」なんて、凄い親しげだけど。

少々不安に思う真理に、若菜はまるで病院で小さな子供に接する時のような表情で、真理に笑いかけた。

「私、大学病院で小児科医をしています。春先に、そちらの病院に尊君が行くまで、ずっと一緒に働いていたの。大学も一緒だったのよ」

「そうなんですか」

真理はちょっとホッとする。

恋人の所に異性が訪ねてきている、というのは何とも変な気分になるものだ・・・。

「話があったんだけど。留守みたいだったから・・・」

「あっ、今すぐ来ますよ。今、車を置きに行っているんです。何なら、お部屋の中で待っていて下さい」

大学の同期で、元同僚。それなら親しげなのも分かる。きっと久し振りに訪ねてきたのだろう。真理はそう思い、気遣いの言葉を掛けながら、手の中から鍵を出す。

しかし、その鍵を見て若菜の表情が曇った。

「ねぇ、あなた。もしかして尊君と付き合っているの?」

「え?」

若菜の口調が少々荒くなった事も気になったが、「付き合っているの?」と訊かれ、真理は赤くなってしまった。

今まで大っぴらに「付き合っています」と言った事は無い。秋光に追及されて、口に出してしまった事があるくらいだ。でも、訊かれたからには答えなければならないだろう。

「はい・・・。お付き合いしていますが・・・」

「いつから?」

「2ヶ月くらい前・・・。ですけど」

「じゃぁ、尊君がそちらの病院に行って、すぐくらいなの?」

「・・・はぁ・・」

この人・・・。どうしてそんなところまで気にするんだろう・・・。女友達って、そこまで気にするだろうか？

そう思いつつも、もし秋光に彼女が出来たら、自分も興味本位で色々訊くだろうな。と思う。

でも、秋光君には訊くかもしれないけど・・・。女の人側には訊かないなぁ・・。それも、こんな顔で・・・。

真理は若菜が自分に向けている目に、何か違うものを感じながら彼女の顔を見ていた。

信じられない、という表情。そして、信じたくない、という目。

まるで敵でも見るような目で、真理を見ている。

「真理ちゃん？どうしたの？」

その時背後から、階段を上る音と共に尊の足音が聞こえた。

階段の途中で真理の後ろ姿が見え出し、何故部屋に入ってないのだろう？と思ったのだ。

しかし、階段を上がり、部屋のドアの前に若菜の姿を見付けた時、尊の表情は厳しいものに変わった。

「何しに来たんだ？」

真理が困ったような戸惑う表情をしているのを見て、何か言ったのではないかと思った尊は、真理の肩をグッと抱き寄せた。

それを見て、若菜が尊に笑いかける。

「可愛い子ね・・・。小柄で可愛らしくて。尊君が好きなタイプよね」

「何の用だ？」

「お付き合いしているんですって？あっちの病院に行ってすぐ手を付けちゃうなんて、手が早いのね」

「何の用なんだ」

「鍵まで渡して。随分と上手くいっているみたいじゃないの？良かったわね。『昔の事』を忘れさせてくれるような彼女が出来て」

「何の用だ、と訊いているだろう！」

苛々するように尊が大きな声を出すと、肩を抱かれていた真理がビクッ！と震えた。尊のこんな声は聞いた事が無い。
大きな声を出された若菜も、黙ってしまった。

どことなく気まずい雰囲気になってしまい、真理は気遣うように尊を見上げる。
「あ、あのさ、尊さん。大学に居た時からのお友達なんでしょ？久し振りに訪ねて来てくれたみたいだし・・・。私、今日は帰るよ」
尊が驚いて真理を見る。
「せっかく訪ねて来てくれたんだもの。久し振りだろうし、積もる話もあるでしょ？私達の方は明日以降にしよう？大丈夫よ、１日２日じゃ食材は腐らないから。・・・あっ、でも、冷蔵庫に入れておいてね」
真理は緊張で胸がドキドキしていた。
尊と若菜の間にある空気が、あまりにも張り詰めていて息が詰まりそうだ。
「いいんだよ。君がそんな気を遣わなくても」
「でも・・・」
「いいんだよ。話す事なんてないから。真理ちゃんは部屋に入ってて」
自分への態度とは一転、優しく真理に話しかける尊を見て、若菜は下唇を噛んだ。
そして若菜は、決してこの場で口に出してはいけない言葉を口にした。

「冷たいのね。・・・尊君」
尊は若菜の顔を見なかった。心配そうに自分を見上げる真理を、気遣うように見詰めたまま。
「そんなに冷たくしなくてもいいでしょう？」
若菜はドアから離れると、尊の横に歩み寄る。

「一度は、あなたの子供を妊娠した女に向かって・・・」

尊の目に、自分を見上げながら大きく目を見開く、真理の顔が映った。

３０　見知らぬ女性（後書き）

こんにちは。玉紀　直です。
昨日更新日に指定してあったのに、更新できなくてすみませんでした！！

さて、最悪の状況に巻き込まれてしまいました。
何の因果か、尊さんと前に関係が合った女性、若菜さんと真理ちゃんが鉢合わせ。
まだ尊さんに想いがある若菜さんは、尊さんが真理ちゃんに優しくしているのを見て、嫉妬心が湧き上がってしまいました。
とんでもない切り札の言葉。
それは事実なのでしょうか？

次回は・・・もしかして、修羅場？！
（え？真理ちゃんが？）

次回、９月６日更新予定。
（遅れても１日くらいです！）

では、次回！！

31　最悪の事実

「で?何でこーゆー所に連れて来るの?君は」
美鈴は少々呆れたように秋光を見た。
「何で?って。美鈴ネーさん、酒飲めるだろ?嫌いじゃないだろう?」
「嫌いじゃないけどさー」
濃い目の水割りが並々と作られたグラスを片手に、美鈴はカウンター席から後ろを振り返った。
煌びやかな店内。肌の露出が多い服を着た女性達が行きかい、客としてやってきた男性に、その笑顔を惜しみなく振りまいている。

今日の昼、真理は昼食を買いに来なかった。
いつも来るのにどうしたのかな?もしかして、風邪でもひいて休みなのかな?
心配になり買い物に来た美鈴に訊いてみると、ちゃんと出勤しているし、今日は昼に近所のスーパーに買い物へ行くと言っていた。
という話を聞いた。
どうやら今日は、尊のところへ行くらしい。・・・

買い物行って、仕事が終わったら彼氏のところ・・・って、何だよ手作り食事付デートじゃん。

それじゃなくても尊と真理が一緒に居るだけでムッとしてしまうのに、そんな事実を知らされてはよけいにムッとする。
「この間の話、聞かせてよ」尊の事を「最悪よ」と言った美鈴の話しを聞かせてもらおうと思ったのだが、彼女は素早くこう切り返した。
「一杯、おごってくれたらね」

そこで、「一杯」おごる為に、美鈴を連れてきたのだ。
達也が任されているキャバクラへ。

「君、いい子なのに彼女が出来ない理由、何となく解かったわ」
そう言いつつ、グラスを一気にあおる。
見事に飲み干すと、カウンター内に居る「マスカラ命！」とでも言いそうな目元の濃い女性がニコニコしながら手を叩いた。
「お嬢さん、すごーい」
あなたより年上ですよー。美鈴はにこっと愛想笑いをしてから、横でビールを飲んでいる秋光をキッと睨む。
「大体ねぇ、『一杯』に女を誘うのに、キャバクラって事は無いでしょっ」
「いいじゃん。飲めるのは変わんないし」
「もう少し女に気を遣いなさいよ。・・・っとにもぅっ。真理ちゃんには気を使いまくりのクセに」
その台詞にはコメントをせずフフンと笑う。ただ、言われっぱなしも何なので、一言言い返した。
「美鈴ネーさんが綺麗なのに男が出来ない理由、何となく解かったよ。・・・口うるさすぎ」

誰も何も言わなかった。
いや、言えなかった。
真理は尊を見詰めたまま。尊は真理を見つめたまま。・・・若菜は、そんな二人を見つめたまま。
3人とも何も言わないまま、張り詰めた空気だけがその場に流れる。

――――あなたの子供を妊娠した女に・・・・。

若菜の言葉が、真理の頭を駆け巡り離れない。大きな目を更に大きく見開いて、真理は尊を見詰めた。

尊さん？

何か言って。

違うなら、違う、って言って。

・・・何か、言って・・・・。

心の中で尊に助けを求めながらも、この場の空気の重さに耐え切れず、口火を切ったのは真理だった。

「あっ、あのさ、やっぱり私、今日は帰るね」

なるべく元気で明るい声でそう言い、真理は肩を抱く尊から離れる。

「話とか、色々あるでしょ？私は居ないほうがいいと思うし」

「真理ちゃん・・・」

「って、いうか・・・居ちゃいけないね。ごめんね。すぐ帰るから。後は二人でおはなしして・・・」

「真理ちゃん！」

言いたい事だけ言って立ち去ろうとする真理の言葉を、ちょっと強めの尊の声が止める。

真理は困ったようにキョロキョロっと足元に視線を這わせ、それから尊を見上げて、にこっと無理矢理な笑顔を見せた。

「・・・また明日。・・・病院で、ね・・・」

自分でも驚くくらい声が震えてしまい、その驚きを気付かれまいとするかのように、早足でマンションの階段を下り始めた。

「真理ちゃん！」

背後から尊の声が追うが、真理は振り向かなかった。

「いい子ね」
真理の足音が消えてしばらくしてから、若菜は申し訳なさそうな声を出した。
「普通の女なら、泣き喚くわよ。『どういう事なの！』って言って。・・・そんな事をしたら尊君を困らせると思ったんでしょうね。いい子だわ。本当に」
「・・・どうして、あんな事いったんだ」
真理が走り去った階段を見つめながら、尊は若菜を振り向かない。
「君が一番、忘れなくちゃならない事、でもあるはずだろう・・・？」
「・・・ごめんなさい」
てっきり尊を責める言葉を口にするだろうと思われた若菜は、予想に反して尊に謝りながら彼の背後へと近付いた。
「あなたが・・・。あまりあの子に優しいから・・・」
付き合っている彼女に、とんでもない事を言ってしまったのだ。多分怒鳴られるだろう。そう思う若菜の思いに反して、尊は諦めたように落ち着いた声で若菜を振り返った。
「・・・もういいよ」
「尊君？」
「事実なんだから・・・」

――尊君。私ね・・・、妊娠したみたい・・・。

若菜がそう言ったのは、今年に入ってすぐの頃。
若菜の婚約者は、年前2ヶ月間、移植手術のチームとアメリカの病院へ行っていた。年が明けて気付いたこの妊娠の原因は、間違い

なく尊だったのだ。

突然の事に、尊は言葉が出ない。

若菜には婚約者が居る。いわば自分とは、なってはいけない関係なのだ。

それも婚約者は、大恩ある教授の息子。

ここで自分が責任をとろうとする態度でも見せようものなら、大学病院での自分の立場はおろか、若菜の立場までもを悪くする。

若菜が夢だった小児科医になるという夢を、そして若菜の医者としての将来を、奪ってしまう事になる。

尊は何も言えなかった。

――尊君は、私の事、好きだった訳じゃないんだよね・・・。

若菜は、泣き声で尊を責めた。

――ただ、セックスしたいだけだったんだよね・・・。

笑いながら、泣きながら、何も言ってくれない尊を、ただひたすら責めた。

――もう、ここには来ない・・・。

部屋の鍵を置いて、逃げるように部屋を飛び出した若菜を、尊は追えなかった。

そして若菜は、自分に宿った命を、捨ててしまった・・・。

「俺が、君を傷付けたのは、事実だから・・・」
辛そうに呟く尊を、若菜は泣きそうな目で見詰めた。

「どうして、閉店なの？」
コンビニのドアの前で、真理は立ち竦んだ。
「まだ８時でしょ？」
本当は１１時閉店。しかし、日中がメインの秋光のコンビニは、夜になって暇になると「もぅ閉めよっ」と、店長である秋光の気分次第で閉店したりする。
店の電気は点いているのに、閉店を知らせるプレートがドアに掛けられている。もちろんドア自体が開かない。

タクシーに乗って家にそのまま帰れば良いものの、コンビニの前で降りてしまった。
電気が点いていたので、てっきり開いているだろうと思ったのだ。

真理は、コンビニのドアの前でペタンと座り込んでしまった。

どうしてここで、降りてしまったのか解からない。
どうしてここに、来てしまったのか解からない。

でも・・・。

「どうして・・・ドアが開かないの・・・」
辛い時、悲しい時、必ずこのドアは開くのに。

――何故か真理は、ここで降りてしまった・・・・・。

31　最悪の事実（後書き）

こんにちは。玉紀　直です。
辛い思いをしたのは、若菜さんだけでは無いんです。
尊さんも色々考えて悩みました。
ただそれを、自分の考えとして彼女に伝える。という大切な事をしていなかったんですね。
どんなに辛くても、こういう事は二人で話し合うことが大切。
ひとつの命を生かせるか生かせてあげられないか、の問題ですから。
こういった問題から逃げてしまう男性が多い世の中。
彼女の立場的なものを考え、何も言えなかった尊さんを、若菜さんは誤解してしまったんですね。

美鈴さんと飲みに行って、コンビニを閉めていた秋光君。
店に真理ちゃんが来て居る事を、彼は知りません。
何故真理ちゃんは、ここでタクシーを降りてしまったのでしょうか・・・。

次回は9月9日更新予定！（遅れても1日）

では、次回！！

32　コンビニ前の月

「何が『一杯』だよ。何杯飲んでんだ、っての」
タクシーから美鈴を降ろし、口うるさいのが居なくなったとばかりに、秋光は帰りのタクシーの中で自宅へ着くまでブツブツ言い続けていた。
「こんな事なら、店の軽トラで行けば良かったぜ」
美鈴を「一杯」飲みに連れて行くのに、一度は店の軽トラのエンジンをかけたが「人を荷物と一緒にしないでよ！」という苦情が入り、しょうがなく愛車のスカイラインを出した。
しかし帰り際、そのまま車に乗って帰ろうとした秋光の首根っこを引っつかみ、美鈴が説教を始めたのだ。
「お酒飲んでんでしょ！タクシーで帰るわよ！」と。

愛車のスカイラインを置き去り・・・。あんな歓楽街に置いておいて、悪戯されたらどうすんだよ！！
・・・と、毒づくものの、看護師さん乗せて事故ったらシャレになんねーな。とも思う。
真理さんだったら、物凄く怒るんだろうな。・・・と考えて、何となく楽しい気分になった。

「もう少し女に気を遣いなさいよ。そんなんじゃ、いつか真理ちゃんに愛想つかされるからねっ」店を出る間際に言われた美鈴の一言を思い出し、鼻をフンッと鳴らす。
いやっちゅうほど、気は遣ってる。つーのっ！
タクシーを降り、店の裏口の鍵をポケットから取り出して、その鍵を見詰めながら真理の顔を思い出した。

気を遣わないでいいなら・・・。

とっくに「好きだ」って言ってる。
とっくに、オレのものにしてる。

車の窓から夜空を見上げると、明るい月が見えた。
秋光はその月を見詰め、ずっと心の中にある思いを口に出す。
「・・・いつまでお前に・・・気を遣えばいい・・・？」“

時刻は9時を回り、もうすでに１０時に近かった。
一杯飲んで簡単に話を聞き、8時過ぎには帰る予定だったので、店の電気も点けっぱなし。
とりあえず閉店のプレートはかけておいたのだが、この時間になると客が来るほうが珍しい。
「店、閉めるか・・・」
秋光は裏口から入り、事務所兼休憩室を通って店のカウンターへ出た。
とりあえず照明をひとつ落として、売れ残ってしまった弁当やサンドイッチを片付けようかと、何気なく店内を見回した時。
「え？」
思わず声が出た。
店のドアの前に、人がしゃがみこんでいる。
ドアに寄りかかって、膝を抱えて顔を伏せてはいるが、それは間違いなく・・・。
「真理さん？」
秋光は驚いてカウンターから出るとドアの鍵を開け、真理が寄り掛かっていないほうのドアをそっと開けた。
ドアが開いた事に気付いた真理が顔を上げる。
その顔を見た瞬間、秋光はドキッとした。

「何してんの？真理さん」
寂しそうな表情。涙が溜まっているのか、それとも明るい月の光と店の照明が同時に当たっているせいなのか、真理の伏せ気味になっている大きな瞳が、キラキラと輝いているように見える。

「・・・お酒臭い・・・」
思わずドキッとしてしまうほどに艶っぽい表情のまま、真理は咎めるような口調でそう言った。
「・・・秋光君・・・、お酒飲みに、行ってたの・」
「あっ・・・うん。ちょっと、・・・所用で」
「わざわざ店を閉めて・・・。何でお酒なんて飲みに行くのよ・・・」
「うーん、っと・・・。付き合い・・・かな」
思わず父親が、飲みに出歩きすぎて母親に責められている時の言い訳を口にしてしまう。が、何となく情けない気持ちになってしまった。

「真理さんこそ、こんな所で何してんの？」
これ以上一方的に責められるのも分が悪い。秋光か訊くと、真理は秋光から顔を逸らして再び膝を抱えた。
「何時から居たの？」
「８時くらい」
「もうすぐ１０時だろ？何してんのさ。こんな所に座り込んで！柄の悪い兄サンにでも捕まったらどうすんだよ！」
「・・・・・」
「だいたい、８時から、って、何で？今日はあの先生と一緒なんじゃなかったの？」
真理は驚いて秋光を見た。
「どうして知ってるの？」
今日、尊さんと会うなんて、私言ってないよ？

昼は近くのスーパーへ買い物に行った。コンビニには寄っていない。秋光に会っても居ないのに、彼は今日真理と尊が会うことを知っている。

真理は何故か気まずいような気持ちを感じながら、それを抑え、秋光の返事を待った。

「美鈴ネーさんに聞いたんだよ。いつも来る真理さんが来ないからさ。気になるだろ?もしかして具合でも悪くて休みかな?とか思ってさ」

「美鈴さん?」

美鈴がお昼の買い物に出る時、真理も一緒に病院を出た。

途中で別れてスーパーの方へ行こうとした真理は、美鈴に捉まり、今日の予定を吐かされたのだ。

「もしかして・・・。今日一緒に飲みに行ったのって、美鈴さん?」

「え?うん・・・まぁ・・・」

何となくそんな気がして口に出してみただけだった。しかし秋光の口から否定の言葉は出ない。

違うだろう。違うはずだ。そんな気持ちが心のどこかにあった。

美鈴が秋光の事を「いいと思わない?」と言っていたのを思い出す。

真理は、何となく胸が詰まった。

「美鈴さん・・・綺麗だしね・・・。良かったね、秋光君」

どこと無く投げやりなその口調に、秋光は少々ムッとする。

「何だよそれ。ただ話をしに行っただけだよ。行った所だって達也のトコのキャバクラだぞ」

真理はちょっと視線を上げて考えた。

・・・気になる女の子を、キャバクラには・・・連れて行かないか・・・。

「何の話したの?」

何となく胸の痞えが取れたような気がして、真理がいつもの口調で訊く。

いつも通りの明るい声が真理の口から出てホッとしたのか、秋光は真理の横にしゃがんで、ふざけた口調で言った。

「真理さんと先生の事。うまくいってんのかなー、って思ってさ」

秋光としては、きっと真理は真っ赤になって「もぅ、おせっかいっ」と言うだろうと思っていたのだが、真理は別に赤くなる訳でもなく、秋光から顔を逸らして抱えた膝先に視線を移した。

「・・・ねぇ、秋光君・・・」

「何？」

「・・・女の人・・・、妊娠させたことある？」

「・・・・・」

なんちゅー事を訊くんだっ！！！

普通、そういう事を男に訊くかっ？？？！

とは思うものの、秋光は今日、美鈴に聞いた話を思い出した。

「私の高校の時の先輩。尊先生の子供妊娠してさ。・・・堕ろしてるのよ」

そう言いながら、思い出すとやはりいい気がしないのか、水割りを飲むスピードが上がった。

「高校の時に随分とお世話になった先輩でさ。凄くいい人。婚約者がいるんだけど、尊先生とは大学から一緒だったらしいのよ。・・・なんでそんな事になっちゃったんだろ？って感じだけどね」

親同士が知り合いで、時々顔を合わせる機会はあった。

今年の1月に飲みに誘われて、何故かいつもと違って荒れた雰囲気の若菜からその話を聞かされた。

「小児科医がさ、子供堕ろさせる、って、何の話よ。笑っちゃう

じゃない」
尊が病院を移ってきた時は、まだ気が付いていなかった。しかし最近若菜に会った時、例の彼が大学病院を辞めて個人病院へ移った。というのを聞き、尊だと気付いたのだ。
美鈴は、立花小児科医院に尊が来て居る事を若菜に話した。
若菜は昨日、それを確認しようと病院の近くを車で走っていて、偶然に尊と真理を見かけたのだ。
「女を妊娠させておいて、挙句に堕ろさせて、逃げるみたいに別の病院に来てさ・・・。最悪じゃない？」
結局彼女は、腹立ち紛れに１０杯ほど飲んだ。

「何それ。オレに『子種』が有るかどうかの確認？」
「ちっ、ちがうわよぉ！いやぁねぇ！！」
我ながらちょっとイヤらしい返し方だな。とは思う。真理もそう思ったのか、真っ赤になって秋光を見るが「そういう意味にとられた」と思うと恥ずかしくて、すぐに顔を逸らしてしまった。
そこまで照れられると、反対に秋光の方が困る。
秋光は困ったように頭を掻くと、溜息混じりに言った。

「残念ながら、それはないなぁ。まぁ、昔は、妊娠させたいくらい好きな女も居なかったしね」
「・・・今は？」
「は？」
「今は、居ないの？」
冗談で答えた言葉に、何故か真理の真剣な問いが再び返ってくる。

――今は・・・？

「今は・・・」

秋光は、チラッと空を見上げた。

夜空に浮かぶ。明るい月。

「オレ・・・」

友人の姿が、脳裏に浮かぶ。

「真理さん・・・」

秋光が、真理を見る。

それにつられる様に、真理も秋光を見た。

「オレは・・・」

――そんな二人を・・・。

月が見ている。

32　コンビニ前の月（後書き）

こんにちは。玉紀　直です。
店の前でずっと座っていた真理ちゃん。
店は開いていなかったのに、どうして彼女はすぐ家へ帰らなかったのでしょうか？
何となく、秋光君と美鈴さんの事が気になったり。尊さんと会うことを、秋光君が知っていると気まずい気がしてしまったり。

急に真剣な質問をされて戸惑う秋光君。
友人の正臣君に気を遣い、ずっと言えなかった想いを、このまま告白してしまうのでしょうか？
そして、真理ちゃんと尊さんは？

次回９月１３日更新予定。（遅れても１日）

では、次回！！

33　月に遠慮

「ハラ減ってない？」

「は？」

真理は目をぱちくりさせた。

質問と答えが、まったく合っていないような気がするのだ。

「真理さん、８時くらいからここにいたんだろ？じゃぁ、メシ食ってないんじゃないかな。って思ってさ」

「・・・うん・・・、食べてない、けど・・・」

「オレもさぁ、食わないで出ちゃったからハラ減ったんだよねー」

「でも、お酒飲んでたんでしょ？」

真理は自分の横で、昔の名残のように深くしゃがむ秋光をキッと睨む。

「酒飲んだって、さほどハラいっぱいにはならないよ」

「あのさぁ・・・。秋光君」

真理は何故かちょっと怒ってしまった。

「今は居ないの？」本気で好きな女の子が今は居ないのか。真理は真剣に訊いたのだ。

しかし、秋光から返ってきた言葉は・・・。

「ハラ減ってない？」

人の話をちゃんと聞いていないって事でしょう？！

何で人の話、ちゃんと聞かないの！！人の質問にはちゃんと答えるのが礼儀っっ！！

・・・根が真面目な真理。妙なところで変に生真面目さが出る。

「売れ残りで悪いけどさ。弁当とかサンドイッチとか、残っちゃったのがあるから。一緒に食わねー？」
「・・・」
「どしたの？」
何となく真理がムッとした顔をしている事に気付いて、秋光は首を傾げる。
真理は答えを諦め、ふぅっと息を吐いた。
「何でもないわよ・・・」
何を訊いているんだろう。私。
答えなかったからって、怒る事ないじゃない。
「ほら。立って」
秋光は立ち上がりながら、真理の腕をぐいっとひっぱる。
いきなり強い力で引っ張られて、真理は勢い良く立ち上がりつつもヨロけてしまった。
「おっと・・・」
ヨロけた真理を秋光が素早く支える。
が、真理の体はバランスを失い、秋光の胸の中へすっぽりと納まってしまった。

「・・・・」
真理は秋光から「ある物」を感じ、動けない。

お酒と、煙草の臭いがする・・・。

「大丈夫？足痺れた？」
自分の胸に倒れこんだまま動かない真理を見て、ずっと座っていたせいで足が痺れていたのに、自分が引っ張ったせいでちゃんと立てなかったのかと思った秋光は、慌てて声を掛けた。

「・・・真理さん？」
しかし真理は、秋光の胸に顔をうずめたまま動かない。
もちろん抱き付かれているような状態なので、彼としては、このままでもいいかなー、などと思ってみたりもするのだが・・・。

「正臣と、同じ匂いがする」
真理はそう言いながら、秋光の胸から顔を上げた。
秋光を見上げ、にこっと笑って、再び彼の胸に顔を付ける。
「お酒と煙草の臭いがするの・・・」
真理は嬉しそうだが、もちろん秋光としては微妙だ。

尊は、酒は飲むが煙草は吸わない。父の正孝も、多少は吸うようだが、真臣に気を遣い、あまり吸っているところを見たことがない。
秋光に支えられた瞬間に感じた「彼と同じ匂い」に、真理はつい嬉しくなってしまったのだ。

しかし、秋光は内心あまり穏やかではない。
何ともいえない真理の髪のいい香りが鼻先をくすぐり、彼女の体の香りが彼の気持ちと体をくすぐる。
・・・酔っちまいそうだ・・・。
本能的に抱き締めてしまおうかと自然に出掛かった両手が、真理の背に回ろうとしたところで止まってしまう。

秋光は空を見上げた。

くっきりと、明るい月が出ている。
まるで、真理を見詰めるように。・・・秋光を、見張るように。

――正臣はね、「月」なのよ。

秋光は、以前、真理が教えてくれた事を思い出す。

四十九日を過ぎてもなかなか喪服を脱がなかった真理に、お線香を上げるという名目で、毎日真理に会いに来ていた秋光は言ったのだ。

「正臣はきっとどっかでオネーサンの事見てるよ。オネーサンがいつまでも泣いてたら、あいつも悲しがるよ」と。

真理は泣きそうな顔で、秋光に教えた。

「正臣はね・・・、月なのよ・・・」

――寂しい時も。悲しい時も。

いつでも傍にいて、私を見守ってくれる。

私だけの、月なのよ・・・。――

真理を抱き締めようとした両手をグッと握り、秋光はその手を下に下ろした。

あいつが見てるのに、真理さんに手ぇ出しちゃ駄目だよな。

さっき「好きだ」という言葉を飲み込んでしまった事もあわせて、秋光は凄く自分を情けなく感じてしまい、自分で自分を馬鹿にするように笑った。

真理の両肩を掴み、いつもの明るい彼の口調で話しかける。

「さっ、なんか食おうぜ真理さん。オレ、腹減った」

「うん」

正臣と同じ匂いを感じて何となく機嫌がよくなった真理は、にこ

っと笑って秋光の胸から顔を上げた。
「でも、もう１０時過ぎてるし、私、軽いものでいいから」
「何でだよ。晩メシ食ってないんだろ？ったく、昼だけじゃなく夜まで軽かったら、明日の朝起きる元気でないぞ」
「だって、夜遅くにあんまり食べたら太っちゃうもん」
「もうちょっと太ったほうが、胸もでっかくなるよ」
「しっ、しっつれいねぇぇ！！」
真理の文句を背に受けつつ、秋光が笑いながらドアを開ける。
店の中に入る秋光に続いて真理も中へ入ろうとした時、真理のバッグの中で携帯電話の着信音が鳴った。
シンプルな呼び出し音。相手ごとに変える事も無く、真理の着信は全てこの音だ。
「ちょっと待って」
携帯を取り出し、発信者の名前を見て、真理は目を見張り慌てて出た。
「もしもし？」
控えめな声で出た真理に合わせるように、控えめな相手の声が耳に響く。
「真理ちゃん・・・」
尊だった。

「今、どこいるの？」
いつもの優しい尊の声。
「ちょっと・・・、コンビニに買い物・・・」
買い物に来ていた訳ではない。なのに真理は、言い訳をするようにその言葉を口に出した。
「今、真理ちゃんの家の前に居るんだ。部屋の電気が全然点かないから、居ないのかと思って」
「家の前に？来てるの？」
「うん。コンビニに居るなら、俺、そっちまで行くよ」

「ま、待って。私、今帰るから」
真理は慌ててそう言うと、秋光の顔を見て片手を顔の前へ出し、「ごめんね」のポーズを作る。そして、店の中へ入りかけていた体を戻して、家の方向へと走り出した。

コンビニから家までは直線道路。
秋光は外へ出て、走り去る真理の後ろ姿を見詰めた。
真理は、自分が行くから。と言ったが、待ちきれなかったらしい尊が、途中まで走ってくるのが見える。
ちょうど中間ほど行った道の途中で、尊が真理を抱き締めたのが見えた。

秋光は、そんな2人から目を逸らし店の中へ入った。
カウンターに寄り掛かって、煙草を出し火をつける。
店内は禁煙。なのに秋光は、このやり場のない想いをどうしたらいいのか解からず、そんな当たり前の事も頭から消えていた。

――――正臣と、同じ匂いがする・・・。

嬉しそうな真理の顔。
なのにその言葉と表情が、彼の心を締め付ける。
秋光は店の窓から見える月を、ジッと見た。

友人の姿が浮かぶ。

決して裏切れない、大切な友人の姿が・・・。

「た・・・尊さん・・・・？」
道の途中まで走ってきていた尊にいきなり抱き締められて、真理は驚きを隠せなかった。
「ごめん・・・真理ちゃん・・・」
真理を抱き締めながら、尊は何度も謝る、
「ごめん。・・・嫌な思いをさせて、本当にごめん」
抱き締める腕の強さから、尊の想いが伝わる。
抱きこまれた胸から聞こえる鼓動が、どれだけ彼が必死であるかを物語るように、その速さを真理に伝えた。
「俺は・・・君が、好きだから・・・」

彼の声が、体の奥に染み渡るほどの熱っぽさで、真理の耳に響く。

「君だけが。好きだから・・・」

33　月に遠慮（後書き）

こんにちは。玉紀　直です。
大切な友人を裏切れなくて、「好き」という言葉どころか、抱き締めることも出来ない秋光君。
ただ自分の想いを貫き、真理ちゃんに「好き」という言葉と行動で、想いを伝え続ける尊さん。
真理ちゃんの中の「正臣」を、認めすぎている秋光君。
あまり認めていない尊さん。
あまりにも対照的過ぎる2人。
表と裏で太陽を想う二つの星は、どこかでぶつかる事があるのでしょうか。

真理ちゃんに謝り続ける尊さん。
次回は若菜さんが、真理ちゃんに会いに来ます。
どうして？

次回は9月18日更新予定。（遅れても1日）

では、次回！

３４　尊と秋光

「真理ちゃーん、真理ちゃんに会いたい、って人が来てるよ」
これからお昼に入ろうかという時、真理は受付事務の女性に呼ばれた。
「私に？誰？」
「福田さん、っていう女の人」
「福田？」
誰だろう？常連さんの中にそんな名前の子供さん、居たかな？
幼稚園関係かな？でも、真臣のクラスにそんな名前の子はいないし。
身に覚えの無い名前に、色々と思いを巡らせる。
しかし、やはり思いつかない。
正面の来院者用駐車場に居ると聞いた真理は、更に「保険の人？」
「それとも何かの勧誘？」と色々な思いを巡らせつつ、病院の出入り口から外へ出た。
昼休みなので、もちろん来院者の車は一台も無い。
そんな中、道路側に一台だけ白い乗用車が停まっている。
「・・・あっ・・」
その車の前に立ちながら真理を待っていた女性を見て、真理は思わず声をあげた。
その女性は、数歩前に出て真理に軽く頭を下げる。
「今日は。真理さん」
若菜が、にこっと笑った。

「この、ゴマ昆布のおにぎりとゆで玉子が真理ちゃんの。で、こっちの山菜蕎麦と鮭おにぎりセットと、ウーロン茶が俺」

カウンターに品物を並べながら、しっかりと説明をし、尊はにこっと秋光に笑いかけた。
「店長に『1ヶ月おごれ』って言われてるから、ちゃんと説明しておかないとね」
それは、それは。律儀にどーもっ。
心の中でそう思うが、彼もコンビニの店長。客商売に「愛想笑い」はつきもの。
その愛想笑いをしつつ、秋光はうんうん、と頷く。
「で？その真理さんは？」
尊が昼食を買いに来たのはいいが、当の真理が居ない。
とりあえず「また『2人で半分こ』かぁ？」とムカつきそうな、1リットル入りウーロン茶の紙パックを手にとって、会計を始めた。
「ちょっと、午前中の最後の子供に時間が掛かっちゃって。買い物に出ていられないから、俺が一緒に買ってくるって言ったんだ」
「ふーん。でも、せっかく先生のおごりなんだから、もう少し贅沢すりゃぁいいのに。・・・あっ、おにぎり温めますねー」
おにぎり一個にゆで玉子。本当によくこれで昼から持つものだ。
秋光はおにぎりを電子レンジに入れ、温かい物と冷たい物を分けるために、袋を2枚取り出す。更に、真理の分は別にしようと、もう一枚取り出す。
たとえお昼ご飯でも、一緒の袋になんていれてやんねー。という、彼のささやかな意地の表れか・・・。
「俺も言ったんだよ。プリンでもチョコレートでも、好きなもの言ってくれって。でも、これだけでいい、って言うんだよね」
「せっかく一ヶ月、好き勝手できるチャンスなのに」
秋光は、真理らしい遠慮のしかたに、思わず笑みをこぼしながら、レンジからほのかに温まったおにぎりを取り出す。

「まぁ、先生は、昼の世話1ヶ月、だけじゃ嫌みたいだけどね」
冗談のつもりで言ったのだが、反して返ってきたのは尊の真剣な声だった。
「・・・本当にそうだったら?どうする?」
「え?」
会計を済ませ、尊の顔を見ないまま商品を袋に入れていた秋光は、尊が声と同じくらい真面目な顔をしているのを見て、その手を止めた。

「俺が、昼食どころか、一生真理ちゃんの面倒を見たい。って言ったら、君はどうする?」

「・・・・・」
「もちうろん。真臣君も・・・」

忙しい昼時間で尊の後にも二人ほど並んでいる。急がなければならないのに、秋光は手を止めて尊を見た。
尊が、少々厳しい顔をして秋光を見ている。
「真理ちゃん。昨夜、ここに居たんだって?」
「・・・いたよ」
「買い物に来ていた。って、言っていたけど。・・・本当?」

昨夜真理は、尊にコンビニに買い物に来たと言った。しかし、尊が真理に会った時、買い物袋らしきものは持って居なかったのだ。
それどころか、自分と別れた時と同じ格好。
家から買い物に来たのなら、持って居なくてもいいバッグまで提げたまま。
秋光に会いに来ていたのでは無いか。尊はそう思ったのだ。

「夕飯食べてないから。って、お弁当を選んでいた。先生から電話が来る5分くらい前だよ。店に来たのは。・・・その前は、知らないけど」
真理は尊と別れてから、ずっとコンビニの前にいた。
しかし秋光は、それを言わなかった。
「君と真理ちゃんは『友達だ』って、真理ちゃんが言ってたけど。・・・本当？」
「真理さんが言うなら、そうなんだろ？」
「君も、そう思っているのかい？」
「・・・どういうイミだ？」
秋光は少々イラッとした。昔からの性格上、こういった奥歯に物が挟まったような言い方、物の訊かれ方は、彼が最も嫌っているものだ。
2人とも何も言わず、どちらかが何かを言うのを待つかのように、厳しい表情で互いを見た。

そのうちに、なかなか終わらない会計に苛ついた尊の後ろの客が、ハーッとわざとらしく溜息をつく。
それを見て仕事を思い出した秋光は、急いで品物を袋に入れ、それを尊の手に押し付けた。
「そういう、一歩間違えば殴り合いになりそうな話は店でしないでくれ。どうしてもしたきゃ、達也の店にでも行ってしようぜ」
「飲める方の店かい？」
秋光はちょっとニヤッとして尊を見る。
「先生がいいなら、もう一軒の方でもいいぜ」
「いや。遠慮するよ」
尊はそう答え、後ろの客に「すみません」と待たせた侘びを言い、その場からよけた。
「ありがとうございましたーぁ」
ニヤニヤする秋光の声を背に受けながら、さすがにもう一軒の方

はね・・・。と、苦笑いをした。

「友達・・・か」

病院への道を戻りながら、尊は呟く。

脳裏に大学時代の若菜の姿が浮かんだ。

明るくて、気さくで、頑張り屋の彼女。

仲のいい友達だった・・・。

――友達じゃなきゃ、いけなかった・・・。

婚約者の事で、悩み泣いていた彼女を、一時の慰めのつもりで抱いてしまったのが、全ての始まり。

自分のそんな経験のせいか、真理が秋光の事を「大切な友達」と言った時、焦りのような危機感を感じた。

真理が秋光の話をすると、おかしな感情が湧き上がってくる。

彼は、身をもって解かっているのだ。

「大切な友達」

男女の間で交わされる、その言葉の危機感を。

病院の近くまできた時、駐車場に車が一台停まっているのが見えた。

まだ午後の患者が来るには早い。そう思うが、尊にはその車に見覚えがあった。

白のレガシィ。

尊もレガシィだが、彼は「Ｂ４」タイプ。

停まっているのは、ツーリングワゴン。
「女なんだから、もっと大人しい車にしたらいいだろ?」と、車選びに付き合った尊に、「いいじゃない。カッコいいんだもん」と笑った、若菜の車だ。

「どうしてここに・・・」
尊は嫌な予感がして、早足に車へと近付いた。
尊が車に近付いた時、車の陰に立っていた真理と若菜がそれに気づき、二人同時に尊を見る。
「尊さん・・・」
あっ、お昼ご飯、買ってきてくれたんだ。笑顔になりかかった真理をいきなり尊が引っ張り、自分の後ろに隠して、彼女を庇うような形をとった。
「何か言ったのか?真理ちゃんには関係ないだろう。まだ何か言いたいなら、俺に・・・」
「違うの!尊さん!」
若菜を責めようとした尊を、真理は慌てて止める。
「違うの!若菜さん、謝りに来てくれたの!!」
「え?」
尊は言葉を止めて、必死で自分を止めようとしている真理を、そして困った顔をする若菜を見た。

「昨日、変なこと言って、ごめんなさい。・・・って。謝りに来てくれたの。尊さんが気にするような事を言いに来たんじゃないよ」
「謝りに・・・?」
若菜は腰に両手を当てて、尊に向かって怒るような声を出した。
「彼女をなじりにでも来たと思ったんでしょ?残念ね」
「・・・ごめん」
若菜は、しょうがないわね、とでも言うように笑うと、尊の後ろに庇われた真理を、ちょっと羨ましそうに見た。

「真理ちゃーん。幼稚園から電話よ！」
その時、病院の出入り口から、真理に若菜が来た事を告げた受付事務の女性が出てきて、彼女の姿を見つけ叫んだ。
こんな時間に幼稚園から電話。何かあったのではないか？そう思い、慌てて二人に「ごめんなさい」と、場を外す事を詫びると、急いで病院へ向かって走った。
「幼稚園。・・・って。まさか、彼女、子供が居るの？」
若菜がちょっと驚いた声を出す。
「ああ。４歳の男の子だよ。産まれる前に結婚するはずだった彼は死んでしまっていて、それから一人で子供を育てているんだ」
とはいえ、両親も居れば「パパ達」も居る。「一人で」っていうのも、ちょっと違うかな？とも思ってしまうが、若菜はえらく感心したようだ。
「偉いわね・・・。まだ二十歳そこそこでしょう？それでシッカリ子供育てて。苦労してます。なんて、そんな雰囲気は全然しないものね。笑顔も可愛らしくて」
「そうだろう？彼女の笑顔はこの病院の名物でね。子供達にも大評判なんだ」
口調が楽しげになった尊に、若菜の心境は微妙だ。
「さすがはあの立花院長の娘さんだよ。明るくて、優しくて、子供に好かれる」
「立花院長の娘さん？」
若菜は首を傾げた。
「ああ。一人娘だよ。院長夫妻とも凄く仲がいいんだ」
若菜はちょっと考え込み、そして、気になった事を口にした。
「立花院長に・・・女のお子さんなんて・・・、居ないはずよ」

３４　尊と秋光（後書き）

こんにちは。玉紀　直です。
ちょっと秋光君、疑われてしまいましたね。
自分の彼女が、いくら「友達」って言っても、他の男の話をしているのをあまり快くは思えないものですよね。
昔の彼を考えると、あまり秋光君につっかっからないほうがいいと思うよ。尊さん。（笑）

真理ちゃんに謝りに来た若菜さん。
所詮彼女には婚約者が居ます。
いくら尊さんの事を忘れられなくなっていても、どうにも出来ないんです。
この件はこれで治まる？どうかな～。
と、言っているうちに、若菜さん、気になる事を言ってくれましたよ。

ここから、尊さんが知らない、最大の秘密が顔を出し始めます。

次回は９月２５日更新予定。
１週間も開いていてゴメンナサイ。シルバーウィークは執筆に取れる時間がギリギリ一本分になりそうで・・・。
最近更新日がずれちゃったりしていましたが、間違いなく２５日に更新させて頂きますので、読みに来てくださいね！

では、次回！！

35　真実の片鱗

「え？」
尊は怪訝そうな顔で若菜を見た。
若菜も自分で言っておいて、少々訳が解からなくなってしまった様だ。次の言葉が繋げないまま尊の顔を見ている。
「女の・・・子供が居ない。って・・・」
尊も若菜の言葉の意味が解からない。
この病院に面接に来た時に真理に出会った。その時、院長直々に「一人娘だ」と紹介されているのだ。

「若菜・・・。どうして、そんな事、知ってるんだ？」
若菜としては、何気なく口から出た言葉だったのだが、もしかしたら自分は言ってはいけない事を言ってしまったのではないか。という思いに捉われた。
自分が言った事を、尊は間違いなく知らないようだし、それがどういう事か訊きたがっている。

もしかして、言ってはいけない事？

若菜はそう感じた。
しかし・・・。彼女の中で声が聞こえる。
「言って、教えてやればいい」と。
そうしたら・・・、もしかしたら・・・。と。

「私の彼の父親は、立花院長の同期よ。尊君にこの病院を紹介した人だわ。立花院長の事を知っているのは当たり前でしょ。・・・私、尊君が大学病院を辞めた時、教授に訊いたのよ。どこの病院へ行っ

たのか。って」

もう一人、若い医師を欲しがっている個人病院がある。

そう言って尊に勧めてきたのは、若菜の婚約者の父親。尊がずっと慕っていた恩師だ。

「君は、最初から個人病院のようなところで『地域に密着した医療』というものを目指してきた。もし希望するなら推薦してあげよう。――君のためにも、若菜君のためにも、・・・そのほうが良い。・・・何も無かった事にするのが。・・・そう思わないか？」

教授は、何かを感じ取っていたのかもしれない。自分の息子の婚約者と、学生時代から仲が良すぎる男に。

自分が希望していた仕事。それが出来るチャンス。

若菜との事を清算する。教授が与えてくれた、強制的なチャンス。

尊が、「イヤだ」と言う理由は無かった。

いや、言わせてはもらえなかったかもしれない。

「一人だけ居た息子さんが、不慮の事故で亡くなったんですって。病院の跡を継がせるつもりでいたらしくて、当時はかなり落胆していたらしいわ。やっぱり精神的な事が関係しているんでしょうけど、今までより仕事を辛く感じるようになってしまったらしくて。それで、若い人を一人欲しい。って、教授に相談したらしいわ」

若菜は教授に聞いたことを、そのまま尊に話した。

「一人息子。・・・って言っていたはずよ。娘さんが居るなんて聞いてないわ。・・・そういえば、その息子さんに子供がいて、その子と一緒に暮らしているんですって？死んだ息子さんによく似た男の子なんですってね？尊君、見たことある？」

若菜が話す事に、尊は驚きを隠せない表情のまま彼女を見詰めていた。

「尊君？」

若菜は尊の様子がおかしい事に気付き、首を傾げて呼びかける。

すると尊は、いきなり若菜の両腕を掴んで詰め寄った。

「その子・・・、一緒に暮らしているっていう子は、いくつの子？」

いきなりの慌てように若菜は驚くが、尊が何か必死なのを見て、戸惑いながらも知っている事にだけは答えた。

「・・・４歳って聞いたわ。なんでも、息子さんが亡くなったのが４年半くらい前で、その子は息子さんが亡くなった後に、入籍する予定だった女性が産んだ・・・って」

勢いを付けて話すうち、若菜もちょっとした疑問を持ち始める。

立花院長の娘だという真理。

あの歳で、幼稚園に通う子供が居るという。

「もしかして、あの子が・・・？」

若菜は真理が入っていった、病院の出入り口に目をやった。

彼女としては、立花院長の息子と結婚するはずだったのが真理で、幼稚園に通う子供というのが、その息子との間に出来た子供なのだろうと思ったのだ。

そうすれば、院長が真理を娘だ、と言っている理由も解かる。

しかし尊は、もっと違う、何かに気付き始めていた。

娘が結婚するはずだっただけの相手に用意するには、立派過ぎる仏壇。

確かに、「自分の息子」だったのなら、あのくらいの仏壇を用意しても不思議じゃない。

じゃぁ、真理ちゃんは？

院長の娘じゃないのか？

じゃぁ、何故彼女は「立花」と名乗っているんだ？入籍前に相手が死んでしまったというなら、立花ではないだろう。・・・苗字が偶然同じだったのか、と考えたりもしたが、更に院長夫妻と真理の姿を思い起こし、再び解からなくなる。

優しくて子供に好かれるところが、院長である正孝に似ていると思っていた。しかしそれは性格的なものなので、偶然にも二人が持つ雰囲気が似ていたと考える事が出来る。

しかし、院長夫人の真澄と真理は、顔付きや雰囲気もとても良く似ている。あれで「親子ではない」と言うほうがおかしいだろう。

さらに、仏壇に飾られた彼の写真が、院長にとても良く似ていた事を思い出した。

正孝に、よく似た、彼。

真澄に、よく似た、真理。

「まさか・・・」

ひとつの仮説が立った瞬間、尊の背筋を冷たいものが走った。

「まだ何か話してる・・・」

待合室の窓から外を見ると、来院者用の駐車場が見える。

駐車場に一台だけ停まる若菜のレガシィの前で、尊と若菜が話をしているのが見える。

真理は窓から、２人の姿をジッと見詰めた。

昨夜真理を抱き締めながら、尊は若菜との事を話してくれた。

ずっと、仲の良い友達だった。という事。彼女には婚約者が居て、結婚も決まっているという事。

いくらそういった雰囲気になったからといって、自分はしてはいけない事をした。「なってはいけない相手と、なってはいけない関係」になってしまった、と。

「尊さんは、あの人の事、好きじゃなかったの？」尊の胸に抱き締められながら問い掛けてきた真理を、尊は力を入れて抱き締め直し、そして辛そうに言った。

「・・・好きだったよ」

自分の恋人が、他の女性を好きだったという話をしている。本当ならば辛い話であるはずなのに、尊の口調のせいだろうか、真理はとても落ち着いた気持ちで聞けた。

「でも、傷付ける事しか出来なかった。・・・守ってあげる事が、出来なかったんだ」

彼女の立場。そして、自分の立場を考えても、自分は何も答えずに全てを白紙に戻すことが最善の方法だった。

――何も無かった・・・。

教授が言うように、何も無かった事にするのが、自分にとっても彼女にとっても最善の方法だった。

「真理ちゃんを好きになって、真理ちゃんや真臣君を、守ってあげたいと思った。自分にもちゃんと守れるものがある、って、君と居ると感じられる。・・・君を一生、守っていきたいんだ・・・」

あれは・・・プロポーズなんだろうか・・・？

昨夜の尊の言葉を思い出し、真理はひとりで赤くなった。

「一生守っていきたい」っていうのは、やっぱりそういう意味なのかな？

昨夜は、それ以上の話はしなかった。

ただしばらくの間、尊が真理を抱き締めていただけ・・・。

――――なってはいけない相手と、なってはいけない関係になった。

「私もだよ・・・」

外を眺めながら、真理はポツリと呟いた。

３５　真実の片鱗（後書き）

こんにちは。玉紀　直です。
若菜さんと話をしているうちに、最大の疑問にぶつかり、そして、気付いてはいけない事に気付き始めた尊さん。
表にさらされだした真実は、どんどんとその覆いを剥がされていきます。

気付き始めた真実。
それを確かめに、尊さんが行ったところは・・・。

次回は、ついに秋光君がブチ切れ?!?!・・・寸前・・・。

次回は９月２８日更新予定。（遅れても１日）

では、次回!!

36　真実の追究

「どうしたんだろう。尊君」
白い革張りのステアリングをツルリと撫でる。
信号待ちの交差点。赤信号で停まってはいるものの、主に学生が多いこの道路は、昼過ぎの中途半端なこの時間に歩いている人間など一人も居ない。

立花院長の息子と結婚するはずだった女性が真理だから、真理を「娘」と言っているのだろう。
そんな話をしている最中、「ごめん・・・俺、ちょっと・・・」尊がそう言って、駐車場から早足で歩き出した。
血の気が引いた顔。「信じられない」という表情。

もしかして私は、言ってはいけない事を言ってしまったのだろうか・・・。

そう思うと、若菜は自己嫌悪に襲われた。
立花院長には、本来、娘は居ない。という事を、尊は知らなかった。
戸惑い、驚く尊を見て、一瞬それ以上言う事を躊躇ったが、彼女の中の「もうひとつの声」が彼女をそそのかした。

言えばいい・・・。
知っている事、全部言ってしまえばいい。
尊君が知らない「何か」があるなら、教えてやればいい。
それが何かは解からないけれど・・・。でも、もしかしたら・・・。

それがきっかけで、二人は別れてしまうかもしれない・・・。

「ずるいな・・・私」

尊君が好きで、忘れられなくて、付きまとって余計な事を言って・・・。

せっかくうまくいきかかっている二人を「別れればいい」なんて。

この先、尊君に会えても会えなくなっても、最終的に私は婚約者の彼のところへ帰らなければならない。

戻る場所は、用意されている。

でも、もしあの二人が別れてしまったら・・・。

尊君は「誰かと別れる」という辛い思いをすることになる。

私との事を忘れて、自分の恋愛が出来るチャンスなのに。

若菜は考えれば考えるほど湧き上る後悔と、こんな事をしてしまった自分への恥ずかしさで胸が痛くなる。

真理に優しく笑いかける尊を、真理を庇おうと自分を責めてきた尊を、思い出すと耐えられない。

・・・別れてしまえばいい。

あの時、本当にそう思った。

考え込む若菜の耳に、けたたましいクラクションの音が響いた。

青信号に変わったのに、発進しない若菜の車に対して後続車から鳴らされたものだった。

車をゆっくりと発進させながら、考える。

・・・謝ったほうがいいかしら・・・。

「謝る」という大義名分を抱えて会いに行けば、おそらくまた「何しに来た」と言われてしまうかもしれない。

――それでも若菜の中には、尊に会いたい気持ちがあった。

「訊きたい事がある」
・・・なんでオレに。
秋光はそう思った。
しかし、ついさっき昼食を買って店を出て行ったのに、再び舞い戻ってきてカウンター越しに自分に詰め寄る尊を見ていたら、もしかしてただ事ではないのかも?とも思う。
ちょうど昼のラッシュも過ぎた頃。店にも1~2人の客が居るだけだ。
自分の休憩も兼ねて、尊の「訊きたい事」の質問に答えてやる事を決めた秋光は、パートの女性に後を任せて、そのまま店を出た。

長い話かと訊けば、短い話だと言う。
とりあえず秋光は、店の裏でその話とやらをすることにした。
「で?何の話?」
ちょっと、うざったそうな声を出してしまったかもしれない。
気持ちはどうあれ、尊は店の常連でもある。もうちょっと愛想を振っておいたほうがいいか?などとも思ってしまった。
「店長は、真理ちゃんが結婚するはずだった相手の友達、だったよね?」

・・・何で?正臣の話?
秋光はジーンズから煙草を出しかけて、思わず手を止めた。
「そうだけど?」
「以前『幼馴染』だって、真理ちゃんに聞いたけど」
「まぁな」
「じゃぁ、彼は、この近くに住んでいたって事だよね?」
「・・・・・」

――――こいつ、何が訊きたい？
秋光は少々ムッとした気分になるが、自分を落ち着かせるために煙草を一本咥え、火をつけた。
「父親が医者で、自分も医者になりたがっていた。って聞いた」
「そうだよ」
尊は次の言葉をなかなか出せなかった。
この言葉に返ってくる返事を聞くのが、怖かったのかもしれない。

「・・・『彼』は、立花院長の息子なのか？」
「・・・・・」
秋光はすぅっと大きく煙草を吸い込むと、溜息のようにハァッと吐いた。
大きく広がる煙草の煙が自分にかかりそうになり、尊は一歩後ろへ引く。
尊は煙草を吸わない。普段子供に係わるという観点から、小児科医になろうとハッキリと決めた高校時代に、自分は絶対に煙草は吸わないと、心に決めた。
秋光だって客商売。客の中には煙草の臭いが嫌いな客も居るだろう。
店長、煙草やめたらいいのに。言えば「大きなお世話」と言われそうな事だが、尊は一瞬そう思った。

「院長は、真理ちゃんを『一人娘だ』って紹介してくれたけど、院長に、本来娘は居ないんだ、ってある人に聞いた。一人息子が４年半くらい前に不慮の事故で亡くなって、その息子の子供と暮らしているって。・・・でも、それって真臣君のことだろう？真臣君は真理ちゃんの子供だろう・・・？」
答えて欲しかった最初の質問に秋光が答えないまま、尊は次の質問を投げかける。

「どう見たって、真理ちゃんは院長夫人の娘だ。・・・院長にも、似ている、ってずっと思っていた。でも亡くなった『彼』が院長の息子なら・・・」

尊はその後の言葉を繋げない。

言って良い事か？

これは、口に出していい事なのか？

尊の頭の中で、そんな思いが駆け巡る。

間違いであって欲しい。自分の気のせいであって欲しい。と。

しかし秋光は、もう一度大きく煙草を吸い込み、煙と共に言葉を吐いた。

「そうだよ・・・」

吐いた煙が、目の前で白い膜を作る。その膜の向こうで、尊が目を見開くのが見えた。

「あいつは、・・・正臣は、立花院長の息子だ」

煙が晴れる。次の言葉を待つかのように、尊が秋光を見ている。

「それが、どうかしたか？」

なんでもない事のように言い放ち、秋光は煙草を咥えるが、彼らしくなく動揺した様子を見せたのは、尊だった。

「でも・・・、それじゃぁ・・・」

若菜の話を聞いた時の仮説が、頭の中を巡る。

――これは、口に出していい事なのか・・・？

「何か、変か？」

秋光の言葉に、尊はすぐさま反論した。
「変か・・・って、彼が立花院長の息子なら、・・・真理ちゃんは」
「娘だよ。母さんとソックリだろ？」
平然と言う秋光に、尊は信じられないという目を向ける。
「・・・嘘だろう・・・？」
どこか呆然とした声が、尊の口から出た。
「真理ちゃんは・・・彼の子供を産んでいるんだぞ・・・。彼も、真理ちゃんも、院長の子供なら・・・」

――――なら・・・、ふたりは・・・。

「だから何だよ」
吸いかけの煙草を根から折ると、秋光は手の中でそれを握りつぶした！
その感情的な行動に尊は驚く。
秋光とて店の周りに吸殻を散らかしておく訳にはいかないので、携帯灰皿くらいはポケットに入れているが、そんな物をちまちまと出して消している余裕などないほど、彼の気持ちは憤り始めていたのだ。
「・・・正臣も、真理さんも、・・・院長の子供だったら、何なんだよ・・・」
店で聞くものとはまったく違う声。昔を知らない尊は、秋光がこんな声を出す事を知らない。

「あんた・・・、真理さんの事、好きなんだろ？」
眉根を寄せて、ただ呆然とするだけの尊を見据える。

「なのに！・・・あんたまで、ちゃんとした理由も知らないで、真理さんを『そんな目』で見るのかよ！！」

「姉弟よ！」

秋光が、尊に掴みかからんばかりの様相を見せた時、その叫び声は二人の動きを止めた！

突然の声の主を、二人は振り返る。

「私と正臣は・・・姉弟だったの！」

――真理が。

そこに居た。

３６　真実の追究（後書き）

こんにちは。玉紀　直です。
若菜さんが尊さんに色々ぺらぺら教えた理由は、もしかしたら、二人が別れる原因を作れるかもしれない。という、お粗末だけど哀しい理由でした。

そして、尊さんは自分の疑問を解決させるために、彼や真理ちゃんの事をよく知っている秋光君に会いに行きます。
しかし、知らされた事実は・・・。

常識的には、考えにくい現実を知らされた尊さん。
それも、真理ちゃんの口から。
二人はどうなる？
そして、秋光君は・・・？

次回更新は、１０月２日予定。（遅れても１日！）

では、次回！

37　真実の瞬間

「日野先輩さぁ、子供産んだらしいよ」
「マジで産んだの?だって、死んだ弟の子供なんでしょ?信じらんない」
「真面目な先輩だと思ってたけどさ、やる事が凄いよね。先生とデキちゃったと思ったら弟に乗り換えてさ。子供まで作ってんの」
「真面目すぎるとさぁ、どっか頭おかしくなっちゃうんじゃないの?」
「いえてるー」
ケラケラ笑う女子生徒達。
ゴールデンウィークの休みも明けた頃、どこからどう漏れたのか、四月に真理が正臣の子供を産んだという話が、高校三年に何とか進級した秋光や健が通う、城南高校に広まっていた。

「あの先輩ってさ、ちっちゃくて可愛かったよな」
「あのワルかった弟にヤらせるくらいだから、頼めばヤらせてくれたかもよ」
「おれ、頼めばよかったー」
中傷と偏見。
「弟の子供を産んだ姉」
そこには、それしかなかった。

そんな噂話をする生徒の傍を通るたび、何度睨み付けそうになっただろう。何度、殴りかかりそうになっただろう・・・。
しかし、いつも健に止められた。
オレ達が今ここで殴ったり庇ったりする様な事をすれば、噂に余計な尾ひれがついて、余計にネーサンが中傷される。と。
間違いではない。今庇うのは、噂で盛り上がっているところへ更

に話題を提供するだけだ。
「弟だけじゃなく、その仲間も・・・？」と。

秋光は辛くて悔しくて堪らなかった。

どんなに二人が真剣だったかも知らないで。
どんなに二人が幸せだったのかも知らないで。
いきなり正臣の命を奪われた真理ネーさんが、どんなに苦しんでいるかも知らないで！

自分は何も出来ない。
真理に何もしてやれない。
不甲斐なくて情けなくて、秋光は涙が出そうになった。

「いつも来てくれて、ありがとう」
毎日線香を上げに行った。
毎日真理の様子を見に行った。

――――いつの間にか、真理に恋をした自分を，抑えながら・・・。

真理はもう卒業した後ではあったが、真理と正臣の事は在学中から噂になっていた。
今度は子供のことで噂になっているという事を、秋光は真理には言わなかった。
そのうち治まるさ。あんな噂。
そのうち誰も気にかけなくなる。

誰も・・・真理ネーさんを、あんなイヤな目で見なくなる・・・。

――なのに・・・。

「姉弟・・・？」

尊は呆然とした表情で、今現れた真理を見詰めた。

真理を見詰める尊の目を見ながら、秋光は下唇を噛む。

――アンタまで！「そんな目」で、真理さんの事を見るのかよ！！

「義理・・・のだ・・・」

秋光は尊に殴りかかってしまいたい衝動を、両手を力いっぱい握り締めることによって抑え、真理の言葉を補足するように付け加えた。

「義理の姉弟だ。・・・血なんか、繋がっていない」

「義理の・・・？」

昼下がりのコンビニの裏手。もちろんこの三人以外に人は居ないが、この空間だけ別空間になってしまったかのように静まり返っている。

尊はジッと真理を見詰めた。真理もそんな尊を大きな眼で見詰め返す。

「高校三年の時、・・・お母さんが、正臣のお父さんと再婚したの・・・」

真理は真澄の娘。

正臣は正孝の息子。

二人は、義理の姉弟になった。

「一緒に住むようになって、『そういう関係』になったわ。・・・最初は、無理矢理されちゃっただけだったけど」

過去に、目の前で母親に自殺されるというトラウマを背負っていた正臣は、笑顔が母親に似ていた真理を身代わりにするかのように憎み、彼女を陵辱した。

「・・・でも、そのうちに心を開いてくれて・・・」

真理の笑顔と優しさに触れていくうちに、正臣は変わった。

そして本当に、彼女を愛するようになった。

「本当に、お互いを心から求め合うようになった。・・・真臣を妊娠した時も、弟の子供を産む訳にはいかない、って悩んでいた私に、必死で産むように言ってくれた・・・」

真理はゆっくりと尊の前へ歩み寄り、彼を見上げた。

自分を見上げる真理の目を見ているうちに、尊は悲しくなってきた。

「・・・どうして、最初のうちに教えてくれなかったんだい？」

「・・・ごめんなさい・・・」

「大切なことだろう？真臣君の事も、・・・死んだ彼の事も。付き合っていれば、いずれは解かる事なのに・・・。どうして、最初に・・・」

「ごめんなさい・・・」

話さなくていいのなら、話したくはなかった。

尊が知らないままで居られるなら。それを通そうと思ったのだ。

「人づてなんかじゃなくて、最初から君の口から聞きたかった。真理ちゃんから、話して欲しかった。・・・俺の事を信じて・・・話して欲しかった」

「ごめんなさい・・・」
真理の口からは謝罪の言葉しか出てこなかった。
いつもは優しい尊の目が、何も話さなかった自分を責めるように、悲しそうに歪んでいる。

心を許して付き合っていかなければならない恋人に。

真理は、本当の心を許さなかったのだから・・・。

それがどんなに辛いか・・・。
一番に頼って欲しかった真理に、心を許してもらえなかった事実。
どんなに体を許してくれては居ても、気持ちをもらえない辛さ。

いつまでも死んだ彼を想い続ける真理。
どんなに自分が真理を想っても、開いてもらえない心。

「言える訳ねぇだろう！そんな事！！」
耐え切れない。そんな思いで、秋光が叫んだ。
「義理の弟とそんな事をしたって聞いて、あんたどう思うんだよ！どうせ二人の事を変な目で見るんだろ?！それなのにワザワザそんな事言えるかよ！！」

血の繋がっていない、義理の弟。
もしも両親さえ結婚しなければ、二人は他人のままだったはずなのに。
他人のままであれば、愛し合ったって、子供が出来たって、誰からも祝福されたはずなのに。

「姉弟」という肩書きをつけられた途端、それは悲劇の引き金となる。
「決して許されない関係」に、変わってしまうからだ。

「真理ちゃんは・・・、最初から、俺を見てくれる気はなかったのかな・・・」
尊はどこか落胆したような静かな声でそう言うと、真理の横を通り過ぎ、その場から歩き出した。
「・・・たっ・・っ！」
真理が振り返り、引きとめようと手を伸ばしかけるが、言葉も手も、尊に届く前に止まってしまう。
何も出来ない真理の視界の中で、立ち去ってゆく尊の後ろ姿が消えた。

尊さんを、傷付けてしまった・・・。
真理の心の中に、後悔のような重苦しい気持ちが生まれる。
あんなにも一生懸命、自分をそして真臣を想ってくれた人を、私は裏切ってしまったのかもしれない。
伸ばしかけていた手に、もう片方の手を重ねてペンダントの上で握り締める。
目の奥が熱くなり、涙が浮かんできた。

「真理さん・・・」
肩を竦める真理の後ろ姿。両肩が小刻みに震えている。泣いているのだと、秋光はすぐに解かった。
「・・・真理さん、ごめん・・・。オレ、余計な事・・・」
秋光が謝りかけていたというのに、その上に真理の声が被さる。
「ごめんね。秋光君っ」
言葉が止まった秋光を振り返る真理は、目に涙を溜めて、・・・

笑った。
「巻き込んじゃって、ごめんね。でも、心配しないで。私、後でもう一度ちゃんと尊さんに謝るよ。ちゃんと話さなかった事、謝るから。・・・安心して」

「安心なんか出来るか！」
秋光はイラつくように叫ぶと、真理の肩を掴んで自分の方を向かせた！
真理は驚いてビクッと体を震わせ、彼を見る。
「やめろよ・・・。もう・・・」
そんな真理の顔を見ながら、秋光は思いのままを口にした。
「もう、あいつと付き合うのやめろよ・・・。真理さんが辛いだけだろ?!」
「・・・辛かったのは、きっと尊さんよ・・・。私が、大切な事も話さないで、都合よく黙ってようとしたから・・・」
「真理さんは悪くない！」
真理の体が再びビクッと震える。明らかに秋光の迫力に押されて少々怯え気味だ。
いつもならば、真理にそんな思いはさせないように気をつけて接する彼だが、今はそんな気遣いをする心の余裕はなかったのかもしれない。

「真理さんが心配なんだよ！真理さんに、これ以上、正臣や昔の事で傷付いて欲しくないんだ！！」
「・・・秋光君・・・？」

太陽だけが輝く昼下がり。
いつも彼を見張る「月」は、今は見えない・・・。

秋光は、両腕で力いっぱい、真理を抱き締めた！

「・・・あき・・みつく・・・・！」

「・・・真理さん・・・オレ・・・」

言えなかった言葉。

言葉の陰に見え隠れする友人の存在を裏切れなくて、ずっと閉じ込めていた想い。

「オレ・・・真理さんが好きだ」

太陽だけが輝く昼下がり。

「太陽」の傍で、「星」が大きく輝いた・・・・・。

37　真実の瞬間（後書き）

こんにちは。玉紀　直です。
「義理の姉弟」その事実を知らされた尊さん。
彼はその事実を受け止め、なかなか心の全てを許してはくれない真理ちゃんを、このまま想い続ける事はできるのでしょうか。

そして、再び昔の事実に傷付く真理ちゃんを、見ていられなくなった秋光君。
月が出ていない昼間。
とうとう彼女に告白してしまいました。
真理ちゃんはどうする？
そのまま、尊さんとやり直す？
・・・それとも・・・？

次回は、「秋光君ひいき」の方々には（やっと）堪らん展開・・・に、なるかな？
喜んで頂けるか、落胆するかは、あなた次第!!

次回は１０月６日更新予定。（遅れても１日）

では、次回!!

すみません、ちょっと「お詫び」です。

実は、前回の３６話で、秋光君の行動の中に一部、現在の社会傾向的に不適切な表現がありました。
読んだ読者の方が慌ててご指摘下さったので、玉紀も考え直し、

やはりこれはいけない、と思って本文を訂正しましたが、訂正したのがその日のお昼頃でしたので、すでに６００人ほどの方が閲覧した後でした。

今はもう訂正されていますが、訂正前を読んで不快に思われた方が居ましたら、心よりお詫び申し上げます。

秋光君の心の憤りを表現するために用いたものでしたが、やはり、今の社会的傾向にはそぐわないと判断しました。

ネットストーカー等に目を付けられないかと、ご心配下さった読み手の方、ご指摘頂き有難うございます。（お名前は控えさせて頂きますね）メールで返信が出来ないので、この場を借りてお礼申し上げます。

38　告白とキスと

「オレ・・・真理さんが好きだ・・・」

――秋光君・・・？

「四年前から、ずっと、好きだった・・・」

――嘘でしょう・・・？

だって、あなたは、正臣の・・・。

言ってしまった。

四年経っても尚、過去の傷に触れられる真理を見て我慢が出来なくなった。とうとう想いが抑えられなくなってしまった。

もう、引き返す事など出来ない。

秋光はそれを自分で確認するかのように、今自分の腕の中に居る真理を、より強く抱き締めた。

「真理さんが傷付くのを見るのは・・・もう嫌なんだ・・・」

秋光の声が、真理の耳元で響く。

冗談で言っているのではない。

彼の言葉の強さ。抱き締める腕の熱さ。それらは「本気だ」と彼の気持ちを真理に知らしめる。

「・・・秋・・光君・・・」

真理は両手で秋光のTシャツの脇をグッと掴んだ。

「ダメ・・・だよ・・・」
自分から離そうとその手を伸ばすが、Tシャツが伸びただけで何の抵抗にもなりはしない。
「そんな事、言ったら・・・。駄目」
自分を抱き締めて、離さない秋光。
その力は、一向に弱まらない。

「秋光君は、正臣の友達でしょう?」
戸惑いを見せるかと思われたその言葉も、抱き締める腕の強さをただ強くさせただけ。

秋光は真理を抱き締めながら足を進めて、彼女の体を後ろへ押した。
真理は押されるままに数歩後ずさる。
「・・・正臣が、見てるよ」
コンッ・・・。
店の壁に真理の背中が当たると、抱き締めたまま彼女を壁に押し付けた。

「秋光君。正臣が・・・」
「・・・見てない」
「正臣が、見てるから・・・」
「・・・見てない」
「見てるから。離して・・・」
「見てない!」

正臣が見てる。
その言葉を繰り返す真理の唇を、秋光は唇でふさいだ。

唇が触れ、真理は目を見開き、彼を押し戻そうとしていた手に力が入る。
しかし、そこまで。
触れる唇の熱さを感じながら、真理は目を閉じた。

何度も首の向きを変えて、静かに吸い付くようなキスは、何故か真理の心を落ち着かせた。
そこには、乱暴な仕草も、貪るような舌戯も、何も無い。
ただ、優しいだけのキス。
真理が抵抗すれば、その唇はすぐに真理から離れるだろうと思うくらいに、優しく静かなキス。

心の中に・・・。
泣き出してしまいたくなるほど苦しい想いが湧き上がる。

正臣が死んで、毎日泣いていた自分。
そんな自分を、毎日笑顔で慰めてくれた人が居た。
毎日見守ってくれた人が居た。
やがてその人は、自分の心のどこかで支えとなり、自分が辛い時や井関恭吾の見舞いに行った後など、必ず会いたい人になった。

――――心の何処かで、常にその人に安らぎを求めた。

しかしそれを、真理の「理性」が認めない。
何故なら・・・。

「その人」は、正臣の友人だから。

真理が心の中に何かを感じそうになると、必ず顔を出すその感情。
昔、正臣を好きな自分に気付きかけた時、いつもそんな自分を止めていた感情。

真理の、「理性」。

「私達は、姉弟なんだよ」昔そう言って真理の気持ちを閉じ込めた理性が、今は「この人は、正臣の友人なんだよ」と言って、真理の心を閉じ込め続ける。

「あき、みつくん・・・」
切なく苦しそうな声が、真理の唇の端から漏れる。
いつの間にか抱き締めていた手は離れ、秋光の両手は真理の頬から肩を滑り、自分のシャツを掴む両腕をなぞって真理の手と絡ませ、壁に押し付けていた。
「・・・正臣、見てる・・・」
薄目を開けた真理の瞳に、涙が湧き出してくる。その事に秋光は気付いたが、「見てない」と言って、再び唇をふさいだ。

長い間、二人は唇を重ねていた。
やがてゆっくりと秋光が唇を離すと、真理は無言のまま肩で小さく息をして目を開ける。
我慢して瞼の奥で止められていた涙が、頬を伝ってポタポタと落ちた。

「真理さん・・・」
下を向いてしまった真理に、秋光は優しく、しかしどこか強い口調で言った。
「真理さんを好きだ、っていうのは、本当だから」

真理が顔を上げて秋光を見る。
そこに、見た事も無いくらい真剣な顔をした彼が居た。
「・・・本気だから・・・」

――彼は、正臣の友人なんだよ。

真理の心の中で、声が囁く。

――正臣が、見てるよ。

空には太陽。
月は出ては居ない。
しかし、心の中の声は囁き続ける。

――見てるよ・・・・・。

３８　告白とキスと（後書き）

こんにちは。玉紀　直です。
今日はちょっと短めですみません。
本当はこの後、病院のシーンが入る予定だったのですが、今回はこの二人だけで締めたかったんです。
コレで多分、秋光君の気持ちは伝わったと思います。
真理ちゃんの心に中で、彼女を止め続ける「声」。
「正臣」から気持ちを離さないように、自分で自分を追い詰めます。

今回は秋光君と真理ちゃんでしたが、次回は尊さんと真理ちゃんです。
この二人、仲直り（？）するのでしょうか？
真実を知った尊さん。どうする？

次回は１０月１０日更新予定。（遅れても１日）

では、次回！！

＊　もう一回、お詫び＊
前回に続いて、何回もすみません。
前回３６話の修正の話を書いたのですが、もうひとつ、３２話にも修正すべき点がある事をご指摘頂きました。
３２話の冒頭部分でしたが、そのシーンを読んで「えっ？」っと思われた方、本当に申し訳ありません。
すでに修正済みです。
ご指摘頂いたユーザーの方、メッセージの返信は読んで頂けまし

たでしょうか？

ご指摘、有難うございました！

39　謝りたくて

「坐薬と風邪薬を出しておきます。熱が下がっても、夜中の咳が続くようなら、また来て下さい」
感じの良い柔らかな口調は、母親達に好評だ。
「ちゃんとお薬飲むんだぞぉ？」
子供がとっつきやすい明るい笑顔。元気な口調。
頭を撫でたり、自分の膝に乗せたり。子供達にも懐かれている。
「せんせー、ばいばい」
「ああ。ばいばい。またお熱が出たらおいで」
診察室に入ってきた時は、病院中に響き渡るくらいの声で泣いていた、3歳の女の子。
尊の診察が終わる頃には、すっかり笑顔になっていた。

こんな優しい人を・・・。私は・・・。

第2診察室。尊の補助に付きながら、昼の事を思い出し、真理は胸が痛かった。

「またおいで。・・・は、マズイかな？」
患者親子が診察室から出ると、尊はカルテを書き込みながら苦笑いをした。
「何だか、また病気になりなさい。って、言ってるみたいだもんな」
笑いながら言うものの、目はカルテやパソコン画面を見ていて、同じ診察室内に居る真理を見ては居ない。
「そう・・・ですね」
真理は少々、笑顔を引きつらせながら答えた。
それだけで黙ってしまったので、診察室の中はシーンとした空気

が漂う。
いつもなら、楽しげに会話はもっと弾むはずだ。
「でも、来てもらわないと俺の仕事がなくなるしなー」と尊が言えば「でも、病気になりなさい見たいで駄目よー」と真理が返す。そうやって二人で盛り上がるはずなのだ。

しかし今日は、二人とも、あまり話もしない。

正確には、午後の診察時間から、二人はほとんど話をしていない。

コンビニでの一件から、尊はすぐに病院へ帰っていたが、真理は午後の診療開始時間ギリギリまで病院には戻ってこなかった。
話が出来ていないのは、そのせいもある。

診療開始時間ギリギリまで・・・。
真理は秋光と一緒に居た。
コンビニの裏手で、話もせずに、そのまま一緒に居ただけ。
それでも何故か真理は、そこに居たかったのだ。

次の患者のカルテを、デスクの端に積まれたカルテの束の中から取ろうとした尊の手と、取ってあげようとした真理の手が、重なるように触れる。
良くある恋話なら、「初対面で恋に落ちた瞬間」の典型。といったところか。
そういった話では、二人は手を引っ込め見詰め合うが、この二人の場合、どちらも手を引っ込めず見詰め合った。

「あの・・・尊さ・・」

謝らなきゃ・・・。
大切な事も言わずに、ずっと黙っていた事。
決して、尊さんを信じていなかった訳じゃないって事、解かってもらわなきゃ。

真理は尊に謝ろうとしたが、尊がその途中で口を出した。
「ごめんね」
「え？」
何故尊が謝るのかが解らなくて、真理は首を傾げる。
尊は戸惑い気味の真理を見詰めながら、困ったように笑う。
「やっぱり俺、真理ちゃんが好きみたいだ」
「・・・尊さん？」
「大切な事を話してもらえるほど君に心を開いてもらえていなくても、信じてもらえていなくても。・・・『彼』より、好きになってもらえていなくても・・・」
「・・・・・」
尊は重なっていた手の下からカルテを抜き取り、真理から目を逸らしてそれをめくり始めた。
「君には・・・迷惑かもしれないけど」
「そんな事・・・！」
真理は反論しようとする。しかし尊は、真理に何も言わせなかった。

「さぁ、次の患者さん、通して」
元気な声で、真理の声をふさぐ。
そんな事は無い、と言おうとしたのだが、すでに仕事モードに入ってしまった尊を見ていると、つい言えなくなった。

とにかく今は仕事中。
あとで、謝ろう。

それと、迷惑なんかじゃないって、ちゃんと言わなきゃ。

病院が終わったら、ちゃんと話をしよう。そう思っていた真理だったが、いつもはそんなに急いで帰る事など無い尊が、今日は仕事が終わるとさっさと病院を出てしまった。

まるで真理と話をする事を避けるかのように。

「ねぇママ。どこに行くの？」

タクシーからピョンッと飛び下りて、その瞬間にずれてしまった制帽を直しながら、真臣は四回目の「お伺い」をしてきた。

真臣を幼稚園に迎えに行って、タクシーを停めたところから「お伺い」は始まり、これで四度目だ。

「ちょっとね。ママのご用事。すぐに済むから。付き合ってね」

「つきあってあげるから、かえりに秋パパのところで、おかしかってくれる？」

ちゃっかりしている。

しかし、秋光の名前が出て、真理はドキッとして足が止まりそうになった。

「い・・、いいよ・・・」

平気を装って答えるが、秋光に会うのだと思うと、何となく照れくさい。

帰りに会いに行くのだ、と思うと胸がドキドキした。

――――オレ、真理さんが好きだ。

その言葉は、抱き締められた腕の感触、触れた唇の温かさと共に、真理の体から消えない。

――本気だから・・・。

真臣を連れて行くなんて・・・。ズルイかな？
真理はちょっとそう思いながら、その建物へ入った。
真理が真臣を連れてやって来たのは、尊のマンションだ。
タクシーの中から駐車場を見て、尊の車があるのは確認した。帰って来てはいるのだろう。
「ごめんなさい」その一言を、どうしても会ってきちんと言いたかったのだ。
自分一人だけだと、もしかして尊は会ってくれないのでは無いか。そう思い、お迎えがてら真臣を連れて来てしまった。
尊の性格柄、真臣が居ると分かれば、そのつもりが無くても会ってはくれるだろう。そう思った。

とにかく、謝りたかったのだ。

「おいで。真臣」
真臣を抱き上げて、階段を上り始める。

――やっぱり俺、真理ちゃんが好きみたいだ・・・。

真理が自分に心を許してくれていないと解り、尊は真理の事は諦めた方が良いのかもしれないと考えたのだろう。
でも彼は、やはり真理に惹かれている自分を偽る事が出来ない。

私が、何をしたのかを知った上でも、まだ私の事を好きだって言ってくれている。

真理は、その気持ちが嬉しかった。
ちゃんと謝ろう。以前のように戻れるかは解からないけど・・・。

真臣を抱き直し、コアラ抱っこでゆっくりと階段の続きを上る。
もう少しで尊の部屋がある二階に出るという所で、二階の通路に立っているらしい人の頭が見え始めた。
ここに住んでいる人かな?何気なくそう思うが、気にもせず上りきる。

しかし、そこで足が止まった。

通路の人影。
それは、正確には二つ。

こちらに背を向けて立っているのは、尊。
そして・・・。

尊の肩越しに見える、若菜。

若菜を抱き締める、尊の姿だった。

39　謝りたくて（後書き）

こんにちは。玉紀　直です。
いつもとちょっと違う更新時間。（笑）
でも、更新日は守れました！（ゼー、ゼー（息切））

そりゃぁ、あんな話を聞いた後です。
仕事をしていたって気まずいですよ・・・。
尊さんを信じていない訳ではない事を、ちゃんと話して謝りたい真理ちゃん。
でも、そこでまたおかしな場面に遭遇！

さぁ、真理ちゃんが精神的にどんどん追い詰められていきますよ・・・。

次回は１０月１４日更新予定。（しつこいですが遅れても１日！）

では、次回！！

４０　若菜への謝罪

「また何か余計な事を言いに来たんじゃ無いのよ！それは解かって！」

ドアが開いて尊の顔を見た瞬間、一番初めに若菜はそう言った。

「もしかして私、尊君に余計な事を教えてしまったんじゃないかって・・・」

尊が教えてくれと言った訳でもないのに、真理が立花院長の子供であり得る訳がないという事や、息子が４年前に死んでしまっているという事実を、婚約者の父親であり正孝の学友である教授から聞いていた若菜は、それを全て尊に話してしまった。

もしもそれが、言ってはいけない事なら・・・。

それが原因で、二人が別れてしまうような事になれば。

――――また、尊君に会える。

そんなずるい思いが、胸の中で渦を巻いたのは間違いじゃない。

「だから、とりあえず謝ろうと思ったの。・・・もし、本当に余計な事だったら・・・。本当にごめんなさい」

マンションの尊の部屋の前に立ったまま、若菜は、ドアを開けて驚いた顔で自分を見る尊の顔を見上げた。

「怒られるから、もう来ちゃいけないって解かっているけど。せめて謝りたかったの」

尊は部屋を出て、通路で若菜と向かい合う。

「尊君・・・？」

何か一言くらい責められるのではないか。そう思っていた若菜は、尊の様子がおかしいことに気付いた。

表情に、まったく覇気がない。

「やっぱり、私が余計な事を教えたから・・・。真理さんと何かあったの？」

真理の名前を聞いた途端、尊は切なくなった。

彼女が義理の弟と愛し合った事を、責めるつもりなど無い。

子供まで残したのだ。二人が本当に愛し合ったのは間違い無いだろう。

ましてや彼は、子供が出来た事を悩んだ真理に、「産んでいい」と言ったという。

尊は目の前で、心配そうに自分を見ている若菜を見詰めた。

かつて自分は、若菜に子供を堕ろす決断をさせた。

同じ「許されない関係」であっても、産む事を認めた「彼」。認められなかった「自分」。

あまりにも大きな、対応の違い。

「許されない関係」の果てに、子供を産んだ真理と、産めなかった若菜。

「尊君・・・」

自分が言った事で、尊がとんでもなく辛い思いをしたのではないか。

返事をせず、ただ自分を見ている尊を見ながら、若菜は不安な気持ちになった。

そんな若菜を、尊はジッと見詰める。

・・・もしも。

もしもあの時、俺が「産んでいい」と言えていたら。

自分の立場も、若菜の医者としての立場も女としての立場も何も

考えず、「子供を産んでいい」と言っていたら・・・。
――この状況は、どう変わっていただろう。

尊は腕を伸ばして若菜を抱き締めた。
「・・・尊君・・・？」
若菜が驚いた声を出す。それはそうだろう。いきなりこんな事をされるとは、彼女に想像出来るはずも無い。
「どうしたの？ねぇ・・・」
尊は若菜を抱き締める腕に力を入れると、絞り出すような声を出した。
「ごめん・・・」
「え？」
「若菜を、傷付ける事しか出来なくて・・・ごめん・・・」
「・・・・・」
若菜の体を、衝撃にも似た、何かが走った。
「・・・本当に、ごめん・・・」
やがてその衝撃は涙に変わり、視界が歪み始める。
尊が「ごめん」という言葉をくれたのは初めてだった。

妊娠したと言った時も、堕胎した時も、彼から一切そういう言葉は無かったのだ。
元々、許される関係ではなかったのだから、若菜もそんな言葉は期待していなかったが、やはり心の中では、謝罪どころか自分の気持ちを何一つ解かってくれない尊に苛立ちを感じていた。
「友達」であったはずの気持ちは、彼に触れられ触れていくうちに、間違いなく自分の中で「恋」に変わって行ったのだから。
だからこそ・・・。

「尊君は、私の事、好きだった訳じゃないんだよね・・・」妊娠

した。そう告げても何も言ってくれなかった尊を、ただひたすらに責めてしまった・・・。

優しい言葉が欲しかった。
優しく抱き締めて欲しかった。

「許されない関係」の中で、それを求めてしまう自分が、悲しくて哀れで・・・。

「ただ、セックスしたいだけだったんだよね？」慰めから始まった関係。いつの間にか、体だけではなく彼の心までもを欲しがる自分が居た。

自分の気持ちから逃げるように。
自分に言い聞かせるように、

ただひたすらに、彼だけを責めた。

その後、二人の関係が終わっても、尊への気持ちを終わらせられない自分を庇うように、心のどこかで尊を責め続けていた。

「尊・・・く・・・」
抱き締める彼の腕の温かさが、腕の強さが、昔彼に抱かれ、抱き締められた記憶を思い起こさせる。
こんな事をしてはいけないんだ。そう思いながら、彼に抱かれる幸せを手放せずに居たあの頃。

私は・・・尊君が好き・・・。
今も、昔も。忘れられない・・・。

尊は、声も無くただ肩を震わせて泣き始めた若菜を、黙って抱き締めていた。

彼女の為に、何も言えなかった自分。

何もしてやれなかった自分。

真理の「彼」は、義姉弟という立場も、場合によっては何もかも捨てて、真理を守ろうとしたのだろう。

子供をどうしようか迷った真理に「産んでいい」と言えるくらい、彼女を愛していたのだろう。

「若い」と言ってしまえばそれまでだ。

自分の立場も相手の事も何も考えず、気持ちだけで突っ走ってしまえるのは、若い証拠。

しかし尊は、真理の為にそこまで出来た「彼」に、大きな敗北感のようなものを感じていた。

そんな敗北感を感じても尚、真理を好きな自分を止められない。

自分に心を許してくれていなくても。

「彼」より、好きになってくれていなくても・・・。

心は限りなく落ち込んだ。

そんな時に目の前に現れた若菜は、尊に自分と「彼」の差を更に見せ付ける。

「許されない関係」たとえ「彼」が死んでも、子供を産んでその思い出を胸に、幸せそうな真理。

「許されない関係」子供を堕ろし、いまだに尊への思いも断ち切

れず、自分が戻るべき場所に戻りきれない若菜。

俺はどれだけ、若菜を傷付けてしまったんだろう・・・。

「ごめんな・・・。若菜・・・」

目の前の光景を、どう理解しようか・・・。
ほぼ階段を上がりきったところで、真理は立ち竦んだ。

目の前には、恋人の後ろ姿・・・。
――――若菜を抱き締める。尊の姿・・・。

真理の首に抱き付いていた真臣が、小さなアクビをした。
顔が後ろになっているので、真臣にこの光景は見えては居ないが、
真理は真臣の顔を自分の肩に押し付けて前を見ないようにすると、
音を立てないよう静かに踵を返し、階段を降り始めた。

「あれぇ?たけちゃん?」
真理の肩からちょっと目を上げた真臣が、尊の後ろ姿に気付いた。
若菜の姿は見えては居ないが、真臣にはすぐに尊の後ろ姿が分かったようだ。

その瞬間、真理は走り出した!

「真理ちゃん?!」
背後から尊の声がしたが、真理は止まらない。
真臣をシッカリと抱き、階段を駆け下りた!

真臣の声がした瞬間、尊は若菜から手を離し、慌てて振り返った！
若菜も反射的に手を離し、飛び退く！
「真理ちゃん?!」
階段の下に、真理が走り去る姿が見えた。尊も急いで階段を下り始めた。

マンションを出た瞬間、目の前に、ちょうど客を降ろしているタクシーを見つけた。
乗っていた客が降りた瞬間、「すいません！」と言って、タクシーに飛び乗る。
「出して！早く！」
真理は真臣を抱いたまま、運転手に向かって怒鳴った。
「え・・っと、あの、どちらに・・・」
客を降ろしたばかりで、すぐに次の客が乗ってくれたのは嬉しいが、それがどうも訳有りに急がせる女性。
タクシードライバーに成りたてのような若い運転手は、少々焦り気味だ。
「とにかく出して！早く！」
真理がそう言った時、マンションから尊が出てくるのが見えた。
「はやくっ！！」
「はっ、はいっ！！」
運転手がドアを閉め、タクシーが動き出す。

「真理ちゃん！！」
真理がタクシーに乗り込んだのを見た尊は、真理の名を叫びながら駆け寄ろうとしたが、その甲斐もなくタクシーは目の前を走り去

って行った。

「・・・真理ちゃん・・・・」

４０　若菜への謝罪（後書き）

こんにちは。玉紀　直です。

尊さんは、若菜さんに謝ります。

自分が何もしてやれなかった事。

正臣がどんな境遇でも真理に子供を産むように言ったのを聞いて、ショックを受けたんですね。色々好奇の目を向けられたりして嫌な事はありましたが、産まれた真臣のおかげで、真理ちゃんが幸せである事は、誰の目にも明らかです。

許されない関係の果て、でも、子供を産んだ真理ちゃんと、堕ろした若菜さんは、心理的にあまりにも違いすぎていますから・・・。

しかし、謝罪のつもりで抱き締めたその場面を、真理ちゃんがしっかりと見てしまいました。

いつもの彼女なら、相手が自分に気付いているのに黙って立ち去る。なんて失礼な事はしないはず。

それも、自分を追いかけてくる人を、話もしないで振り切るなんて・・・。

二人は、本当にもうこれで終わりなのでしょうか？

次回から、真理ちゃんの行き場の無い心が動き出します。

彼女が秋光君に、あるお願いをしますが・・・。

次回は１０月１８日更新予定。（遅れても１日）

では、次回！！

41　秋光への頼み

「ただいまぁ」
可愛い声が玄関先に響く。
この声を聞くと、一日の疲れも飛んでいってしまうような気がする。
故に、そんな祖父母は声がした途端に、玄関へ出迎えに出てしまうのだ。

「おかえりー、まーちゃん」
「お帰り。真臣。真理」

真臣が帰ってくる時は真理も一緒だという事は解かっているが、ついつい可愛い孫の名前だけが出てしまうのは真澄だ。正孝は一応気を遣って、真理の名前も入れる。
しかしそれも、大分前に「あらー？私は『お帰り』じゃないのねー」と冗談で真理に皮肉を言われたからなのだが。

「あら？」
キッチンから廊下へ出てきた真澄が、玄関で靴を脱いでいる真臣の傍へ屈んでから、辺りをキョロキョロ見回した。
見回さなければ、本来ならばそこに居るべきもう一人を捜せないほど広い玄関でもないのだが、ついそれをやってしまった後に、お行儀良く靴を揃える真臣に問い掛けた。
「まぁちゃん。ママは？」
まるで真臣が一人で帰ってきたかのように、真臣と一緒にいるべき真理が居ないのだ。

靴を揃え終えた真臣は、制帽を脱いで、屈み込みながら自分を見る大好きな祖父母にニッコリと笑いかけた。
「ママね。秋パパのお店」
「秋光君の？何か買い物かしら」
「ぼくね、ママのごようじにつきあったから、おかしかってもらうやくそくしたんだ。でも、タクシーでかえってきちゃったから、ぼくはさきにおうちに入ったけど、ママはおかしかいに行った」
「そう。そういえば遅かったもんね。・・・遅いね、って言ってたのよ。お腹すいたでしょ？真理も、用があるなら言えば良いのに。そうしたら、私がまぁちゃんを迎えに行ったのに・・・」
もぅ七時半だ。その通り真臣はお腹が空いたらしく、ちょっとフクレ顔でお腹をさすった。

「たけちゃんがいるところに行ったから、ごはんたべに行くのかな、っておもったけど、ママね、バイバイも言わないでかえってきちゃったんだよ」
「・・・尊先生？」
真臣は大きく頷いて、制服のボタンを外し始めた。
真臣の鞄と制帽を手にして、屈んでいた真澄が立ち上がり、リビングの入口で話を聞いていた正孝と顔を見合す。

「何かあったのかしら・・・」
真澄の表情が不安そうに変わった。
元々真理に、真臣の為にも自分の幸せをちゃんと考えなくては駄目だ、と言ったのは真澄だ。
尊が真理に好意を持っているのを感じ、尊の人柄ならば大丈夫だろうと、食事に行くようにけしかけたり、進んで真臣を預かったり。と、何かと娘の幸せの為に微力を尽くしていたのだ。
心配そうな真澄を見ながら、正孝は小さく息を吐き、辛そうに呟いた。

「・・・正臣の事で、また真理が嫌な思いをしなきゃいいんだがね・・・」

「ありがとうございました！」

好印象を与える元気な声で、シメの挨拶をしながら笑顔を作り手を振る。

すると、店を出て行こうとしていた幼稚園児くらいの男の子が、母親に手を引かれ秋光に笑いかけながら手を振り返して来た。

今の親子連れが出て行き、店内に静けさが戻る。

秋光はカウンターに手を付いて、グルッと店内を見回した。

パートはとっくに帰ったので、今は彼一人だけだ。客層的に昼間がメインのこの店は、夜になるといつ閉めても良いくらい暇になる。

菓子類の棚でも見てくるかな・・・。さっきの男の子は、母親にお菓子をねだるのに、結構長い間もめていた。

「これとこれ」「駄目。一個」「じゃぁ、こっち」「そんな大きいの食べられないでしょっ」結局はスタンダードに、ラムネ菓子とキャラクターの顔が付いたチョコレートを買ってもらっていたようだ。

小さな子供が立ち去った後の菓子棚は荒れている事が多い。親が一緒でも意外に変わらない。買わない商品をあっちこっち触っても、「どうせ店で直すでしょ？それが仕事じゃない」とばかりに知らん振りの親が多いからだ。

真理さんはなー、若い母親だけど、ちゃんと注意とかするぞー。

真臣だって、ちゃんと直すし。・・・いい子だよなぁ・・・。

真理の事を思い出しながら、カウンターを出て菓子棚の方へ歩く。

――――オレ、真理さんの事、好きだ。

昼間、自分が言ってしまった言葉を思い出しながら立ち止まる。
思ったよりは乱れていない菓子棚を見詰めながら、考え込んだ。

好きだ・・・。――――――

言ってしまった言葉・・・。
伝えてしまった想い・・・。

もう引き返す事は出来ないと、覚悟を決める秋光の気持ちをいつまでも奮い立たせるように、真理は時間ギリギリまで彼の傍にいた。
何も話す事は無い。
しかし、落ち着いた幸せな空気がそこにあり、彼は幸せを感じた。

後悔なんてしない・・・。
ずっと好きだったのは、間違いじゃないんだ。

静かな店内に、ドアが開く音が響いた。
「いらっしゃいませ・・・」
条件反射で出る、言葉と笑顔。
しかし、言葉の語尾が伸びる事も無く、彼の言葉も笑顔も入ってきた人物を見て止まった。

そこには、真理が立っていた。

カウンターの中に秋光がいないのを見て、真理は声がした菓子棚の方へ目を向ける。
二人の目が合い、しばらくそのまま見詰め合った。

「・・・また、八時前なのに、閉まってるのかと思った・・・」
真理はちょっと皮肉を言いながら、秋光が立っている棚へ近付く。
秋光の前に立ち、彼を近くに感じた瞬間、昼間の事を思い出しドキッとした。

彼の唇の感触が不意に蘇った。
その時に安らいだ、自分の気持ちを思い出した・・・。

「いらっしゃい。珍しいね。こんな時間に一人で」
言葉を出しあぐねている真理を気遣うように、秋光が先に話しかける。
いつも通りのその口調に、真理はちょっとホッとした。
「真臣に、お菓子買ってあげるって約束していたんだけど・・・。ここに寄らないで家まで帰っちゃったから・・・。買いに来たの」
真臣が一緒ではないのだから、別にどこで買ってもいいのだが、真理は当然のようにここへ来た。

ここへ、来たかった・・・。

「もしかして、今帰り？随分遅かったね。どっか行ってたの？」
真理が薄いレースのカーディガンにショルダーバッグを提げているのを見て、まだ家に帰っていないのだろうという事が解かる。

何気なく訊いて棚の商品を整え始めた秋光の手は、真理の返事を聞いて一瞬止まった。
「・・・尊さんの所・・・」
「・・・」
「謝ろうと思ったの・・・。大切な事、黙っていた事」
「・・・謝ったの？」
秋光はしゃがみ込み、下の列を直し始める。
そんなに乱れていた訳では無いので整理はすぐに終わったが、真理から何も返事が返ってこないので変に思った秋光は、しゃがんだまま真理を見上げた。
「真理さん？」
秋光が驚いて、ゆっくりと立ち上がる。

真理が、泣きそうな顔をしているのだ。
大きな目を潤ませて。
下唇を噛み締めて。

「何か、言われたの？」
謝りに行った真理に、尊が何か心無い事を言ったのだろうか？そう思った秋光は、真理を気遣うように声を掛ける。
が、その瞬間、真理が秋光に抱き付いた。
「・・・真理さん・・・？」

何を言ったんだ？あの男・・・。
場合によっちゃ許さねーぞ。

秋光が真理の両肩に手を置いて、とりあえず何があったのかを訊こうとした時、真理が、彼の胸の中で呟いた。

「・・・抱いて・・・・」

「え・・・・？」

秋光の背中に回された真理の手が、力いっぱい彼のシャツを掴む。

「私の事・・・抱いて・・・・」

４１　秋光への頼み（後書き）

こんにちは。玉紀　直です。
真理ちゃんと尊さんの仲が深まっていくにしたがって、どうしても避けられない事実を気にする両親。
特に、本当の母親である真澄さんは、気が気では無いでしょう。

そして、当たり前のように、心が辛くなると来てしまう場所。
会いたくなる人。
尊さんの前から逃げた真理ちゃん。
秋光君の前で見せた涙は、誰のためなのでしょう？
そして彼女が突然秋光君にした頼みごと・・・。
秋光君は、どう答える？

次回は１０月２１日更新！（遅れても１日）

では次回！

42　優しいキス

「・・・真理・・さん・・・？」
しっかりと掴まれたシャツの背中が、痛いくらいに熱い。
その握り締める力で、真理が必死の思いで今の台詞を口から出した事が、秋光には分かった。

――私のこと・・・抱いて・・・。

しっかりと自分に、しがみつくように抱きつく真理。
ここに来る前、尊に会いに行ったという彼女。
その後にこれでは、何か有ったのだろうという事が嫌でも解かってしまう。

――抱いて・・・。

その言葉が心から出たものではなく、一時の感情の果てに出たものだという事が、嫌でも解かる。

いくらオレが、バカでもな・・・。
秋光は真理の肩に置いた両手にぐっと力を入れると、半場無理矢理に彼女を自分から引き剥がした！
「！」
あまりにも勢い良く乱暴に引き離され、真理は驚きに体が大きく震える。
「秋光君・・・？」

真理が大きな目を見開いて秋光を見上げる。彼の背に回していた手が、引き離されたまま彼の体の横で行き場を失い彷徨った。
「真理さん」
秋光は真理の肩に手を置いたまま、商品陳列棚の上から店の外へ目を向けた。

「正臣・・・見てるよ」

ビクッ!!
その言葉に、より一層真理の体が震える。
真理は秋光の視線の先を追った。

コンビニの外に見える夜空。
雲の間から、自己主張するような明るい月が見え隠れする。
「正臣の前で、そんな事言ったら・・・」
「ずるいよ!秋光君!」
真理を思い直させようと正臣の名前を出した秋光だが、真理はそんな秋光を非難した。

「ずるいよ!・・・だって・・・、秋光君、私の事、好きだって言ってくれたじゃない!」
「・・・好きだよ」
「じゃぁ・・・どうして抱いてくれないの?・・・嫌だからって、正臣の名前出すなんてずるい・・・。昼間は私の言ってる事なんて聞いてくれなかったくせに!」
真理は、動揺する自分を抑える事が出来ない。

尊と若菜が抱き合う姿を見た時、自分はどうしたらいいか解からなくなった。
助けて欲しかった。教えて欲しかった。・・・自分がどうしたらいいのか。
真理は、それを秋光に求めた。
苦しくて辛い気持ちを受け止めて欲しくて、真理は秋光の腕の中へ飛び込んだのだ。

――しかし彼は、それを拒んだ。

「正臣の名前・・・出さないで・・・。お願い。私・・本当に、秋光君に・・・」
「・・・ヤれりゃいいってもんじゃない・・・」
すがる様に秋光を見る真理を見ながら、彼はちょっと怒った顔をした。
「・・・昔みたいなガキじゃない・・・。ヤれりゃぁいいってもんじゃないんだ」
重たく真剣な口調に、真理の言葉は止まる。彼女はじっと目の前の秋光を見詰めた。

「真理さんが傷付いているのを利用して・・・ただヤりたいだけなら・・・。四年前にとっくにしてる・・・。正臣のことで傷ついて悲しくて弱くなっている真理さんを、犯してでも自分のものにしてる・・・」
「・・・・・」
「でも、そんな事、出来なかったし、したくなかった」
自分を見詰める真理を、秋光は食い入るように見詰めた。
「真理さんの事。本当に好きだから、そんな事、したくなかった」

真理は息が詰まりそうになった。
秋光の言葉が、何かとてつもなく重たい物となって、自分の心の中へ入り込んでくる。

こんなに私の事を想ってくれている人を、私は私の行き場のない思いの為に利用しようとしたんだ・・・。
「秋光く・・・」
秋光を見つめる真理の瞳に、涙が滲んだ。
「何かあったんだろ?」
「・・・・・」
「あの先生と」
尊が若菜と抱き合っていた場面が、目の奥に焼き付いて離れない。
どうしてこんなにショックなのか・・・。
どうしてこんなに、辛いのか。

「何か、嫌なことでも言われた?正臣の事なら、場合によっちゃ、オレ・・・」
「違うの・・・。何も言われてなんか居ないの・・・。ただ、私が・・・」
真理に気付き、後を追いかけてきた尊。
その尊を振り切って、自分は逃げてきてしまった。

――――裏切られた・・・?

そんな気持ちが心の中に渦巻いて、怖くなった。

真理は指で涙が溜まった目頭をちょっと押さえ、それから再び秋光を見上げて、我ながら情けないな、と思う顔で笑う。
「・・・ごめんね・・・。秋光君」

秋光は肩に置いていた両手で真理の頭を押さえ、静かにキスをした。

「・・あき・・・みつ・・くん・・・」

唇が触れていても話す事が出来るくらい。
触れるだけの・・・優しいキス。
昼間と同じ・・・。優しいキス。

雲の間から、月が見え隠れする。

なのに真理は、いつものように「正臣が見ている」という罪の意識を感じないのだ・・・。

正臣じゃない人と、唇を重ねているのに・・・。

月が、見ているのに・・・。

「でもさ・・・」

秋光は唇と手を真理から離すと、ニヤッとして強気の口調で言った。

「次にこんなチャンスがあったら、今度は今みたいに遠慮はしないからさ。口には気をつけてよね」

真理が赤くなる。よく考えてみれば「抱いてくれ」などと、とんでもない事を言ってしまったものだ。

「ごめんね・・・ありがとう・・」
真理が恥ずかしそうに笑う。
その顔を見て、秋光も笑った。

そして真理は、心の中で湧き上っては「静止」される思いを、抑え続ける。

――この人は、正臣の友人なんだよ・・・・・。

「もう、いいかな?」
その時、その声と共に店のドアが開く音がした。
秋光は黙ってドアのほうへ目を向け、真理は聞き覚えのあるその声に、顔を動かす事も出来ない。

「真理ちゃんを、返してくれるかい?」

尊が、ドアを開けて立っていた。

４２　優しいキス（後書き）

こんにちは。玉紀　直です。
行き場を見失った心の慰めを秋光君に求めた真理ちゃんですが、彼はそれを受け入れる事はしませんでした。
真理ちゃんの心から、抑えつけられる想いが出てきそうになる優しいキスは、これから彼女の心をどう変えるのでしょう？
でも、キスをして落ち着いた彼女の前に現れたのは・・・。

次回は１０月２５日更新予定。（遅れても１日）

では、次回！

43　奪還・・・そして

「早く彼女を追いかけて！ちゃんと説明しなきゃ駄目よ！」
そう言って、真理を追うようにけし掛けたのは若菜だった。
このまま放っておけば、真理は誤解をしたまま尊とは別れてしまうかもしれない。
しかし、若菜には「行かないで。追いかけないで」と尊を止める事は出来なかった。
「すまなかった」と心から詫びて自分を抱き締めてくれた尊に、それ以上の辛い思いをさせることは出来なかったのだ。

一時の感情。なんかじゃない・・・。
私は本当に尊君が好きだった。
友達としてずっと傍にいて、それに気付けなかっただけ・・・。

二人は友達。
自分には婚約者がいる。
「許されない関係」を結んでしまっただけ。
・・・そんなふうに自分の中で割り切る事なんかしないで、「好きだ」と認めてすぐにでも婚約者と別れていたら・・・。この状況は、変わっていただろうか？

そう考えても、全ては手遅れ。

尊は若菜をその場に残し、真理の後を追った。

真臣が一緒だったのだ。真理の性格上、どこかに寄るという事は無いだろう。
立花家へ向かって車を走らせながら、信号で停まる度に、雲の間から見え隠れしている明るい月が目に入る。
尊は、無意識のうちにその月を睨み付けていた。
真理の心を、いつまでも縛り付けるものを・・・。

頭の中が真理の笑顔で満たされる。
初めて会った時、あの笑顔に惹かれた。
あの笑顔を、自分だけの物にしたかった。
自分だけに向けて欲しかった・・・。

しかし、真理の本当の笑顔は、もう居ない「彼」だけのもの・・・。

悔しくて、辛くて、堪らない。
行き場のない想いが、溜まって行くばかり。

真理が義理の弟と愛し合った事など、責めるつもりは無い。
ましてや子供を産んだ事を、なじる気も無い。

ただ、「彼」の事は「過去」として、自分を見て欲しい。
自分に本当に心を開いて欲しい。
それだけだった。

尊は、彼女の笑顔が欲しかった。自分だけの為に。

・・・しかし、尊はそこで、フッと気付いた。

もう一人、自分以外にも、真理のあの笑顔を欲しがっている男が居る。

・・・多分、間違いなく・・・。

何かの予感だったのかもしれない。

尊は秋光のコンビニの前で車を降りた。

真正面ではなく、店横の駐車場に車を停め、何気なくそこから店の中を覗く。

中に客は居ない。

しかし、商品棚の間に真理の後ろ姿を見つけた。

――秋光に抱きつく、真理の姿を・・・。

秋光が真理を引き離し、何かを話している。

そして・・・。

秋光が真理にキスをしたのを、尊はその目でハッキリと見た。

尊は、湧き立つ何かを抑えながら、店の出入り口へと向かった。

「あんた・・・。真理さんに何をしたんだ?」

尊が店へ入ってきて、自分達の方へ近付いてくるのを見ながら、秋光が尊に問い掛けた。

「まさか、正臣のことで真理さんを責めるような事を言ったんじゃ・・・」

突っかかりそうになった秋光を、真理が慌てて止める。

「違うよ。秋光君。何も言われてないよ・・・。ごめんね、変な心配させて!」

自分を振り返らないまま秋光を気遣う真理の腕を、尊は思い切り引き、秋光の傍から引き離した。
「・・・あ・・！」
その勢いで真理がよろけ、バランスを失うが、そんな彼女の体を尊は片腕で素早く支え、彼女が離れないように腕の中へ抱き込むと、秋光を睨むように見る。

「これは、俺と彼女の問題だ。・・・君が口を出す事じゃないだろう？」
明らかに今のは秋光の気に触った。
険しい顔で秋光は尊を睨み返した。

「君は、真理ちゃんの『友達』なんだろう？いくら泣き付かれたからって・・・。やりすぎなんじゃないのか？」
キスしていたところを見ていたと言わないまでも、尊に見られたと察した真理は、無意識のうちに体がビクッと震えた。
しかし、この尊の言い方に自分を抑えられなくなったのは秋光の方だ。
「・・・テメ・・ェ・・・」
小さな声で呟き、両手をグッと握り締める。
今にも殴りかかっていきそうな雰囲気を察した真理は、慌てて尊の腕を押しのけ、秋光と尊の間に立った。

「ごめんなさい・・・！秋光君！私・・・大丈夫だから・・・」
「・・・真理さん」
放っておけば喧嘩になってしまう。それを止めようと、真理は懸命に秋光へ笑顔を見せた。
「ごめんなさい。くだらない事で心配させて。・・・本当よ。本当に大丈夫だから！」
「でも、真理さんっ」

「ごめんなさい！」
真理は、相変わらず握り締められて緩まない、秋光の両拳を包み込むように握った。

「ごめんね・・・。本当に・・・」
必死で自分を止めようとする真理を見て、秋光の体から気負っていた力が抜ける。真理はホッとして手を離した。

すると尊が、真理の肩を抱いて彼女を引き寄せる。
「行こう。真理ちゃん」
「じゃ、じゃぁ、秋光君・・・。また・・明日・・・」
さっさと歩き出す尊に引きずられるように、真理も歩き出す。
店を出る直前、真理は一瞬、チラッと秋光を振り返った。

辛そうな表情で自分を見る彼が目に入り、真理は泣きたい気持ちになった・・・。

店の前に停めてあった車に真理を乗せ、尊は立花家には送らなかった。
近くの公園まで走り横道に車を停めると、すぐに真理を抱き締めたのだ。
「・・・尊さん・・・」
「ごめんね・・・。真理ちゃん」
元々は自分が謝ろうと思っていたのに先に謝られてしまい、真理は少し戸惑う。

「あの・・・尊さん。私・・・」
「若菜の事、・・・責められても俺は何も言えない。彼女と関係が

あったのは間違いじゃないし、子供を堕ろさせてしまったのも事実だ。・・・そんな事をしていた俺に、君が誰と愛し合っただの、誰の子供を産んだだの、そんな事で君を責める資格なんて無い」
尊は真理を抱きしめたまま、想いを全て吐き出してしまうかのように口にした。

「でも、解かって欲しい。・・・俺は、本当に君が好きなんだ・・・。初めて会った時から・・・」
「・・・・・」
尊は真理を抱きしめたまま、顔を上げて彼女を見詰めた。

「何もかも、ひっくるめて、俺に預けて欲しい。・・・君を、守らせて欲しいんだ」
「尊さん・・・？」

尊の言葉の意味に気付き始めた真理は、大きな目を更に大きく見開く。
そして尊は、その瞳を見詰めながら言った。

「結婚しよう。真理ちゃん」

４３　奪還・・・そして（後書き）

こんにちは。玉紀　直です。

真理ちゃんに惹かれ、止められない尊さん。
秋光君という存在に危機感を感じながら、彼の元から真理ちゃんを奪い返しました。
自分の思いを彼女に告げて、彼がしたのは・・・。
プロポーズでした・・・。

中途半端な真理ちゃんの気持ち。
全てをひっくるめて、と言いながら、明らかに秋光君や正臣君の存在を気にする尊さん。
そして、秋光君の想いは・・・。

崩れ始めている真理ちゃんの心に、最初に気付けるのは誰なんでしょう？

次回は１０月２９日更新予定！（遅れても一日！）

では、次回！！

４４　真理の幸せ？

「すぐ返事をくれとは言わないよ・・・」
尊はそう言って、真理を抱き締めた。
「真理ちゃんにだって、色々と考えなくちゃいけない事があるだろうし」
正臣の事。子供の事。確かに真理には、考えなくてはならない事が沢山ある。

予想はしていた。
いつかは言われるだろうとは思っていた。
しかし、そうは思っていても、突然されたプロポーズに真理の頭の中は真っ白になる。
何も考えられなくなった頭の中に、尊の声は響く。

「幸せにするから。・・・本当に、真剣に考えて欲しい」
そのままストレートに尊の言葉が頭の中に入り込み・・・そして・・・。

――俺、お前の事、幸せにするから・・・。

昔、正臣に言われた言葉と重なる。

「真理ちゃんと真臣君を幸せにする権利を、俺がもらいたいんだ・・・」

――絶対、幸せにするから。

同じ様に真理を抱き締めて、そう言った正臣。

真っ暗な車内。雲に隠されながらも時々顔を出す明るい月の光が、フロントガラスから時折射し込んで来る。

エンジンを停めてしまっているので、車内の中の静寂がやけに重苦しい。

尊に抱き締められたまま、真理はフロントガラスから見える夜空に目を向けた。

雲に隠されながら、月が見てる。

昔、絶対に幸せをすると、真理に約束した、月。(まさおみ)

「幸せ・・・？」

真理がポツリと呟くと、尊は体を離し、真理の肩に手を置いたまま彼女の顔をジッと見詰めた。

「幸せにするよ・・・」

そして尊は、そのまま真理の唇に静かに唇を重ねる。

尊のキスを受けながら、真理は最初に唇を重ねた時のように目を開いたまま前を見ていた。

視線をかすかにずらし、フロントガラスから見える月を見詰める。

月が見ている。
――何やってんの？真理。
そう言っているような気がする。

尊の熱っぽい唇と舌を感じながら、真理は秋光にされたキスを思い出していた。

触れるだけの、優しいキス。
それ以上の行為を、彼はしなかった。

そして、何故かその時、月の声（まさおみ）は真理には聞こえなかったのだ。

「でもさ・・・」
唇を離しながら、尊はずっと月を見詰めていた真理の瞳を見詰める。
「あまり・・・長く待たせないで欲しい・・・。我慢できなくならない程度で頼むよ」
冗談めかして言いながら、病院で子供達に接する時のような人懐っこい笑顔を作る。そしてもう一度、真理を抱き締めた。

「愛してるよ。真理ちゃん」

――愛してる・・・。真理。

尊の仕草が、尊の言葉が、次々に正臣と重なる。

――――・・・一生。お前だけに言うよ。

幸せにすると言った彼。

一生、愛してると言うと約束してくれた彼。

・　・・なのに・・・あなたは、どこにいるの・・・？

真理の心が、真っ白な空間に投げ出されてしまったかのように彷徨い出す。

どこにいるの・・・？

正臣・・・・・？

「まぁちゃん、寝ちゃったわよ」

帰宅してリビングに入ってきた真理を見て、どうやら洗濯をしていたらしい真澄が、濡れた衣服のしわを伸ばしながら「しょうがないわね」とでも言うように笑った。

「お帰り。真理。お腹空いてないのか？」

ソファに座って新聞を見ていた正孝が、真理に笑いかける。

もうすぐ9時になる。真臣が寝てしまうのは当たり前だ。

子供を置いて姿を消したままだったというのに、両親は何も言わない。それどころか、気を遣うように笑いかけてくれる。

もしかしたら、尊の所へ行った事を、真臣が両親に話したのだろうか？そう思うと妙に恥ずかしくなり、言い訳をするように口を開

いた。

「尊先生に・・・プロポーズされた・・・」

「え?!!」

当たり前だが両親は驚き、二人揃って真理の顔を見た。

「返事はしてないけど・・・」

真澄は手に持っていた濡れた衣服をキッチンとリビングを仕切るカウンターテーブルの上へ置くと、笑顔で真理に駆け寄り両肩に手を置いた。

「おめでとう。よかったね。真理」

「・・・お母さん・・・」

「尊先生、優しくて良い人だもの。きっと、真理ちゃんとまぁちゃんの事、幸せにしてくれるよ」

「・・・幸せ・・・?」

真理は自分でも気付かないうちに呆然とした表情を作り、正孝へ視線を移した。

正孝としては複雑だろう。

元々真理は、自分の息子、正臣と結婚するはずだったのだ。

真澄と再婚して自分の娘にはなったものの、自分の息子と結婚するはずだった真理が、他の男のものになるかもしれないのだ。

しかし、正臣の死で真理がどれだけ苦しみ悲しんだか。正孝だって知っている。

そんな真理が幸せになるというのだ。その一歩を掴もうとしているのだ。「親」として、見守ってやるべきだろう。

「真理は・・・園居君が好きなんだろう?」

正孝の言葉に、真理は呆然とした声で呟いた。

「・・・好き・・・?」

尊さんが・・・好き？
結婚してもいいくらい？
正臣を忘れて、結婚してもいいくらい・・・？

「当たり前よね、真理。あんなに真理の事を想ってくれているんだもの。きっと幸せにしてくれるわ」
真澄は本心から嬉しかった。
辛い思いをして、色々な壁を乗り越えて正臣と幸せを掴もうとしていた矢先に起きた悲劇。
真理がどれだけ泣いたか。どれだけ苦しんだか。
それを痛いくらい知っているからこそ、尊が真理を想い、幸せにする覚悟を決めてくれている事を知って、とても嬉しかったのだ。

「お母さん・・・」
しかし真理は、呆然としたまま、真澄に問い掛けた。
「私の、幸せって、何？」
真澄の顔から、徐々に笑顔が消えていく。真理があまり嬉しそうにしていない事が不思議なのだ。
「私の幸せって、何なの？」
「それは、ちゃんと真理を愛してくれる人と結婚して、まぁちゃんにも、父親がいる幸せをあげて・・・」

「正臣を忘れて？・・・正臣の事を全部忘れて、違う人と結婚することが、私の幸せなの？」

――――お前の事、幸せにするから。

真理の中で、声が響く。
正臣の声。

それは、「愛してる」と囁いた尊の声でも、「好きだ」と言った秋光の声でもない。

――愛してるよ。真理。

彼が約束した「幸せ」。

囁いた「愛」。

「なのに・・・」

真理の瞳に涙が溢れた。
どうしてこんなに、苦しまなければならない？
どうして無理矢理、幸せにならなければならない？

正臣を・・・忘れて？

――私の、「幸せ」って、何？！！

「正臣がいなきゃ！私に幸せなんて無いの！！」

泣きながら、真理は叫んだ。
次から次へと涙は流れ、止まる事無く彼女の頬を流れて行く。

どうして？

どうして、あなたは、私の傍に居ないの？

「誰が」私から、あなたを奪ったの？！！

「・・・・・」

涙を止める術を知らないまま、真理は踵を返しリビングを逃げるように飛び出した！

「真理！」

追おうとした真澄を、正孝が肩を掴んで止め、首を振った。

私の「幸せ」を、誰が奪ったの？！

私から「正臣」を奪ったのは誰？！

バタンッ！！

ドアが、壊れてしまいそうな音を立てて閉まる。

自分の部屋のドアを閉めた真理は、カーテンが閉じられていない窓から覗く、明るい月を見詰めた。

「あの人・・・」

ポツリと呟いて、月を見詰める。

――太陽に、影が落ちる。

明るい太陽に、月の影が落ちる。

真理の心が、崩れてゆく・・・。――

４４　真理の幸せ？（後書き）

こんにちは。玉紀　直です。
尊さんからプロポーズされた真理ちゃん。
幸せの意味を考えれば考えるほど、思い浮かぶのは正臣の事。
「正臣がいなければ、幸せになんてなれない」
じゃあ、彼女の幸せを奪ったのは誰？

さぁ、三番目の星の出番です。
自分を見失い、崩れかけた心のまま、真理ちゃんがした事は・・・
。

次回１１月２日更新予定。（遅れても１日）

では、次回！！

45　父親の承諾

「あれ？真理ちゃんは？」
思わず口から出てしまってから、ほかの看護士や事務員の視線が一斉に自分へと注がれ、尊は手で口を押さえた。
「今日はお休みみたいですよぉ。知らないんですかぁ？」
横に立った美鈴が、小声で冷やかす。
毎朝恒例の朝礼。冷やかされ気まずい顔をする尊を、正孝は苦笑いをしながら眺めた。

休み。なんて、どうしたんだろう？
最近季節病が多くなってきている、という看護士長である真澄の話を、どこか耳に入れては素通りさせながら、尊は真理の事を考えた。
特に昨日、具合が悪そうではなかった。
昨夜は、近いうちにプロポーズの返事をすると約束して、尊と別れたのだ。
本当はすぐにでも返事は欲しい。
しかし、色々と事情がある真理に、そんな無理強いをしてはいけない事くらい尊にだって解かっている。

真理ちゃんを。真臣君を。俺が守っていきたい。
幸せにしてあげたい。
真理ちゃんを、愛しているから・・・。

自分の気持ちは伝えた。

あとは、真理の答えを待つだけだ。
自信があるか無いかでいえば、尊には自信があった。
O，Kをもらえるだけの気持ちを、尊は真理に伝えられたと思っているのだ。

ただひとつ、どうしても気になる事がある。
――秋光の存在だった。
真理は秋光を「友達」だと言っていた。
その「友達」にキスをされても、彼女は特に嫌がる素振りを見せなかった。
秋光は自分と同じ気持ちを真理に持っている。ただ、「彼」の友人だったという立場から、あまり強く出られないのだろう・・・。
ちょっと要注意だな。そう、尊は感じていた。

「園居君」
名前を呼ばれて、ハッと我に返る。
いつの間にか周りに居た看護士達も居なくなり、みんな仕事の準備に入っていた。
考え事をしていて、朝礼が終わった事にも気付かない尊に声をかけてきたのは、正孝だった。
「すまないね。真理は今日、用事があると言って休みなんだよ」
「あ・・・、そうなんですか・・」
少々笑いが引きつってしまった。自分がつい呟いてしまった言葉に、わざわざ正孝が答えに来てくれたのかと思うと、何となく気恥ずかしい。
「具合が悪いとかじゃないなら、安心です」
尊が本当に安心したような口調で笑顔を見せると、その笑顔をちょっと辛そうに見ていた正孝が、小さな声で彼に言った。

「真理に・・・プロポーズしてくれたそうだね・・・」

「え？」

尊は驚いて正孝を見てから、ちょっと周囲に目を走らせた。

別に悪い話をしている訳ではないのだが、まだ返事はもらっていないのだ。誰かに聞かれるのはやはり気恥ずかしい。

幸い、みんな自分の仕事の準備に忙しい。正孝と尊が話している内容を聞いていそうな者はいなかった。

尊は改めて正孝の目を見ると、ハッキリと答えた。

「はい。真理さんと、結婚したいと思っています」

周囲に配慮して、正孝と同じ、声は少し控えめ。

しかしその口調の強さは、しっかりと真剣であることを正孝へ伝えた。

「まだ、返事はもらってはいません。ですが、良い返事をもらえると信じています。・・・その時は、改めて院長にご挨拶に上がります」

真剣に真理との結婚を口にする尊。

その尊の姿と、真理の事を話す真剣な口調を聞いていると、正孝は死んだ正臣の事を思い出し胸が苦しくなった。

尊は、背格好が正臣にとてもよく似ているのだ・・・。

白衣を着て立つ姿は、生きていれば医者になってこの病院を継いでくれるはずだった息子の姿を嫌でも思い起こさせる。

「真臣の・・・父親の事は、知っているかい？」

知らないなら、知らないままで良い。そんな気持ちだったが、尊から返ってきたのはそんな気持ちを裏切る言葉だった。

「院長の、息子さんですよね？」

正孝は一瞬言葉をなくすが、あきらめたように「そうだ」と小さく呟き、少々厳しい目でい彼を見た。
「それを全て理解した上で、真理にプロポーズしたと思っていいのだね？」
「はい」
ハッキリとした口調で返事を返して、尊は言葉を続けた。
「最初、驚かなかったといえば嘘です。けれど、そんな事、僕が真理さんを好きな事と何の関係も無い。そんな過去も全てまとめて、僕は真理さんと一緒になりたいと思っています」
尊がどれだけ真剣なのか、その口調から正孝に伝わってくる。

園居君なら、大丈夫かもしれない・・・。

そんな思いが胸に湧き始めた正孝は「ありがとう」と一言言うと、どうしても彼に分かってもらいたかった事を最後に口にした。

「これだけは分かって欲しい。・・・あの二人は、決して若いだけの勢いで愛し合った訳じゃない・・・。本当に真剣だった。へたな大人よりも真剣で一途だった。本当に心から純粋に、二人は繋がっていたんだよ・・・」

他人が触れば壊れてしまいそうなほどの、危うい純粋さ。
怖いほど真剣に。
短い期間(とき)を愛し合った。

「父親」の言葉を、尊は心に刻むように聞いた。
そして、真理との事を認めてもらえたと、確信したのだ。

「初めてですね。こんな事」
弁護士の今泉は、車に乗り込みながら、先に後部座席へ乗り込んでいた真理をルームミラー越しに見た。
「先週『見舞い』に行ったばかりなのに」
今泉の言葉に、真理は特別返事を返すことは無かった。車の後部座席に黙って座り、ショルダーバッグを膝に置いて、ただ微かに微笑む。

「井関恭吾の見舞いに行きたい」真理は昨夜、弁護士の今泉に連絡を取り、その事を伝えた。
真理が井関に会いに行く時は、弁護士や警察官などが同行しなければいけない事になっている。今日の午前中が空いていた今泉は、
「じゃぁ、明日の午前中に行きましょう」と答えた。
先週「見舞い」に行ったばかり。こんな事は初めてで、どうしたのかとも思ったが、一週間と開けずに真理の顔を見たら、もしかしたら井関の病状は変わるかもしれない。と良いほうへ考え、特に何の疑いも持たず引き受けた。

「雨が降りそうですね」
何気なく口から出して、運転席のドアを閉める。
真理は顔の横にかかる、サラサラとした綺麗なストレートヘアの隙間から、外の景色をチラッと見た。

どんよりとした空。
灰色の雲が、本来そこにあるべき太陽を隠している。

「そうですね・・・」

小さく呟く。無感情な声で。
それと同じくらい、無機質で光を失った目を、外に向けながら。

彼は、本をめくる手を止めた。
何度も何度も読まれている本。しかし彼は、自分のその行為に気付いてはいない。

止まった時間。
動かない、現在(いま)。
――幸せなまま止まった、彼の記憶。

「真理・・・？」

それは、予感・・・・・。

愛しい少女が、彼の元へやってくる時感じる、予感。

愛しい太陽が。

彼の幸せな時間を、壊しに来る。

予感・・・・・。

４５　父親の承諾（後書き）

こんにちは。玉紀　直です。
やっと一日進みました！
お話の中で、３４話から４４話まで一日分のお話だったんですよ！
しかし、一日にあんだけの事が有ったら頭がおかしくなりそうですよね。
なのに真理ちゃんは、井関さんのところへ向かいます。

結婚しようとする時、女性側の父親の承諾って重要ですよね。
尊さんは真理ちゃんを真剣に思っていることを話す事で、正孝さんの承諾を得られたようです。
あとは真理ちゃんの気持ちですが・・・。
今の彼女は、きっと、尊さんの事も、秋光君の事も、頭には無いかもしれません。

井関さんに会い行った真理ちゃん。
そこで彼女がしたことは・・・。

次回、１１月６日更新予定！（遅れても一日）

では、次回！！

46　澱んだ太陽

「真理、来てくれたんだ！」

――――いつもの台詞・・・。

井関恭吾はとても嬉しそうに笑いながら、すでに何度も読み返されボロボロになってしまっている事にも気付かない本を、目の前の小さなテーブルへ放り投げるように置き、椅子から立ち上がる。

――――いつもと同じ行動。

真理は嬉しそうに笑顔を向ける彼を、冷たい目で見詰めた。

何も知らず。
何も考えず。
ただ「覚えていない」というだけで、自分の幸せの中で生きている人。
自分が何をしたか。
私から何を奪ったかも。
忘れてしまった人。

そして、今も尚、私が苦しみ続ける原因を作る人。

神経精神専門病院の最上階。閉鎖病棟。

その「保護室」へ入院する井関恭吾の元へ、真理は月に一度ほど見舞いに来ていた。

しかし、今回は先週来たばかり・・・。

どういった風の吹き回しかな?そう思いつつも、付添いで来ていた弁護士の今泉は、保護室の扉に寄り掛かり二人の様子を眺めた。

真理が見舞いに来た時、今泉は井関の前には出ずにドアの所で見ている約束になっている。第一、真理を目の前にした時、井関の目には彼女しか映ってはいない。彼女の事しか考えてはいない。

あれ?

今泉はどこかおかしい感覚に襲われ、目の前に立つ真理の背中を眺めた。

いつもならば、井関が真理の顔を見て「いつもの」台詞を言い「いつもの」行動に出た直後、真理は部屋の中央に進み出て彼にニコッと笑いかけていたはずなのだ。

なのに今日は、なかなか部屋の中央まで進み出て行かない。

井関もまるで舞台で演じる役者のように、止まったままその行動を待っているというのに。

「立花さん・・・」

今泉は後ろから小声で真理に呼びかけた。

どうしたのだろう?やっぱり辛いから帰りたいというなら、とりあえず一通り済ませて、すぐにでも・・・。

今泉が真理の肩に手を置こうとすると、真理はそれを外すかのように動き出す。ゆっくりと部屋の中央へ進み、井関の正面に立った。

「こんにちはっ。気分はどうですか?」

いつものようにニッコリと笑いかける真理。その真理を見て、今泉はホッと胸を撫で下ろした。

その言葉が出てきた瞬間、井関は主人の帰りを待ちわびた子犬の

ように真理の前へと飛び出し、いつもの甘えた声を出した。
「真理に会えたら気分なんて悪いわけがないよ。でもぉ、にゅういんはあきたなぁ。いつまでいればいいんだろう?」
ちょっと焦点が定まらない目で、真理を見詰める井関。
いつもならば真理は、この後に優しく言い諭すのだ。
「もう少しよ。ちゃんとお医者様の言う事を利いてね。じゃないと、いつまでたっても退院できないわ」・・・と。
しかし真理は、いつものお決まりの台詞を言わなかった。

「・・・いつまでかしらね?」

え?
腕を組みながら二人を眺めていた今泉が、ちょっと驚き顔を上げる。
井関の動きも止まった。
いつもならば真理に会えた嬉しさでソワソワと揺れ動く体の動きが止まり、眼球だけが何かを探すようにグルグルと回る。
それでも彼は、いつもの言葉を口にした。

「いくら『けんさ』って言われたって、もう一週間だよ・・・。あーあ、はやく、がっこうにもどりたい・・・」
しかしその口調は、棒読みの台詞のよう。

四年以上、まるでお芝居のように続けられてきた一連のやり取り。
そのやり取りの途中がいきなり変わったのだ。彼の思考は、その小さな事実について行けない。

真理は言わなければならないのだ。
最後に、彼を、井関を、自分が愛する者に刃を向けこの世から居なくなる原因を作った男を、「勇気付ける」言葉を。

「もう少しよ。もうすぐよ井関先生。頑張ろうね」と。

しかし真理は言わなかった。

四年以上続けたこの茶番を終わらせるかのように、芝居の流れを変えてしまうかのように。

「無理よ・・・」

真理は、動揺を始めて眼球だけをグルグルとせわしなく動かす井関に、笑顔を消した顔で一歩詰め寄った。

「あなたは学校になんて戻れない。・・・あれから四年以上が経っているのよ。今のあなたに、戻れる場所なんてないわ」

今泉は驚いて、一歩足を踏み出した。

明らかに真理はいつもと違う受け答えをしている。それも、下手をすれば井関にショックを与えかねない状況だ。

「・・・立花正臣・・・」

グルグルと動揺する井関の目を睨みながら、真理が呟く。

「覚えているでしょう?・・・この名前を」

井関の表情が、徐々に青ざめていった。

「ホント、ごめんなさいね。店長」

パートの女性は、本当に申し訳なさそうに秋光の前で頭を下げた。

「いいよ。しょうがないだろ?早く行ってやんな」
嫌味な様子などひとつも見せず、秋光が店の出入り口を親指でしゃくると、パートの女性はホッとしたようにもう一度頭を下げて足早に出て行った。
ついさっき、女性の幼稚園に通う子供が熱を出したと連絡が来た。
そんなに余裕のあるシフトでまわしている訳では無いので、女性は少々気が引けたようなのだが、小さな子供が熱を出して母親が大変なのは、真理を見てよく知っている。秋光は、今日はいいからすぐに行くように、と女性に言ったのだ。

どうせ十一時を過ぎれば交代のパートが来る。それまで何とかなるだろう。
そう思いながら、秋光はカウンターの中から、店の外に見えるどんよりとした空を見上げた。
太陽の姿が見えないその重たい空は、何となく昨日の真理を思い起こさせる。
真理さん・・・どうしたかな・・・?

――私の事・・・抱いて・・・。

せっかく自分を頼ってくれたのに、自分はそれを突き放すような事をしてしまった。
けれどもし、真理の一時の辛い感情から出たあの願いを利いて、彼女を抱くような事をしてしまっていたら・・・。

きっと、自分は後悔をしただろう。そして、多分、真理も・・・。

秋光はそう思う。
「真理さん・・・」
その重たい空に太陽を捜すように、秋光は自分の中に真理を捜し

求める。そこに現れたのは、昨日、尊と共に自分の元を離れて行く時に見せた悲しげな真理の表情。
どんなに自分が真理を好きか、改めて思い知らされたような気がした。
あの後、辛くて悔しくて堪らなかった。
まるで昔、中傷にさらされ続けた真理のために何もしてやれなかった自分の非力さを悔やんだ時のように。
涙が出そうになるほど。悔しかった。

「正臣・・・オレ・・・」
秋光は問い掛ける。
彼の中の「親友」に。
「お前を裏切っても・・・いいか?」

小さな星が・・・。
月に反乱を起こすように。

４６　澱んだ太陽（後書き）

こんにちは。玉紀　直です。

実は、コッソリ更新・・・。クスクス。

活動報告に書いてますが、玉紀、２日からインフルエンザで倒れまして。（笑）

もう一本の連載はお休みしております。

今回のお話は、下書きがその時点でほとんど出来ていたので、調子が良くなってきてから一気に仕上げました。

んで・・・コッソリ更新。

って、言っても、いつもの更新時間では無いけど、午後からとかに読んでくれている方は「どこがコッソリ??」って感じですよね。（笑）

でも、玉紀は今お休み。って思っている方が多いので、何人の人が気付いてくれるかな?って。

でも怒られそうなので、後でちゃんと「活動報告」の方に書きますね。（笑）

・・・って、玉紀はタミフル飲み続けて楽しげですが（おいおい）お話の方は楽しげではありません。

真理ちゃんが井関さんに何かをし始めました。

いつもいい子で、心身ともに人を傷付ける事など考えられないほど優しいはずの彼女。

でも彼女だって一人の女性です。

愛する人を殺した人間に対しては違うのかもしれません。

そんな中、正臣を裏切ってでも真理ちゃんへの想いを貫こうと決意を決める秋光君。

次回は11月10日更新予定。（遅れても一日）

では、次回！！

47　星への報復

「・・・たちばな・・・」
井関の唇が震える。
「・・・ま・・さおみ・・・？」
その震えた唇から発せられる、震えた声。

その名前を聞いた事によって、井関の決められた記憶の囲いの中に違う色が入り込みだす。
ゆっくりと、ゆっくりと、「ソレ」は彼の幸せなまま止まった時間の中へ入り込んできた・・・。

「私の・・・大切な人・・・」
真理は、肩に掛けていたショルダーバッグの中から何かを取り出した。
井関の右手を取り「ソレ」ごと握ると、真理の顔を怯えた目で凝視する井関と、自分の顔の間まで上げる。そして、「ソレ」をキュッと握り軽く振った。

パチンッ！

弾けるような軽い音がして、飛び出しナイフの刃が飛び出す。

「・・・ひ・・っ、ぃ・・」
眼球が零れ落ちてしまいそうなくらい大きく目を見開き、井関は喉の奥で引きつった声を上げた。

「・・・あなたが、殺したの」

「やめなさいっ、立花さんっ！」

あまりの真理の言動に危ういものを感じた今泉が、その場で注意を促す。

しかし、真理はやめなかった。

「あなたが・・・私の大切な正臣を殺したのよ。・・・四年以上も前だわ。そうよ、もう四年以上も経っているの。・・・私は、もうあなたが知っている高校生じゃない。あなたも、先生じゃないのよ・・・」

銀色に鋭く輝くナイフの刃の向こうに真理の顔を見ながら、井関は真理の言葉をこのナイフの刃のように聞いた。

自分の、ずっと奥深くに閉じ込めていたもの・・・。

閉じ込めた記憶。

狂気に走り、人を憎み、人を殺めた記憶。

井関の閉じ込められた記憶の中から、一人の少年が蘇る。

背の高さも体格も、自分と良く似た少年。

ブロンズ系の金髪。左側にグレーのメッシュ。

ちょっと長めの前髪の間から、いつも人を馬鹿にするような鋭い目を光らせていた。

いつしか、自分の恋敵となった少年。

自分を陥れ、どんな手段を使ってでも自分の元から真理を奪い去ろうとした少年。

真理を奪い取り、自分の未来も、教師としての将来も、全てを奪い取った少年。

憎くて！憎くて！憎くて！憎くて！憎くて！憎くて！

憎しみだけで、心はいっぱいになった。

ナイフの刃の鋭さが、目から離れない。
これと同じ輝きを、井関は確かに見た事がある。
あの日。・・・クリスマスイブの日。
同じ様に輝くナイフを懐に忍ばせて、家を出た。
自分を苦しめる元凶を始末するために・・・。

「あなたが、殺したのよ・・・」
真理の言葉が、ナイフと同じくらいの鋭さを持って井関の心の中へ入り込んで行く。
それと共に、井関を睨み付ける視線さえも・・・。
この目にも、井関は覚えがあった。
この目は・・・。そう・・・。

真っ白な初雪が舞い落ちる歩道で・・・。
そこで、井関は自分を苦しめる元凶を刺した。

死んでしまえ！
この世から、お前の存在など無くなってしまえ！

しかし、その元凶に駆け寄り、自分を睨み付けた者が居る。
それは、自分が愛して止まない少女・・・。
――真理だった・・・。

この目は、あの時と同じ目・・・。

「思い出してよ！あなたが正臣を殺したのよ！」
「もうやめなさい！立花さん！！」
今泉は、真理がナイフを持ったままガッシリと握った井関の手を離させるために、真理と井関の間に割って入ろうとした。
「ひゃ・・はぁぁっっ！！」
突然の第三者に、井関が奇声を発する。
元々真理と二人で会っている時、「彼の世界」には井関と真理以外は存在出来ない。第三者を、井関の心が受け入れないのだ。
面会の時は、くれぐれも井関の前には出ないようにと、今泉は主治医に言われていたのだ。
しかし今は非常時。そんな事には構っていられない。
このまま放置しておいたら、真理が何を言い出すか解からないのだ！

「あなたが、私の正臣を殺したの！なのに、いつまでその事を忘れているつもりなの？！！」
「立花さん！！」
今泉が無理矢理真理の腕を引いて井関から引き離す！
それでも真理の言葉と睨み付ける視線は、井関へと注がれたままだった。

「どうして殺したの？！返して・・・私の正臣を返して！」

真理はただ感情のままに叫んだ。
死んだ人間を返せなど、無理な事であるのは当たり前。
しかし今の彼女は、それを言わずにはいられないのだ・・・。
そう言って、井関を責めずには居られないのだ。

井関はただ、黙って立ち竦んだ。

彼の中で、色々な物が次々に壊れてゆく。
「崩壊の音」を彼自身で聞きながら、ただ立ち竦み、その目はもう真理さえも見る事が出来ない・・・。
「幸せな過去」という箱庭の中に住み続けた、自分の時間。
止めてしまった記憶。
それが全て、壊れてゆく・・・・・。

正臣を憎んだ記憶。
殺してしまった記憶。
思い出したくなかった物が、一斉に顔を出し始める！

愛した真理を、憎んだ男に奪われ、そして・・・。
愛した真理に、向けられた憎悪の目・・・。

「あ・・あ・・・」
井関が両手で頭を押さえた。
眼球が飛び出さんばかりに見開かれた目が、一瞬ギロッと真理を見る。
――相変わらずサラサラとした綺麗なストレートヘアは、井関が知っている高校時代より少し短め。薄化粧を施した唇が少し艶っぽいのは口紅のせい。カラーブラウスにタイトスカート。――明らかに、高校の制服ではない。
――彼が愛した、高校生の頃の真理、ではない真理が・・・そこに居る。

「もう四年以上経っているの」その言葉が、彼の心を覆う。

四年・・・。
あの幸せだった時間は、もう過去のもの。
もう、すでに無いもの・・・。

――存在しないもの！！！！！

「ひっ！・・・あああああああぁぁぁぁ・・・っっっ！！！」

獣の首を絞めたような怯えた悲鳴が、井関の口から上がる！

その悲鳴に驚いた今泉が手の力を緩めた瞬間、真理は今泉の手から逃れ、そのまま保護室を飛び出した！

４７　星への報復（後書き）

こんにちは。玉紀　直です。
前回も書きましたが、真理ちゃんは本来、こんな人を責めるという行為を出来る子ではありません。
でも、もう彼女は耐えられないんです。
井関さんに全てを思い出して欲しかったのか。
それとも、思い出す過程でパニックになって苦しめばいい、と思ったのか。
その辺はこの後に出てきますが、どちらにしろ彼女は、正臣を亡くしたその悲しみと怒りを、ぶつけたかったんでしょうね。

すっかりパニック状態の井関さんですが・・・。
彼はこの後、更に間接的に真理ちゃんを追い詰めます。

一人病室を飛び出した真理ちゃん。
やりきれない辛い心のまま、彼女が向かったところは・・・？

次回は１１月１４日更新予定。（遅れても１日！）

では、次回！

48　冷たい雨

「安定剤を！早く！！」
主治医が叫び、その手に注射器が渡される。
男性看護師数名がかりで、床に押さえ込まれた井関の口の中には、舌を噛み切らないようにと布が詰め込まれていた。
暴れる手足を押さえつけ肩に精神安定剤が注入されると、数秒で井関の抵抗は治まり、体は人形のようにクタッと床に伸びた。
「なんて事だ・・・」
主治医が立ち上がると、半目を開いて意識が朦朧としている井関を、男性看護師が数人でベッドへ運ぶ。薬が切れても暴れ出さないようにと、硬い皮の拘束具が手足に付けられた。
それを見ている今泉に、主治医はキツイ口調で問い掛けた。
「いきなり叫んで暴れだした。・・・間違いないんですね？こんな事は初めてなんですよ！」
「・・・ええ。間違いじゃないです・・・」
井関が話の途中で暴れ出し、立花真理は驚いて逃げ出してしまった。――今泉は、そう医師に説明をしていたのだ。

「店長、雨降ってきたよ」
昼パート担当の少女が、大袈裟な声をあげて、持っていた箒（ほうき）で外をさした。
少女は中卒でフリーターという立場。少々お行儀が良くない。さすがの秋光にも「店の中で箒を振り回すな！」と怒られた。
秋光はいそいそと店先を掃いて箒を片付けに行く少女を見てから、

外へ目を向ける。大粒の雨が、歩道や車道のアスファルトを黒く染め出しているのが見えた。

そのまま秋光は空に目をやる。

大きな雨粒が、次々と零れ落ちてくる空。

それを見ているうちに、秋光は辛くなってキュッと眉を寄せた。

雲に隠されて、太陽が泣いている・・・。

――――真理が、泣いているような気がしたのだ・・・。

「あー、濡れちゃったな？大丈夫かぁ？」

診察室に入ってきた子供の濡れた前髪を人差し指でいじりながら、尊はいつもの笑顔を見せた。

「病院に着いたっけ、ふってきたんだよ。かぜひいちゃうよねぇ」

そう言いつつ、鼻をすする五歳の男の子。

尊はちょっと声を立てて笑いながら、男の子の頭をクリクリッと撫でた。

「風邪ひいたから、先生の所に来たんだろ？」

「まぁね」

今日は真理の代わりに尊の補助に付いている美鈴が、ティッシュを二枚引き出して男の子に渡すと、男の子は上手にプーンと鼻をかんだ。

そんな男の子を見ながら、尊はチラッと窓の外へ目を向ける。

大粒の雨が、窓の外の木々をより濃い緑色に変えながら音を立てて流れ落ちて行くのが見えた。

根拠のない不安が、彼を襲った・・・。

何か、嫌な事が起こる予感・・・。

何か、大切なものを失ってしまうような・・・。予感。

「雨・・・？」

俯いていた自分の髪に掛かる冷たい感触。

その感触に気付いて、真理は顔を上げた。

空から大粒の雨がぽつりぽつりと落ちてきて、見上げた彼女の頬を濡らす。

濡らした雨は頬を伝い、涙のように下へと流れ落ちた。

涙のように・・・？いや、彼女は本当に涙を流していた・・・。

膝を抱え、その場に座り込んで。背を壁につけ顔を伏せて。・・・

ずっと、泣いていたのだ・・・。

ここで・・・。

秋光のコンビニの裏口で・・・。

自分が怖かった。

自分がしてしまった事が怖かった。

驚愕に震えた井関の顔が、いつまでも頭から離れない。

獣の咆哮のようなあの叫び声が、まだ耳から離れない。

怖くて怖くて。
逃げるように病院を飛び出してしまった。
あんな事を言って彼を混乱に陥れるような事をすれば、彼がどうなってしまうか解からない訳ではないはずだったのに。
昔を思い出す前に、狂い死んでしまうかもしれないのに・・・。
しかし・・・。

――それでもいい。そう思った。

――いっそ、死んでしまえばいい・・・。とさえ。

大切な人を殺した男。
大切な人を奪った男。

自分と正臣の幸せを奪って、なのに本人は「幸せな記憶」の中で生きているのだ。
罪を償う事も無く。
許せなかった。
憎くて、憎くて、許せなかった。
思い出せなくて罪を償えないのなら、思い出させてやろう・・・。
そう思った。

そんな事を考えてしまっていた自分が、たまらなく怖い。
そんな事を意図的にすれば、自分はあの男と同じ人間になってしまうのに・・・。

憎しみで人を殺す人間と、同じになってしまうのに・・・。

「・・・つめたい・・・」
雨が体中に当たる。この壁側には、店の正面のように雨避けになるような屋根も窓もないので、冷たい雨は直に真理の体を濡らした。
病院を飛び出してから、ここまで真理は一人考え事をしながら歩いてきた。
普通、歩くような距離ではないのだが、タクシーなどの交通手段を使うという事にさえ、混乱した真理の頭は回ってくれなかったのだ。
もう少し歩けば家に着くというのに、真理はこの場所の裏口でペタンと座り込んだ。
もう足は、一歩も動かない。動かせない。
・・・いや、動く気など無い。
――ここへ来るのが目的であったかのように・・・・・。

「見つけて・・・」
立てた膝の上に置いた手に顔を乗せて、真理は誰に向けてなのか解からない言葉を口にした。

「私を・・・見つけて・・・」
冷たい雨が体中を濡らしていく。
そして、心の中までも染み渡っていく。

「店長、休憩にあがんないのー?」
パートの少女が、大分穴あき空間が出来てしまった御弁当の棚を

整理しながら、カウンター内に立ったままジッと店の出入り口を眺めていた秋光に声を掛けた。
「もうすぐ二時だよ。お腹空かないの？」
「あ・・・、うん。じゃぁ、一服してくっかな」
店の時計を見上げ、本当に後五分ほどで二時になる事を確認して諦め顔をつくり、それでももう一度出入口から外へ目をやる。

・・・真理さん、今日はお昼来なかったな。
真理が来ないので当然尊もこなかった。昨日の今日だ。尊だって顔は出し辛いだろう。
早々に美鈴や他の看護師などは来ていたが、真理が来ない事が気になる時間帯ではなかったので聞きもしなかった。
二人揃って来ないので、どこかに昼食をとりに行ったのかとも思う。
午後診療は二時から。もう二時になる。真理が来る可能性はもう無い。
秋光は、いつ真理が来るかとずっと休憩にも上がらず待っていたのだ。

「じゃぁ、一服してくっから」
「暇な時間だから、ゆっくりしてきて良いよ。店長」
「おぅ、サンキュー」
気の利いたパートの少女の言葉を気軽にかわして、カウンター内の出入り口から、事務所兼休憩室になっている部屋へと入る。
小さな冷蔵庫からアイスコーヒーのペットボトルを出してそのまま口を付け、喉を鳴らしながら半分ほど飲むと、フーっと一息つきながら冷蔵庫へ戻した。
とりあえず本当に「一服」するか。と歩きながら煙草を一本咥え、裏口のドアへと向かう。
ライターどこだっけ？とズボンのポケットを探りつつ裏口のドア

を開けた秋光は、開けたその体勢のまま動きが止まった。

「・・・あ・・」

裏口のドアの外に、まるで雨の中に捨てられた仔猫のようにびしょ濡れになって、開いたドアを振り返り、泣きそうな目をした・・・。

「・・・やっと・・・来た・・・・」

真理が居たのだ。

４８　冷たい雨（後書き）

こんにちは。玉紀　直です。
真理ちゃんは、またここに来てしまいました。
無意識に当たり前のように、どうしても足はここに向かってしまいます。

雨を見て、真理ちゃんが泣いているのを感じた秋光君。
そして、雨を見詰めながら、尊さんが感じた不安は・・・？

真理ちゃんが井関さんに対してしてしまったこと。
それは確かに、健常者が精神弱者に対してしてはいけない事なのかもしれません。
でも、そんな一般常識論では片付けられない思いが、そこにはあります。
人間として真理ちゃんの行為を責めるか否かは、読んでくれている方々にお任せします。

この後井関さんは、どう変わってしまうのでしょうか・・・。

雨の中、座り込む真理ちゃんを見つけた秋光君。
追い詰められた真理ちゃんの心が求めるものと、ずっとずっと真理ちゃんを求め続けてきた秋光君の心。
月の存在が阻み続けた、太陽と星の心はひとつになれるのでしょうか・・・。

次回は１１月１８日更新予定。（遅れても１日！）

では、次回！

49　あなたのニオイ

「何やってんの！こんな所で！！」
降りしきる雨。雨避けも何も無い裏口の壁に寄りかかり、びしょ濡れになって膝を抱えていた真理の腕を掴むと、秋光は引きずるように中へと引っ張り入れた！
大声を出した瞬間落ちそうになった煙草を、火をつけて無くてよかったと思いつつポケットへ押し込む。
いきなり大声を出されたのも驚いたが、思い切り引っ張られたのも驚いた。
真理は何が何だか解からないうちに中へ入れられ、休憩室の長椅子に座らされた。
座らされてから、自分がびしょ濡れな事に気付き慌てて立ち上がる。
「座っててよ！今タオル持って来る！」
「だって・・・私、びしょ濡れだから・・・」
こんな体で座っては椅子を濡らしてしまう。そう思い立ち上がったが、かえって秋光に怒られた。
「いいからっ！座るっっ！！」
「・・・・・」
迫力に圧されるように、真理は無言でストンッと座った。

秋光は「待ってて」と言うと、この事務所兼休憩室の奥にあるドアを開け、中へ入っていった。
この先は秋光の自宅になっている。
もともと個人商店だったものをコンビニに変えたのだ。その時の名残で、店と自宅を行き来できる通路がある。

ドアの奥からバタンバタンという大きな音が聞こえる。何をしているのだろうと真理が不思議に思っていると、片手に大きなタオルの様な物を抱えた秋光が戻ってきた。
「ほらっ、拭いてっっ」
大きなタオルを、頭の上から体中を包むように掛ける。ついでに頭を押さえてグシャグシャと髪を拭いてやると、真理が慌ててその両手首を掴んだ。
「秋光君、痛いよ・・・。力、入れすぎ・・・」
「あっ、ごめん・・・」
人の頭を拭いてやった事など無い。秋光は手を離そうとしたが、真理がその両手首を掴んで離さない。
「真理さん?」

頭から体全体を包む大きなタオル。
それをチラッと見て、真理はクスッと笑った。
「秋光君。これ、タオルケットでしょ?」
「あ、うん・・・。タオル二~三枚持って来るよりでっかいし、一枚で済みそうだったから・・・」
一枚で済みそうだったから、タオルではなく、寝具のタオルケットを持ってきたらしい。
何とも横着でいい加減に聞こえる話だが、彼はこれでもあの短い時間の中で必死に考えたのだ。
すると真理は、秋光の手首から手を離し、鼻にタオルケットを当てて上目使いに秋光を見る。

「それも、自分のベッドから持ってきたんじゃないの?」
「え?ごめんっ。何か、汗臭いとか?」
自分のベッドから持ってきたというのは、困った事に正解。慌てていたので洗濯済みの物を引っ張り出してくる前に、自分のベッド

から引っ剥がして来てしまったのだ。
タオルケットを母親が代えてくれたのは三日ほど前だったが、それでも汗臭かっただろうか、と焦る。
馬鹿みたいに汗っかきではないが、今日は雨で湿気もある。タオルや布地についた臭いという物は、湿気があると強調されてしまうところがあるものだ。
焦る秋光とは対照的に、真理はタオルケットを鼻から下に当てたまま、目を閉じた。

「・・・正臣の匂いがするの・・・」

嬉しそうな声。
静かな優しい声を聞いて、秋光は胸が詰まりそうになる。

「・・・煙草のニオイ・・・。それと・・・」
真理は目だけで秋光を見上げた。

「・・・男の人のニオイ・・・」
さっきまで泣いていた、溶けそうに潤んだ大きな目が秋光を見詰める。
秋光は苦しいくらいに胸が詰まった。
煙草の臭いを「正臣と同じ匂い」と言われるのは初めてではない。しかし、こんな目で見られるのは初めてだった。

「真理さん・・・」
秋光は身を屈めると、真理の口元から当てられていたタオルケットを外させ、雨でメイクはほとんど流れてしまい、口紅の色だけが薄っすらとどこか色濃く残る唇に、そっと唇を付けた。

「・・・拭いて・・・」

触れるだけのキスが離れると、秋光は真理の体に掛けたタオルケットで、静かに真理の顔を撫でた。
髪から顎の下に流れ滴る雫を拭き取り、首筋をなぞる。
ただここで彼はハッと気付いた。
軽く濡れただけならまだしも、真理はびしょ濡れだ。このまま服の上から拭いたとしてもたがが知れている。

「着替えになりそうな物でも持ってくるよ。男物でもジーンズとTシャツくらいなら大丈夫だろ?俺ので悪いけど・・・」
「お洗濯したやつ?」
「当たり前だよっ」
笑いながらそう言って、再び自宅へと続くドアの中へ入って行った。
秋光を見送ってから、真理はタオルケットを両手で引っ張り体に巻きつけて、その中に顔を埋めた。

煙草のニオイ・・・。
少し、男っぽいニオイ・・・。

煙草を吸わない尊の傍に居る時は、感じる事が出来ない感情。

涙が出そうなほどの懐かしさと・・・。
愛おしさ・・・。

――正臣が、傍にいるような気がした・・・。

ジーンズとTシャツを真理に預け、着替えるように言って、秋光は店に出ると、少し早いが今日はもう帰っていいよ、とパートの少

女を帰らせた。
店のメインの電気を落とし、入口に鍵を掛けて「閉店」のプレートを掛けておく。
真理の服を乾燥機にかけ、きちんと乾かして夕方くらいに真理が返ったら、もう一度店を開けよう。そう思っていた。
しかしそこで、秋光は今まで忘れていた事に気付く。
今日は平日なのに、真理は私服だった。

仕事は？大体、あんなびしょ濡れで真理さんは何をやっていたんだ？

「真理さーん、着替えた？」
秋光はカウンターから奥へ向かって叫ぶ。しかし、真理の返事は無かった。
着替えを渡して二十分ほど経っている。まだ着替えが終わっていないという事も無いだろう。
「濡れた服さぁ、悪いけど自分で乾燥機に入れてきてよ。下着もあるだろうから、オレがやっちゃマズイだろ？」
本当はやってあげてもいいけど・・・。などと邪な事を考えつつ部屋を覗き、秋光はちょっと困った顔をした。

「どうして着替えないの？」
テーブルの上に置いた着替えが、そのまま乗っている。まったくの手付かずで。
真理はタオルケットにくるまったまま、顔を埋めたまま。

「真理さん？」
秋光が真理の傍へ近付くと、真理はゆっくりと口を開く。
「・・・井関さんのところに、行って来たの・・・」
「え？」

井関の所へは最近行ったばかりだ。
どうしてまたそんな所に行ったんだ?この平日に。
泣いてあんな所に居たなんて、よっぽど辛い事でもあったのか?
余計に心配になった秋光だが、真理はフッと笑った。

「あなたが正臣を殺した・・・って、言ってやったわ」

混乱に陥った井関の顔を思い出す。
零れ落ちてしまいそうなほどに眼球が飛び出した目。青ざめた顔。
震える唇。

「もう四年も経っているっていう事も、あなただけが自分が人殺しである事を忘れているんだ、っていう事も・・・」

耳の奥に残っている獣のような咆哮。
それが耳の中で、だんだんと大きくなっていく。

「正臣がいつも持ち歩いていたナイフを持って行って見せてやった・・・。こういうナイフで殺したんだ、って。目の前に突きつけてやった・・・。本当は・・・そのまま刺してやりたかった!」

話しているうちに涙が滲む。耳の奥で大きくなった井関の咆哮を消すように、真理が叫んだ。

「でもあの人・・・凄い顔してた!凄い声出してた!・・・このままだと、狂って死んじゃうかもしれない!でも、いい!死んだっていい!あの人は私の正臣を殺したの!死んだって当たり前よ!!」

真理は興奮して言葉が止まらない。そんな真理の隣に座り、秋光は真理を抱き締めると、彼女の顔を自分の胸に押し付けた。
興奮して入っていた体中の力が、だんだんと抜けてくる。
押し付けていた手を離すと、真理は秋光の胸に寄りかかったまま、自嘲気味に笑った。

「・・・私は・・・あの人と同じ・・・」
最初にグシャグシャにしてしまった真理の髪を指で梳きながら、秋光は彼女の頭を撫でる。
「憎しみで人を殺した・・・あの人と同じよ・・・。憎くて憎くて・・・死んでしまえばいい、って、思っているんだもの・・・」

「違うよ・・・」
秋光が手を止めて真理を見下ろす。真理が顔を上げると、秋光は彼女にキスをした。
「・・・真理さんは、ずっと我慢してた。・・・憎しみで正臣を殺したあいつと同じなら、とっくに殺しに行ってるさ」
「秋光く・・・」
もう一度唇を合わせる。
今まで触れるだけだった秋光の唇は、少し強く真理の唇に押し付けられ、彼女の唇を吸った。
そんなキスを受けながら、真理は静かに目を閉じる・・・。

「・・・風邪、ひくよ・・・」
秋光の手が、真理のブラウスのボタンに掛かった・・・・・。

49　あなたのニオイ（後書き）

こんにちは。玉紀　直です。
煙草のニオイで正臣君を思い出す。
煙草のニオイって、煙が充満していると「ああ、けむたいっ！」とか思って、あまり嬉しいものでは無いですよね。（笑）
でも、秋光君のニオイと混じって香った煙草のニオイは、間違いなく正臣君への愛しさを思い出させてくれました。
真理ちゃんはそれで少し心が落ち着いたのかもしれません。
でも、再び自分が井関さんにしてしまった事を思い出し、動揺する彼女を落ち着かせるのは・・・。

月の見えない、雨の昼下がり。
雲に隠れるようにその姿を寄せ合った太陽と星は、ひとつになれるでしょうか・・・。

次回は少々、久し振りの「閲覧注意」で・・・。

次回は11月22日更新予定！（遅れて1日！）

では、次回！！

５０　背徳の太陽（前書き）

注意

今回は本文中に少々、性的表現が含まれています。
苦手な方、又は、そういう表現が嫌いな方は
その場面にきたらとばすなど。してください。
Ｒ－１５指定はさせて頂いていますが閲覧にはご注意を・・・。

50　背徳の太陽

「・・・だめ・・」
小声で呟くように言って、真理の手が、ブラウスのボタンを外す秋光の手の上に重なった。
秋光は手を止めて考える。
雰囲気に呑まれて、つい本心のままにブラウスのボタンなぞを外そうとしてしまったが、真理にそんなつもりは無いのかもしれない。だいたい、「いい？」と確認の言葉もかけてはいないのだ。

秋光が気まずい思いに捉われていると、真理は恥ずかしそうに上目使いに秋光を見上げてから、横目でチラッと窓を見て、そのまま視線を下げた。
「・・・カーテン、閉めて。・・・電気も・・・」
「あ・・」
言われて気付き、部屋の中を明るく照らす照明と、雨が降って外は薄暗いとはいえ、しっかりと昼下がりの明るさを保った窓の外を交互に見た。

「あの。真理さん・・・」
いい？とは訊いてはいなかった。だが「カーテン閉めて」と言うという事は、真理もその気でいてくれていると思っていいのか・・・。
秋光は自分でも考えられないくらいに慎重になってしまい、探るように真理に問い掛けた。
「・・・いいの？オレ・・」
すると更に恥ずかしくなってしまった真理が、更に下を向き、ム

キになって答える。

「カーテンっっ、しめてっっ」

答えになっている様ないない様な。

秋光は少々複雑な思いで立ち上がり、まず部屋の照明を落として、その後窓辺に向かった。

そんな秋光の後ろ姿を目で追いながら、真理は今カーテンが閉められようとしている窓から外を見る。

――月は、出ていない・・・。

真理の心が、真理に囁く・・・。

――この人は、正臣の友人なんだよ?

真理は、胸が締め付けられるように痛くなった。

「真理さん」

カーテンを閉め終えた秋光が戻ってきて、再び真理の横に座る。

「・・・真っ暗じゃないけど、これでいいかな?」

この事務所兼休憩室のカーテンは遮光ではない。外は薄暗い雨模様とはいえ、一応昼間。部屋の中は、どことなく薄明るい。

すると真理は、クスッと笑った。

「同じ・・・」

「何が?」

「・・・同じ事、最初の時、正臣に言ったわ。・・・カーテン閉めて。って」
切ない表情。昔を思い出す懐かしそうな口調。その声は、嬉しい事を話す時のように、しっとりと明るい。

「秋光君・・・」
「何？」
「・・・ごめんね・・・」
そう言って、真理は下を向く。

「・・・嫌だよね。こんな時に・・・正臣の話なんてされたら・・・」
これから意中の女性を抱こうという時に、違う男の話をされる。本当なら気分の良い物では無いだろう。

秋光は大きく真理に腕を回して、自分の胸に抱き込むように、グッと彼女を抱き締めた。

「もっとしてよ・・・」
囁くような優しい声で、彼は真理に告げる。

「もっと教えてよ。正臣の事。・・・オレに、話してよ。・・・真理さんの、大切な正臣の事・・・」

「あき・・みつくん・・・？」
真理は目頭が、火でも点いたかのように一瞬にして熱くなって行くのを感じた。

「オレ、知りたいよ。・・・あいつが、どのくらい真理さんの事、大切にしてたのか・・・。真理さんに何を言って、何をしてあげた

のか。真理さんの口から聞きたいよ・・・」

秋光の脳裏に、大切な友人が蘇る。
しかし、いつも自分を見張るように、思い出の中で威嚇するように自分を見ているはずの友人は、横を向いて目を逸らしている。

「オレは、嫌じゃない。・・・真理さんがずっと・・・正臣を好きでも。・・・オレは、真理さんが好きだから」

真理の瞳から、暖かい涙がボロボロとこぼれた。
次々に頬を伝い、抱き込まれた秋光の胸を濡らす。

「オレ、正臣（あいつ）の事も・・・真臣の事も、ひっくるめて、・・・真理さんが好きだから・・・」

秋光は更に力を込めて、真理を抱き締めた。

ずっとずっと、求めていた女性（ひと）。

守りたくて。守れなかった。

友人への友情の陰で、好きだという自分の想いも伝える事を許されなかった。

いつも、悲しんでいる姿を見ている事しか出来なかった。

誰よりも、何よりも、守ってあげたかった女性（ひと）。

「こんな事したら・・・オレ、正臣を裏切る事になるのかもしれないけど・・・」

裏切る、という言葉を聞いて、真理は行き場が決まらず彷徨い気味だった両手を、グッと握った。

自分は、尊に抱かれた時に正臣を裏切った。

そして今度は・・・。

このまま秋光に抱かれれば、尊を裏切る事になる。

今の自分は「尊の」恋人なのだ。

人道的に考えて、して良い事ではない・・・。

けれど・・・・・。

「オレ、・・・『正臣』にはなれない。でも、・・・正臣の変わりに、真理さんの事、真理さんが抱えている物全部・・・守ってやりたい、って・・・。思うんだ」

この想いを、どうしよう?

心が彼を求める気持ち。これをどうしよう!

――正臣の、友人なんだよ?

いつも自分を止めていた理性の声が、だんだんと小さくなる。

――正臣の・・・・・。

その声は途切れ途切れに変わり。・・・やがて・・・。

聞こえなくなる。

「オレ、真理さんの事、本当に好きだから！」

秋光が自分の伝えきれない思いを込めて、真理を抱き締める！

真理も秋光の背中に腕を回し、グッとシャツを握り締めながら、力いっぱい抱きついた！

雨が降っていたか、いなかったかなど、その時の秋光には、最早何の気にもならなかった。

薄暗い部屋の中で聞こえるのは、いつの間にかシーツ代わりになってしまった、ちょっと湿っぽいタオルケットに体がすれる音。

休憩室の安っぽい長椅子が軋み、たまに大きくガタンッと揺れ動く音。

そして、どんどんと高まって行く自分の呼吸を抑えようと、何度も大きく繰り返す自分の呼吸。

「ふっ・・ぅぅんっ・・・」

恥ずかしいのか、大きく息を吐き出しながら、抑え気味に真理が出す声・・・。

「まり・・・さん・・」

抑え気味でも、そんな声を聞くたびに秋光のボルテージはひとつずつ上がってしまう。

服を脱がせた時の真理の肌は、雨に濡れていたせいもあって、しっとりと濡れて冷たかった。

しかし今、裸の体を重ねあい、秋光の手で繰り返される愛撫に身を任せている真理の肌は、体温が上がり、すっかり温かくなってい

る。

「・・・小さくて、ごめんね・・」

ちょっと恥ずかしそうな声が真理の口から漏れると、手と顔を胸の辺りで彷徨わせていた秋光が、フッと顔を上げた。

「もうちょっと太って、大きくしておけば良かった」

真理の左の乳房を掴んでいた秋光の手の上に、自分の手を添える。

以前「もう少し太ったほうが大きくなるよ」とからかわれた事を逆手に取ったのだ。

真理の胸は、ちょうど秋光の手のひらに納まるくらいの大きさ。特別小さくはないが大きくもない。

大きいほうが好きなんだろうな?と、一般的に言われる男性の好みを考え、恥ずかしさもあって、そんな事を言ってしまった。

「正臣は、何て言ってた?」

秋光に言ったのに、彼は正臣の事を訊いてきた。

真理は驚いたが、懐かしそうに、嬉しそうに答える。

「・・・何も・・・。でも、子供が出来て、一時的に大きくなった時は、変に喜んでた・・・。大きいほうが好きだったのかも」

「あいつらしいや・・・」

秋光は嫌がりもせず、答えを聞いてクスッと笑う。

「オレ、真理さんだから、関係ないよ。大きくたって、小さくたって」

そう言いながら、乳房を掴んだ手の指で、乳首を摘み擦り合わせる。

真理の体がピクンと震え、一瞬固まると、その口から熱っぽい声が漏れた。

「・・あっっ、あぁっ・・・」

だんだんと乳首が硬く立ち上がってくるのと同時に、真理の声も切なげに変わる。そこに秋光が唇で吸い付くと、その声は一際大きくなった。

「んっ！や・・んっ、あっ！」

真理がそんな声を上げてくれるのが堪らなく嬉しくて、秋光は左から右へ交互に移動しながら、すっかり硬く立ち上がった乳首を吸い上げる。

「ふぅ・・んっ、ん、あぁぁっ・・・」

発せられる声が早くなり、両脚の内側が悶えるように擦り合わされる。

秋光はその擦り合わされた両脚の間に、脚を広げさせながら手を差し込んでいった。

「・・・あっ、ん・・っ」

真理が恥ずかしそうに秋光を見上げる。

さっき雨でびしょ濡れだった真理のように、彼女のそこは、温かい雨ですっかり濡れそぼっていた・・・・・。

５０　背徳の太陽（後書き）

こんにちは。玉紀　直です。
本当は嫌な物だと思うんです。
こんな時に、もう居ないとはいえ、前に好きだった男の話をされるなんて。
でも、秋光君は、それを受け入れます。
真理ちゃんも。真理ちゃんの中の正臣も。

でも、どんなに綺麗事を並べても、どんなに言い訳をしても、これは「尊さんへの裏切り行為」浮気ですよね。
真理ちゃんはまだ、「尊さんの恋人」っていう立場ですから。
でも今は、この太陽と星を、雲に隠してあげておいて下さい。

「閲覧注意」が続きます。その表現が苦手な方、ご注意下さい。
尊さんに抱かれていた時とは違う、何かが起こります。

次回は１１月２６日更新予定。（遅れて１日）

では、次回！！

５１　星に抱かれて（前書き）

注意

今回は本文中に性的表現が含まれています。
苦手な方、又は、そういう表現が嫌いな方は
その場面にきたらとばすなど。してください。
Ｒ－１５指定はさせて頂いていますが閲覧にはご注意を・・・。

51　星に抱かれて

「尊先生、真理ちゃんと連絡着きません？」
午後診療が始まり一時間半近く経った頃、一旦患者が途切れたのをみて、尊は外の駐車場にある自動販売機へ缶コーヒーを買いに行った。
いつもは補助に付いている真理が買いに行ってくれるのだが、今日は真理が休み。真理以外にだと頼みにくいのは、やはり自分が真理の優しさに甘えてしまっているからだろうか？と思う。
冷たい缶コーヒーの缶を額に当てて、大きく一息つきながら入り口を入ると、受付の女性にいきなりそう呼び止められた。

「真理ちゃん？どうかしたの？」
「自宅にも戻ってないし、携帯も出ないんですよ。でも、着信の名前が『尊さん』だったら出るんじゃないかなーって思って」
彼女は台詞の最後で、意味ありげに言葉を伸ばす。
冷やかされているのがすぐに解かったが、嫌な気どころかかえって嬉しくもあり、尊も苦笑いするにとどまった。

「こちらの方が、真理ちゃんに用事らしくて・・・」
彼女は受付の前に立つ、スーツ姿の男性を手で示す。男性は尊を見て軽く頭を下げ、それにつられるように尊も頭を下げた。
「弁護士の今泉、と申します。立花真理さんにお会いしたかったのですが、ご自宅の方にもいらっしゃらないので、病院かと・・・」
そう言いながら、今泉は尊に名刺を手渡す。
それを受け取りながら、尊は名詞と今泉のスーツの襟につけられた弁護士バッチを交互に見た。

「今日は用事があると言って休んでいます。病院には来ないのではないかと思いますが」
「立花さんとは午前中ご一緒していたのですが、居なくなってしまいまして・・・。どうしてもお伝えしたい事があったものですから・・・」
真理の用事が弁護士などという者と関係のあるものだと知って、尊はちょっと驚いた。
しかし、亡くなった彼が刺殺されているという事を思い出し、もしかしてその件なのかと考える。
だとしたら大切な用事なのだろう。尊は「ちょっと待っていて下さい」と言うと、病院の外へ出て、白衣のポケットから携帯電話を取り出した。

電話に出ないという真理だが、自分が掛けてそれで出たりしたら、またからかわれるな。などと、決して嫌ではない冷やかしを想像しながら、尊は真理の短縮番号を押した。

「電話・・・鳴ってるよ・・」
ふさいでいた唇を離す。すると、解き放たれたように、ふさがれていた真理の唇が動き出した。
「・・やっ・・あぁ・・・っ、あんっ・・・」
「出なくて、いいの？」
「いっ、いい・・・いいのぉ・・っっ・・」
休憩室の長椅子が、ガタンガタンとうるさいくらい大きな音を立てる。
こんな小さなスペースの上で抱き合っているのだ。椅子の上に座る、という用途以外の事に使用していれば、音を立てるのは当たり

前。
　ましてや、ずっと求め続けた真理を、やっと自分の腕で抱いているとなれば、秋光の動きも大きくなるというものだ。
　オレの部屋にでも行けば良かった。と少々後悔するものの、そんな事を考える心の余裕は無かった。

「さっきから鳴ってるよ・・・。本当にいいの？」
　体をピッタリと重ね、膝を立てた真理の脚の間に腰を落とした秋光が、その動きを止める事無く訊くと、真理は上半身を悶えさせながら体を捻る。
「い、いいのっ・・・いいからぁっっ・・」
「そんなに気持ちイイの？」
　電話に出なくても「いい」と言っていたのに、気持ちが「イイ」のかと訊かれ、真理はちょっと怒った目で秋光を見た。

「・・・ば・・かぁ、・・あぁぁっんっっ！違う、でしょっ、・・う、うっんっ、んっ！」
　こんな状態なので当たり前だが、怒った目をしてもかえって艶っぽく見えてしまう。
　秋光は夢中になって真理を突き上げ、その中で暴れながら、それでも訊いた。
「正臣は、訊かなかった？」
「んっ、なに・・？ああぁっ・・」
「気持ちイイ？って、訊かなかった？」
　何訊いてるの！！と怒ってしまいたくなるような事ではあるが、今彼に与えられている快感のせいで、彼のいう事を素直に利いてしまう。

「・・きいた・・。んぅ、うん、んっ・・・」
「今は？真理さん・・・」

熱っぽい男の声に変わってしまっている秋光の声が、耳元で囁く。
それだけでも体が反応を起こすが、秋光が真理を貫くスピードが少し落ちると、彼を求める体が焦るように答えを出させた。
「・・・気持ち・・イイっ。すご、く、気持ちイイ、よ・・・。あき、みつく・・ん」
「真理さ・・ん、オレもっ・・・」
両膝を真理の太腿の下に入れ、腰を深く落とす。
奥まで入り込まれる挿入感が下半身に力を入れさせ、秋光自身を根元から締め付けた。
「・・・ま、・・りさ・・んっ」
すぐに腰を引きそうになったが、真理が唇を震わせ潤んだ瞳で自分を見上げているのを見て、更に彼女を感じたい欲望に駆られた彼は、そのまま押し付けるように大きく腰を捻った。

「あはっ・・ああぁっっ!!やぁ、あん、んっ!!」
背が反り返り、悶えながら上半身が大きく動く。
あまりにも大きく動いたので、真理は上半身が椅子から落ちそうになった。
「ほらぁ・・・。落ちちゃうよ・・」
秋光が真理の体を、椅子の上に引っ張り上げる。
「そんなに、暴れないで・・・」
しかし自分は真理の中で暴れ続けているのだから、何とも不公平な話だ。
真理もそう思ったのだろう。泣き声なのか喘ぎ声なのか解からない声で、秋光に哀願した。

「じゃ、ぁ、あんっ、・・あばれさせない・・でぇっ・・ああっ!」
「・・・無理だよ・・・」
再び大きく腰を捻って、真理の中に刺激を与える。

「はあぁぁっっ！！い、やぁ・・っ、ああっっ！！」
今度は落ちそうにならないように、真理の腕を抱くように体を抱き締めていたが、それでも自分の腕の中で暴れ乱れる真理を見て、秋光はクスッと笑った。

「真理さんって・・・意外に暴れん坊なんだ？」
「そんな・・コト、ない・・あんっ！んっ、ふぅ・・いやあ・・ん！！」
「こんなに、感じてくれると思わなかった・・・」
「・・・秋光、くん・・・」

正直な感想だった。
自分は真理を好きで好きで堪らないけれど、真理がどう想ってくれているのかは解からない。
辛い想いのはけ口に、自分を選んでくれただけなのかもしれない。
それでも秋光は嬉しかったが、気持ち的に自分の独り善がりで終わってしまうのではないかと思っていたのだ。

「そんな、こと、ないよ、・・あっ・・」
秋光の想いを現すかのように、熱っぽく強く、自分にもたらされる快感を覚えながら、真理は高揚し続ける気持ちを抑えられない。
「す、ごく・・・あぁっ、感じ、るよ・・。秋光く、んっ・・あぁんっ！」

だんだんと体の奥から襲い来る、大きな快感。
それに身を任せ、迎え入れようとしながら、真理はフッと気付く。

「・・・真理さん・・・」
秋光の声が・・・。

自分を貫き、快感を与える動きが・・・。

――――正臣と重ならないのだ・・・・・。

「あき、みつ、くんっ、あぁっ！んっ、ん、わ、たし、・・・ダメ・・っ！」

自分はこんなにも感じているのに。

体が、我慢する事無く、彼から与えられる快感のままに、最後の瞬間を迎えたがっているのに・・・。

「まりさん・・・、ごめっ・・ん、オレ、もぅ・・ダメかもっ・・」

自分を「感じて」くれているのは、間違いなく秋光で・・・。

「あきみつく・・・ん、私・・、あぁっ・・っっ！！」

自分を「感じさせて」くれているのは、間違いなく秋光だ。

――――正臣じゃない。

神経が高まり、体が最後の快感を求めようとすると、いつも真理の体の中に正臣が入ってくる。

他の誰かに抱かれようとするのを、止めるかのように・・・。

どんなに愛撫されても、貫かれても、もはや正臣しか思い出せなかったはずだ。

なのに、今は。

「真理さん・・ご、めんっ、オレ、着けてないけど・・・中でしな

いからっ・・安心して・・・っ」
コンドームは店にもあるのだから、一つ持ってくれば良かったのだが、そんな事を悠長に考えている暇などもちろん無かった。
土壇場でそんな事を言う秋光らしさに、思わず真理はクスッと笑った。
「ばか・・ね。いいわよ・・・。もぅっ・・んっ、ん・・」
「よくない、よっ」
秋光の動きが早くなる。彼はもうもたない。
真理も同じだった。

「あき、みつく、んっ！ダメッ・・っ！イっ・・・くぅ・・っっ！」
正臣にしか、与えられなかった物。
正臣だけにしか、許されていなかった自分の体が・・・。

「あっ、・・まり、さ・・・」
「きてっ、そのままっ、あっあぁ・・っっ！！」
限界を感じた秋光が腰を引こうとした瞬間、真理は彼の腰を押さえ、両太腿で固く挟み力を入れて、彼自身を締め付けた！

「イっ・・・くぅっっ、あぁぁっ！！」
「まっ・・りさ・・・！」
逃げる事もできず、秋光は体をビクッと震わせ動きを止めた。

真理の体が反り、彼を押さえた脚や真理自身が、ビクビクッと痙攣を起こす。
その痙攣は体中を駆け巡り、甘い痺れをもたらした。

外すのを忘れていた「月の指輪」が、乱れた真理の動きでチェー

ンが外れ、胸元からスルリと汗で湿ってしまったタオルケットの上へ落ちる。

正臣の声も。
正臣の姿も。

今の真理には、感じられなかった・・・・・。

51　星に抱かれて（後書き）

こんにちは。玉紀　直です。
もちろん、尊さんは知りません。
電話の向こうで、何が行われていたかなんて。
尊さんに抱かれている時は感じられなかったもの。
それを秋光くんに感じられたのは何故でしょう？
いつもは入り込んでくる正臣くんが、真理ちゃんが他の男に抱かれる事を許したのは、何故でしょう？

沢山の積み重なった想いを抱えて、とうとう体の関係を持ってしまった二人。
このまま何も無い訳がありません。
まだ、問題が残っているんです。
あと二つ、星が彼女の傍にありますから。

それでも、もう少しだけ、真理ちゃんを休ませて上げてください。
月への気持ちを忘れさせた、星の傍で。

次回は１２月１日更新予定！（遅れて１日）

では、次回！

52　雨上がりのまどろみ

「電話、誰からだった？」
肩越しに顔を近付けて、真理の手元を覗き込む。
隣に寄り添い、裸の肌を近付けていると、何となく恋人同士のようだ。
そう思うと、秋光は何となく自分で照れてしまった。

抱き合っていた時、何度も鳴っていた真理の携帯。
長椅子に座って裸にタオルケットを巻き付けた真理は、体の前で合わせたタオルケットの間から片手を出し、着信を確認していた。
静かな事務所兼休憩室の中。雨は上がったのだろう。雨音は聞こえなかった。

「弁護士さんから、三回・・・」
井関の所から逃げ出してしまったのだ。それもあんな事をして。
今泉も、真理に連絡を取ろうと必死だっただろう。
・・・井関さん・・・、どうなったんだろう・・・。
ちょっと気にはなったが、真理はそのまま次の着信を確認して行く。

「病院から・・・四回・・・」
何だろう？大事な用だろうか？
私指定の子供の予約が入ったとか。それとも、やっぱり今泉さんが病院に来たとか？
色々と考えながら、次を確認する。

「・・・・・」
次の送信者の名前が映し出されると、真理はちょっと目を見開いた。
真理が口に出さないので、秋光は首を傾けて画面を覗き込む。
そこに映し出された名前は・・・。

【尊さん】

「・・・五回・・・」
尊からの着信は五回。真理がなかなか出ないので、不思議に思っていただろう。
多分、病院の電話に出ないから、尊さんの電話なら出ると思ってかけてもらったんだろうなぁ。
真理はちょっとおかしくなった。
恋人からの電話を無視して、自分は別の男に抱かれていたのだ。
夢中になって・・・・。

同時に一本だけ入っているメールを開く。
それも尊からだった。
弁護士が会いたがっている。という連絡。そして・・・。

――――【真理ちゃんが居ないと、寂しいよ】

ちょっと胸が詰まる思いで、真理はその文章を読んだ。
画面の文字をジッと見ている真理に気付いた秋光は、メールをチラッと覗いて、真理の手の上から携帯を握り、その画面を消した。
「秋光く・・・」
秋光を見上げた瞬間、彼の唇が真理の唇に重なる。特に抵抗する事も無く、真理はそれを受け入れた。

気持ちが落ち着いてくると、尊に対しての罪悪感が生まれ始める。尊という恋人が居る自分は、本来こんな事をしていい人間ではないのだ。

なのに真理は、ただ自分の気持ちと体が求めるままに、秋光に抱かれてしまった。あんなに夢中になって。

さっきまでの自分を冷静に思い出すと、たまらなく恥ずかしくなってくる。

真理は思わず秋光の体を押した。

真理が赤くなって自分から目を逸らしているのを見て、秋光が困った顔をする。

「・・・後悔してるの？」

「・・・・・」

「オレは、してないよ。もしあの先生にこの事がばれても、オレの真理さんに対する気持ちも態度も変わらない。もし・・・真理さんが後悔してて、オレと距離を取りたい、って言っても、オレは・・・」

「してないわ」

真理は慌てて秋光を見上げた。

こんな真剣な顔を見るのは初めてだというくらいな目で、自分を見詰める彼がそこに居る。

「・・・してない・・・」

真理は体に掛けていたタオルケットを広げて、裸のまま横に座っていた秋光の体を包むように、彼の体に腕を回す。

「後悔なんて、してないよ・・・。私、こんなに満たされたの、久し振りで・・・」

「本当？」

「感じちゃいけない事かもしれないけど・・・」
二人はそのまま唇を重ね、向きを変えながらお互いの唇を感じ、秋光はタオルケットの中で真理の裸の体を抱き締めた。
「真理さん・・・ごめんな・・・」
唇を離し、真理の首筋を上へ下へと移動しながら、秋光が申し訳なさそうな声を出す。
「オレ・・・ちゃんと用意もしないで始めちまったから・・・。中で・・・」
真理の中で最後の瞬間を迎えてしまった事を言っているのだろう。最後の瞬間、秋光は真理の中から抜け出ようとしたのだ。けれど、真理はそれを押さえた。
真理が自分の中でイかせてくれた事を、秋光は真理が自分に気を使ってくれたのだろうと思ったのだ。

「もし、何かあったら・・・。オレ・・・」
何かあったら。もしそんな事があったら、尊を差し置いてでも責任を取るつもりで口に出す。
そう考えると「何か」あってくれたほうがいいかな?などと不謹慎な事も考えながら。
すると真理がクスッと笑った。
「正臣は、着けなかったよ。一回も」
「あいつは別だよ」
秋光が真理の首から顔を離す。
ちょっと恥ずかしそうな目で秋光を見上げる真理が居て、秋光はドキッとした。

「だって、中でしなくたって、あの場合はアウトでしょ?」
「何で?」
本気でどうしてなのか訊いてくる秋光に、真理は呆れそうになりながらも、その彼らしさに小さく笑い出してしまった。

「そうやって気を使ってくれるつもりなら、中に入ってくる時に最初に着けなきゃ駄目なのよ。最後の時だけ着ければ大丈夫、ってモンじゃないの」
「ええ?!そうなの?!」
またまた本気で驚いている。正直、本当に知らなかったのかと真理の方が驚いた。

「・・・知らなかったの?秋光君・・・」
「知らなかった・・・」
しかし、考えてみると彼らしい気もする。真理はそう思うとプッと吹き出してしまった。
「やだぁ。秋光君の彼女って可哀想っ」
「いっ、いねーよ!今そんなモン」
秋光がムキになる。真理は笑うのをやめ、探るように訊いた。
「・・・昔は?」
「昔?」
「私にばっかり、昔の事訊いて。ずるいもん。教えて」
秋光は、眉をしかめて難しい顔で考える。
素行が悪かった頃、それなりに遊んだが「彼女」と呼べるものが居ただろうか?
それでも・・・少し続いたような女はいたし・・・。
「まぁ・・・それなり?」
何を今更真剣にこんな事を考えているんだ・・・。と思いつつ真理を見ると、何となく唇の端が曲がっている。少し機嫌が悪い顔。

「どうしたの?真理さん」
「何?」
「機嫌悪い顔してるよ」
「してないわよ!」
赤くなって眉を寄せる。明らかに少々ご立腹な顔だ。

教えて。と自分で言っておきながら、聞いているうちにちょっと妬いてしまった。その事に、真理自身も、そして秋光も気付く。

「私、べつに・・・」

言い訳をしようとした真理を、秋光は再びグッと抱き締めた。

「オレさ、彼女いるよ、って、言ったら駄目かな・・・」

「・・・秋光君・・・」

私・・・。秋光君が・・・？

ずっと支えとくれていた人。
ずっと見詰めていてくれた人。

正臣が死んでから。ずっと。

大きな力では無いけれど。
小さな力で精一杯・・・。
大きな太陽を支えてきた。小さな星。

「私・・・」

辛い時。
悲しい時。
苦しい時。

いつもその小さな星の存在を感じたかった。

甘えているだけ。

ずっと、そう思い込んできた。

正臣と一緒に居た人。
なのに、正臣とは違う人。

背の高さ。
体格。
性格。
好み。
――愛し方・・・。

私は・・・。秋光君の事・・・。

抱き締められ、秋光の体温を感じながら、真理はその背に腕を回そうとした。
と、その時、膝に置いていた携帯が鳴ったのだ。
また病院からだろうか？そう思って送信者の名前を見た真理の表情が一瞬固まる。

――尊からの、電話だった。

52　雨上がりのまどろみ（後書き）

こんにちは。玉紀　直です。
まどろみのベタベタ時間ですね。（笑）
こういうまどろんでる時間を書くのは結構好きだったりします。
何か、幸せで良いかな・・・。なんて。
今この状況でらぶらぶしてていいの？って話もありますが。

「彼女居る。って言ってもいい？」
ずっとずっと求めてきたんです。自分の物にしたいのは当たり前。
でも、それを阻む電話が掛かってきました。
今、太陽の傍に居る事を、正式に許されている星です。
彼が、この陰に隠れた小さな星の存在に気付く事はあるのでしょうか。

お気づきかもしれませんが、物語の折り返し地点は過ぎました。
太陽と星達の軌道が、変わり始めます。

次回は１２月５日更新予定！（遅れて１日）

では、次回！！

53　「好き」の言葉（前書き）

注意

今回は本文中に少々ですが性的表現が含まれています。
苦手な方、又は、そういう表現が嫌いな方は
その場面にきたらとばすなど。してください。
Ｒ－１５指定はさせて頂いていますが閲覧にはご注意を・・・。

53　「好き」の言葉

『今、何処にいるの？』

携帯電話から聞こえる尊の声は、心配げなトーンで限りなく優しかった。

『弁護士さんが心配していたよ。どうしても伝えたい事があるって』

「あ、ごめんなさい・・・。あの、高校の時の友達のところに来ていて・・・」

歯切れの悪い口調でそう言いながら、自分の肩を抱いたまま離さない秋光をチラッと見る。

身長差があまりないせいか、ちょっと目を上げるとすぐに彼の顔が目に入る。

肩を抱かれた時、顔を上げなければ相手を見ることが出来なかった正臣や尊とは違う感覚に、真理は何となく新鮮な物を感じた。

一枚のタオルケットにくるまって、裸の体を寄せ合っている。

なのに自分は、本来の恋人と電話をしているのだ。

胸がドキドキして、その鼓動が自分の耳にまで聞こえてきそうになる。いや、もしかして肩を抱いている秋光には聞こえているのでは無いだろうか。

真理はそう考えると、限りなく恥ずかしくなった。

『病院が終わるくらいまでに、コッチに帰ってくる？今日は会えるかな？』

「え・・・、あの・・・」

真理はもう一度、秋光を見上げた。

別に答えを迷う事などない。「すぐに戻る」と言えば良いだけなのだ。
そうすれば尊だって変な疑いは持たないだろうし、自分だってこれ以上の罪の意識を感じずに済むのだ。
しかし、真理の口から出た言葉は・・・。

「ごめんなさい・・・。もう少し居たいから。・・・戻れるかどうか解からないわ」

電話の向こうから、残念そうな尊の声が聞こえた。
『そうか・・・。友達じゃ、しょうがないよね。じゃぁ、夜にまた電話するよ』
「・・・うん、解かった」
『真理ちゃん』
「何？」
『――愛してるよ』

電話の向こうで囁かれる言葉に、携帯を持つ真理の手がビクンッと震える。
考えてみれば、昨日プロポーズを受けたばかりなのだ。
尊とて、気持ち的に真理への想いでいっぱいになっているはず。
普通ならば真理だってプロポーズの余韻が残っていて、少々浮かれた気分になっていてもおかしくは無い。
なのに今の真理は、自分の肩を抱き寄せ頭をコツンとくっつけている秋光に、今の言葉が聞こえては居ないかと、そればかりを気にしている。

『真理ちゃんは？返事してくれないの？』
この状況を知らない尊は、真理が照れているのだと思い、笑いながら同意見を求める。

真理は戸惑いながらも、小声で返事を返した。

「・・・好きよ・・・。尊さん・・・」

その瞬間、秋光が携帯を取り上げ、電源を落とす。

「秋光く・・・」

まだ話中だ。こんなタイミングで切ってしまっては、尊が変に思うかもしれない！

そう思った真理は、慌てて手を伸ばし携帯を取り返そうとした！

しかし、その手を掴んだ秋光は、そのまま真理の体を強く抱き締める！

「・・・嫌だよ、真理さん」

苦しいくらい。力が込められる腕。

まるで彼の想いのように、苦しげに力が入り、真理を胸の中に閉じ込める。

「イヤだ・・・」

「秋光君・・・苦しいわ・・・」

「イヤだ・・・。緩めたら、真理さん、逃げて行くから。・・・あいつの所に行っちまうから・・・」

まるで駄々っ子のように真理を抱き締めたまま、秋光は首を左右に振る。

真理は秋光の背に腕を回し、背中をポンポンッと叩いた。

「逃げないわ・・・」

秋光の力が緩む。真理は彼の顔を見上げた。

「逃げないわ・・・。もう少し、秋光君と一緒に居たいの・・・」

秋光は嬉しくて、もう一度強く真理を抱き締め、そして再びタオルケットを下に、その場で重なり合った。

「真理さん・・・好きだ・・・好きだよ・・・」

夢中で真理の体を抱き締め、首筋から肩へ唇を這わせる。
掴まえていなければ真理はすぐにでも尊の元へ戻ってしまうだろう。
その焦りが、秋光の心をいっぱいにした。
そんな秋光の背に腕を回し、真理は静かに囁く。

「・・・好きよ・・・。秋光君・・・」

落ち着き無く真理の体をまさぐっていた秋光の動きがフッと止まり、顔を上げて真理と目を合わせる。
真理は少し恥ずかしそうに微笑んでいた。

「好きよ・・・」
「真理さん、本当・・・？」
疑う言葉が出そうになり、秋光は慌ててそれを打ち消すように真理に唇を重ねた。
ちょっと貪るようなキスをして、秋光の手は再び真理の体をまさぐりだす。
「・・・あっ・・ふぅ・・・」
さっきまで聞いていた甘い声が再び真理の口から漏れ始め、秋光は夢中でその手を進めた。
感じさせてでも体を繋ぎ止めておかなければ、真理は尊のところへ行ってしまう。そんな不安が消えない。
たとえ、「好きだ」と言ってもらっても。

「真理さん・・・もう一回、言って」
「す・・き・・・、好きよ・・・。あきみつ、く・・ん・・・。あぁっっんっ・・・」
乱暴なくらい激しい愛撫に、真理の体は確実に反応する。
「す・・き、好きよ・・・あんっん・・」

「もっと、言って、真理さん・・・」
「好き・・・好きっ・・・ああっ！」
急ぐように秋光は真理の中へ侵入する。体を繋げて震える真理自身を確認すると、秋光はやっと安心したように真理を見下ろした。
「好きだよ・・・。真理さん」
「秋光君・・・好きよ・・・」

何度でも、何度でも、秋光は真理にその言葉を言ってもらいたかった。
四年間の苦しかった想いの分を、埋めてもらえそうな気がして。
「好き・・・あっ、あぁんっ！」
真理を感じながら、秋光は何度もその言葉を聞いた。

秋光は嬉しかった。
たとえ、同じ言葉を、尊に囁いた後だったとしても・・・。

「お疲れ様です」
「尊先生、お疲れ様」
まだ最後の後片付けをしていた看護師達の挨拶を受けて、尊は早めに帰り支度を終えて病院を出た。
真理ちゃん、やっぱり帰ってこなかったな。
今日真理に会えなかったのは残念だが、夜に電話するから良いか。と自分を説得する。
照れ屋の真理に電話で「好きだ」と言わせてしまった。すぐに切れたのは恥ずかしかったせいだろう、と思っている尊は、夜の電話

で謝らないとな。と、ちょっと電話をするのが楽しみな気分だ。

駐車場から車を出し、コンビニに寄ろうかな、と考えた。
これからも長い付き合いになるのだ。いつまでも変に睨み合っていたって、お互い気まずいだけだろう。
真理にプロポーズをして、正孝に了解のような言葉ももらった。
尊はどこか気持ちが大きくなっていたのかもしれない。
今日早めに帰り支度をした理由。彼はこの後、ジュエリー専門店へ行こうと思っていたのだ。
ある物を選びに・・・。

ビールでも買って行こうとコンビニの駐車場に車を入れた尊は、店の照明が半分消えている事と、出入り口に閉店を知らせるプレートが掛けられている事に気づいた。
珍しいな。休みなんて。
まぁ、明日でも良いか。駐車場を出ながら、バックミラー越しにもう一度目を向ける。

中に真理がいて、秋光と抱き合って居る事を、尊は知らない。

53　「好き」の言葉（後書き）

こんにちは。玉紀　直です。
今回のテーマは「昼メロ」（笑）
ノリを昼メロ風にしてみました・・・。ちょっち、途中、恥ずかしかった。（照）
エッチまで行く予定じゃなかったんですけどね。
・　・・流れ、という事で、ご勘弁を・・・。

「好き」と言われた秋光君ですが、真理ちゃんは同じタイミングで尊さんにも同じ事を言ってしまっているんです。
それでもその言葉を信じたい秋光君は、必死の思いで真理ちゃんを抱きます。

尊さんと秋光君。二人の間で揺れだした真理ちゃん。
どちらかと幸せをつかむ事になるのでしょうか？
それとも・・・。（↑何だコレは（汗））

次回は12月9日更新予定。（遅れて1日）

では、次回！！

５４　共有の想い

「これを、お返ししたかったんです」
真理の前に差し出されたのは、真理が病院に持ち込み井関に突きつけた、正臣のナイフだった。

雑居ビルの中にある、今泉法律事務所。
そんなに立派な事務所では無いし、働いている人間も少ない。
狭い事務所の中、壁側の棚にびっしりと並べられた書類のファイル。真理が座っている応接セットの長椅子などは、高校時代の職員室にあったものを彷彿させる。
ちょっと手を抜けば、物で溢れて乱雑な場所になりそうな雰囲気ではあるが、ここはいつ来ても整理整頓がされていて居心地の悪さを感じさせないのだ。
小さな仕事でもキッチリとやる今泉の性格が出ているようで、真理はここへ来るたびに「良い人に弁護人になってもらっているな」と思う。

「すいません・・・。私、落としてきたんですね。
真理はナイフを受け取り、両手で握ったまま膝に置いた。
今泉に井関から引き離された時、てっきり鞄の中へ入れたと思っていたのだ。しかしあの時は、動揺していた上に慌てていた。入れたつもりで下に落としていたのだろう。
真理が逃げ出し、看護師を呼ぶ前に、今泉はナイフを拾ってスーツのポケットに隠したのだ。

七時も近くなってやっと秋光が離してくれてから、真理は今泉に

電話を掛けた。
渡したい物があるが明日でもいい。との事だったが、今日の事も謝りたかった真理は、事務所に行くと言って電話を切り、秋光にその事を伝えた。
真理が帰ったらもう一度店を開けようと思っていた秋光は、もちろんその考えを無き物とし、当然のように愛車のスカイラインでここまで真理を送ってくれたのだ。
今は外の駐車場で、真理が戻るのを待っている。

「井関さんは・・・あの後、どうなったんですか?」
真理が訊き辛そうに口を出すと、ちょうど男の事務員がお茶を持って来てくれた。
今泉もあまり他人に聞かせたくは無いらしく、事務員が事務所と応接コーナーを区切る衝立の向こうに消えてから口を開く。
「混乱状態でした。・・・安定剤を打たれて、やっと大人しくなったようでしたが」
「何か・・・変化は・・・」
「解かりません。とりあえずは、意識が戻ってからでしょうね」
「・・・そうですか」
安心したような、残念なような。複雑な思いが、真理の胸中で渦を巻く。

あのまま、狂い死んでしまえばいい・・・。

そう考えていた自分が、今ではとても恐ろしく感じるのだ。
秋光に抱かれて、酷く落ち着いた自分を感じる。
いつもと同じ自分に戻れた気がして、真理は何となく嬉しかった。

「立花さん」
今泉は膝の上で手を組んで、少し身を乗り出しながら苦笑いを漏

らす。
「もう・・・、あんな事はしないで下さい」
真理はナイフを握っている手を見詰めていた視線を上に上げ、今泉を見た。
「気持ちは解かります。思い出させたかったのでしょう?けれど、あれはしてはいけない事だ。解かりますね?」
「はい・・・。すみませんでした・・・」
真理が素直に返事をすると、今泉は安心したように目の前の湯飲みの飲み口を片手で持ち上げ、熱いお茶をすすった。

「じゃぁ、どうなったかは解かんないんだ?」
車に戻ってきた真理から話を聞いて、運転席のシートを倒し仮眠していた秋光は、ゆっくりと起き上がりながらシートを直した。
「・・・少し、思い出すと良いな・・・」
秋光の本心としては「あんな奴、死んじまったっていい」と思ってしまっているのだが、真理に気遣って控えめな言葉を出してみた。すると真理が嬉しそうに笑って「うん」と言ってくれたので、「思い出すと良いね」発言を優先させる事に決めた。

「ごめんね、秋光君。こんな事まで頼っちゃって」
真理は助手席でシートベルトを引きながら肩を竦める。するとその手を秋光が掴んだ。
「いくらでも言ってよ。正臣が死んだ事を悔しがっているのは真理さんだけじゃないんだ。同じ思いを共有できるなら、オレは何を頼られたって嬉しいよ」
真理はシートベルトを中途半端に止めたまま、秋光を見る。
「正臣の事・・・話したかったら、いつでもオレに話してよ。オレ、いくらでも聞くし、いくらでも話相手になれる」

真理はシートベルトを手から離し、嬉しそうに笑いながら、その手を秋光の手に重ねた。

秋光の心の中に、間違いでは無い優越感が生まれる。

正臣の話。

それは、尊とでは絶対に出来ないもの。

真理が心に抱えるそんな大切な話を、自分は出来る。聞いてあげられる。

その思いは間違いなく、真理と共有できる思いなのだ。

「真理さん・・・」

秋光は真理の肩を掴み、顔を前に回して唇を重ねる。

さっきまで何度も何度も唇を重ねていたというのに、秋光は真理の唇の温かさを堪能するように優しく唇を吸った。

「オレさ・・・」

唇を離し、両腕で真理の頭を抱いて、秋光は真理と額をくっつける。

「真理さんと同じ事を考えられる。って、凄く嬉しいんだ。それが良い思い出じゃなくてもさ。・・・だって、その事で悩んだらオレが力になってあげられるだろ?・・・オレが、支えてあげられるだろ?」

秋光は、まるで頼み込むように真理に問い掛けた。

「あの先生より・・・オレ・・・」

ついそこまで口から出てしまい、ハッとして口を噤む。

完全に尊に出遅れている自分。それを感じるのが悔しい。しかし、そんな事まで口に出してしまっては、真理が嫌な思いをするのではないか。

そう思い、恐る恐る少し顔を離して真理を見るが、彼女は優しく笑って秋光を見上げた。

「秋光君は、いつも私の事支えてくれていたよ。私・・・正臣の事

で苦しい時、秋光君にしか頼れなかったもん・・・。気付いてなかったでしょ？」

そんな事にはまったく気付いていなかった秋光は、ちょっと照れくさくなってしまい、にやけそうになる顔を見られないように真理から顔を逸らし上を向いた。

「あ・・・」

その秋光の目に、ある物が映る。

彼はそれに惹き付けられた。

「月が出てるよ。真理さん」

真理も車の窓から外を見た。

昼間雨が降っていた夜空は、雲ひとつ無い。

月と、その周りの星達が、それは綺麗に見える。

真理は月をジッと眺めた。

・・・正臣・・・？

いつも月を眺めていると聞こえてくるはずの正臣の声が、聞こえてこない。

どうして？

良い事なのか、悪い事なのか、解からない。

しかし、月を眺めていた真理は、いきなりゾクッと背筋に冷たい

ものが走った。

そんな気持ちも知らず、同じく月を眺めていた秋光が真理を抱き締めた。

「オレさ、きっと正臣みたいな大きな存在にはなれないと思うけど・・・、小さいけど、真理さんの力になりたい。真理さんが望む事、叶えてあげたい・・・」

――月が見てる。

真理は、その視線を感じた。

「辛い事があったら、オレが真理さんの事、守るから・・・」

必死にそう言葉を出す秋光の背中に、真理は手を回す。しかし、目は月から離せない。

正臣の声は、聞こえない。

しかし・・・。

――正臣が・・・見てる・・・。

大切な友人の切ない想いに、目を閉じたかと思われていた月が、ただ黙って真理を見詰めている。

問い掛ける事も、呼びかける事も無く。

ただ黙って、自分だけを愛し続けているはずの、真理を見詰める。

月が語る。

目で、問い掛ける。

真理に・・・・・。

――真理は、俺だけのもので、いいんだよな？――・・・と。

５４　共有の想い（後書き）

こんにちは。玉紀　直です。
井関さんは、様子見です。
さて、彼は過去を思い出せるのでしょうか。

尊さんにライバル意識を燃やしつつ、自分の思いを伝えられた事が嬉しい秋光君。
確かに、正臣君の話は秋光君としか出来ませんね。

秋光君と体を重ねて、最後まで感じられたこと。
正臣君の声が聞こえなかった事。
それが、全ての答え？
もしかしたら、もっと違うところに、月の真意は隠れているのかもしれません。

秋光君と関係を持った真理ちゃん。
尊さんにはどう言うのでしょう。

次回は１２月１３日更新予定！（遅れて一日！）

では、次回！！

55　三角関係

「出来たよ。尊さん」
エプロンをした真理がキッチンで振り返ると、ベッドの端に腰掛けて、新聞を見ていた尊が顔を上げた。
「ほらっ、テーブルの上、よけてっ」
ちょっと厳しい真理の声が飛ぶと、尊は慌ててテーブルの上に置きっぱなしにしていた本や、ビールの缶をよけ始める。
「もぅっ。よけておいて、って言ったでしょ？」
まるで真臣にでもするように「めっ」と眉を寄せて、尊を睨む。
手にしているお盆に乗せた、豚のしょうが焼きの皿をテーブルに並べ、次を取りにキッチンへ戻る真理の後姿を、尊はテーブルからよけた本を抱えながら幸せな気分で見詰めた。

お流れになっていた「夕飯を作ってあげる」という約束を果たす為、今日は尊の部屋へ来ていた。
一人暮らしにしては意外と大きな冷蔵庫が置いてある尊の部屋。火曜日に買ってあった材料は、全て手付かずでその中に収められていた。
ただ、ビールなどは飲んでしまっていたようだが。

昨日、病院を休んだ真理。
尊が帰るまで病院には戻らず、また弁護士などが真理を訪ねて来ていたりして、「何かあったのかな？」と心配していた尊だが、今日仕事に出てきた真理はいつも通り元気で明るかった。
「もう金曜日だし、材料が腐っちゃったらもったいないでしょ？」

と冗談混じりに言って、今夜夕食を作りに来てくれる約束をしたのだ。

どことなく嬉しそうで機嫌が良くて。いつもより真理が可愛らしく見えてしまい、仕事中も彼女を抱き締めてしまいたい衝動に駆られ、尊は少々困った。

「え？椎茸？」

お味噌汁と一緒に並べていた小鉢の中に、高野豆腐の煮付けが見える。その中にチラリと椎茸を見つけ、尊は思わず口が出てしまった。

すると真理はお盆を胸に抱え、悪戯っぽく尊を覗き込む。

「食べなきゃ駄目よーぉ。食べなかったらもう二度と作ってあげない」

好き嫌いの無い尊。しかし唯一、椎茸が駄目な事を真理は知っているはず。

尊は真理の腕を掴むと、自分の横に引き倒した！

「きゃっ・・・！」

お盆を抱えたままの真理が、うつ伏せになってベッドの上へ倒れこむ。尊は素早く真理を仰向けにして、胸の前の両手を左右に開いて押し付けた！

「なにーぃ？わざわざ入れたーぁ？」

「ふふっ。入れたっ。ごめんなさい」

クスクス笑いながら悪気なく言われるが、その仕草が妙に可愛らしく感じる。

尊はそのまま、真理に唇を重ねた。

お味噌汁の味見をしたばかりのせいか、ちょっとしょっぱいキス。

そのキスをした唇が首筋をなぞり、手首を押さえていた手が、真理の腰をまさぐる。

「・・・た、尊さんっ、だめ・・・」
真理が慌てて両手でその手を押さえると、尊は顔を上げた。
「どうして・・・？」
「だっ、だって・・・、ご飯、冷めちゃう・・・」
「いいよ。冷めても・・・」
「駄目・・・よっ。せっかく作ったのにぃっ」
ちょっと怒って必死に抗議をする真理を見て、尊は諦め顔で起き上がり、真理の腕を引いて彼女を起こした。

「コッチを先に食べたら良かった・・・」
起こしたついでに抱き締めてしまおうとした尊の腕をかわして、真理はベッドから立ち上がり、キッチンへ非難する。
「温かい物は温かいうちに食べるのっ。冷めてもいい、なんて言うなら、もう作ってあげないからぁっ」
「ごめん、ごめん」
尊は謝りながらも楽しくてしょうがない。はにかみながらご飯をよそい始めた真理の後ろ姿を、楽しそうに見ている。

本当に真理ちゃん、今日はいつもよりご機嫌じゃないか？

何にしろ、真理が元気だと尊も嬉しいのだ。

「泊まっていければいいのに・・・」
ベッドの中で真理を抱き寄せ、髪を撫でながら尊が呟くと、真理は困ったように笑った。
それが無理だという事は、尊だって解かっている。
両親に預けているとはいえ、家には真臣が待っているのだ。
いくら休日前でも、真臣を置いて一晩家を空ける事など、真理に

は出来ない。

「帰らなくてもいいように・・・したいな・・・」

真理は答える代わりに、抱き寄せられた尊の裸の胸をコンッと叩いた。

こんな事を口に出しては、プロポーズの返事を急がせているように聞こえてしまう。尊はそれ以上を口には出さず、黙って真理の体を抱き寄せた。

「それじゃ、明日」

尊はそう言って、真理を立花家の前で降ろした。

明日の土曜日に、真臣込みで食事へ行く約束をした。先週連れて行った時に凄く喜んでいたのを聞いて、また連れて行ってあげたい。と尊が言ったのだ。

「用意して待ってるわ」

真理が笑顔で手を振ると、尊も運転席の窓から「じゃぁ」と手を上げ、車を発進させた。

明日の食事の約束は昼。この間のような事は無いだろう・・・。

真理はひとつ溜息のような深い息を吐くと、何故か家へは入らずに、今帰ってきた道を戻り始めた。

時刻は夜の十時を過ぎているが、まだ電気がついていたのだ。

――秋光のコンビニが・・・。

いつもなら店のドアが開けば、条件反射的に出る商売言葉。
しかし店のドアが開いた時、秋光はカウンターの中から顔を上げただけで声が出なかった。
「あれ？いらっしゃいませ、は？」
店の中へ入ってきた真理がひやかしながらカウンターへ近付くと、秋光が疲れた顔で溜息をつく。
「土曜のこんな時間じゃ、客が来るほうが珍しいんだよ」
「じゃぁ、どうして開けてるの？」
客が来ないと自由に店を閉めてしまうのを知っている真理は、クスクス笑う。
すると秋光は、チラッとどこか恨みがましそうな目で真理を見た。

「昨日午後からズーッと店が閉まってた。って、近所のかーさん達がウチのおふくろに告げ口したらしくてさ。今日は十一時まで真面目に店開けてろ・・・って」
「あらっ」
真理は手で口元を押さえる。午後からずっと閉めていた原因は真理だからだ。
「私のせいね。疲れたでしょう？」
申し訳なさそうな台詞だが、顔は笑顔だ。秋光はカウンターを素早く出ると、真理を引き寄せ抱き締めた。

「真理さんに会えたから。もう、いいや」
そのまま真理に唇を重ねるが、すぐに離す。
見上げた秋光の顔が、ちょっと怒っているような気がして、真理は小首を傾げた。
「・・・こんな時間にどうしたのかな・・・って思ったけど。・・・あの先生と、一緒だった？」
「どうして？
「ニオイがする」

真理はハッとして、秋光から目を逸らした。
以前同じ様に、尊と体を重ねた後で秋光に会った時、「セックスしたニオイって、体に残るよ」と言われたのだ。
尊にシャワーを使っていくように勧められたのだが、妙にさっぱりして家へ帰るのも母に目ざとく指摘をされそうな気がして、どこか気まずいので遠慮したのだ。

「あ・・・、さっきまで・・・」
言いよどむ真理の唇を、秋光は乱暴にふさいだ。

自分の事を、あんなにも想ってくれている尊を、真理は裏切れない・・・。
心の中に、秋光の存在が大きな影を落とし始めていても。

「真理さん・・・」
秋光のちょっと悔しそうに乱暴なキスを受けながら、真理の心は過去へ戻る。

――昔、同じ過ちを犯した、・・・自分の過去へ。

５５　三角関係（後書き）

こんにちは。玉紀　直です。
秋光君への気持ちに気づいたから、そこでお・わ・り？
・・・な、訳が無い。（笑）
どーも真理ちゃんはこういう状況に弱い子です。
自分を想ってくれている人を、裏切れない。という・・・。
前作から入ってくれている方は、嫌って言うほど解かってるかも。
（苦笑）

どうやら「三角関係」というものに陥ってしまったようです。
尊さんとの関係を続けているのに、秋光君と・・・。
そんな事、いつまでも続けられるものでもないんですけどね。

次回、その「三角関係」に決定的なことが・・・。
「閲覧注意」になります。

次回１２月１９日更新予定。（遅れて１日（汗））

では、次回！！

５６　冷たい月（前書き）

注意

今回は本文中に性的表現が含まれています。
苦手な方、又は、そういう表現が嫌いな方は
その場面にきたらとばすなど。してください。
Ｒ－１５指定はさせて頂いていますが閲覧にはご注意を・・・。

56　冷たい月

「誰かお客さんかい？」
学会の関係で出かけていた正孝は、玄関にあまり見た事が無い男物のスニーカーが並べられている事に気付いた。
「ええ。真理と正臣君のお友達よ」
笑いながら真澄が鞄を受け取ると、正孝はコートを脱ぎながら、階段の方へ目を向ける。
「ああ。秋光君か」
「そうなのよ。八時過ぎにまぁちゃんが寝てね。真理がコンビニに買い物に行ったんだけど、九時近くにそのまま二人一緒に戻ってきてね、今二階にいるわ」
「そうか」
正孝は腕時計をチラッと見る。ちょうど十時。九時近くに来たという事は、八時半には店を閉めたのだろう。

「最近、夜にちょくちょく遊びに来るようになったね」
「もうすぐ正臣君の命日だもの。何か思うところがあって、二人でお話してるんじゃない？・・・でも彼、本当にいい子よ。来ると必ず、最初に正臣君の仏壇に手を合わせてくれるの。思えば、正臣君が亡くなった時から、ずっと真理の力になってくれて・・・。本当にいい子よね」
正孝から脱いだコートを受け取りながら真澄が秋光を褒めると、正孝はドアが開いたままの仏間に目を向けた。
視界に、正臣の仏壇が目に入る。それを見ながら、正孝はちょっと寂しそうに、今までずっと感じていた事を口に出した。

「私はね・・・。もしかしたら秋光君が、真理の恋人になるのでは無いかと思っていた事があるんだ」
「え？」
初めて聞く話に、真澄は驚いて正孝の顔を見た。

「正臣が死んだ時、真理の落胆は私達だけでは支え切れないものだった・・・。でも、毎日そんな真理に会いに来て、元気付け、勇気付け、真理が立ち直ってくれるまで、ずっと見守っていてくれた。真理に笑顔を取り戻してくれたのは秋光君だと、私はずっと思っていたんだよ」
「・・・・・」
真澄は夫のコートを胸に抱いて、当時、見ているほうが泣いてしまいそうなくらい憔悴していた真理を思い出していた。

そんな真理に、いつも会いに来た少年。

「正臣に会いに来たんだ。ほら、オネーサン、甘いもんでも食おーぜ」
毎日コンビニ袋に甘いオヤツを入れて、笑顔でやって来た、学生服の少年。
それは、プリンであったり。チョコレートであったり。クッキーであったり。
一日中、正臣の仏壇の前で泣いてばかりいた真理は、どんなに言っても食事など採ってはくれなかった。しかし、何故か彼が持ってくる甘いオヤツだけは、口に入れたのだ。
「甘いモンでカロリーとってりゃ、飯なんて食わなくたっていいよ！そのうち嫌でも食えるようになるって！」
決して、無理強いはしなかった。
いつも笑顔で、真理を励まし続けてくれた。

「そうね・・・。そうなっても、おかしくなかったわね」
真澄がしんみりとしてしまったのを見て、正孝はちょっと慌てて妻の肩をポンッと叩いた。
「ま、結局は『友達』で終わってしまったようだがね。真理には今、尊君がいるんだし」
「・・・ええ」
「しかし、お客さんか・・・。マズかったかな」
「何がです？」
「ん、実はね」
正孝が「マズイ」と言った理由を言おうとした時、玄関のドアが静かに開いた。
「こんばんは」
笑顔で、尊が入ってきたのだ。

部屋に電気は点いていなかった。
真臣が眠る部屋の隣。そこは真理の部屋だ。
カーテンは開きっぱなしだった。
気温が下がると、夜空は凍ったように星の輝きが増す。
その星に囲まれて、明るい月が見えた。
くっきりと明るい。

どこか、冷たい月。

その月の光は、カーテンが開きっぱなしの窓の中を、ジッと見詰めるように照らしている。

「あっ、あ、あ・・・ダメッ・・あっ！」

堪えていても出てしまう声。
ただ、声を潜めることに昔から慣れている真理は、闇雲に大声を出したりはしない。
「ああんっっ・・・あ・・、秋・・光くぅん・・・」
秋光の名を呼ぶと、ベッドの上で真理の両脚を肩に抱え上げた彼が、深く真理を貫きながらそのスピードを落とす事無く、自分の名前を呼んだ真理の口を唇でふさいた。

「ダメ・・・だよ。真理さん・・・。名前呼んだら。下に聞こえたらどうするのさ」
「だ、いじょうぶ・・・よ。ああぁっ！・・・あぁぁ、ダメ、もぅダメェッッ！」
「・・・嫌だよ。まだイかせないから」
スッと腰を引いて真理の両脚を肩から下ろすと、荒い息を吐きながら、休憩のように小さな動きに変える。
今まで彼でいっぱいに満たされていた真理自身が、入口で遊ぶ彼にじれったさを感じ始め、両足をシーツに擦り付けながら焦れた。

「あ、イヤ・・・、いじわ、る、しない・・・で、あんっ・・」
「昨日も一昨日も、あの先生の部屋に行ってたんだろ？・・・どうせ、沢山イかせてもらったんだろうから・・・。オレは、イかせないよ・・・」
「・・・イ・・ヤ・・。ああっ！あき、みつ、く・・・」
ちょっと意地悪な態度を取られても、真理の体は容赦なく高まって行く。もうイかせてもらいたくて堪らない。

いまだに、尊とのセックスでオーガズムを得られる事はなかった。
必ずと言っていいほど、正臣が真理の体を支配してしまうからだ。
反対に、秋光とのセックスでは、真理は頭の中が真っ白になりそうなほどのオーガズムを迎えてしまう。

彼に抱かれる時は、正臣が真理の体を支配してしまう事がないのだ。
あの雨の日、休憩室で体を重ねてから、もう何度と無く彼に抱かれた。
その度に秋光に翻弄されるだけで、正臣は現れない。
今日も・・・。

「あ、ん・・・イ、かせて・・ぇ・・、おねがいっっ、ん、ん、ぁぁあっ！」
月は見ている。
綺麗な夜空で。
輝く星を、沢山従えて。

「真理さん・・・好きだよ・・、まり、さ、・・・・」
秋光がいきなり奥まで真理を貫く。
真理の体が大きく反る。彼を離すまいと、両脚がキュッと彼の腰を挟み込んだ。

「あっ、イイ・・・よ。まりさ、ん。・・・オレ、アノ先生になんて、真理さん抱かせんの、イヤだ・・・」
「あきみつくん・・・」
「好きだよ・・・真理、さん・・・。すき・・・」
秋光の動きはだんだんと早くなり、的確に真理の体を高める。
イかせないと言った秋光だが、彼も、もう我慢は出来なかった。
「秋・・光く、ん・・・、イくよ・・ぉ！もぅ、ダメぇ・・・。イかせてぇっ！」

「すいません、こんな時間にお邪魔して」
夜の突然の訪問、という物は、時として妻の負担になるものだ。
それを知ってか知らずか、尊が申し訳なさそうに真澄に言うと、正孝が笑いながら尊の背中を叩いた。
「私が家へ寄って行ってくれと言ったんだよ。今日は学会の付き合いに同行してもらったからね。今、車を病院の駐車場に置きに行っていたんだ」
「まぁ、そうなの？じゃぁ車？お酒は駄目ね」
「寒いからカフェオレでも淹れてくれ。真澄が淹れるカフェオレ、尊君にも飲んでもらおう」
真澄は「はい」と返事をしてリビングへと入って行った。
仲の良い院長夫妻に何となく口元がほころび、外は寒いが何となく温かい気持ちになった尊は、ちょっと辺りを目で見回し、何気なくを装って正孝に訊ねる。
「あの・・・、真理ちゃんは、もう寝たみたいですか？」

せっかく来たのだ。真理にだって会いたいだろう。正孝は笑って階段を見上げた。
「部屋にいるみたいだよ。呼んでこようか？」
すると尊は、嬉しそうに首を振った。
「いいえ。俺、顔出してきます。驚くと思うし」

――――確かに、驚くかもしれない・・・。

56　冷たい月（後書き）

こんにちは。玉紀　直です。
いつの間にか、すっかりハマッタ三角関係。
尊さんの恋人でいながら、秋光君とも関係を続ける真理ちゃんは、もぅ引き返せないところまで来てしまっています。

何も知らないで、真理ちゃんを思う尊さん。
尊さんの恋人だと承知の上で、尊さんに敵対心を持ちながら真理ちゃんを抱く秋光君。

そんな二人を、そして真理ちゃんを。
月が冷たく見下ろします。

二人が抱き合っている時、立花家へやって来た尊さん。
・・・何が起こる？

次回は１２月２４日更新予定。（遅れて１日）

では、次回！！

57　もうひとつのプロポーズ

「煙草、吸ってもいいんだよ」
しつこいくらいに髪を撫で、その感触を楽しんでいる秋光の手をくすぐったく感じながら、真理は秋光の胸に体を預けたままそう言った。
「・・・こういう事した後って、吸いたい物なんじゃないの？」
彼の裸の胸を指でなぞり、乳首をピンッとはじいて悪戯をする。すると素早く秋光が手を伸ばしてきて、真理の片方の乳首をキュッと摘んだ。
「あっ、やぁっ・・」
いきなりの仕返しに身を捩り、片腕で胸を隠す。それから拗ねた目で秋光を見上げた。
「秋光君っ」
「最初にやったのは真理さんだよ」
秋光はアハハと楽しそうに笑ってから、真理に悪戯をした手を頭の後ろで枕にする。そして、今まで自分がこの真理の部屋のベッドの上で愛していた彼女の体を、ちょっと強めに片腕で抱き締めた。

「正臣は？吸った？」
「ん？」
「煙草さ。セックスした後、吸った？」
秋光はよく正臣の話をする。
何一つ嫌がる素振りも見せず、自然に話してくる。また真理も話をされる事は決して嫌ではなかった。むしろ嬉しかったのだ。

「最初のうちは一方的だったから、した後すぐに居なくなっていたけど・・・。気持ちが通じてからは・・・吸ったかな。たまに。・・・でもね、妊娠したって解かってからは、絶対吸わなかったよ」

「ふーん、じゃぁ、俺も吸わない」
張り合うように言う秋光を見て、真理はクスッと笑った。
「馬鹿ねぇ、良いのよ、吸っても。煙草は好きじゃないけど、煙草のニオイは正臣を思い出させてくれるの。少しくらいなら正直大歓迎よ。妊娠してる訳じゃ無いんだから、そんな気を遣わないで」
「本当？」
何となく深刻な声を出した秋光に驚きながら、真理は彼を見上げる。

「何言ってるの。馬鹿ねっ」
「だってさ・・・最初の時・・・」
秋光が言わんとしている事は解かる。
初めて彼と体を重ねた時、そんな事に構っている状況ではなかったという事もあったが、避妊をしなかった。
あれから一ヶ月近く経つが、秋光は少し気にしていたのだ。

「大丈夫よ」
真理はクスッと笑って秋光の顔を見た。
「あの時は、生理が終わったばかりだったから、そういう『危険日』じゃなかったし」
すると秋光はちょっと残念そうな顔をして、頭の下にしていた手で布団の中の真理の腰を撫でた。
「ちぇっ」
「・・・ち、ちぇっ・・・って、秋光くんっ」
残念そうに舌を鳴らす秋光。残念がっている様子に、真理は思わず上半身を少しだけ上げた。

「な、何考えてるのよっ。バカねっ」
「バカじゃないよ・・・」
秋光は手を伸ばし、真理の頭を引き寄せる。

「・・・子供、出来ちまえばいい、って、あの時思ったし。そしたら、オレ、真理さんと・・・」

そのままキスをして強めに唇を吸うと、真面目な顔で真理を見詰めた。

こうなってしまうと真理の方が照れてしまう。真理は体を起こして、赤くなった顔を隠すように秋光に背を向けた。

「変なこと・・・言わないで」

明るいと真理が恥ずかしがって嫌がるので、部屋の中には豆電球しか点いてはいない。あと部屋を照らすのは窓から入る月明かりだけだ。

顔が赤くなっているかいないかなどハッキリは解からないとは思うが、やはり恥ずかしくて顔自体見られたくは無かった。

・・・これじゃぁ、まるでプロポーズじゃない・・・。

尊からプロポーズされて、真理はまだ答えを出しては居ない。その後ろめたさもあるのか、秋光の言葉が妙に心に重い。

秋光はゆっくり起き上がると、後ろから裸の真理の体を抱き締めた。

「本気だよ」

「秋光君・・・」

抱き締めた秋光の腕に手を当てる。

温かい腕。同じ「男」の腕であるはずなのに、尊に抱かれるのとは違う感覚を体に残してくれる、秋光の腕。

「オレ、本当に、真理さんと真臣の事、大切にしたいと思ってる・・・。――真理さんと、結婚したい」

真理は、手を当てた秋光の腕をグッと握る。それと同じ様に、秋

光も強く真理を抱き締めた。
真理の心の中に、戸惑いにも喜びにも取れる複雑な思いが渦巻き始めた。
「秋光君・・・私・・」

驚かすつもりで、尊はコッソリと部屋のドアを開けた。
部屋の中は暗い。思えば真臣はもう寝ているのだ。部屋の電気が消えているのは当たり前だろう。
「こっちじゃないか・・・」
尊は呟きながら、そっと部屋の中へ入りベッドへ近付いて、スースーと可愛い寝息を立てる真臣を覗き込んだ。
普段は時々、とても生意気な顔を見せる真臣。
しかし今は本当に可愛い顔で眠っている。見ているだけで幸せな気分になれそうだ。
こんな寝顔の真臣が、自分の子供として傍にいてくれるようになるのかもしれない。そう思うと尊は妙に嬉しくなり、くすぐったそうに笑うと再びコッソリと部屋を出た。
この部屋の隣にある、まったく同じドアに目を向ける。
そこは真理の部屋だ。
正孝に、秋光が遊びに来ているから、と聞いていた。
てっきり真臣の傍に居るのかと思い寝室を先に覗いたのだが、考えてみれば真臣が寝ているという事は部屋の電気も消されているという事だ。
そんな部屋で真理と秋光が話をしている、というのもおかしいだろう。
尊はそう考え直し、隣のドアへと手を伸ばした。

「ダメだよ秋光君。何も、子持ちにそんなこと言わなくたって良いじゃない・・・」
何と答えたら良いか解からなくなって、真理は言葉を選ぶこと無くそんな言い方をしてしまった。
ちょっと怒ったのは、もちろん秋光だ。
「オレが本気で好きなのは、知ってるだろ?!」

尊の手がピタッと止まる。
今の声は・・・コンビニの・・・。
もちろん秋光の声だ。しかし尊は、声の主よりその叫び声の内容に眉を寄せ、ドアノブを掴んで乱暴に捻った!

ガチャンッ!!
突然立てたドアノブの大きな音。真理はビクッと体を震わせた。
ドアノブはガチャガチャっと音を立てながら、激しく揺すられている。
しかしドアには鍵が掛かっているのだ。開かないのは当たり前。
「真理ちゃん?中に居るのかい?」
やがてドアノブの音はやみ、ドア自体に何度もノックの音が響き始めた。
「真理ちゃん?中に居るんだろ?・・・秋光君も、いるのかい?」

「尊さん・・・?」
真理の全身から血の気が引く。
火照って温かかったはずの体は、一気に冷えてしまった。

「真理ちゃん?!」
尊に騒がれてはマズイ。今日は正孝が学会仲間の集まりに行くので、それに尊を連れて行くと言っていた。尊が帰っているという事は、正孝も帰っているという事だ。二階が騒がしいと気付いた両親が駆けつけて来でもしたら・・・。
・・・こんな状況を見られるのは、非常に好ましい事ではないのだ。

「待って!今、開けるから!」
真理はドアの方へ向かってそう叫ぶと、床に散らばった自分の服と秋光の服を拾い、秋光の分を渡しながら「服を着て」と言って、自分も慌てて服を着始めた。
「まっ、待ってね!やだ、私、気付かないうちに部屋の鍵、掛けてたんだ?やだなぁ。今開けるからね!」
わざと明るい声で叫ぶように言い、秋光が着替え終わったのを確認して、ドアへ向かい鍵を開けた。

「こんばんは。真理ちゃん」
開けてくれたドアの向こうに真理が立っている。
真理の顔が見られたのが嬉しくて、ドアがあいた途端にそう言った尊だが、すぐにその「おかしさ」に気付いた。

「こんばんは・・・」
真理の落ち着かないソワソワした様子。
いつもは綺麗なストレートの髪が、今は乱れている。
そして、赤く染まった頬。

「・・・」

尊は何か嫌な予感がして、真理を押しのけ部屋の中へ足を踏み入れた！

「・・尊さ・・・っ！」

急におかしな様子を見せた尊に焦った真理が、慌てた声を上げる。しかし尊の足は、部屋の中へ一歩踏み込んだところでピタッと止まり、その顔は何処か青ざめ始めていた。

部屋の中に篭るにおい・・・。

それは、自分でも知っているニオイだ。

どこか生々しい・・・、汗のにおいと、男と女のにおい・・・。

尊は怖いものでも見るかのように、ゆっくりとベッドへ目を向けた。

立ち昇る白い煙草の煙。

ベッドの端に腰掛け、煙草を吸っている秋光の姿がある。

乱れたシーツと寝具。

几帳面な真理が、こんなに乱したまま一日放っておいたとも思えない。

と、すると、「今」乱したとしか思えないのだ。

視線を動かすと秋光と目が合う。彼は煙草を咥えたまま、軽く片手を上げた。

「やぁ・・・、センセイ」

その挨拶には答えず、尊は真理を見る。

「真理ちゃん・・・？」

その顔は、信じられない物を見るように、目を見開き眉を寄せたものだった。

「・・・何していた・・・の・・・？」

57　もうひとつのプロポーズ（後書き）

こんにちは。玉紀　直です。
実は、朝更新してすぐの分に、あとがきを転記し忘れる、というドジをやらかしました・・・。朝早くに来てくれた方々には申し訳ないです。（謝謝）

もう一人、秋光君にもプロポーズをされた真理ちゃん。
尊さんの気持ちにも応えていない彼女は、何処までも自分を追い詰めてしまいます。
そこへやって来たのは尊さん。
隠していた秋光君との関係が知られることに・・・。

次回展開されるのは、予想通り「修羅場」というものですが・・・。
そんなに凄くは無いと思う。うん。
どっちが優勢に立つでしょうね・・・。
答えは次の更新で・・・。なのですが、年内更新が難しいです。
でも出来れば年内もう一度更新したいんで・・・。
１２月３０日更新予定（空いちゃってごめんなさい）にさせて下さい。
物語も佳境に入っているので、出来れば短いペースでぽんぽんっと更新してお楽しみ（？）頂きたいところですが（たっ、楽しみにしてもらえてるのかぁぁ・・・（笑））年末年始は雑用が多くて・・・。（だって、主婦だし・・・と、弱音を吐いてみよう（笑））

ｗｅｂ拍手と言うものをつけてみました。
サイトにユーザー登録をしていなくても、メッセージなどを送って頂く事が出来ます。（拍手だけでも大歓迎です）

よろしければご利用下さい？

非公開メッセージですので、玉紀にしか読めませんので。「公開されるメッセージは恥ずかしい」という方も是非！

では、次回！

３０日に更新できるように頑張ります！

58　尊の怒り

「やめろよ。困ってんだろ？」
長い沈黙だった。
冷たく張り詰めた空気が部屋の中に漂い、何の音も聞こえない。
もしも「空気の音」という物があるのなら、その音だけが「シーンッ」という音となって耳の中に響いていただろうか。
そんな中で、口火を切ったのは秋光だった。

「何言ってんだよ。・・・『何してた？』って、分かんないようなガキじゃねぇだろ？」
「秋光君・・・」
秋光の、この場の状況を全て肯定する言葉に真理が慌てた声を出す。
しかし、秋光の言う事ももっともだ。
この状況で、二人が仲良くゲームをして遊んでいたようには見えないだろう。

「わざとらしいんだよ・・・」
ちょっと鼻でフンッと笑った秋光。
この状況でその態度は、著しく尊の男としてのプライドを傷付けた。

「尊さん！！」

真理が慌てて叫ぶ。
尊がいきなり、秋光の胸倉を掴みあげたのだ！

すぐにでも殴り付けるのではないかと思った真理は、反射的に目を閉じて肩を竦める！

しかし、何か起こった気配はなく、彼女はゆっくりと目を開けた。

秋光の胸倉を掴み上げ、憎々しげに彼を睨み付ける尊。

尊の目を睨み返し、手に持っていた煙草をベッドの上に置いてあったコーヒーの空き缶の上で潰す秋光。

「なんだぁ？やろうってぇのか・・・？」

胸倉を掴んだ尊の手を上から押さえると、秋光は尊から目を逸らさず睨み付けたまま、勢い良くベッドから立ち上がった！

「上等だ！センセイがオレに喧嘩ふっかけようなんざ、見上げた度胸だ！なぁ？！！」

身長に十五センチほどの差はあるが、確かにこういう事に関しては秋光の方が上だろう。

どう考えても、真面目に医療畑一筋でやって来た尊には分が悪い。

体を使った喧嘩になれば、この手の事は学生時代に慣らした秋光の方が有利だ。

「やめて！秋光君！！」

真理もそう思ったのだろう。慌てて秋光に掴み掛かる尊の腕に手を掛け、二人の間に入った。

「やめてっ・・・暴力なんて・・。そんなの駄目だよ！」

胸倉を掴みあげるという、挑発行為に出た尊と、それに受けて立とうとした秋光。

一体どちらに言ったらいいのか分からず、取り敢えず真理は怯えた顔で二人を交互に見る。間に真理が入り二人の視線が集まると、真理はまず尊と目を合わせた。

「・・・ちゃんと、説明するから・・・。この手を離して？お願い・

・・尊さん」
秋光の胸倉を掴んでいる尊の手の上に、真理が手を乗せ尊を見詰めると、尊は一瞬戸惑ったが投げ捨てるようにその手を離した。
秋光から顔を逸らし、悔しそうに唇を結ぶ尊の横顔を見て、締め付けられるような胸の痛みを覚えながら、真理は秋光へと目を向けた。

「秋光君・・・今日は、帰って。私、尊さんにちゃんと説明するから・・・」
「でも、真理さん・・・」
「大丈夫よ。ちゃんと話すわ。・・・どちらにしろ、ここで殴り合いも怒鳴り合いもしないで・・・。下に、お父さんもお母さんも居るから・・・」
確かに今ここで騒ぎを起こすのはマズイ、と秋光も気付いたのだろう。いささか納得のいかない顔ではあったが、「分かったよ」と言って頷いた。

床に脱ぎ捨ててあったジャンバーを拾い上げ、煙草の灰を落とした空き缶を手に持つ。それから、心配そうに自分を見ている真理に目を向けた。
「真理さん・・・」
帰れと言われても、心配だ。
これから二人が、どんな話をするのか。気になって堪らないのだ。
「大丈夫よ」
そんな秋光の腕に、真理はそっと手を触れ、ニコッと笑って見せた。
「あとで電話するから。・・・ねっ？」
納得いかないまま秋光は頷き、そして一切振り向かない尊の後ろ姿を睨み付けて、ドアを閉めた。

秋光が部屋を出た瞬間、尊は部屋の窓を全開にして開けた！
冷たい夜風が一気に吹き込んできて、さっきまで火照りを隠せなかった真理の体を包み冷やす。
「息が詰まる・・・」
開け放たれた窓の縁に手を掛け、外を見ながら尊が呟く。しばらくすると、家を出て歩き去る秋光の姿が見えた。
その後姿を見ながら、尊はグッと眉を寄せる。

あいつ・・・。真理ちゃんを・・・？

「部屋に入った瞬間から・・・。君とアイツのニオイで、息が詰まった・・・」
「・・・尊さん・・・、あの・・・」
真理が話しかけようとすると、尊はそのまま振り返り、首を傾げた。
「何をしていたの？真理ちゃん」
「・・・・・」
「こんなニオイが、部屋中に篭るような事、って、何？」
「あの・・・」
「言ってくれなきゃ、解からないだろう？アイツに言ってたじゃないか？『ちゃんと話す』って」
言わなくたって分かる事だ。しかし尊は、それをハッキリさせるために真理の口から言わせようとした。
自分が間違った事をしていたのだ。素直に訊かれた事には答えよう。そう思った真理は、尊から目を逸らし言い辛そうに答える。
「あの・・・、セックス、した・・・」
「誰と？」
「・・・秋光、くん・・・」

「アイツは、君の『友達』なんじゃなかったのかい？」
「・・・・・」
「『大事な友達だ』そう俺に言ったよね？」
「・・・それは・・・」
「『友達』と、こんなコトするの？！」
急に怒った声を出し、速足で真理へ近付くと、尊は乱れたままのベッドの上へ真理を投げるように押し倒した！

「たっ・・け・・・！」
「ここで何をしていた？！アイツは、君に何をしたんだ？！」
尊の両腕を掴み起き上がろうとするが、もちろん尊の腕はそれを許さない。
「『友達』だって、言っていただろう？！『友達』と寝るのか？！君は！！」
「ちがう・・・。違う！」
「俺が居るのに・・・！どうして、こんなコト・・・！」
「ごめんなさい！ごめんなさい、尊さん！」
いつもと違う、本当に怒った様子の尊の迫力に押されて、真理は小さく何度も首を振る。説明などする余地は無い。自分を押さえつけ苛立ちをぶつけるように揺する尊の腕を掴んで、真理は涙が浮かんできた。

「真理！」
必死で首を小さく振る真理の首元、Ｖネックの中で月の指輪が首の横へ滑る。
それを見た瞬間、尊の中で、言いようのない憎しみにも似た感情が大きく膨れ上がった。

――――忘れてはくれない。死んだ恋人・・・。

そして、今度は、その友人・・・。

「！」

尊は、吐いてしまいそうなショックに、思わずグッと息を詰める！
いきなり首に掛かるペンダントをグッと掴むと、力いっぱい引き
ちぎった！

「たける、さっ・・ん！！」

千切れたチェーンごと指輪はそのまま放り投げられ、開け放たれ
たままの窓から入り込む月の光に反射して、小さくキラリと光った。

「やめて！」

それは、月が流した涙にも見えた・・・・・。

58　尊の怒り（後書き）

こんにちは。玉紀　直です。
年末更新が出来ず、長い事お休みになってしまい申し訳ありませんでした。
また、新年一発目から、平和じゃない話ですみません・・・。

恋人の浮気現場を発見したのですから、怒らない男は居ませんよね。（女もですが）
考えようによっては、尊さんの怒りももっともです。
でも、これでは話し合いにはなりません・・・。

次回は、ちょっと「イタイ」です。
「あっ、無理！」と思われたらスルーでお願いしますね。

次回は1月9日更新予定。

では、今年も宜しくお願いします！

＊「活動報告」の方に12／24～30まで、web拍手で頂いたコメントのお返事を掲載させて頂いています。
この間にコメントを下さった方。覗いてみて下さいませ。

沢山の拍手を、いつも有難うございます！

59　笑う月（前書き）

注意

今回は本文中に少々「無理矢理系」の性的表現が含まれています。
苦手な方、又は、そういう表現が嫌いな方は
その場面にきたらとばすなど。してください。
Ｒ－１５指定はさせて頂いていますが閲覧にはご注意を・・・。

59　笑う月

「え？出かけた？」
返ってきた返事に、秋光は眉をひそめた。
秋光も不思議そうだが、それを言った真澄も不思議そうな顔をしている。
「そうなのよ。秋光君が帰って・・・すぐ位かしら？ちょっと行って来る、って。二人で」
真澄はついさっきの事を思い出していた。
尊に手を引かれ、家を出て行った真理。しかし、「手を引かれる」というと微笑ましい光景に感じるはずなのに、その時の二人はどこか深刻な雰囲気だったのだ。
「何か、あったのかしら？」
そう呟いて、チラッと秋光を見る。

三十分ほど前、秋光の「おじゃましました」という声が玄関から聞こえた。
尊が来たから気を遣って帰ってしまったのかな、と正孝と二人で話していたところ、十五分ほどして尊と真理が下りてきた。
どことなく、深刻な雰囲気で。
もしかして、夜遅くに男友達が遊びに来ていた事で、尊が嫌な顔でもして揉めたのではないか？真澄は少し勘ぐった。

「分かりました。すいません」
踵を返して帰ろうとした秋光を、真澄は慌てて止める。
「真理に、何か用事があったんじゃないの？」
「はい・・・でも、いいんです。様子を見に来ただけなんで」

「秋光君」
ドアに手を掛けた秋光を、真澄は再び止めた。
「いつも・・・、真理の事、気にかけてくれて、有難う・・・」
母親として、娘の力になってくれる友人への、感謝の言葉だった。
何となく胸が詰まり苦しくなった秋光は、頭を軽く下げ立花家の玄関を出た。
出た途端に体を包む冷たい空気は、彼の熱くなった頭を冷やす。

真理に「帰って」と言われ店の前まで戻ったが、やはり考えていると気になって、再び立花家まで戻ったのだ。
あんな状況の説明を、真理に出来る訳がない。
説明する。という事は、自分との関係を話す。という事だ。
「何処に行ったんだ・・・」
門を出て小声で呟きながら、秋光は空を見上げた。

明るく綺麗な月が見える。
さっき真理を抱いている時も、カーテンを開けっ放しの窓から、ずっと自分達を見ていた月。
「正臣・・・」

月は答えない。
ただ黙って、親友を見ている。

「・・・笑ってるのか？」

月が笑っている。
親友を、不敵な顔で。

何かを企む時の、「彼」の顔で・・・・・。

「・・・や、ぁ・・っ、た、け・・るさっ・・」
苦しそうな真理の声が、暗闇に響いた。
その声は、さっきからこの部屋の暗闇の中で響き続けている。

「や・・め・・・ああっ！」
腰を引こうと下半身に力を入れるが、上から尊の腰が追ってくるので、かえって硬い床に押し付けられるだけ。
「・・・い、た・・・いっ、ああ・・っっ！！」

秋光の気配が残る部屋にはいられないと、車に乗せられ連れてこられたのは、尊のマンションだった。
車の中でも一切話をせず、引きずられるように手を引かれ、部屋の中に押し込まれた。
真理を部屋に入れると、尊は部屋の電気を点ける事も無く、いきなり真理を床の上へ押し倒した！
言葉も何もなかった。真理が抵抗する間もなく、尊は真理のスカートの中へ手を入れる。真理が驚いてその手を押さえようとするが、尊に圧し掛かられているせいか手が届かない。それどころか体自体動かす事は出来なかった。

「い・・・やっ！」
体を硬くし身を竦めた瞬間、ショーツの中に尊の手が入り込み、指が真理自身の中へ無造作に差し入れられた！
「やっ、ぁっ！」
何の準備もされていないその箇所への、いきなりの行為。
入口がグッと引きつったように痛み、その痛みから逃れようと下

半身を引くが、指は抜けてくれない。
「い、やぁっっ！尊さんっ！」
真理は泣きそうな声をあげながら、握り締めた両手で尊の背中を叩く。
そんな真理の抵抗はもろともせず、尊は上半身を上げ、暗闇の中で真理を見下ろした。

「濡れてるよ・・・。真理ちゃん」
「・・・・・」
「君の中。・・・まだ、濡れて温かい・・・」
入口にその気配はなくとも、真理の中はまだ、秋光に愛され絶頂まで導いてもらった時の余韻が残っている。

「こんなに後が引くくらい、誰かに抱かれたかったの？」
「・・・尊さん・・・」
「こんな・・・。だから、アイツに抱かれたの？！」
「尊さん！！」
「友達なんだろ？！友達なのに・・・、どうしてそういう事になるんだ？！」
「ごめんなさい・・・！でも・・・でも、尊さんだって、前に・・・！！」
真理はそこでハッと口をつぐんだ！
勢いに押され、尊の責めが怖くて、言ってはいけない事を口に出そうとしてしまった。

前に「友達」とそういう関係になったでしょ？・・・と。

若菜との事は、尊が真理にきちんと説明をして、余計な思いをさせた事を謝り、すでに終わっている事だ。
今ここで真理がそれを口に出す事は、恋人同士としてのルール違

反だろう。

「仕返しのつもりかい・・・？」

尊が信じられないという声を出す。真理は慌てて首を左右に振った！

「仕返しのつもりで、友達と寝たのか？！」

「ちがう・・・っ！違うよ、尊さん！」

しかし真理の声は届かない。

尊はそのまま、真理のストッキングとショーツを一緒に奪うと、上半身を伸しかけ更に彼女の動きを封じながら、スーツのズボンを脱ぎ捨てた。

「た・・・ける・・さっっ！！」

身を捩ろうとするが、まったく何の抵抗にもならない。

そのまま尊は真理の中へ入り込んだ！

「！」

そのショックに体が固まる。

尊は特に激しく動く訳ではなく、奥へ奥へ、自分自身を進めてきた。

「・・・た・・け、る・・・さん・・・」

押し付けるように腰をすりつけ、ただ悪戯に痛みが襲う入口を刺激する。

「い、た・・・ぃ、よ・・・。あっ・・・あっっ！」

濡らされる事も慣らされる事も無く攻められる入口の痛みと、幸せな余韻が残る滑らかな中への刺激が同時に襲う。

「や、めっ・・・てぇっ・・・あっ、あぁぁ！！」

「こうやってアイツに抱かれたんだろ?!そんな声、聞かせてやったんだろ?！」

「尊さんっ！！」

尊が怒っている。
いつも自分に優しかった人が。
・・・怒るだけの事を、自分はしたのだ。

秋光に抱かれた事を。
真理は何の後悔もしては居ない。
自分にとって、彼は大切な存在なのだと気付けた。
彼に抱かれる事が、とても幸せな事だと、感じられるようになったのだ。

でもそれを、まだ尊の恋人であるうちに感じてしまったのは、明らかに真理の「間違い」だろう。

「あっ！んっ・・・やぁぁ・・」
服も着たまま、ただ下半身だけが繋がり貫かれる。
その悲しいだけの行為に、真理はなす術も無く体を預けているしかなかった。

「真理っ！」
真理を犯すように抱きながら、尊は悲しそうな声を発した。
その声は、真理の心を締め付ける。

「・・・ごめん、なさ・・い・・・」
尊にただ体を貫かれ揺さぶられながら、涙が溜まった真理の瞳に、月明かりが当たる。
真っ暗な部屋の中に差し込む、明るい月明かり。

――真理・・・。

「まさ・・・おみ・・・？」

月の声（まさおみ）が聞こえる。

――真理・・・。

「見な・・・いで・・・」

秋光に抱かれている時は聞こえない、正臣の声が、真理の体に響く。

――何してんの？・・・真理？

「・・・・・」

月明かりが真理を追う。

自分を裏切り続ける太陽を。

月が、笑うように・・・・・。

59　笑う月（後書き）

こんにちは。玉紀　直です。
真理ちゃんは「言ってはいけないこと」を。
尊さんは「してはいけない事」を。
それぞれにしてしまいました・・・。
二人の関係は、ここから修復する事は可能なのでしょうか・・・。

真理ちゃんも傷付きましたが、尊さんだって傷付きました。
更に、追い打ちが掛かります。

次は1月14日更新予定。

では、次回！

60　傷付いた人

「ごめん・・・」
重苦しい声だった。
泣いてしまいそうな声だった・・・。
真理から体を離した尊は、暗闇の中、月明かりだけが入り込む部屋で真理を見下ろす。
ただ自分の激情に任せて、怒りのままに真理を抱いた。
恋人同士であろうと、あれは明らかにレイプだ。
真理が泣こうと、謝罪の言葉を口にしようと、与えられる痛みを訴えようと、尊は最後まで自分の怒りを欲望の暴力に変えて、その制裁を真理に加えたのだ。
最後のその欠片を、真理に体の中へ吐き出して。

その制裁が終わってから、尊はしばらく真理から体を離さなかった。
離せなかったのだ。
だんだんと戻ってくる理性が、どんどんと彼を追い詰めた。
今体を離して真理から離れれば、彼女は何処かへ行ってしまう。
もう自分の元へは戻ってきてはくれない。と。

だから、離れることが出来なかった。
あまりの仕打ちに身動き一つ出来ず、自分の体の下で黙って床に体を横たえている真理。
散々泣いたのに、その涙はまだ目尻を伝い横へ流れていた。
泣きはらし、自慢の髪も乱れに乱れているというのに、皮肉な事に洋服に乱れは無い。

体を動かないように押さえつけられていたのだ。当然だろう。
ただ、下半身だけがスカートを腰に巻きつけるように捲り上げられ露にされている。それだけだ。

「ごめん・・・真理ちゃん・・・」
後悔が滲み出る、苦しそうな尊の声。
それは、初めて聞く彼の声だった。
その声を聞いて、真理はまた涙が浮かんでくる・・・。

――こんな声を、出させているのは・・・私だ・・・。

真理は体を起こそうと、床を押しながら上半身を浮かせる。すると尊が、真理の両腕を持ってゆっくりと起こしてくれた。
「・・・っ・・・！」
上半身を起こした瞬間、押し付けら暴れて擦れた背中と、押さえ続けられた腰、そして無理矢理入り込まれた部分に痛みが走り、真理はビクッと動きを止め表情を歪ませた。
「痛いの・・・？」
そう訊きながら慌てて真理の背中に手をあて支えるが、訊いた事自体が間違いである事に、尊はすぐに気付いた。
痛みが無いはずがないのだ。
無理矢理関係を持たれるという事は、体にも心にも、大きな痛みをもたらす物なのだから。

「真理ちゃん・・・ごめん・・・。いくら何でも、俺、君に・・・こんな・・・」
照明も点けていない部屋で、月明かりだけが真理を照らした。
力なく座り込み、憔悴しきった表情。体を起こされた事で、尊の声を聞いて浮かんだ涙が、頬を伝い下に落ちる。

「尊さん・・・」
それでも真理は、呟くように小さな声で尊を呼ぶ。
しかし次に彼女から出た言葉は、尊の心を凍りつかせた。
「私・・・あなたの恋人でいられない・・・」
「！」
驚いた尊は、慌てて真理の両腕を掴む！
「真理ちゃん・・・！ごめん・・！俺、俺どうかしてた！本当にごめん・・・！！」
必死な声と形相で真理に訴えかけながら、力無く崩れそうになっている体を抱き締める！
「ごめん！本当にごめん！真理ちゃん！！」
さっきまで謝っていたのは真理だったはずなのに、今は尊が必死になって真理に謝っている。真理はその事実が悲しくて堪らない。
「謝らないで・・・尊さん・・・」
尊の腕の中で強い力に抱かれながら、真理は抜け殻のような声を出す。
「・・・悪いのは・・・私なの・・・」
――――悪いのは、私・・・。
いつもハッキリしてくれない、私の心。
尊さんの恋人でいながら、心の安らぎを求めて秋光君に抱かれた。
そんな事を繰り返して・・・。
深く深く、尊さんを傷付けた・・・。
「あなたと居たら・・・、私、あなたの事、傷付けてばかりいる。
正臣の事も、今回の事も・・・」

自分のハッキリとしない気持ちをハッキリとしないままにして、答えを出さないままにダラダラとその関係を続ける。
そんな事を、昔もしていたのでは無いか？
真理の心は昔へ戻る。
高校三年生の・・・あの時へ。
自分を好きになってくれた人を裏切れなくて、中途半端な気持ちのまま付き合い続け、その結果、尋常では無いほど傷つけて人生を誤らせてしまった人が居る。

真理の中に思い起こされる笑顔。
それは、「自分」を失う前の、井関恭吾の姿。

その井関の姿が、尊の姿と重なる。
真理は自分の体から血の気が引くのを感じ、あまりにも酷い自分の想像に寒気がした。

「私、尊さんと居たら・・・あなたの事、もっと傷付ける・・・。だから・・・」
「駄目だ！！」
尊は崩れそうになる真理の体を、力いっぱい抱き締めた！
「駄目だ！俺は離さない！君が好きなんだ！」
「でも・・・」
「好きだよ・・・真理ちゃん・・っ！・・君、がっ・・、好き、なの・・に・・・」
尊の声が詰まる。真理を抱き締める腕が震え始める。

・・・泣いてる？

真理は尊の胸に体を預け、震える声を漏らす尊の吐息を感じた。

彼女の体の中に湧き上がってくるのは、尊に対しての罪悪感ばかり。

そんな中、尊は静かな声で真理に問い掛ける。

「真理ちゃん・・・。俺、君の傍に居たいんだ・・・」

寂しそうに、その声は真理の体に響く。

「君に、傍にいて欲しいんだ・・・」

愛しそうに。悲しそうに。

「君に、傍にいて欲しい・・・。俺の為に、傍で輝いていて欲しい。・・・そう思うのは、いけない事なのか?君の為に、君の願いも全て叶えて守ってあげたいと・・・思っちゃいけないのか?」

「尊さん・・・」

「そんな、雫ほどの小さな願いも、俺は持っちゃいけないのか・・・?」

真理は、静かに尊を抱き締めた。

「・・・ありがとう・・・」

真理には、解からない。

自分は尊が好きなのか。

それとも、秋光が好きなのか。

自分を包み込む月明かりを、体に感じる。

しかし真理は、怖くて窓から月を見上げる事が出来なかった。

太陽に寄り添う、二つの小さな星を。
大きな月が。
嘲笑う。

――――そして・・・。

「本当なんですか?それで?見つかったのですか?」
今泉法律事務所の中で、まだ仕事中だった今泉は、驚きを隠せない口調で固定電話の受話器を握り締めていた。
「そうですか・・・。ええ・・・。見つかったらすぐに連絡を下さい。警察は?」
事務員などはとっくに帰っている。事務所の中は今泉だけだ。
「今夜中に見付かれば良いのですが・・・。いや、もし見付からなかったら、明日にでもすぐに立花さんに連絡をしますよ。・・・ええ、お願いします」
今泉は受話器を置くと、深刻な顔で息を吐いた。
「大変な事になったぞ・・・」

電話は、神経精神専門病院からだった。

「井関恭吾が・・・病室から居なくなった・・・なんて」

最後の星が・・・。

動き出す。

――太陽を求めて。

６０　傷付いた人（後書き）

こんにちは。玉紀　直です。
真理ちゃんを失いたくない尊さんは必死です。
自分がした事にすぐ気付ける分だけ、彼はまだ壊れては居ないのかもしれません。

月が嘲笑う中、迷走する星が二つ。
そして、最後の星が、太陽の光を求めて動き始めました。

次回は１月１９日更新予定。

では、次回！

＊「活動報告」の方に１／４～９まで、ｗｅｂ拍手で頂いたコメントのお返事を掲載させて頂いています。
この間にコメントを下さった方。覗いてみて下さいませ。

沢山の拍手を、いつも有難うございます！

61　引き返せない想い

「おかえり」
そう言って笑顔で軽く手を上げた秋光を、真理は目を見開いて信じられないという顔で見詰めた。
「・・・何、してるの？」
そう言いたくもなる。
秋光が居るのは、立花家の玄関前。玄関のドアに寄りかかり、座り込んでいたのだ。

時刻は夜中の零時を回っていた。
真理が尊に家から連れ出されたのは夜十時過ぎ。やっと開放してくれて、家まで送ってもらったところだったのだ。

「さすがに・・・、十二月の夜中は辛いなぁ・・・」
一体、いつからここに居たのだろう？
真理がそう思う中、しかめっ面をしながら立ち上がり、真理を見て大きく息を吐きながら安心したように笑う。
「良かった。真理さん、帰ってきて」
「秋光君、いつからここに居るの？」
「真理さんに『帰れ』って言われたけど、やっぱり気になって戻ってきたら、もう出て行っていなかったんだ。それから・・・ここで待ってた。電話くれるって言っていたから、携帯に電話でも来たら帰ろうと思っていたけど・・・。来なかったから・・・」
秋光は自分の携帯をポケットの中から出して振って見せてから、また笑いながらポケットへ入れる。
しかし真理は電話も何も持ってはいなかった。

ただ体ひとつで尊に連れ出されたのだ。
もちろん秋光に電話など掛けられるはずもない。

真理は両手を伸ばすと、秋光の頬に触れた。
当然だが酷く冷たい。
秋光は頬に触れた真理の手に自分の手を重ね、キュッと握った。
冷たい頬と手に、真理の手の温かさが染み渡る。凍りつきそうに冷たかった体が和らいで行くようで、秋光はホッと安堵の息を吐いた。

「・・・ちゃんと、言えた?」
安心したついでに出た言葉に、真理の手がビクッと震える。
「言ったわ・・・。でも・・・」
秋光と必然的に関係を持った事を言い、尊を傷付けた事を詫びた。
自分の優柔不断さで尊を傷付け続けるのなら「恋人ではいられない」とまで言った。しかし・・・。
「尊さんは、それでも、私が好きだ、って・・・言ってくれた・・・」
「・・・・・」
「こんなに傷付けて、・・・私は、酷い事をしているのに・・・」
秋光は頬の所で握った真理の手を下ろさせると、彼女を待って冷たくなった体で、真理を抱き締めた。

「オレ・・・好きでいていいよね・・・?」
「秋光君・・・」
「オレ、真理さんの事、好きでいていいよね!」
瞼が開かなくなるほど泣いたはずなのに、哀しみの余韻は更に後を引き、真理の目から簡単に涙を落とした。

尊さんだけじゃない・・・。

私は、秋光君も傷付けているんだ。
こんな中途半端な自分のまま、中途半端な気持ちを伝えたばっかりに。

「秋光君・・・私、やっぱり・・・、秋光君とは・・・」

秋光君を、傷付けたくない。
私が自分の気持ちを伝えたっぱっかりに・・・。
尊さんにも気持ちを置いたまま、秋光君にも中途半端な気持ちを伝えたばっかりに、彼が傷付いてしまうなら・・・。
こんな関係は、やめなければいけない。
こんな関係は、続けちゃいけない。

「友達」に、戻さなくちゃならないんだ・・・。

「好きだよ・・・」
真理が言おうとした言葉を、秋光は止める。
何を言おうとしたか。彼には分かったのだ。しかし秋光は、当然だが真理から「その言葉」を聞きたくはなかった。

「好きだよ・・・真理さん」
「・・・秋光君・・・」
「好きだよ」

後戻りもやり直しも出来ない状況に、真理は追い詰められていく。
真理自身も。そして、真理の心も。
太陽の周りで迷走する星も、後に戻るつもりは無いのだ。

「明日、真臣、幼稚園休みだろ？」
急に明るい声を出して秋光は体を離し、真理の両腕を掴んだまま彼女の顔を覗き込んだ。
すでに零時を回っているので「今日」になるのだが、それを指摘する心の余裕は、今の真理には無かった。
「昼近くになると思うけど、しばらく会いに来てなかったからさ、達也と健と、三人出会いに来るよ。病院にいるんだよね？」
「・・・うん。いるわ。・・・有難う。喜ぶわ、真臣」
今日は第二土曜日。幼稚園は休みだが、病院は午前中開けている。そういう時、真臣は病院で過ごしているのだ。

秋光は再び真理を抱き締めると、唇を重ねた。

「好きだよ・・・」

嬉しいはずの優しい言葉が、今は胸に突き刺さる。
苦しいほど鋭利な刃物になって、真理の心の中に何処までも突き刺さって行った。

クスクスッという小さな笑い声が、その場に溢れていた。
好意的な笑い方では無い。明らかに人を馬鹿にした笑い方だ。
あまり人通りも車通りもない場所に、ポツリと建ったコンビニの前。そこでたむろしている数名の男女。制服を着ている者もいるので、高校生なのかもしれない。
彼らは車の来ない車道の中央を、足を引きずって歩く一人の男を見ながら、面白がって笑っていたのだ。
「何だよ、夢遊病か？」
「きもちわりーオッサン」

「このままにしておいたら、車に轢かれるぜ」
「おもしれーじゃん。ほっといてみようぜ」
好き勝手な事を言いながら、彼らが見詰める視線の先には・・・。

自分の足よりも大きなスニーカーを履き、膝丈の長いコートを羽織った男。
その下に着ているのは、間違いなくパジャマだ。
虚ろな目で、ただ前だけを見て、その男は足を進めた。

「・・・・」
彼の唇が・・・、微かに動き続ける。

呪文のように。

「まり」と。

土曜日の朝、病院へ出てきた尊は、まだ真理が来ていない事が気になり、もしかして休みなのかと、待合室の窓からずっと外を眺めていた。
「尊先生」
そんな尊に声を掛けてきたのは美鈴だった。
「ああ。おはよう。今朝は寒いね」
ちょっとした世間話を入れつつ、笑顔で挨拶をするが、美鈴の顔は笑ってはいない。
彼女は尊の正面に立つと、真剣な顔で彼を見上げた。

「尊先生・・・。若菜さんが結婚やめたの、知ってますか?」

「・・・え？」
尊はちょっと眉を寄せる。
正直、一瞬美鈴が何を言っているのか理解できなかった。

若菜とはあの一件以来、顔も合わせてはいない。
彼女はクリスマスに婚約者と結婚するはずだ。
尊は出席しないと伝えてあるが、結婚式まであと二週間もない。

「先月、若菜さんの方から結婚を取り消したんです。・・・その途端、小児科から追い出されて・・・。若菜さん、今何処にいるか知ってます？病院の、救命救急センターにいるんですよ！」

「・・・救命・・・？」
尊はその言葉を聞いた途端、息が詰まりそうになった。

６１　引き返せない想い（後書き）

こんにちは。玉紀　直です。
尊さんは別れてくれない。
秋光君も離れてくれる気は無い。
真理ちゃんだけが、何処までも追い詰められていきます。

そんな時、夜の道を徘徊する影。
そして、忘れていた若菜さんの話。

次回、アノ星が、太陽の「分身」を見つけます。

次回は１月２４日更新予定。

では、次回！

＊　＊「活動報告」の方に１／１４～１６まで、ｗｅｂ拍手で頂いたコメントのお返事を掲載させて頂いています。
この間にコメントを下さった方。覗いてみて下さいませ。

ｈｔｔｐ：／／ｍｙｐａｇｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｍｙｐａｇｅｂｌｏｇ／ｖｉｅｗ／ｕｓｅｒｉｄ／２８２５４／ｂｌｏｇｋｅｙ／１４９６４／

沢山の拍手を、いつも有難うございます！

62　一番好きな人

「パパたち、いつ来るのぉ？　ママぁ」
戦隊ヒーローがイラストになって付いている、子供用のナップサック。
中に入っているのは、駄菓子のような小さな包装のお菓子と小型ゲーム機とソフト。
いつも通りの用意を早々とした真臣は、出勤の用意をする真理をキラキラした目で見上げながら、今日四度目の「いつ？」を口にした。
朝起きてから、今日は病院に「パパたち」が真臣に会いに来てくれる、という話をすると、最近会えていなくて寂しかった真臣は、張り切って「出勤」の用意を始めたのだ。

真理はそんな真臣を見ながら、薄ピンクのナース服の上に膝下丈のオーバーコートを羽織る。
ナース服は家で着てそのまま病院まで行くのだが、さすがにこの十二月ともなれば、いくら職場が隣でも上着無しはキツイ。おまけにナース服は半袖だ。
「昼頃って言っていたわよ。少し遊んでいたらすぐよ」
「どうしてあさから来てくれないのー？　ぼく、たいくつだよ」
真理はハンガーラックから真臣のフリースジャンバーを取り、床に両膝をつくと、真臣にジャンバーを着せながら、目の前で不満そうな顔をする真臣に言い聞かせた。
「パパたちだって忙しいのよ。達パパは夜中までお仕事をしている人だし、健パパだってお嫁さんのお腹に赤ちゃんが居るから、お買い物に一緒に行ったり大変だし、秋パパだって・・・」

真理はそこで言葉を止める。

昨夜、十二時過ぎまで自分を待っていて、冷たい体で抱き締めてくれた秋光を思い出したのだ。

――オレ、真理さんの事、好きでいていいよね！

秋光や尊の事を考えていて、あの後ベッドへ入ってもなかなか眠れなかった。

「秋パパも？　いそがしいの？」

真臣の無邪気な問い掛けで我に返る。真理は思い直すように、真臣のジャンバーのファスナーを上げ、床に置いていたナップサックを肩に掛けさせた。

「そうよ。誰でもお仕事は大変なの。だから、我侭言わないのよ。せっかくパパ達が会いに来てくれるって言っているんだから」

「うん。じゃぁ、今日はびょういんに行ったら、たけちゃんにも会えるね。うれしいな」

ニコニコ笑う真臣の顔を見詰めたまま、真理は真臣の頭を両手で包むようにして撫でた。

「真臣・・・。真臣はさ、・・・たけちゃんと、秋パパ、・・・どっちが好き？」

「え？　たけちゃん？　秋パパ？」

真臣は大きな目をくりくりさせて、キョトンッとした目で真理を見詰める。

こんな事を子供に訊くのはズルイ。それは自分で解かっている。

それに答えを聞いて、自分はどうするつもりなのだろう？

そう真面目に悩んでいた真理だが、真臣から返って来たのは実に素直な答え。

「どっちも！」

明るい笑顔で、まるで幼稚園の朝のご挨拶のような張り切りよう。

「どっちもだよ！　たけちゃんも、秋パパも、大好き！　たけちゃんはかたぐるまが上手だし、秋パパはゲームが上手だし！　どっちかなんて、ないよ？！」

「そう・・・、真臣は、どっちも好きなんだね」

「ママは？　『どっち』なの？」

「ママは・・・」

「ぼくはどっちも好き！　だから、ママもどっちも好きだよね？」

真臣の何気ない言葉が、痛いくらい、辛いほど胸に突き刺さる。

「どっちも好き」「どっちも裏切れない」そんな態度が、二人を傷付けた自分の失態。

「でもぼく、ママがいちばん好きな人、知ってるよ」

「え？」

真理が不思議そうな顔をする。ああ、そうか「ぼくでしょ！」って言うつもりなんだ。そう思って笑みが零れそうになった真理に、真臣は机の上に飾られた写真立てを指差し自信満々に叫んだ。

「パパでしょ？！」

「・・・！」

「ママがいちばん好きなのは、パパだもんね？」

真臣が指を指した方向に、真理はゆっくりと視線を移す。

机の上に飾られた写真立て。正臣の写真。
ダークブラウンの写真立ては、その木枠に薄っすらと埃がかかり白っぽくなっているのが分かる。
真理は立ち上がると、机の傍に歩み寄り写真立てを手にとって、指で写真立ての埃を拭った。
正臣の顔の部分に掛かる埃を指で拭う。その部分に、いつのまにか流れ落ちてきた涙がポタッと落ちた。

毎日この写真立ての写真を眺めていた。
手に取らない日など、なかった筈だった。
毎日拭いて綺麗にして。毎日話しかけて。
埃が付いてしまう事など有り得ない筈だった。
毎日見詰めていなければ辛くなってしまうくらいだから・・・。

それくらい、大切だったはずなのに・・・・・。

「・・・正臣・・・」
いつ頃から、彼に話しかけなくても平気になっていたのだろう。
いつから、彼の写真を眺めなくなってしまっていたのだろう。

それは・・・・・。

「・・・・・」

真理の唇が小さく震える。
「何か」に気が付いた心は、まるで振り子のように揺れ動く。

「ママ？」
正臣の写真を見ながら立ち竦む真理の横に真臣が立ち、真理のオ

ーバーコートをグイグイと引っ張った。
真理は正臣の写真を持ったまま、床に座り込み真臣を抱き締める。
「ママ？」
身を切るような切ない想いが、真理の中を一杯にする。真理は真臣を抱き締めながら、小さな声で呟いた。
「・・・ごめんね・・・。正臣・・・」

その言葉が耳に入った真臣は、自分に話しかけられたものと勘違いをして、小さな手で真理の頭を撫でた。
「ママは、なんも悪いことなんてしてないよ？」

その言葉が、辛く辛く、真理の心に突き刺さる。
「それに、泣いたらおけしょう落ちるよ？」
「・・・そうね」
ちょっと笑って、真理は真臣ごと、写真立てをグッと抱き締めた。

男はそれを見ていた。

それほど車通りが多い訳では無い車道を挟んで、向かい側の路地のような細い塀の隙間から。
朦朧とした、霧が掛かったような思考の中。
浮かぶ記憶の断面。
何かを覚えている体が、動くままに足を進めてきた。
男はその場に座り込み、自分の物では無いコートの襟元を掴んで身を縮める。
昨夜から歩きっぱなしだった。コートの下はパジャマ一枚、この十二月にこれでは体が冷えないはずも無い。
左足が、刺すように痛かった。

自分の足にはブカブカの、自分のものでは無いスニーカー。歩きやすい訳が無く、何もない所でつまずいて数回転んだ。
そのうちに、どこかで脱げて左足の分だけ無くなってしまったのだ。

そんな男が見ているのは、一人の女性の姿。
恐らく自分が目指していたであろう家から出てきて、隣に建つ病院へと入っていく女性。
その女性は、小さな子供の手を引いていた。
明るい笑顔を見せながら、スキップをして歩く少年を。

女性の姿ばかりを追って動いていた男の眼球は、少年を捉えた。

――――コレハ、ダレダ・・・？

少年は病院前の来院者用駐車場にある自動販売機の前で立ち止まる。どうやら、新しいジュースが入っているのを見つけたらしい。
立ち止まって動かない少年の手を離して「先に行っちゃうぞー」と数歩歩いた女性だが、それでも少年が自販機の前から動かないのを見て、諦め気味に笑い、よく通る大きな声で少年に呼びかけた。

「あとで買ってあげるからっ！　ほらっ、中に入るよ、真臣っっ」

ちょっとだらしなく力が抜けた男の表情が、ビクッと大きく動く。
男の声帯が、小動物の悲鳴のような細く小さな声を上げた。

「・・・ま・・さ・・お・・み・・・・ぃ・・？」

62　一番好きな人（後書き）

こんにちは。玉紀　直です。
久し振りに真臣君を出せて、ちょっと嬉しいです。
この無邪気さは、ホント、この話の清涼剤のような気がする。（笑）

埃をかぶった正臣くんの写真に、何かを気付き始める真理ちゃん。
しかし、それを見詰める男の陰。

「まさおみ」の名前に異常反応を起こした男が次にした事は・・・。

次回は1月28日更新予定。

では、次回!!

＊「活動報告」の方に1／19～20まで、ｗｅｂ拍手で頂いたコメントのお返事を掲載させて頂いています。
ｈｔｔｐ：／／ｍｙｐａｇｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｍｙｐａｇｅｂｌｏｇ／ｖｉｅｗ／ｕｓｅｒｉｄ／２８２５４／ｂｌｏｇｋｅｙ／１５８５６／
この間にコメントを下さった方。覗いてみて下さいませ。

沢山の拍手を、いつも有難うございます！

63　不安の足音

「次、入れますよ」
気付かないうちに、とても心配そうな声を真理は出していたような気がする。
しかし、そんな声を出してしまいたくもなるのだ。
「え・・・、あっ・・」
朝から、尊の元気がない。
診療時の笑顔にも、いつもの元気がない。
思えば、朝真理が出勤してきた時から何処かおかしかった。
今も、診察を終えて、患者である子供と付き添いの母親を診察室から出した。その時点で、いつもならば次の患者のカルテを手に取り、目の前のパソコンで確認をしているはずなのだ。
しかし今日は、手が動いていない。視線も走らない。

真理はカルテを取って、尊の前に置く。
尊の横に立ち、躊躇いがちに彼に尋ねた。
「・・・私の、せいで・・・、元気でないの？」
尊が顔を上げて真理を見る。
「気にしない訳が無いものね・・・。尊さんは・・・私に、一緒にいたいって言ってくれたけど・・・やっぱり、そんなの・・・」
「違うよ」
尊は目の前に置かれたカルテを手に取り、そのカルテで真理の頭をポンッと叩いた。
「違うよ。真理ちゃんの事じゃない」

尊が引っ掛かっていたのは、若菜の事だった。
結婚を取りやめ、大学の救命救急センターへ異動させられたという彼女。
自分で希望したのか。それとも・・・。
彼女の婚約者の父親である教授は、若菜の医者としての実力を高く評価していた。その彼女の可能性を潰したくないなら、と「例の一件」の際、尊にプレッシャーを掛けたくらいなのだから。
まさか・・・結婚を取りやめたせいで、救命救急センターへ移されたのでは・・・。

救命救急センターは、通常以上にハードな仕事内容が強いられる。休みなどもあって無いようなものだ。
今まで小児科で過ごしてきた若菜には、辛い毎日ではないのか。

「だって、今日、『パパ達』が来るんだろう?俺、殴られないかな?って」
「え?」
尊は本当の事には触れず、真理が思うよりも明るい声で、元気がない理由を話した。
「顔を見た途端にさ、殴られないかな?」
「なっ・・・どうして?」
そう訊いてしまうが、理由は何となく分る。
「パパ達」はいうなれば「秋光の仲間」だ。
秋光に話を聞いていれば、尊の事を快くは思わないだろう。
「だからって、殴ったりしないわよ。・・・何かしそうになったら止めてあげる。安心して」
尊が明るい様子を見せてくれたのが嬉しくて、真理の声も少し弾んだ。

「まだこないかなー」
真臣は待合室の大きな窓から、ずっと外を眺めていた。
窓側の椅子に靴を脱いで上がり、膝をつき窓枠に手を掛けて外を見る。
ここからはちょうど来客者用の駐車場が見えるので、「パパ達」が来たらすぐに分かるのだ。
「まだかな・・・」
嬉しそうに、ウキウキとした声で、真臣は呟く。
「パパ達」に会うのは久し振り。
朝、真理に「今日会いに来てくれる」と聞いてから、嬉しくて楽しみで堪らない。
おかげで、持ってきていたお菓子にもゲームにも、手を付けられないくらいだ。

真臣は椅子からピョンッと飛び下りると、受付カウンターへと近寄り、台に手を付いて背伸びをしながら、中にいる事務の女性に話しかける。
「ねーぇ、今なんじーー?」
「今?十一時よ。どうしたの? まぁちゃん。お腹すいたの?」
「ううん、だいじょうぶだよ」
「お昼」は十二時。ママは「おひるまでには来る」って言っていた・・・。

真臣は窓を振り返り、その小さな胸にひとつの考えを浮かべる。

・・・外で、待っていようかな?

弁護士の今泉から真理に電話が入ったのは、十一時半を過ぎた頃だった。

井関恭吾が病院からいなくなり、今まだ見付からないという話を聞いて、真理の表情が固まる。

「・・・あの人、正気に戻っているんですか？」

病院の事務室内にある固定電話の受話器を握りしめ、その手が汗ばんでいくのを感じながら、真理の声は震えた。

『完全には戻ってはいないのですが、時々昔の事を口に出すようにはなっていたみたいです。それがまさか・・・こんな事に』

受話器を持つ手が震える。

真理は言われも無い不安感に襲われていく。

『おそらく裏口から病院の外へ出たのではないかと思われます。正面にはロビーから出入り口まで、各所に監視カメラがありますが、裏口は職員や急患が使用するので出入り口に一箇所だけです。　職員の靴が一足と、シューズロッカーの上に置きっぱなしだったコートが無くなっていたらしいので』

真理は返事が出来ない・・・。

何だろう・・・。この不安感は・・・。

あんな状況の人間が、間違っても自分の元へ来られる訳は無いだろう。

そう思う反面、彼ならくるのでは無いか・・・。そんな思いが湧き上がる。

『とにかく今は捜索中です。午後には警察が立花さんの所へ行くと

思いますから。私も午後一番でお伺いします。・・・立花さん？』
一方的に話していて、真理の返事が無い事に気付いた今泉が呼びかけると、真理はハッとして返事を返した。
「あ・・・は、はい・・・」
その声がちょっと震える。こんな話を聞かされて不安にならないはずもない。
今泉は元気付けるように力強く真理に言う。
『いいですか？気をシッカリと持って下さいね。大丈夫ですよ。そんなに遠くまで行ける筈は無いのですから』
「・・・はい・・・」
しかし、電話を切っても、真理の不安は消えない。

「・・・真臣・・・？」

真理は何気なく、その名を口にする。

しかし、次の瞬間、一気に血の気が引いた！

「・・・真臣・・・どこ・・・？」

一気に湧き上がる不安！
相手の姿が見えない事への恐怖！

「真臣・・・！」

真理は事務室から受付カウンターへ出て、待合室を見渡す。
真臣はいない。
休憩室？それとも、処置室で遊んでる？それとも・・・。

「真臣・・・、真臣、どこ?!」

興奮気味に待合室を何度も見回す真理に、受付の女性が心配そうに声を掛けた。

「まぁちゃんなら、さっき外に出て行ったわよ。誰だかが来るのを待ってる・・・って、言っていたけど」

「・・・!」

――――え も知れぬ不安。

体中を包み込む恐怖。

井関が居なくなったという話を聞いた途端、真理の脳裏に、あの「クリスマスイブの惨劇」が浮かびあがった。

正臣。

血まみれの正臣が、自分の腕の中で目を閉じた・・・。

あの日の事を・・・。

その正臣の姿が、真臣と重なっていく・・・・・。

６３　不安の足音（後書き）

こんにちは。玉紀　直です。

・・・というか、「こんばんは」の時間だったりして。（笑）

一応、２８日更新日。遅くなってごめんなさい。

井関さんの事を教えられ、不安になる真理ちゃん。

一人で外へ出た真臣君。

彼女の中に、思い出したくは無い思い出と、考えたくは無い想像が渦巻きます。

真臣君の前に「アノ人」は現れるのでしょうか？

次回は２月１日更新予定！

では、次回！！

＊　「活動報告」の方に１／２４～２５まで、ｗｅｂ拍手で頂いたコメントのお返事を掲載させて頂いています。

この間にコメントを下さった方。覗いてみて下さいませ。

ｈｔｔｐ：／／ｍｙｐａｇｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｍｙｐａｇｅｂｌｏｇ／ｖｉｅｗ／ｕｓｅｒｉｄ／２８２５４／ｂｌｏｇｋｅｙ／１６７０１／

沢山の拍手を、いつも有難うございます！

64　真臣に迫るもの

「俺が無意識にあの先生に掴みかかったら、止めろよな」
無理だよ・・・。
聞いた瞬間、二人はそう思った。
学生時代からそうだが、体格が良く血の気が多い達也を止められる男、サシでやりあって勝てる男はただ一人しかいなかった。
そう、親友の正臣しか。

「間違ってもやめろよな。真理さん、泣いちまうだろ。そんな事したら」
咎めるような口調で言いながら、コンビニの裏口をロックすると、鍵をジャンバーのポケットに突っ込み、秋光が達也と健を振り返る。
「ふぅ～ん、『真理さん』ねぇ・・・」
振り返った途端、親友二人の冷やかし笑いにさらされ、秋光はグッと言葉に詰まった。
「いいッスねーぇ。何か、生き生きしてるッスよー」
「まったくだよなぁ。いっつも『オネーサンが可哀想だ』っつって泣きそうな顔ばっかしてた奴がよぉ」
「なっ、泣きそうな顔なんて、してねーよ!!」
そう言い返しつつも、・・・いや、してたかも？　と、心のどこかで思う。

真理さんの力になりたくて。
真理さんを守ってあげたくて。
でも、何も出来なかった自分。

悔しくて泣きたくなったのは、一度や二度じゃない。

「それが今や、イイコトする仲にまでなってんだもんな？　上手くやったな、お前」

達也が肘でドンッと秋光を思い切り突く。不意をつかれて思わずふら付いたところを、健が更に肩を掴んでドンッと達也の方へと突き飛ばした。

「念願かなって・・・だよなぁっ。最近店閉めるの早いらしいし・・・。なんだぁ？　毎日会ってるって感じッスか？　このヤロッ！」

「毎日ぃ！　どうりでお前、ウチの店に来ないと思った！！」

「どっちの店だよっ！」

飛ばされてきた秋光の肩を掴んで達也がからかうと、秋光がちょっとムキになる。二人共秋光より大きいので、彼は少々遊ばれてしまった形になった。

「せっかくウチのソープ店のＮＯ．１空けといてやるって言ってんのに」

「行くか、アホっ！」

達也の手をバシッと叩くように振りほどいて、照れ隠しにプイッと歩き出す。

「ほら、早く行こうぜ。真臣が待ってんぞ」

達也と健は顔を見合わせ、ちょっとからかいすぎたか？　と苦笑いをし合い、歩き出した。

「でもよぉ。ネーサンは、まだその医者と付き合ってんだろ？」

達也が秋光の横に着いて歩きながら訊くと、秋光は少し間を開けて「ああ」とだけ答えた。

「どうすんだよ。このままアッチが別れなかったら、それでもずっとこんな『二番手』みたいな関係、続けんのか？」

すると秋光は、ジャンバーのポケットに手を突っ込んで視線を下にしたまま、ピタッと立ち止まる。

「おっと・・・」
後ろから歩いてきていた健が、いきなり立ち止まった秋光に、ちょっとぶつかる。
秋光は下を向いたまま呟いた。
「それでもオレは・・・真理さんが好きだから・・・」
親友のあまりにも健気な言葉に、さすがの達也も何だかくすぐったい気持ちに襲われたのだろう。頭をクシャクシャット掻いて、大きく息を吸いそのまま吐き捨てるように言った。
「やっぱ、センセー殴っちまいそうだ。俺」
「どうしたんだい？　真理ちゃん」
患者が切れて、息抜きに待合室へ出てきたらしい尊が、受付カウンターから待合室内を見回す真理を見て寄って来た。
どこか青い顔をして、泣いてしまいそうな表情をした真理に、尊は首を傾げる。
「どうしたの？何か、良くない電話だったのかい？」
「・・・真臣が・・・、一人で外に・・・。連れ戻さなきゃ。あの子・・・一人にしちゃいけない・・・」
真臣は幼稚園に通う前、毎日病院で過ごしていた。外で道路に出てはいけないことも知っているし、病院の敷地内からは出ない。
何故真理がそんなに慌てているのか解らなかったが、尊は真理を落ち着かせるためにニコッと笑うと、カウンターから身を乗り出している彼女の腕をポンポンッと叩いた。
「見て来てあげるよ。大丈夫だよ。真臣君はシッカリしているし、勝手に居なくなったりしないよ」
「あ・・・」

真理は何て言ったら良いのか説明がつかない。
この何ともいえない不安を、どう言えば良いのか・・・。
「待ってて。もし外に居たら、ちゃんと連れて来るから」
もう一度、力が入りすぎている真理の腕を軽く叩いて、裏口から出るために待合室から姿を消した尊を、真理は黙って見詰めた。

来院者用駐車場まで出て、真臣は道路をキョロキョロッと見回した。
「・・・もぅ来るかなぁ・・・？」
「パパ達」が来るのが待ち切れないのだ。楽しみで堪らないのだ。
道の先にまだ来る気配がないのを知ると、ちょっとがっかりした顔をするが、すぐに気を取り直して自販機の前へ寄って行った。
朝真理に「後で買ってあげる」と言われたが、残念ながらまだ当たっては居ない。
ふと見ると、自販機の周辺のよくある光景。飲み終わった缶や瓶が周りに数個置かれている。もっと小さな頃からこんな光景をよく見ている真臣は、空き缶を両手に持つと自販機横の缶用ゴミ箱に捨てた。瓶もあったが、瓶用のゴミ箱が無いのでそのままにする事にする。
自販機のジュースをジッと眺め、新しいのも良いけど、やっぱりいつものでも良いかな？　と、つい目移りしてしまう。

・　・その時・・・。

後ろに誰かが立ったような気がして、真臣が振り返る。

そこに、見知らぬ男が立っていた・・・。

――――コレハ・・・ダレダ・・・？

朝からずっと、井関の頭の中は、その声でいっぱいになっている。

真理に手を引かれて、歩いていた少年。

真理は、少年をこう呼んだ。

「まさおみ」と。

「おじさん・・・誰？」

目の前の少年が、怪訝そうな顔をした。

いきなり見知らぬ大人が自分の後ろに立ってジッと見られれば、小さな子供だっていい気はしないだろう。

しかし、怪訝そうに細められたその目は、井関の記憶の中から思い出してはいけない物を引っ張り出した。

ちょっと長めの前髪。

その隙間から覗く目。

いつも人を小馬鹿にしたような目で。

その目で睨み付けながら、自分から、真理を奪って行った男。

その男の目と、目の前の少年は、同じ目をして居る・・・。

「・・・あ・・・」

湧き上がる憎しみ。
蘇る憎悪。

目の前の少年が、憎んでも憎みきれない男の面影と重なった！

「あっ・・・あぁぁ～～～～～っ！！」

いきなりおかしな声を上げた井関に、真臣はビクッとする！
井関は自販機の前に置かれっぱなしの瓶を素早く手に取ると、アスファルトに底の部分を叩きつけて割った！

割れた先が刃物のようになった瓶を握り、驚いた顔で自分を見ている真臣に詰め寄ると、その手を思い切り振り上げたのだ！

自分を苦しめ続けた・・・。
その原因を作った男と同じ目をした。
少年の頭上に・・・・・。

６４　真臣に迫るもの（後書き）

こんにちは。玉紀　直です。
ちょっと友情っぽいところから始まったのに、変なところで終わっていてすみません。

正臣くんの息子なんですから。
似ているのは当たり前。
井関さんは、「真臣君」を「正臣」だと見てしまいました。

真臣君は、どうなる？

次回は２月４日更新予定。

では、次回！！

【お知らせ】
バナーを見て気付いてくれた方もいるかと思いますが、今年もアルファポリスさんの「恋愛小説大賞」に参加させて頂く事にしました！
去年も参加させて頂き、とても楽しかった思い出があるので、今年も楽しんで参加させて頂こうと思っています♪（お祭り、お祭り）
２月１日から２８日まで開催されます。
詳しくは「活動報告」で！

ｈｔｔｐ：／／ｍｙｐａｇｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｍｙｐａｇｅｂｌｏｇ／ｖｉｅｗ／ｕｓｅｒｉｄ／２８２５４／ｂｌｏｇｋｅｙ／１７３８０／

目標！目指せ「1ページ目」！（笑）

65　真臣の危機

「真臣！！」

冬の冷たい空気を切り裂くような、悲鳴にも似た真理の叫び声が、病院前に響き渡った！

病院のカウンター内に立っていた真理は見たのだ。

来院者の車が無くなった病院前の駐車場で、道路を見渡す真臣の姿。

そして、自動販売機の前に立っていた真臣に近付く、男の姿。

井関恭吾の姿を・・・・・。

病院から居なくなったという井関。

まさかここまでは来ないだろう。来られないだろう。そう思っていた。

しかし、彼は来たのだ。

この場所へ。真理に会いに。

「ま・・さおみ・・・、真臣ぃ！」

真理は引きつった声をあげながら、受付の女性が驚いた顔をしているのも構わずにカウンターから待合室へ飛び出すと、靴も履かないまま走り出した！

振り上げられた茶色の瓶。それは、良く見る栄養ドリンク系の瓶だ。
そんなに大きな物ではない。
しかし、底を割り、割れた口が鋭い刃物のようになってしまったそれは、充分に人を傷付けるだけの能力を持つ物と化しているだろう。
特に今それを振り下ろされようとしている小さな少年などには、充分な凶器になり得るのだ。

小さな真臣は、何が起こっているのか解からない。
突然自分の前に現れた見知らぬ男。
痩せこけ、何かを探すように目だけがキョロキョロと動きまわっている。
ハッキリ言えば、小さな子供は怖いし気味が悪い。
だから、訊いたのだ。
「おじさん、誰？」と。
その途端、聞いた事もないような恐ろしい叫び声を上げた男！
そして今、真臣が捨てずにその場に置きっぱなしにした瓶で彼を殴ろうとしている。

・・・どうして？
ぼくが、ちゃんとビンをすてなかったから、怒っているの？
だって、ビンをすててていいハコは、ここにはないんだよ？
ママがいつも、ビンがあったらそのままにしておいていい。って言っているから・・・。

真臣には、分からない。
しかし、ただ一つ、解かった事がある。

相手から伝わってくる、身を切られるような「憎悪」。

「マ・・・マぁ・・」

小さな体が張り裂けてしまいそうなほど一杯に埋められる、初めて体験する、本当の「恐怖」という物。

「あァァ～～！たぁちぃばぁなぁぁぁぁ～～～・・・！！」

これ以上聞いていたら、聞いているほうの気が狂ってしまいそうな声を上げ、井関が瓶を振り下ろした！！

「いやあぁ！！」

病院を飛び出し、真臣の傍へ走り寄ろうとした真理が、その光景に立ち竦み、両手で頭を押さえ悲鳴を上げる！

ガシャ・・ンッ！

井関が手に持っていた瓶は、「目の前の人物」に当たり、その手から滑り落ちて駐車場のアスファルトの上で砕け散った。

瓶を刺された「目の前の人物」の、刺された後ろ肩部分が赤く染まっていく。

その人物は、白い白衣を着ている。

瓶が刺さり、やはり怪我をしたのだろう。赤い血と見られるものが、彼のワイシャツと白衣を通して、どんどん赤いシミを作っていったのだ。

井関は立ち竦んだ。

まったく知らない第三者登場に、彼は動揺を隠せない。

――――コイツハ・・・ダレダ・・・。

傷付けられた肩越しに井関を振り返り、目の前で訳の分からない恐怖に震える真臣を抱き締める。

「・・・た・・け・・・、たけちゃ・・ん・・・」

恐怖に縛られていた真臣は、誰かに守ってもらうという安心感を得て、涙をボロボロ流して泣き出した。

尊はそのまま、真臣をグッと抱き締めた。

「・・・尊さん・・・」

真理は震える手をゆっくりと下ろす・・・。

真理も尊も、そして井関も。

冬の空気に凍りつけられたように。

誰もその場から動けなかった・・・・・。

６５　真臣の危機（後書き）

こんにちは、玉紀　直です。
真臣君を庇った尊さんは怪我をしてしまいます。
真臣君はこのままで居られるでしょうか。
井関さんは、どうなる？

こんな中で、次にやってくるには「パパ達」。

ちょっと短くしている分、早め更新でいきます。
次回は２月６日更新。

では、次回！！

＊「活動報告」の方に１／２９～２／１まで、ｗｅｂ拍手で頂いたコメントのお返事を掲載させて頂いています。

ｈｔｔｐ：／／ｍｙｐａｇｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｍｙｐａｇｅｂｌｏｇ／ｖｉｅｗ／ｕｓｅｒｉｄ／２８２５４／ｂｌｏｇｋｅｙ／１７９４８／

この間にコメントを下さった方。覗いてみて下さいませ。
沢山の拍手を、いつも有難うございます！

66　最期の制裁

「何だ？　今の声」
そう思ったのは、秋光だけではない。
達也も健も、三人ともそう思ったのだ。
もうすぐ病院へ着くという直線道路で、三人は確かにその声を聞いた。
まるで、獣の咆哮の様な叫び声を。

「あいつ・・・。何だ？」
目の前に迫った病院の駐車場に目を向けた秋光が見たのは、長いコートを着た人間の後ろ姿だった。
どう見ても不自然なその人物は、傍の自動販売機の前から何かを取る。
その時、今までその人物の陰になっていて見えなかった真臣の姿が目に入ったのだ！
「真臣？！」

尊は裏口から出て表へ回った瞬間、真臣の前に不審な男が立っている事に気づいた。
表情が虚ろで、目の焦点が合っていない。
医者の目から、いや、素人目にもおかしいと感じるのは確かだ。
真臣君から離さなくては。そう感じ、急いで真臣に近付こうとしたその瞬間、男が瓶を割って真臣に振りがざしたのだ！！
「！」

立ち竦んで動けなくなっている真臣。その真臣の前に立ちはだかって庇う事がその時、尊に出来た精一杯だった。

振り下ろされた瓶の刃は、尊の右肩に浅い傷を作り、彼の白衣を赤く染めた。

「子供に何て事をするんだ！」

咄嗟的にそう口から出るが、心神喪失状態の井関には通じてはいないだろう。それに、そんな人間をこのままにしておく訳にもいかない。

尊は、叫び声を上げて病院前に立ち竦んだままの真理に目を向けると、真臣を真理の方へ向けて叫んだ。

「真理ちゃん！　真臣君を！　早く！！」

真理はハッと我に返り、慌てて傍へ駆け寄ると、大きな目を見開いてぼろぼろと涙を流している真臣を、屈んで力いっぱい抱き締めた。

抱き締めたまま、真理は立ち竦んだままの井関を思い切り睨み付けた！

「あなたは・・・また私から大切なものを奪おうとするの？！！」

井関を睨み付けた真理の目を見て、ただでさえ冷え切っている井関の体温は更に下がった。

真理の大切なものを傷付け、そして、真理に睨み付けられるのはこれが二度目。

以前は正臣を刺した時。

あの時も井関は動揺した。

何よりも愛した少女に向けられた憎悪の目が、彼の精神を極限に

まで追い詰めたのだから・・・。

今の真理の目は、あの時と同じ・・・。

井関を軽蔑し、憎しみを沢山溜め込んだ目。

それは・・・彼が一番、真理からは得たくない物。

「ぁ・・・ぁああ～～ぅぁ～、ぃやだ・・・いやだぁ・・・」

まるで感情の無いうわ言の様に呟き、井関は後ずさり踵を返す。

しかし、数メートル離れた後方には、この状況をおかしく思った秋光達が駆け寄って来ていたのだ！

「お前！　・・・井関か？！」

秋光が驚いた声を上げる！

驚いたのは達也と健も同じだ。

四年前のあの時以来、井関の姿は見てはいない。

痩せこけ、眼球だけが目立つその怯えた男は、あの頃、意気揚々と毎日笑顔で教壇に立っていた男とは思えない。

泣きじゃくる真臣、それを抱き締め井関を睨み付ける真理、そして、白衣の肩を赤く染めた尊。

それだけで、今ここで何が起こったのかが想像できる。

「てめぇ！相変わらずふざけた真似しやがってぇぇ！！」

達也が井関の方へ突進していくと、その後に続こうとした健は、秋光の肩をポンッと叩いた。

「お前はネーサンと真臣の所へ行ってやれ！」

秋光が頷いて、真理と真臣の傍へ駆け寄る。

井関を取り押さえようと達也と健が井関へ向かって来た時に、それは起こった！！

「あああああああ～～～～～！！！！！！！」

追い詰められる「恐怖」。

それから逃げるように、井関は、車道へと飛び出したのだ。

走り込んできていた、中型トラックの前へ・・・・・。

66　最期の制裁（後書き）

こんにちは。玉紀　直です。
まるで4年前の再現のように、真理ちゃんに憎しみの目を向けられ、自分を追いかけてくる「正臣の仲間」にさらされる井関さん。
逃げ出した彼の前に迫ったものは・・・。

彼への、最後の制裁だったのかもしれません。

まだ終わりません。
更に真理ちゃんの心は追い詰められます。

次回は2月8日更新。

では、次回！！

67　失われた星

「見るな！真理さん！！」
そう叫んで、秋光は真臣を腕に抱く真理を自分の胸の中へ入れ、抱き締めた！
正面を見ないように、力を入れて。

何かがぶつかる音と同時に、トラックのブレーキ音が周辺に大きく響く！
井関が上げた奇声や妙な騒がしさに、病院内や近所の人間などが外に出て来始めた。

「きゃぁっ！！」
「何だ？　人が轢かれたのか？！」
悲鳴が響き、周囲が騒ぎ出す。

「何があったんだ？」
同じく騒ぎを聞きつけた正孝が、秋光に抱きしめられた真理の傍に寄ってきた。
真理は何も答えられない。
ただ泣きじゃくる真臣を抱き締め、そしてその身を秋光に庇われているだけだ。
傍に尊もいるというのに、何故秋光に？そう思った正孝だが、取り敢えずは目の前の状況に目を向けるのが先だった。

「救急車だ！　早く！！」
正孝が外に出て来ていた事務員に叫ぶ。確かにここは「病院」だが、小児科だ。どうする事も出来ない。

道路に急ブレーキをかけて止まったトラック。遠巻きにする野次馬たち。

トラックの若い運転手が、運転席から降りてトラックの下を覗き込み、泣きそうな顔でオロオロしていた。

トラックのキャビン下から、赤い血が周辺のアスファルトへと流れ出てきている。

井関の体はちょうどキャビン下へ入り込んでしまっていた。運転手がちゃんと停まらなければ、その体を引きずってしまうところだっただろう。

尊はそこへ近付いて行き、キャビンの下を覗くように屈み込むと、うつ伏せになって倒れている井関の首に手を当てた。

生存確認をしようとしたのだ。

――しかし、もう必要は無かった・・・。

尊は黙って立ち上がり、道の向こうでこちらを見ている正孝に目を向ける。

秋光の陰になって見えない真理をチラリと見て、そして目を閉じると黙って首を左右に振った。

「あの人、・・・どうなったの？」

やっと少し泣き止んできた真臣を抱き締めたまま、顔を上げずに真理が訊いた。

秋光は答えない。

しかし、聞かなくても真理には解かる。

周囲の人間のざわめき。そして、話し声・・・。

――あの人は・・・死んだんだ・・・。

自分から大切な人を奪い、幸せを奪った男。
自分を見失い、幸せな記憶の中という箱庭でしか生きられなくなっても、尚、真理を愛し続けた男。

彼女だけに、その愛する気持ちを注ぎすぎたあまり、嫉妬と憎しみから逃れられなくなった、可哀想な男・・・。

太陽に魅せられ。
太陽に惹かれすぎて。
その傍で輝きたいと願い、それを許されなかった星。

彼の運命を決めたあの事件で、自分自身を失くし。

そして今回、自分の心の全てを失くした井関恭吾。

彼は、本当の意味で全てを失った。

自分の命さえも。

――星が一つ・・・。

太陽の傍で消えた、瞬間だった・・・・・。

67　失われた星（後書き）

こんにちは。玉紀　直です。
今日はちょっと短めでしたね。
キリのいいところで終わらせたかったので・・・スイマセン。

前作のラストにあれだけ関係していた人である限り、井関さんのエピソードを物語に中に入れない訳には行きませんでした。
井関さんの最期に、ご不満の方もいると思います。
「正臣を殺した人間だから、こういう結果にしたのか」と責められればそれまでですが、この先真理ちゃんが彼に惹かれる事は無いように、彼が救われるべき道も、もぅ無かったように思います。

彼が生きていても、そして死んでしまっても。
真理ちゃんの苦しみは続くんです。

その苦しみのボルテージも上がり続けます。
井関さんに憎しみの心しか持てなかった真理ちゃんが、次に感じるもの。
それは、「罪の意識」です。

次回は少し時間を下さいね。
２月１３日更新予定。

では、次回！！

＊「活動報告」の方に２／４～６まで、ｗｅｂ拍手で頂いたコメントのお返事を掲載させて頂いています。
この間にコメントを下さった方。覗いてみて下さいませ。

http://mypage.syosetu.com/mypage/blog/view/userid/282254/blogkey/1878 5/

沢山の拍手を、いつも有難うございます！

68　謝罪の雨

「すみません！　本当に申し訳ありません！！」
井関恭吾の母親は、半狂乱に近い状態になりながら泣き叫んでいた。

「ご主人をあんな目に遭わせて、・・・おまけに坊ちゃんまで！本当にすみません！　ごめんなさい！！」
喪服が汚れてしまう事など、多分何も考えては居なかっただろう。地べたにうつ伏してしまうのではないかという位、ベッタリと地面に体をつけ、頭を下げて・・・。
「ごめんなさい！！」
これ以上頭を下げる事など不可能なくらいの土下座を、真理の前で見せたのだ。

井関恭吾の葬式は、家族葬だった。
本当に家族だけで、内々に行われたのだ。
今泉には止められたが、お焼香だけでもしたいと、真理は弁護士の今泉を立会人に、通夜の席へ顔を出した。
その時、尊も、正孝の代理として一緒に焼香へ訪れた。
尊に代理を頼んだのには訳がある。一人息子の正臣を殺されている正孝は、不慮の事故に痛ましさと気の毒さを感じてはいても、やはりやりきれない思いがあったのだ。

「死んで当然なんです！　あんな子！　人を殺して、罪の償いもしないまま、また、子供さんを襲うなんて！　あんな恐ろしい子・・・死んで当たり前なんです！！」

地べたに這いつくばって、死んだ息子を罵倒する母親。その横で同じく地べたに座り込み、首をうな垂れ、苦しさに肩を震わせる父親。

真理の姿を見た瞬間、母親は猛然と謝罪の言葉を口に出したのだ。

「バチが当たったんですよ！　気がふれて、罪の償いが出来ない身だったから、・・・バチがあたったんです！！」

真理が井関の両親に会うのは二度目だ。

一度目は。正臣の通夜の席で・・・。

あの時も、同じ様に母親は土下座をして頭を下げていた。

ただ悲しみにふれていた真理は、その時は何も言えなかった覚えがある。

両親とも、あの頃より小さくなってしまったのでは無いだろうか？

特に母親は、四年前はふっくらとした女性だったのに、すっかりやせてしまってまるで病人のようだ。

「すみませんでした！　本当にすみませんでした！！　あんな恐ろしい子を産んでしまって・・・すみませんでした！！」

母親が泣きながら叫ぶ言葉は、真理の心に深く深く突き刺さる。

そんな訳は無い。

自分の子供を、死んで当たり前、などと本気で言う母親がいるだろうか。

「あんな子を産んでしまって」などと、言いたい母親がいるだろうか・・・。

真理は昔の井関を思い出す。

学校で教師をしていた頃の井関は明るく気さくで、沢山の生徒に好かれていた。

彼はきっと、両親に大切に育てられたに違いないのだ。

昔の彼の、大らかで優しい性格が、それを物語っているのでは無いか？

そんな息子が、人を殺した。

両親は、どんな思いだっただろう。

気がふれ、病院に入り、一生元にはもどらないという宣告を受けて。

両親は、どんなに辛かっただろう・・・。

そしてまた、殺した人間の子供を襲った。

「死んで当たり前なんです！　こんなことまでしてっ！　もし生きていたなら、私が殺してやります！」

母親は、自分が何を言っているのか自覚出来てはいなかったのかもしれない。

正臣を殺された、真理。

しかし、真理だけが辛かったのでは無い。

正臣を殺した井関。

その両親だって、苦しんだのだ。

私は・・・ここへ来てはいけなかった・・・。

雨なのか涙なのか解からない位、真理の顔はぐちゃぐちゃに濡れていた。

ただただ涙は止まらず、眩暈がしそうになって立っているのも辛く、倒れそうになった時、隣にいる尊に支えられた。

「ごめんなさいぃぃ・・・っっ・・」

ただひたすら、謝罪の「言葉」を口にする母親。

この母に子供を罵倒させ、辛い思いをさせているのは、私だ・・・。

愛しんで育てたであろう子供を、悪く言わなければならない辛さ。

もしも真理なら、真臣を悪く言わなければならないなど辛すぎる。

真理の瞳からは、涙が流れつづけた。

小雨が降りしきる中で、この雨と同じくらい止む事を知らない、

辛く苦しい謝罪の言葉が真理を苛む。

雨は止まない・・・。

そして、雨がやんでも・・・。

真理の心の雨は・・・降り続ける・・・。

68　謝罪の雨（後書き）

こんにちは。玉紀　直です。
辛い話ではありますが、何かの事件を子供が起こしてきた時、その両親はとても辛い思いをするのだと思います。
加害者の親は、同時に「被害者」でもあるのかもしれません・・・。
もちろん、ケースバイケースですよ。誤解しないで下さいね。

真理ちゃんの心の雨は、降り続けます。
ただひたすら、「自分」を責めて。

そんな彼女に、手を差し伸べられるのは・・・？

次回は2月16日更新予定。

では、次回！

69　ひとつめのサヨナラ

「大丈夫かい？真理ちゃん」
温かそうな湯気が上がったマグカップを差し出された事に、真理はなかなか気付けなかった。
考え事をしていたからではない。
何も考えられなくて・・・。
まさしく、真理の頭の中は真っ白だったのだ。

「真理ちゃん」
コレは誰の声だろう・・・。
真理は膝を抱えたまま、顔を上げる。

「大丈夫？」
尊さん・・・？
白い湯気が立ったコーヒーのマグカップを持つ尊が、目の前に居た。
受け取ってもらえないマグカップを手前のテーブルに置くと、尊は真理と同じ様に膝を立てて横に座る。
肩を抱き寄せられ尊の肩に寄りかかると、彼の温かさが雨で濡れた体に伝わってきた。

「・・・たける・・・さん・・」

誰かの温かさを感じると、やっと自分が戻ってきたような気がして、今自分が何をしているのかが解かってくる。

「私・・・」

「いいよ。無理して喋らなくても」

尊は真理を抱き寄せたまま、それ以上何も言わなかった。

せめて真理が落ち着くまで・・・。そう思ったのだ。

尊に肩を抱かれながら、真理はちょっと目を閉じる。しかし、目を閉じると、さっきまで目の前にしていた井関の母親の悲痛な姿が思い浮かんでしまう。

泣き叫び、謝り続けた母親。

辛くて、苦しくて、真理はお焼香をするとすぐにその場から立ち去った。

弁護士の今泉とはその場で別れたが、真理は一緒に行った尊に家まで送ってもらう事になっていた。

しかし、小雨と涙でびしょ濡れになり、一歩歩いただけで倒れてしまいそうになっている真理を見ていられなくなった尊は、少し落ち着くまで休ませようと、自分のマンションまで連れてきたのだ。

濡れた服を少しでも乾かそうと気を遣った部屋の中は、服の湿気が加湿代わりになり、ほわっと温かくて気持ちが良い。

尊に借りたシャツとジーンズの袖と裾を捲り上げながら、真理はその温かさがどこか辛かった。

自分は、こんな温かさを感じても良い人間なのだろうか・・・。

――人一人の人生を・・・壊したのに・・・・・。

真理がずっと寄りかかって動かないので、もちろん尊も動かない。

随分と長い間、二人はそのまま身を寄せ合っていた。
そのうちに外は暗くなっていき、もちろん部屋の中も薄暗くなってきたが、真理が動かないので尊も動かない。
とうとう部屋が真っ暗になった時、カーテンを閉めていない窓から微かに外の光が入り込んでいるのを見て、雨は上がったのだという事が解かった。

「尊さん・・・」
やっと真理が口を開く。
真理は自分が寄りかかっている尊の肩に、そっと手を触れた。
「傷・・・大丈夫？」
真理が気にしたのは、真臣を庇った時に負った尊の肩の傷だった。
そんなに深い傷ではなかったようだが、あの時白衣まで赤く染めた尊の血は、四年前に正臣が刺された光景を真理に思い出させたのだ。

尊は真理を見ると、もう片方の手も彼女の体に回して、キュッと抱き締めた。
「あの・・・尊さん・・・」
「大丈夫だよ。ほらっ、こうやって真理ちゃんの事、抱けるし」
少しでも元気付けようとしているのか、力をこめたり緩めたり。
ちょっとおどけた様子でそれを繰り返す。
真理はクスッと笑って尊を見上げると、優しい目で自分を見詰めてくれている尊に、伸び上がって自分から唇を付けた。
尊はちょっと驚くが、真理が自分からそんな事をしてくれたのが嬉しくて、そのまま真理を抱き締めその唇を受け入れる。
情熱的で息をすることも許してはくれなさそうな尊のキスを受け入れ、それから開放されると、真理は彼女を見詰める尊をジッと見詰め返し、静かな声で切り出した。

「尊さん・・・プロポーズの返事、させて・・・」

尊はドキッとした。

今、この良い雰囲気で「返事」というのだ。

どうしても気持ちは良い方へ行ってしまう。

「聞かせて。真理ちゃん」

高まる気持ちを更に高めさせてしまいそうな笑顔を、彼女は作る。

どこか悲しそうな・・・「太陽の笑顔」で。

「私・・・あなたとは結婚できない・・・・・」

69　ひとつめのサヨナラ（後書き）

こんにちは。玉紀　直です。
真理ちゃんを癒そうと、必死の尊さん。
その優しさを体で感じた真理ちゃんですが、彼女が尊さんに告げた言葉は・・・。

じゃぁ、もしかして、彼女が選ぶのは・・・。
次回は、その「彼」の元へ、真理ちゃんが行きます。

次回更新は2月19日。

では、次回!!

＊「活動報告」の方に2／4～13まで、web拍手で頂いたコメントのお返事を掲載させて頂いています。
この間にコメントを下さった方。覗いてみて下さいませ。

http://mypage.syosetu.com/mypage/blog/view/userid/282254/blogkey/2039４／

沢山の拍手を、いつも有難うございます!

70　ふたつめのサヨナラ

「いらっしゃい」
いつもの威勢の良い声ではなかった。
客もいないし、パートも帰った時間帯。店には秋光一人しかいない。

何故か、怖いくらいに静かな夜だった。
夕方まで降っていた小雨はすっかりやんで、眩しいくらいに明るい月が夜空にぽっかりと浮かんでいる。
そんな月を、店のカウンター内でパイプ椅子に座って、黙って秋光は眺めていたのだ。
視界の端に一台のタクシーが映る。タクシーは店の前で停まり、彼の愛する人を降ろした。
そしてその人は、当然のように店のドアを押したのだ。
その人が入って来るのが解かっていたから、秋光は落ち着いて言えた。
「いらっしゃい。真理さん」と・・・。

真理はニコッと笑って、カウンターへ近付いた。
彼女は尊のマンションで乾いた喪服に着替え、彼に別れを告げて、タクシーでここへやってきたのだ。
「秋光君・・・」
真理は横の出入り口を開いてカウンター内に入ると、椅子に座ったままの秋光の前に立った。
「・・・焼香、してきたの？」

真理を見上げ秋光が訊くと、彼女は小さくこくんと頷いた。
「大丈夫？」
無理も無い事だが、真理の表情が悲しそうに見えた秋光は気遣って声を掛ける。
悲しそうだが、自分を見ながら微笑んでくれている。
それがとても愛おしく感じた。

真理が秋光の両肩へ手を掛ける。
彼女はそのまま身を屈めて、自分を見上げてくれている秋光の唇に自分の唇を重ねた。

重ねるだけのキス。

激しさも何も無い。
ただ重ねて相手を感じるだけの、優しくくじれったいキス。
それは、秋光が初めて真理に「好きだ」と告白した日に、彼がしたキスと同じだった。

「真理さん・・・」
秋光は下から腕を伸ばし真理の頭を押さえると、いつものようにちょっと強く真理の唇に吸い付いた。
それでも、精神的に参っているであろう真理に気遣って、強く、それでもゆっくりとしたキスを繰り返す。
秋光の温かさが伝わってきて、真理はとても嬉しかった。

「・・・好きよ・・・秋光君・・・」
唇が離れかかった時、真理が囁く。
「好きよ・・・」
切なそうに、何処か悲しそうに発せられるその声は、嬉しい言葉

であるはずなのに、秋光の胸を苦しいくらいに締め付けた。

「好き・・・」

真理は口に出しながら、涙が浮かんでくるのを感じていた。

「好き」という言葉が、今の真理の心にはあまりにも重い。

幸せな言葉であればあるだけ、自分が使ってはいけない言葉のように感じる。

「真理さん、オレも・・・」

真理の切なそうな表情に耐え切れなくなって、秋光もいつも口にする自分の気持ちを言おうとした。

しかし、その言葉を、真理は遮る。

「秋光君。・・・この間の、プロポーズの返事させて」

「返事・・・？」

真理と結婚したいという言葉を、先日口から出してしまっていた事を思い出す。

もちろん本心から出た言葉だったのだが、イザ返事という物をもらえるという事になると、秋光は柄にも無くちょっと体が緊張した。

今、この良いムードで。

そして真理は、秋光を好きだと、口に出してくれている。

この状況での「返事」に期待をしない人間が居るだろうか。

真理はニッコリと笑う。

哀しそうに・・・「太陽の笑顔」を作って。

「私・・・秋光君と、結婚できない・・・」

静かな夜。
月だけが明るく輝いている。

月は・・・。
何か楽しいのだろうか？
何か嬉しい事でもあったのだろうか？

今日の輝きは、いつにも増して明るい。

太陽の光を失いかけた星を二つ、見下すように・・・。

明るい月が、見ている――――。

70　ふたつめのサヨナラ（後書き）

こんにちは。玉紀　直です。
秋光君のプロポーズを断る真理ちゃん。
彼女は、何を考えて、そんな答えを出したのでしょうか・・・？

明るい月が見詰める中、次回、真理ちゃんの気持ちが語られます。
真理ちゃんが選択する「幸せ」とは・・・？

次回、2月22日更新予定。

では、次回！！

71　太陽の願い

「あの先生と・・・結婚するの？」
聞きたくない。口にしたくも無い。
けれど、それが事実なら、それは聞かなければいけない事。

――秋光君と、結婚出来ない・・・。

真理がそう言ってから、重苦しいほどの沈黙が店の中を漂った。
椅子に座り、ただ呆然と真理を見詰める秋光。
微かに微笑んだまま、その大きな瞳いっぱいに涙を溜めて、秋光を見下ろす真理。

いっぱいに溜まった涙は、そのままぽたりと大きな雫となって秋光の頬に落ちた。
真理は秋光の頬に落ちた自分の涙を手の甲でキュッと拭い、小さく首を左右に振る。
「私は、誰とも結婚なんてしない・・・」

再び走る沈黙。その中で、パイプ椅子の脚が床をする音が、まるでその身を裂くように耳の奥へ響く。
秋光はゆっくりと立ち上がり、今度は彼が真理を見下ろした。
「・・・オレの事、好きだ、って・・・言ってくれたのに？」
真理は悲しそうに目を細め、秋光を見上げる。
「真理さん・・・、好きだ、って、言ってくれたろ？・・・嘘なのかよ・・・」
「本当よ・・・」

「じゃぁ、何で・・・」
秋光は納得がいかない。
真理は自分を好きだと言ってくれているのに。なのに、結婚は出来ないという。

真理がなかなか答えないうちに、店のドアが開いた。
真理は背を向けていたが、とっさに顔を上げた秋光は、入って来た人間の顔を見て目を見開く。
「やっぱり、ここに居た」
店に入ってきたのは尊だった。
「ここに来ているんじゃないかって思ったんだ・・・」
尊はカウンター前に歩み寄り、チラッと秋光を見てから、下を向いてしまっている真理の横顔に視線を移す。
「・・・秋光君とも結婚はしない。・・・そう言ったのは、本当？」

尊の部屋でプロポーズを断った時、「秋光を選ぶのか」と訊かれ、真理は首を振ったのだ。「秋光君とも結婚はしない」と。
秋光とは結婚しない。けれど尊のポロポーズも断った。そんな真理にどうしても納得がいかず、尊は真理を追ってきたのだ。
そのまま立花家へ行こうかと思ったが、その前にここへ来ているのではないかと思い、コンビニのドアを押した。
そして真理は、確かにここにいたのだ。

「本当よ・・・」
真理は下を向いたまま答える。
「真理さん！」
すると突然、秋光が真理の両肩を掴んだ！
「どうして、真理さん！　オレ・・・オレは、真理さんが好きだよ

!!　ずっと、ずっと好きだった！　真理さんがオレの気持ちを受け入れてくれた時は、ただ嬉しいばっかりで浮かれ上がっていたけど、でも、でも今はそれだけじゃなくて、本当に真理さんの事を幸せにしたい、って思ってるよ！・・・それでも・・・」

　掴まれた肩を竦め辛そうな顔をしている真理を見て、つい興奮のあまり力を入れてしまった事に気付いた秋光は、その手を離し言葉を続けた。

「それでも・・・オレじゃぁ、真理さんの事、幸せに出来ないって思ってるの？」

　感情が溢れるままに口にする秋光に反して、尊は落ち着いた声を出した。

「俺も・・・以前言ったよ。君の悲しみも君自身も、全てひっくるめて幸せにしてあげたいんだ、って。その権利を貰いたい、って。・・・その権利は、これから何年待っても、貰えないのかい？」

　真理は顔を上げ、秋光と尊を交互に見た。

「・・・私は・・・幸せになっちゃいけないの・・・」

　綺麗に通るはずの、彼女自慢の声が、これでもかとばかりに低く響く。

　心の底から、全てのものを拾い上げ。

　その重みに耐え切れないような声で・・・。

「他人（ひと）の人生を壊した私に・・・幸せになる権利なんて無いの・・・」

　井関の事を言っているのだ。やっぱり今日の通夜になど行かせるべきではなかった。そう思った秋光は、慌てて口を出す。

「違うよ真理さん！　井関の件は、真理さんには何の責任も無いだろう?！」
「そうだよ。あれは事故だ。真理ちゃんには何の関係も無い」
もしかして、初めて二人の意見が合ったのかもしれない。
しかし、真理は首を左右に振り、秋光から離れると横の出入り口からカウンターを出る。

「元々、昔のあの明るかった井関さんを、勝手な行動と優柔不断さで傷付けて、壊れるキッカケを作ってしまったのは私・・・。井関さんがあんな風にならなければ、正臣だって、彼に殺される事はなかった・・・。全部・・・私が悪いの・・・」
完全に全てを自分のせいにしてしまっている真理の心の中には、自分を責める言葉しか巡っては居なかった。

全て、私のせいだ・・・。
井関さんの精神がおかしくなったのも。
正臣が殺されたのも。
そして、その井関さんが死んだのも。
井関さんのお母さんが、泣き叫びながら自分の子供を罵倒しなければならないまでに追い詰められたのも！

全て・・・私が・・・！

「そんな私に・・・幸せになる資格なんて無い・・・」
真理はそう言って、店の出入り口へ向かった。
「真理さん！」
「真理ちゃん！！」
そんな真理を引きとめようと、二人が叫ぶ。
真理は出入り口の前に立ち、ゆっくりと振り返った。

「私の願い・・・叶えてあげたい、って・・・言ってくれたよね？」

涙を沢山、溜めた目を細め。
心の底を、罪の泉に浸しつくして。
真理は、静かに言葉を出す。

「じゃぁ・・・叶えて・・・。私の、お願い・・・」

ドアの前に立つ真理。
ガラス戸の向こうに、明るい月が見える。

「――――正臣に・・・会わせて・・・」

月の光に照らされて・・・。
真理は、自分の心に閉じ込め続けた、一番の願い事を口にする。

「私を・・・正臣に会わせて・・・」

真理の背後から、月の光が彼女を照らす。

包み込むように。

守るように。

――真理・・・。

正臣の声が、真理の耳に響いた・・・・・・。

71　太陽の願い（後書き）

こんにちは。玉紀　直です。
二人のプロポーズを断った真理ちゃん。
その理由は、「幸せになる権利はない」という事。
そんな彼女を、今まで探るように様子を見ていた月が包み始めます。

壊れてしまいそうな彼女に、残り二つの星が出来る事は・・・。

さて、完結まで残り１０話を切りました。
次回から完結まで、あとがきは書きません。
次の更新日と、特別にお知らせしたい事だけ、書かせて頂きますね。

ラストスパートです。
真理ちゃんが求めた「幸せ」とは？
彼女は本当に「幸せ」を掴めるのでしょうか？

次回更新は２月２５日予定！

完結まで、どうぞお付き合い下さい！！

72　月に会わせて

「真臣・・・」
優しい声で、真理は呼びかける。
静かに、幸せに溢れた声で。
目の前で眠る真臣。寝顔が少し正臣に似ている。
真臣が眠る、いつもの部屋。
元々、正臣の部屋だった。中に置かれている机も本棚も、全て正臣が生きていた頃のまま。もちろん、今真臣が眠っているベッドも・・・。

電気も点けず真っ暗な部屋の中には、カーテンを閉めていない窓から明るい月明かりが入り込んできている。
床に両膝立ちになってベッドへ上半身を乗せ、真理は眠る真臣の前髪を指で撫でた。

「・・・大好きよ・・・真臣・・」

真理が秋光や尊が止める声も聞かず、店を飛び出し家へ帰ってきた時、すでに真臣は眠っていた。
喘息の常連患者が急患で入ったらしく、両親は病院の方へ行っている。真理が帰って来るまで居た真澄も、様子を見に病院へ行ってしまったのだ。

「・・・あなたが居たから、頑張れたんだよ・・・」

真理は、眠る真臣に話しかける。

愛しい者を見る優しい目。
今にも泣き出してしまいそうな、哀しい目で。

正臣の忘れ形見。
愛する人が残してくれた子供。
産まれて来るのを心待ちにしながら、抱くことはおろか顔を見てもらうことも出来なかった。
?父親?を知らない。真臣。

「ごめんね・・・。真臣・・・」
父親の温かみを知らずに育ち、寂しい思いをするなら。
?父親?を与えてあげようと思った。そうする事が、自分の幸せにも繋がるのかもしれない。・・・そう思って。
でも・・・。

真理はゆっくりと立ち上がると、窓辺に置かれた机へ近付いた。
机の上には、木製の写真立てがある。中で笑うのは、もうこの世には居ない愛しい人。
「正臣・・・」
真理は写真立てを胸に抱いた。
「あなたは・・・私を離してはくれないんだね・・・」

尊の優しさと、ちょっと強引な愛に触れても。
秋光の、真理だけを想う深い愛情に触れ、彼に惹かれても。

誰かと何度キスをしても。
何度抱かれても。

真理の心には、「正臣」が入ってくる。

――真理・・・。
心の中から、今も消せない声。

――愛してるよ。真理。
一生、言い続けると誓ってくれた言葉。

――幸せにするよ。
そう言ってくれたのは、彼のはずだった!!

「まさおみ・・・ぃ」

そして、「幸せに」なるはずだった・・・・・。

「どうして・・・居ないの・・・？　正臣・・・」
この四年間、何度も何度も口に出し、何度も何度も心の中で繰り返した言葉。
真理は写真立てを胸に抱いたまま、窓の外を見る。

ぽっかりと。明るい月。

――真理・・・。

正臣の声が聞こえる。

どうして居ない？
決まっている。
彼が居る場所と、自分が居る場所は違うのだ。
会えないのは当たり前。居ないのも当たり前

「あなたに、会いたい・・・」

たった一つの願いだった。

ただ一つ、心から願い、でも決して口からは出せない願いだった。

「会いたいの・・・」

ただ、「愛する人に会いたい」と・・・・・。

月を見上げる真理の瞳から、涙が零れ頬を伝った。

そんな彼女を、月の光が照らす。

「私は・・・まだ、頑張らなくちゃいけないの?」

周囲を安心させるために。

真臣の為に。

自分の気持ちに、目をつぶって・・・。

「もぅ・・・いいでしょう?」

もぅ、頑張らなくても、いいでしょう?

「正臣・・・」

――――真理・・・。

月明かりが彼女を包む。

迎え入れるように、優しく抱き締める。

真理は再び机へ近付くと、机の上に写真立てを戻した。

机の小引き出しを開ける。中には、クリップやペン、レポート用紙等が入っている中、無造作に入れられている物がひとつ。

真理はそれを手に取った。

手の平に納まるくらいの柄。
それをキュッと握ると、パチンッと音がして鋭いナイフの刃が飛び出す。
昔、素行が悪かった頃の正臣が持ち歩いていたナイフ。
そして、病院で井関の前に突きつけ、彼を混乱に陥れたナイフだ。
真理はその刃を、涙でいっぱいになった目で見詰めた。

「・・・もぅ、いいでしょぅ・・・？」

涙でナイフの刃も見えなくなる。
その瞼に、真臣や両親、病院の仲間、そして、尊の姿が映った。

「・・・・・」

真理の唇が何かを言いたげに動いた時、最後に秋光の姿が思い映る。

「・・・あきみつ・・くん・・・」

無意識にその名が口から出た瞬間・・・。

――真理。

真理を照らした月明かりが、彼女を抱き締める。
気持ちを自分へ戻すように。
真理を、捕まえる様に。

真理は、まるで?そうしなければいけない?かのように、ナイフの刃を左手首に当てた。

「・・・会いたいの・・・」

?幸せ?に・・・してくれるんでしょう?

鋭く光るナイフの刃が、皮膚に押し付けられる。

「・・・まさおみ・・・」

真理はそのまま、左手首の上で、ナイフを引いた・・・・・。

涙で滲んだ視界が真っ白になった時、真理の目に、正臣が見えたような気がする・・・・・。

――真理・・・。

月(まさおみ)が呼んでいる。

その腕を広げて。

愛しい者を迎え入れようと・・・・。

――おいで・・・。真理・・・・。

72　月に会わせて（後書き）

次回更新2月28日予定。

＊「活動報告」の方に2／16～23まで、web拍手で頂いたコメントのお返事を掲載させて頂いています。
この間にコメントを下さった方。覗いてみて下さいませ。

http://mypage.syosetu.com/mypageblog/view/userid/282254/blogkey/21948/

沢山の拍手を、いつも有難うございます！

73　死と幸せ

――――正臣に、会わせて・・・。

「真理さん・・・」

さっきから、この繰り返した。
頭の中からは、いつまでたっても真理の声が消えない。
真理が逃げるように店を出て行き、しばらくしてから辛そうに立ち竦んでいた尊も店を出た。
そして秋光は、何も考えられず、ただカウンターの中に佇み、あの時真理を照らし続けてきた月を、ガラス越しに見るだけ。

解かっている事だった。
真理さんは正臣を愛してる。
死んでもそれは変わらない。
ずっとずっと、解かっていた事だ。

だから、その気持ちを大切にしてあげたかった。
自分の気持ちを、押し殺しても。

でも・・・。
自分の気持ちを伝えて、真理さんが体を許してくれて。
そのうち、「好きだ」って言ってくれるようになって。

嬉しくて。
有頂天になった。
一回一回、真理さんを感じる回数を重ねるごとに、どんどんどん

どん好きになっていって、守ってあげたい、ずっと一緒にいたいっていう気持ちが大きく膨らんだ。

正臣と、入れ替われるかもしれない・・・。とまで思った。

「そんな訳、ねーんだよな・・・」

秋光は片手で顔を押さえ、カウンターに片手を付いて、大きく溜息を付いた。

「正臣と、入れ替われるはずなんて・・・ねーじゃん

現実を口に出すと、あまりにも胸が苦しい。

秋光は顔を押さえていた手を離し、店のガラスの向こうにぽっかりと浮かぶ、明るい月を見上げた。

「お前・・・笑っていたのか?」

真理さんに惹かれるオレを見て・・・。

真理さんに「好きだ」って言われて、その気になっているオレを見て。

少しだけ、お前の上をいけたような気がして、良い気分になっているオレを見て・・・。

「・・・笑っていたのか?・・・正臣」

月(まさおみ)は答えない。

ただ、太陽と月の間で、今にも壊れてしまいそうに弱い光を放つ星を、黙って見ているだけ・・・。

――正臣に、会わせて・・・。

「無理だよ・・・、真理さん」

どんなに悲しんだって。
どんなに足掻いたって。
正臣は死んだんだ。
それは、事実なんだ・・・。

そして、目の前で泣かれても、「結婚は出来ない」と突き放されても。
真理さんがどれだけ正臣を愛しているかという現実を突きつけられても・・・！

オレが真理さんを好きな気持ちも、事実なんだ・・・。

秋光はカウンターを出ると、特に閉店準備をする訳でもなく、ただ出入口の鍵を掛け、閉店のプレートをかけて、照明の電源を半分落とし、休憩室へと入った。
だからと言って、特に休憩をしたかった訳ではない。
彼はそのまま、裏口へ向かったのだ。

もう一度伝えたくて。
真理が正臣を思っているという気持ちを解かっていても、何よりも愛し続けているという事を解かっていても。

「オレ・・・真理さんが、好きだよ・・・」

それだけを伝えたい。
それだけを解かって欲しい。

ただ・・・それだけを・・・。

「こんばんはー」
いつもよりは少し小さめの声だったと思う。
立花家のドアチャイムを押し、いつものようにすぐ一声掛けながらドアを開ける。時々鍵が掛かっている時があるが、今日は開いていた。
玄関にキチンと揃えられた真理の靴があった。それを見てちょっとドキッとする。
しかし秋光は、真理の靴の他に小さな真臣の靴しかないのを見て、両親が出かけている事を悟った。

「真理さーん・・・」
口の横に手の平を立てて、控えめではあるが家の中へ呼びかける。
家の中はシーンとしていて、何の物音もしなければ人の気配も感じられなかった。
寝てしまった。という事はないだろう。それならばせめて玄関の鍵は掛けているはずだ。
入浴中？　その可能性もない。両親が留守なのだから、真理の性格上やはり鍵は掛けて入るだろう。
二階に居るのかな？　電気が点いたままのリビングを横目で見ながら秋光は家へ上がり、階段へ向かった。

この部屋のノックなんて初めてかもしれない。そう思いながら秋光は？正臣の部屋？をノックした。
この時間なら真臣が寝ているはずだ。辛い事があった後なのだからきっと真臣と居るだろう。そう思ったのだ。

しかし中から返事はない。
「・・・入るよ？」
秋光は一声かけてドアを開いた。

部屋の中は暗かった。
電気は点けず、部屋の中にはカーテンを閉めていない窓から明るい月明かりだけが、眩しいくらいに射し込んでいる。
「・・・真理さん？」
そんな広い部屋ではない。真理の姿はすぐに目に入った。

窓辺の床に、横たわる真理の姿を。

「真理さん？　寝てるの？」

秋光は部屋に入り、そのまま真理の傍へ歩み寄ろうとして・・・。
「・・・！」
――――足を止めた。

「真理・・・さん・・・？」

月明かりに照らされ。
その中で横たわる真理。
身動きしない彼女の右手には、しっかりとナイフが握られている。

そして左手は、薄明るい月光の中で、真っ赤に染まっていた。

「真理さん？！」

――正臣に会わせて。

慌てて真理に駆け寄る秋光の耳に、「真理の願い」が響く。

――正臣に、会わせて・・・。

これが、答え？
これが答えなのか？　真理さん・・・。
これが・・・。

――正臣に、会いたい・・・・・。

真理さんが選んだ、「幸せ」なのか？！！

73　死と幸せ（後書き）

＊次回更新3月3日予定。

74　生と幸せ

「何をしているんだ・・・・？」
尊は呆然とした声を出していた。
目の前の光景を見れば、そんな声も出るという物だ。

薄明るい部屋の中。
月明かりが入り込む窓辺で月光に照らされて、真理と秋光の姿がある。
座り込んだ秋光が、真理を抱き締めている姿が・・・。

「何をしているんだ?!　秋光君!!」

大きな声を出してしまってから、尊はハッとしてベッドへ視線を移す。
そこでは真臣が眠っていて、小さな寝息を立てているのだ。だが、目を覚ます事はなかったようだ。
それを見届けて、尊は再び二人に視線を戻す。

秋光に抱き締められた真理は、くったりと体を反らしていた。
眠っているかのような表情。
しかし右手には、小さなナイフが握られている。
そして垂れ下がった左手からは、鮮血が滴り落ちているのが薄闇の中でもシッカリと見えた。

真理が手首を切った。
そしてそれを、秋光が見つけた。

そんな状況がありありと解かる光景だが、尊は一つ納得がいかない。
秋光が何もせずにただ真理の体を抱いて、悲しそうに彼女を眺めているだけである事だ。

真理が店を飛び出してから、しばらくして尊も店を出た。
一度は帰りかかったが、やはり真理が気になり引き返したのだ。
立花家の前に着いた時、秋光が門の中へ入って行ったのが見えた。
二階を見上げたが、真理の部屋に電気は点いていない。
だが真理が帰ってきていないはずはない。秋光も門から出てくる気配はない。
こんな時に押しかけるのもどうかと思ったが、みすみす秋光と二人にしておくのも何処か癪に障る。
尊は車を降りて門の中へ入り、ドアチャイムを鳴らすが何の応答も無い。何の応答も無い事に妙な不安を感じて、玄関に秋光の靴があることを確認してから自分も中へ入ったのだ。
そして、ドアが半分開いていたこの部屋を覗き、この光景を見つけた。

この、嘘であって欲しい、光景を・・・・・。

「救急車は？　電話はしたのか?!」
尊は真理の傍へ屈み、首に手を当てた。
脈はある事を確認して、真理の左手に目を走らせる。手首から血が滴り落ち、床に小さな血溜まりを作っていた。
手首を切って、どれくらい経つのだろう。

「秋光君、電話はっ？」
秋光の返事が無いので、尊は再度彼に問い掛ける。
電話で救急車くらいは呼んだだろう。そう思った尊だが、秋光からはそんな彼の動きを止める台詞が吐かれた。
「真理さんは・・・正臣に、会いたがっているんだ・・・・・」
手首からまだ血が滴っているのを見て、取り敢えずは止血をしようと、手短なところで自分のネクタイを解きかかった尊の手が止まる。
「・・・正臣に・・会いに行こうとしてるんだよ・・・」
秋光とは思えないような静かな声だった。
しかしそれは、まるで夢の中で口を開いているような、目の前の現実を受け入れられないで居るような、呆然とした声だったのだ。
「・・・バカを・・・言うな」
しかしその言葉に、尊が声を震わす。
「だからこのままにしておいてやりたい、とでも言うのか？　・・・だから、このまま真理ちゃんを彼の所へ行かせてあげたい、とでも言うのか・・・？」
信じられない。そんな思いで、尊は秋光を見た。
秋光とて、平気でそんな事を言っている訳ではない。
真理を抱きかかえる腕は震え、真理の服を力いっぱい握り、歯を食いしばって、何かに耐えるように悲しそうな顔で真理を見詰めている。
「それが・・・真理さんの、『幸せ』・・・なら・・・」

秋光がそう言った瞬間、尊はグッと秋光の腕を掴んだ！
「・・・馬鹿を、言うな・・・」
あまりの事態に、声の震えは止まらない。
「死ぬ事が『幸せ』だって・・・？　死んで彼の元へ逝く事が、真理ちゃんの『幸せ』だって・・・？」
秋光の腕を掴んだ手も震え、彼と同じ様に力がこもった。
行き場の無い憤り。やり場のない思い。
哀しみと、切なさ。
その気持ちの全てを、何処へ持って行ったら良いのか分からない。

「そんな幸せがあるか・・・。そんなのは幸せなんかじゃない！」
「あんたは知らないからそんな事が言えるんだ！　真理さんと正臣がどんなに愛し合っていたか知らないから！　正臣が死んで、真理さんがどれだけ悲しんだか、どれだけ苦しい思いをしてきたか！！」
「ああ！　知らないよ！　俺は何も知らない！」
秋光の言葉に、尊は反論する。
まるで投げやりなような言葉に聞こえるが、尊は切実な自分の気持ちを口にした。

「だからこそ、俺は真理ちゃんに、前を見て生きて欲しいんだ！　自分の未来を見て欲しいんだよ！　君は彼の友人だったから、彼に義理立てして、彼の事も含めて真理ちゃんの事を考えようとするんだろうが、俺は違う！　俺は彼の事なんて何ひとつ知らない！　だから、真理ちゃんの事しか考えない！　俺は、彼女に生きていて欲しい！」

尊は秋光から手を離し、ネクタイを引き抜くと真理の左腕を強く縛った。これで止血になるはずだ。
止血を済ませて、尊は睨み付ける様に秋光を見る。

「生きて欲しい・・・。生きて『幸せ』を掴んで欲しい・・・。そう思うのは、間違いなのか・・・？」

「・・・・・」

尊は救急車を呼ぶために、スーツのポケットから携帯電話を取り出した。

「俺は医者だ・・・。目の前で人が死んで行こうとしているのを、黙って見ていられるか！」

尊が電話をしている間、秋光はずっと真理の顔を眺めていた。

月明かりに引かれる様に、だんだんと血の気を失っていく真理の顔を。

「すぐに救急車が来る。取り敢えず、院長と奥さんに連絡を・・・」

病院の方に電気が点いていたのを、ここへ来た時に見た。多分急患か何かが入って二人共病院の方に居るのだろうと察しは付く。

すぐに連絡を入れるだろうと思われた尊は、病院へ掛ける前に違う番号を押した。

出てくれるかどうかは分からない。

しかし尊は、携帯を握り締めながら相手が出るのを待った。

『・・・・・もしもし？』

電話の相手が、戸惑うような声をあげながら応答する。

尊は決死の思いで、しかし何処かホッとした口調で、相手に呼びかけた。

「・・・若菜、頼みがあるんだ・・・」

７４　生と幸せ（後書き）

次回更新３月６日予定。

＊「活動報告」の方に２／２５～３／１まで、ｗｅｂ拍手で頂いたコメントのお返事を掲載させて頂いています。
この間にコメントを下さった方。覗いてみて下さいませ。
ｈｔｔｐ：／／ｍｙｐａｇｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｍｙｐａｇｅｂｌｏｇ／ｖｉｅｗ／ｕｓｅｒｉｄ／２８２５４／ｂｌｏｇｋｅｙ／２３４２５／

沢山の拍手を、いつも有難うございます！

75　手を差し伸べる人

「大学病院の救命救急センターへ行ってください！　医師との連絡は付いていますから！！」

救急車が来ると、尊は救急隊にそう言った。

真臣が眠っている事もあり、真澄が自宅に残る事になった。正孝は急患の処置にまだ一時間ほどかかるという事で、救急車には尊と秋光が同乗した。

こういう場合は尊に患者を任せて、親である正孝が行くべきかもしれないが、患者は喘息の急患で、正孝が専門に力を入れている分野だ。もちろん患者である子供の親もそのつもりで連れてきている。

正孝が離れる訳にはいかなかった。

「どうしてこんな事になったの？！」

運ばれた大学病院の救命救急センター。

そこで予め尊から連絡を受け、到着してから患者の受け入れに出てきた福田若菜は、手首を切って死んだように白い顔をしている真理を見て、責めるような言葉を尊に浴びせた。

「久し振り」と微笑み会う事も無い、最悪の再会だった。

そして、真理の処置が始まったのだ。

処置室の前で、尊は椅子に座り下を向いたまま、そして秋光は壁に寄りかかり処置室の扉を見詰めたまま。
二人共、何も言わなかった・・・。

一時間を過ぎた頃、正孝が一人でやって来た。
そして、真理の処置も終わったのだ。
真理は出血が多く、出血多量のショックで弱くなる心臓の動きを助ける為に、救急車の中でも心臓マッサージが行われた。
尊が駆けつけた時に止血をしていなければ、本当に危なかったらしい。

ひとまず、命は取り留めた。

しかし、極めて危険な状態である事に変わりはない。
担当した医師は、声を詰まらせながら正孝に言った。
「やれる事はやりました。あとは・・・娘さんの『生きたい』という気力次第です」
と・・・。

「良く思い付いたわね。予め連絡をつけておくなんて」
処置を終えた真理を乗せたストレッチャーが病室へ運ばれていく。
正孝と秋光はそれに着いて行った。
尊も着いて行こうとしたのだが、処置室から若菜が出てきたのを見て足を止め、その場に残ったのだ。
「・・・リストカットの患者は・・・時に病院を?たらいまわし?にされがちだからね」
若菜の言葉に尊が返す。

真理をスムーズに搬送する為に、尊は若菜を頼った。
大学病院の救命救急センターへ移されたという彼女に連絡をして、受け入れの了解を取ったのだ。そしてそこへ真理を運び込んだ。

「・・・久し振り」
最初に尊に向けた険しい表情は何処にも無い。
若菜はちょっと寂しそうに尊を見た。
「ああ・・・」
尊は何を言っていいのか分からない。
結婚をやめた事。その理由。救命救急センターでの仕事の事。
訊きたい事は沢山あるのに、最後に見た時より痩せた印象さえ受ける若菜の顔を見ていたら、何も言えなくなった。
ここまで彼女を追い詰めたのは自分ではないか？　という思いが、尊にはあるのだ。
自分は何処までも、彼女を苦しめる事しか出来なかった。・・・と。

「有難う。電話くれて」
「え・・・？」
若菜の意外な言葉に、尊は彼女の顔を凝視する。
あまりにも不思議そうな顔で自分を見るので、若菜は逆に照れてしまった。
「だって、私を頼ってくれた。って事でしょう？」
若菜は白衣のポケットに両手をグッと突っ込むと、肩を上下させ大きく息を吐いて、顔を上に上げた。
「嬉しかったのよ。まだ尊君に覚えてもらえているんだ・・・、って。それが真理さんの為であっても。尊君の声が聞けて、嬉しかった。・・・ごめんね、こんな時に『嬉しい』　だなんて」
上を向いた若菜の目尻が、ちょっと光ったように見える。しかし彼女は、すぐに白衣の袖口で軽く目元を押さえ下を向いた。

若菜の声は震え気味だった。泣きたいのを必死で堪えているかのような声だったのだ。
「あーあ、連日ロクに寝ていないから眠いわぁ。目が疲れちゃって。すぐに涙が出る」
苦しい言い訳だが、今の彼女にはこれが精一杯だ。
「若菜・・・」
そんな若菜に、尊は優しい口調で声を掛けた。
「・・・有難うな・・」
自分の頼みを利いてくれた事や、真理を助ける手助けをしてくれた事。電話が来た事を「嬉しい」と言ってくれた事。
突き放して酷い事をしたはずの自分に、「有難う」と笑ってくれた事。
色々な思いが尊の中で渦巻き、結局その一言しか出ては来なかった。
しかしその一言は、あまりにも重く若菜の胸に響く。
若菜はクルリと後ろを向くと、医者として、彼に告げた。
「担当医から聞いたでしょ？　真理さんは、今夜がヤマよ」
「・・・・・」
「傍に・・・居てあげないと・・・駄目よ」
二人の間に沈黙が走る。
若菜は、もっともっと尊の声が聞きたかった。
他愛無い世間話でもいいから話もしたいし、傍にも居たい。
本当に、少しの間でいいから・・・。
尊も、もっと若菜に訊きたい事があった。
結婚をやめた理由や、今の仕事の事も。

しかしそれは、今すべき事ではない。

「福田先生！　誤飲の子供です！　石油を飲んだそうです！！」
処置室から若い看護師が飛び出してきた。
若菜は看護師の後について処置質へ戻りかけ、一瞬だけ尊を振り返る。
「真理さんの所へ行って。早く」
そして、逃げるように処置室の扉の中へ消えた。
尊はしばらくその扉を見詰め、そして踵を返して病室へと向かう。

最後まで若菜に手を差し伸べてやる事が出来ない自分に、言葉に出来ないもどかしさと悔しさを感じ、奥歯を噛み締めながら。

――暗闇だった・・・。

暗闇だが、真っ暗ではない。

月明かりが射している。
自分を照らしてくれている。

明るく照らして、寂しくないように守ってくれている・・・。

そんな空間に、真理は立っていた。

月光が、明るく綺麗な、暗闇に。

――真理・・・。

何処からか声が聞こえた。
真理はクルリと周囲を見回す。
その声は、とても懐かしい声。
とても、愛しい声。

――真理・・・。

「・・・正臣・・・・？」

真理は相手の名を呼ぶ。これは、正臣の声だ。

クルリと見回してから正面を向いた真理の目に、月光から抜け出してきたような、愛しい人の姿が映る。

――真理・・・。
「正臣・・・？」

正臣が立っている。
真理が知っている、四年前のままの姿で。

正臣は、照れくさそうに笑い、スッと片手を真理に差し伸べた。

――おいで・・・。真理・・・。
「・・・正臣・・・」

――幸せにするよ・・・。

75　手を差し伸べる人（後書き）

次回更新3月9日予定。

76　月に叫ぶ

「やだあああぁぁぁぁ！！！！！」

悲鳴のような叫び声が、静かな家の中に響いた！

驚いたのはリビングにいた真澄だ。

今の声は二階から聞こえた。間違いなく真臣の声なのだ。

「まぁちゃん？！」

真澄は二階へ駆け上がり、もしも真臣が泣いて起き出したりでもしたらすぐに解かるようにと、開けっ放しにしておいたドアから中へ飛び込む！

「まぁちゃん！」

ベッドの上で横になったままの真臣が、目を開けて泣き声のような叫び声を上げているのだ！

「どうしたの？　まぁちゃん！！」

真澄は慌てて真臣を抱き起こした！

真臣は叫ぶのを止め真澄の顔を見ると、急に大きな目から大粒の涙をボロボロと零し始めたのだ。

「ママ・・・ママぁっ！」

真理が運ばれた時、真臣は眠っていた。真理が今病院に居て、生死の境をさまよって居る事を真臣は知らない筈だ。

しかし真臣は、必死で真理を呼んだ。

「ママ・・・ママがぁ！！」

「まぁちゃん！　落ち着いて・・・。ママはすぐに帰ってくるから・・・ねっ？」

背中をポンポンと叩きながら、真澄は真臣を落ち着かせようとした。しかし真臣は、真澄にしがみ付きながら叫んだのだ。

「ママがぁ・・・！　お月さまにつれていかれちゃうよぉ！！」

その言葉に、真澄は息を呑んだ！

子供の直感なのだろうか。

母親の命の危機に、何か夢でも見たのだろう。

「お月さまが、ママをつれていっちゃう！！」

真澄は真臣を抱きかかえたまま、部屋を飛び出した！

当然だが、病室の中は静かだった。

病室の中には三人の人間。

中央のベッドに横たわり、意識の無い真理と、その横に座って付き添う正孝。そして、真理の顔を見詰めながら言葉無く窓辺に寄りかかる秋光。

病室に入った時から、誰も何も言わない。

脳波や心拍数を表示する機械が立てる音だけが、やけに大きく耳に響いてくる。

いつ目を覚ますのか。いや、それ以前に、目を覚ましてくれるのか定かではない真理を見詰めたまま、時間だけが過ぎて行った。

「秋光君・・・」

そんな中で、正孝が口を開いた。

「すまないね・・・。こんな事になってしまって」

真理のベッドを挟んで向かい側の窓側に立つ秋光を見上げる。どこか正臣に似た目が自分を捉え、秋光は一瞬心がビクついた。

「それと・・・、有難う。真理を見つけてくれて」

「・・・！」

お礼を言われ、秋光は息が止まりそうになる。

違う・・・んだ。

違うんだよ、おじさん・・・。

オレはあの時、真理さんを見殺しにしようとしたんだ・・・。

正臣に会えるなら・・・。それが真理さんの願いなら・・・。

そう思って。

それが、真理さんの「幸せ」　なら、って！

秋光の脳裏には、ただ彼女が生きる事だけを考え行動した尊の姿が、いつまでも残っていた。

真理の自殺行為に動揺して、「正臣に会いたい」　という言葉に迷い、彼女をそのままにしようとした自分。

真理の自殺行為を前に、ただただ、「真理が生きる為に」行動した尊。

オレは・・・、真理さんを・・・。

自分の行動に打ちひしがれる秋光。

しかし、そんな彼に正孝は優しい言葉を掛けた。

「息子が死んだ時も、君はいつも真理を元気付けてくれた。・・・ずっと、力になってくれた・・・。感謝しているよ」

正孝は、ベッドで目を閉じる真理の髪を撫でた。その顔を見ながら、記憶は四年前へ飛んでいく。

毎日、今のような蒼白な顔で、泣いてばかりいた真理を。

「あの頃、真理は食事もとらないで泣いてばかりいて・・・。正直、このまま泣き死んでしまうのではないかと思った。・・・正臣の後

を追って、死んでしまうのではないか、って」
正孝は再び秋光を見上げた。
「それでも、毎日君が笑顔で会いに来てくれていたお陰で、真理はあの時期を乗り越えられたんじゃないか、って、思っているんだよ」
「・・・おじさん・・・」
「真臣が産まれて、真理に生きる希望が出来るまで、この子を支えてくれていたのは君かもしれない・・・。本当に、有難う」

真理を見殺しにしようとした。そんな思いがある秋光は、お礼を言われる事があまりにも辛くて、正孝や真理から目を逸らし足元に視線を落とした。
「でも・・・、もう限界だったのかもしれないな・・・」
正孝も、秋光から真理に視線を移す。
「真理は・・・正臣の所へ行きたいのだろうか・・・」

その声は、まるで泣いているようだった。
一人重たい過去を抱え、その重たさに耐えて過ごしてきた四年間。
真理はどんなに辛かっただろうか?

「ただ、この子に、幸せになって欲しい・・・。その一心で、尊君の事を薦めてみたりもしたが、もしかしたら、それも真理には辛かったのかもしれないね・・・」
正孝の気持ちはいつも複雑だ。
真理は本来ならば、自分の息子と結婚するはずだったのだ。
その真理が他の男と結婚するという事は、彼にとって、たった一つ残された正臣の息子である真臣も、自分の手元から離れてしまうという事になるのだから。
それはもちろん辛い事だ。しかし正孝は?父親?として、真理の幸せを願ってやらねばならない立場なのだ。

――――正臣がいなきゃ！私に幸せなんて無いの！！

そう叫んだ真理を思い出し、正孝の目に涙が浮かんだ。

「すまないね・・・。真理」

言葉に出してはいなくても、正孝の「すまない」　に込められた想いが、とても重たく響く。

父親として、娘に幸せを与えてやれない事。

正臣の父親として、正臣の事でいつまでも真理が苦しく悲しい思いをしている事。

その苦しさゆえに、このまま真理が死んでしまいでもしたら・・・。

子供を二人も亡くす事になる正孝は、どうなってしまうのだろう。

薄いレースカーテンが引かれた病室の窓から、秋光は月を見上げた。

ぽっかりと、明るく光る月を。

この光景を、ただ、黙って見ている月を。

「・・・正臣」

秋光はカーテンをよけ、開閉制限で半分までしか開かない窓を限界まで開いた。

ジッと、ただ明るい光を放つ月を、秋光は睨み付ける。

「もぅ・・・、いいだろう?」

十二月の冷たい風と、明るく冷たい月の光が、彼を包んだ。

「もぅ・・・、真理さんを、縛り付けないでくれ」

秋光は淡々と語りかけた。
月に。
自分の親友（まさおみ）に。

「連れて行くな・・・」

親友（まさおみ）は答えない。
黙って、切実に訴えかける親友（あきみつ）を、照らし続ける。

「真理さんを、連れて行くな！　正臣！」

76　月に叫ぶ（後書き）

次回更新3月14日更新予定。

77　太陽と月

「正臣・・・？」

薄闇の中に彼がいる・・・。

月明かりに照らされるように浮かびあがるその人は、間違いなく、求めて止まない正臣の姿。

――――真理。会いたかった。

四年前の姿のままで、照れくさそうに笑いながら、でも何処か自信あり気に真理を見ている。

「正臣・・・」

真理はゆっくりと正臣に近付いた。

恐る恐る腕を伸ばすと、正臣も腕を伸ばしてくる。

指先が触れる。そのまま正臣は真理を引き寄せた。

そして、真理をその胸に抱き締める。

――――真理は・・・俺のものだよな・・・？

「正臣・・・」

会いたくて会いたくて堪らなかった人。

触れたくて触れたくて。

触れてもらいたくて、触れてもらいたくて、堪らなかった人。

抱き締めて欲しかった。
名前を呼んで欲しかった。
その思いが今、叶ったのだ。

――――幸せにするよ・・・・・。

「つれて・・・行くな。正臣」
窓の縁に両手をついて、秋光は首をうな垂れる。
彼はひたすら、呟くように訴えた。
「真理さんは、四年間、苦しんだだろう・・・？　ずっとお前を、想い続けてきたんだ・・・。もういいだろう？」
開閉制限で半分しか開かない窓から、秋光は月を睨み上げた。
「正臣っ・・・」

正臣に会う事が真理の幸せならば、と秋光は最初彼女の死を受け入れようとしていた。
尊と違い、秋光は真理の過去を知りすぎているのだ。
真理が正臣の死でどんなに苦しんだか。どんなに悲しんだか。
そして二人がどんなに愛し合っていたのか。
それ故に真理が自殺をした姿を発見した時、このまま逝かせてあげるのが真理の幸せではないかと錯覚を起こした。

ただひたすら真理が生きる事を願い、行動した尊の姿に打ちひしがれる自分がいる。
正孝が語った、正臣の父として、そして真理の父として、悩み苦しむ姿が辛く苦しい。
しかしこのまま真理が死んでしまったら、心に一生分の傷を負う人間がいるのだ。

「真臣から、真理さんをとるな・・・」

幼い真臣が、今は知る事が無くても、いずれ成長した時に母親は自分を残して自殺したのだと知ったら、どうなるだろう。

きっと辛く悲しい心の傷になってしまうはずだ。

風が吹き、十二月の冷たい空気が流れ込んでくる。

寒さと自分の考えに思わず身震いを起こした秋光は、病室を冷やしてはいけないと、ゆっくりと窓を閉めた。

月から目を逸らし、秋光は小声で呟く。

「オレから・・・真理さんをとらないでくれよ・・・、正臣」

自嘲気味に呟くそれは、自分にしか聞こえてはいないはずの呟き。

しかし、静か過ぎる病室で、もう一人それを耳に入れてしまった人物がいる。

正孝だ。彼は微かに聞こえたその言葉に眉を寄せ、複雑な表情で真理を見た。

病院の面会スペースにある大きな窓から、尊は夜空を見上げていた。

明るく輝く月が、ぽっかりと浮かんでいる。

あまりにも綺麗に浮かぶその月が、どこか楽しげに見え、尊は表情を曇らせた。

真臣が言っていた「パパはお月さまなんだよ」という言葉を思い出すと、何ともいえない怒りが込み上げてくる自分がいる。

死ぬ事を選んだ真理。
正臣の元へ行く事で得る?幸せ?を選んでしまった。

「そんな幸せなんて、有り得ない」
月を睨み上げ、両手を握り締める。
「そんな事で、幸せになんてなれるもんか・・・」
尊は踵を返し、真理の病室へと向かう。すると背後から彼を呼び止める声がした。
「尊先生」
振り向くと、廊下の向こうから真臣を抱きかかえた真澄が速足で歩いてくる。
「奥さん、真臣君・・・どうしたんですか?」
真臣が眠っていた事もあり、二人は自宅待機だったはずだ。
尊が見ると、真臣は真澄にしがみ付き、声を殺して肩を揺らし泣いていた。パジャマにダウンジャケットを羽織っただけの格好なので、よほど急いで来たのだろう。
もしかして自分が傍を離れている間に、容態が変わったのだろうか? それで、身内が呼ばれて。
尊の胸に不安がよぎる。そんな尊に、真澄の腕の中で泣いていた真臣は顔を上げ、嗚咽交じりに言った。
「ママ・・・、たけ、ちゃん・・・、ママ、が・・」
尊が腕を伸ばし真澄の腕から真臣を受け取ると、同じく涙を溜めた真澄が声を詰まらせる。
「まぁちゃんが、『ママが、お月さまにつれていかれる』・・・って」
「え・・・?」
尊が驚いて真臣を見る。尊の腕の中で、真臣は大きな瞳から涙をぼろぼろと流し叫んだ。
「ママ・・・、ママ、つれていっちゃ、だめ・・・ダメだよ!」

尊は真臣を力強く抱き、病室へと走り出した！

太陽が月を照らす。

太陽に照らされ、今日の月は一層明るい。

明るい月は、太陽を抱き締める。光を一つにする為に。

――――真理。会いたかった。

彼(まさおみ)は月。

いつでも真理を見守ると約束し、太陽(まり)を幸せにすると誓った。

「正臣・・・ずっと、ずっと、会いたかったんだよ・・・」

彼女(まり)は太陽。

彼女が照らし輝きを与えた月(まさおみ)を、いつまでも忘れられない。

「ずっと、ずっと、私の中から正臣が消えなくて・・・。ずっと、会いたかった」

心の中に住み続けた月。

いつしか彼女と一体になり、太陽の心の一部になったもの。

ずっと一緒に居ると言い。

きっと幸せにすると誓い。

一生、愛している、と口にする事を約束した。

太陽はそれを忘れられない。
ずっと、ずっと、忘れられなかった。

――――真理、愛してるよ・・・。

月の優しい言葉に、太陽は彼を見上げ、その瞳を見詰める。

――――真理・・・。

月に会う事を望んだのは彼女。
月を照らし、輝かせているのは、太陽。

彼さえいれば、何も望まない。
幸せは全て、彼がくれるはずだ。

それなのに・・・・・。

「まさ・・おみ・・・」

彼女の口から出てくる名前。
そして、月の瞳の中に見える人。

「まさおみ?」

そこには、月に良く似た瞳で笑う、小さな「まさおみ」が居る。

77　太陽と月（後書き）

次回更新3月18日予定。

＊「活動報告」の方に3／3～10まで、web拍手で頂いたコメントのお返事を掲載させて頂いています。
この間にコメントを下さった方。覗いてみて下さいませ。

http://mypage.syosetu.com/mypage/blog/view/userid/282254/blogkey/2607４／

沢山の拍手を、いつも有難うございます！

78　さよなら正臣

「尊君・・・」
病室のドアが少々乱暴に開けられ、それと共に正孝の声が秋光の背後で聞こえた。
正孝は入ってきた人間の名前を呼んだのだろうし、病室へ入ってきたのが尊だけならば秋光も振り向きはしなかっただろう。
しかし、ドアが開き尊が入ってきた気配と共に、子供がすすり泣くような声が聞こえ、秋光はハッと振り返った。

「真臣・・・」
真臣が尊に片腕で抱かれ、彼のスーツをグッと握り締めながら泣いている。
尊が真理の枕元まで来ると、真臣が窓辺にいた秋光に気付いた。
「あき・・・パパぁ・・・」
しゃくり上げる嗚咽で上手く言葉など出ない。秋光はいつも生意気なくらい元気な真臣のそんな表情が可哀想で堪らなくなり、腕を伸ばしかけた。
真臣も秋光が居た安心感から、抱っこの腕を伸ばしかけるが、それを阻止するように尊は真臣を両腕で抱き直し、ちょっと強く秋光を見る。

自分の中に、真理を見殺しにしようとしたという思いがあるせいか、秋光は真臣を受け取る事も、尊を睨み返す事も出来なかった。

「真理ちゃん・・・」
尊は真理の顔を見ながら話しかける。

「真臣君だよ」
身を屈めて、真理の近くに真臣を近づけると、今まで泣いていた真臣が泣き止んだ。
「・・・ママ・・・？　ねんね？」
真臣が片手を伸ばす。真理に触れたがっているのだと悟った尊は、真臣を少し前に倒して真理の顔に触れさせてやった。
「ママ・・・おいてかないで・・・」

今の真理は、真臣の目にどう映っているのだろう。
本当に、ただ眠っているようにしか見えていないのだろうか。
しかし、きっと心のどこかで母親の危険を感じ取っているのだろう。
母親が何処かへ行ってしまう危機感を、その小さな体いっぱいに感じているだろう。
不安で不安で、怖いに違いないのだ。
「ママぁ・・・おいてかない、で・・・」

真臣は夢を見たのだ。
月が、大好きなママを連れて行ってしまう夢。
大好きな母親が、月に吸い込まれてゆく夢を。
「ママ・・・」

正臣を、そしてもしかしたら真理までも失い、身を切られるような悲しみにさらされるのは、正孝だけではない。
何よりも、真臣がそれを味わう事になるのだ。

父は殺され。
母は自分を置いて自殺をした。
そんな現実を、彼は背負うのだ。
例え周囲に沢山の理解者が居たとしても、それはそんな者では覆

い尽くせないほどの心の傷。

「・・・・・」

秋光は、考えただけで呼吸が止まってしまうかと思うくらい胸が詰まった。

片手で自分の胸元をグッと掴み、もう片手は震えるくらい握り締められた。

戻ってくれ・・・。

早く意識が戻ってくれ。

真理さん・・・。

誰のため、何かじゃ無い。真臣の為に。

死んで幸せになろうなんて、考えないでくれ！

祈る気持ちで真理を見詰める秋光の背後には、明るい月。

探るように覗き込む、月が居る。

「・・・まさ・・おみ・・・？」

繰り返し呟く真理に、正臣は首を傾げる。

不思議そうにしながら、その目は真理を見詰めた。

そして真理は、その瞳の奥を見詰め続ける。

そこに・・・小さな？まさおみ？が見えるのだ。

彼女が愛した？正臣？と同じ目をした。

？真臣？が・・・・・。

小さな彼女の?まさおみ?が・・・。

「あ・・・」

――――真理・・・?

――――ママ・・・?

正臣の声が、真臣と重なる。

無邪気で悪戯っ子のような、優しい声。

――――真理、愛してるよ。

――――ママ、大好き。

「まさおみ・・・」

闇の中、月明かりのような正臣を感じながら、真理は気付く。

いつまでも正臣を忘れられなかった理由。

いつでも正臣に見詰められているような気がしていた理由。

正臣はいつでも、真理の傍に居たのだ。

?真臣?の中に・・・。

正臣と同じ目で、同じ声で、いつでも真理を見守っていた。

真臣は、毎日真理に「好き」　と言ってくれた。

真臣は、毎日真理に?幸せ?をくれた。

真理も、そんな真臣が大好きだったはずだ。

やがて真理は、自分の中に?正臣?を作り出す。
自分を見詰め、癒してくれる、何処までも自分に優しい正臣を。
死のうとする自分を、現実から逃げようとする自分を、ただ受け入れてくれる?正臣?を・・・。

真理は、正臣の腕から、スルッと抜け出した。

――――真理・・・?

自分の腕から抜け出した真理を、正臣は不思議そうに見る。

「あのね・・・正臣・・・」
真理は正臣の目を見て話し出した。
正臣の目の中の、?真臣?を見ながら。

「私ね、毎日あなたとお話していたんだよ。・・・毎日、お水をあげて、ご飯をあげて、お話をしながら正臣の写真を拭いて」
毎日毎日、それを繰り返した。
自分の生活の一部であるかのように。
正臣は、確かに自分の一部だったのだ。

「あなたの写真に、埃なんてかけた事、なかったのに」
真理はちょっと、恥ずかしそうに笑った。

「?あの人?に、好きだ、って言ってもらって・・・。それが変わった」

正臣が、ちょっと目を見開いた。
そして、だんだんと哀しそうな表情を作っていく。

「あなたを愛する事しか出来なかった私は・・・、？あの人？に愛してもらって、・・・あなたを、忘れた・・・」

真理の心に、一人の青年の姿が浮かぶ。
大切な真臣に手を差し伸べ、抱きかかえて、真臣が大好きな肩車をしてくれる人。

「あなたを忘れるのが、怖かった・・・。？あの人？の気持ちを全て受け入れて、あなたと誓った愛を裏切るのは、真臣をも裏切るような気がして・・・」

何度も「好きだ」　と言ってくれた。
何度もキスをして、体ごと気持ちごと、沢山愛してくれたのに。
自分が作り上げた正臣の陰に遠慮して、それを受け入れられずに・・・。

「愛してるわ・・・正臣」
真理は顔を上げ、だんだんと光が弱まる正臣を、ジッと見詰めた。

「一生・・・あなたを、愛してる・・・」

――――真理・・・。

「でも、現実に、もっと、愛していかなきゃならない人が居るの・・

・」

正臣をぼんやりと照らしていた、明るかったはずの月光が、だんだんと光を失っていった。

消えそうなほどに、その光は弱まっていく。

「大切な大切な、真臣と・・・」

真理は両手を胸にあて、正直な自分の心を引き出すように目を閉じる。

「・・・?あの人?・・・・」

ゆっくりと目を開き、顔を上げ、太陽の光を失いかけ、自らの光をも失っていく月(まさおみ)を、優しく見詰めた。

「・・・さよなら、正臣」

さようなら。

私の。

月(まさおみ)・・・・・。

78　さよなら正臣（後書き）

＊次回更新3月21日

79　新しい朝

――愛してるよ・・・真理・・・一生。

そんな声が聞こえた。

月の陰が消えてゆく。

周囲が闇に変わる前、真理はフッと目を閉じた。

「愛してるわ」

それは、もう居ない人への囁き。

「正臣・・・」

瞼の裏に映る正臣の陰に、小さな真臣が重なる。

大切な、大切な。

彼女の?まさおみ?

――待っていてね・・・。真臣。

いっぱい、いっぱい。

抱っこしようね。

いっぱい、いっぱい。

幸せになろうね。

意識が暗転した次の瞬間、真理は、ゆっくりと現実の世界で意識を取り戻した。

「真理？！」

「真理？」

「真理ちゃんっ！」

一番初めに聞こえた声、次に聞こえた声、最後に聞こえた声。

それが真澄と正孝と、そして尊だと、真理はなかなか認識出来なかった。

しかし・・・。

「ママ・・・？」

今起きたような、ちょっと寝ぼけ気味の真臣の声が聞こえた瞬間、その意識は急速に目覚め始める。

ゆっくりと開いた瞼が、真理の目に少しずつ光を入れてゆく。

その光の中に、真臣が映った。

「まさ・・・おみ・・？」

吐く息と同時に出る弱々しい声。しかし間違いなく、真理は真臣を呼んだ。

「ママ・・・ママぁ・・」

今まで泣き疲れて寝てしまっていた真臣は、真理の布団に顔を付けて泣き出す。

真理はゆっくりと右手を布団の中から出して、真臣の頭を撫でた。

夜はすっかり明け、病室には明るい光が差し込んでいた。

最初、今夜がヤマ、と言われていた真理の容態は、明け方前から

平静を取り戻した。
ずっと泣いて落ち着かなかった真臣は、まるでそれが分かったかのように、真理の容態が良くなった頃、泣き疲れて尊の腕の中で眠ってしまったのだ。
それからずっと真理が眠るベッドの足元のスペースで眠っていたのだが、数時間しか眠っていないにもかかわらず、真理が意識を取り戻した瞬間、真臣までもが目を覚ました。

尊も秋光も、もちろん二人共帰ろうとはせず、真理の容態が良くなってもずっとこの場に残っている。
お互い言葉を交わす事も、顔を合わせる事も無かったが、今の二人の間には、その立場に上下関係が出来てしまっているように見えた。

真理の死を認めようとした秋光。
絶対に認めなかった尊。

そして、生きる事を選んだ真理。

真理が目を覚ました瞬間、呼びかけて駆け寄って行きたかったが、尊が声を掛けた時点で秋光がそれを出来なかったのは、自分にそんな負い目があったからかもしれない。

「何だってこんな馬鹿な真似をしたんだ」
ベッドの上へあがって布団の上から真理に抱き付くように泣いている真臣を見ていると、尊は安心感と同時に、強い憤りを覚えた。
気を遣って「大丈夫」　と優しい言葉を掛ける前に、彼の口からは自殺未遂を起こした真理を責める言葉が出てしまう。
「君がおかしな事になったら、真臣君がどんな思いをすると思う。

一生、悲しい思いを背負う事になるんだ」

真臣の頭を撫でていた真理の手がピタッと止まった。
改めて、自分がした事の大きさに気付かされたのだ。
「真臣君だけじゃ無い。院長だって、奥さんだって・・・」
決して怒ったような強い口調ではない。心配しているからこそ出た言葉だった。
「俺だって・・・」
その気持ちが、痛いくらいに伝わってくる。
真理は謝ろうと口を動かしかけた。しかしその時、今まで泣いていた筈の真臣が、勢い良く顔を上げ泣き顔で尊を睨んだのだ！
「ママをいじめたらダメ！」
真臣は涙を溜めたままの目で尊を睨むと、布団の上から真理をギュッと抱き締めた。
「どうしてママをいじめるの？！　たけちゃんなんかキライだよ！」
真臣を庇ったというのに「嫌い」　と言われては尊も出る言葉が無い。
正孝や真澄に面白そうに見られて、尊は苦笑いをしながら頭を掻いた。

「ごめんね・・・真臣」
真理は弱々しい声で真臣に謝り、再び頭を撫でた。
「でもね、たけちゃんは悪くないの。・・・ママが、いけない事をしたから怒られたのよ」
「ママ、悪い子したの？」
「そう。悪い子だったのよ」
「だめだなぁ、ママは。ずぅっと前に、秋パパにもおこられてたのに」
そう言って真臣は、窓辺に黙って立つ秋光に目を向ける。
真理がその視線を追った。

首を傾けた窓辺に、秋光が寄りかかって立っている。
「・・・あきみつくん・・・」
死の淵を乗り越えてきたばかりの憔悴した身では、声を出すのも辛いだろう。
しかし真理は、それに加えて弱々しくではあるが笑顔を見せたのだ。
尊がハッとして秋光を見る。
そんな尊を、正孝がチラッと盗み見た。

「・・・おはよう。真理さん・・・」
秋光は静かな声でそう言うと、哀しそうに笑い、真理から目を逸らした。

「じゃぁ、オレ・・・。店があるんで・・・」
正孝と真澄の方を見て一言言い残し、秋光は病室を出ようと窓辺を離れる。
「秋光君！　真理を見つけてくれて、有難う！！」
病室のドアを開けた時、背後から聞こえた真澄の感謝の言葉が、彼を更なる罪悪感の中へ叩き落す。
秋光は下唇を噛んで、病室のドアを閉めた。

「尊君と秋光君が、真理を見つけてくれたんだよ」
立ち去った秋光が消えたドアを、悲しそうな目で見ていた真理に、正孝が教える。
「尊君は、病院に受け入れ態勢の要請までしてくれて。真理の為に色々してくれたんだ」
真理が尊を見上げると、尊はさっき彼女を叱った事を忘れたかのように、優しく彼女を見下ろしていた。

「ありがとう・・・尊さん・・・」

真理の入院は、予定で三週間と決められた。
遅くても年内には退院が出来る事になる。回復状態によっては二週間でも許可されそうだ。
正孝と真澄が毎日交代で様子を見に現れ、尊はもちろん毎日やって来た。
当然の事だが、真臣は幼稚園が冬休みに入る十二月中頃からは、一日中ずっと真理と居る。
しかし、秋光だけは、あれ以来一度も姿を現さなかった。

それは、正臣の命日を二日後に控えた夜の事だった。
「真理ちゃん。これ」
綺麗なベルベット地の小さなケースを、尊が差し出しのだ。
「何？」
ベッドの上に座った真理の膝では、膝枕で真臣がクークーと眠ってしまっている。
真臣の頭を撫でていた真理が、その手を止め、笑顔でケースを受け取った。
すっかり顔色も良くなり、もう二、三日で退院しても良いのではないかという位だ。
「開けてみて」
尊に言われるままにケースを開けた真理は、中身を見て笑顔が止まった。

中には、ダイヤが三つ並んだ綺麗な指輪が入っていたのだ。

「クリスマスプレゼントじゃないよ」
尊はベッドの淵に腰を下ろして、真理の髪を撫でた。
「一度断られたけど、俺は諦めないから」
尊の顔を見詰める真理の目に、彼の顔が近付いてくる。

「結婚しよう。真理ちゃん」

温かな唇が、優しく重なった・・・。

79　新しい朝（後書き）

＊次回更新3月24日予定。

80　幸せの決断

「店長～、元気ないねぇ？」
パートのフリーター少女に声を掛けられ、秋光は重い気分で顔を上げた。
が、少女を見た瞬間、その眉がキッと吊り上る！
「ホウキを肩に担ぐな。ゴミが商品にかかるだろう」
暇なので店内を掃いていた少女。事もあろうにそのホウキを肩に担いでチリトリ片手に立っているのだ。
？店長？が怒るのは当たり前だろう。
「へーい、すいませーん」
少女は特に悪びれもせず、笑って肩からホウキを下ろし、そそくさと清掃用具を片付けに行く。
行儀はあまり良くないが、サッパリとした素直な性格だ。

「でも、店長。ホントに元気ないよ。どしたの？」
客用トイレの横にある清掃用具入れに片付けを済ませ、スキップをしながら戻ってきた少女は、レジカウンターに手を付き中に居る秋光を覗き込んだ。
カウンターの奥で壁に寄りかかり、腕を組んで考え事をしていた秋光は、ちょっと面倒くさそうに溜息をつく。
「そう見える？」
「見える、見える。シケた顔してるもん。どしたの？　せっかく明日はクリスマス・イブなのに」
「クリスマス・イブでもオレは仕事だよ。お前だってシフト入ってんだろ？」
「でも夕方までだもん。どーせ忙しいのってケーキとかオードブル

とかの受け取りがある夕方までだし。店長だって、それが済んだら店なんて閉めちゃうんでしょ？」

少女が急にニヤニヤして、秋光を指差す。

「デートなんでしょ～？　ほらぁ、よく来る看護婦サンと」

秋光はレジカウンター側へ寄ると、ニヤニヤする少女の頭を軽くゴンッと殴った。

「今日はもう上がっていいぞ」

「へ？　いいの？」

殴られた頭を押さえて少女は目をぱちくりさせる。

仮にも女の子の頭を殴ったのだ。「何すんですか～」と一言文句でも言おうかと思ったのだが、文句を言う前にラッキーな一言を貰った。

「サンキュー。店長っ」

喜び勇んでカウンターの中へ入り、奥の休憩室へ行こうとした少女は、もしかして自分は、さっき言ってはいけない事を言ってしまったのではないか？　という事に気付く。

少女が知っている？近くの小児科の看護婦サン？は最近店に来ない。

それに加えて、元気のない店長の様子。

詮索根性旺盛な年頃の少女は、禁断の大人の世界をついつい想像してしまうのだ。

「あ、あのさ、店長？」

通路へ入りかけて、少女は秋光に恐る恐る声を掛けた。

「もしさ、彼女とか欲しかったら、アタシ紹介するよ。アタシの知り合い、冗談抜きでヤバイくらい可愛い子ばっかだよ。店長みたいに、昔ワルかったけど今は真面目に働いている、ってタイプ、けっこうウチらにツボだからさぁ。いつでも言ってよ」

仕事をしている時よりも真面目な態度で、真剣に訴える少女。

それを見て秋光は思わず吹き出した。
「サンキュー。その時はお前に言うよ」
「ホントだよ？　約束だよ。そんなシケた顔してる店長なんて見たくないからさ。マジで言ってよ？」
少女は嬉しそうにそう言うと、奥へ入って行った。

「シケタ顔か・・・」
秋光はそう呟いて、左手で自分の左頬をパンッと叩いた。
「そんなツラばっかりしてたんだな・・・。オレ」
だんだんと自分が情けなくなってくる。

真理が入院して半月間、結局一度も見舞いには行っていない。
後数日で退院出来るらしい、という話は、昨日の昼にやって来た美鈴に聞いた。
退院したら、真理は店に来てくれるだろうか？
いや、多分来ないかもしれない。
そう考えると、しょうがない事なのだが気持ちは落ち込んでゆく。

恐らく尊から、真理が手首を切った現場を発見した秋光が、救急車も呼ばずそのままにしようとしたという話は聞いているだろう。
おまけに、今まで一度も見舞いに訪れては居ないのだ。
確かに、自殺をしようとしたのは真理だ。
しかし、本当に好きな相手なら、それを救おうとするのが本当の愛情であったのかもしれない。
真理の事だけを考え、必死で動いた尊の様に。

「クソッ・・・」
秋光は腹立ち紛れに頭をグシャグシャッと掻いた。

自分に腹が立つ。
一時でも真理の死を認めようとした自分に、言いようの無い憤りを感じる。
正臣の傍へ行かせることが真理の幸せなんだと思った自分が、あまりにも愚かしく惨めだ。

そんな彼が、真理に会いに行けるはずなど無かった。

「真理さんが死ぬ事を、正臣が喜ぶ訳無いじゃん・・・」
正臣は、本当に真理さんを愛していたんだ・・・。
そんな正臣が、自分と真理さんの子供である真臣を残して死ぬ事を喜ぶはずが無い。
あの先生みたいに、真理さんが生き続ける事を望むだろう。
「だから、返してくれたんだよな？　正臣・・・」

秋光の心の中に、親友が蘇る。
誰より、何より、短い期間で真理を愛した親友。
そして・・・。
誰より、何より、ずっと真理が愛し続ける、彼。

「やっぱりオレは、お前には敵わないんだな・・・」
心に映る親友。
その親友は何故か、何か言いたげに苦笑いをしていた。

明日はクリスマス・イブ。
正臣の命日だ。
店が終わったら、線香でもあげに行こうか。
でも、多分真理さんがお参りの為に病院から一時帰宅しているだ

ろうし、あの先生も居るんだろうな。
顔、合わせづらいな・・・。

・・・ああ、オレ、いつの間にこんなウダウダした性格になっちまったんだろう。

そんな事を何気なく考えながら、秋光はカウンター内のパイプ椅子に座り、腕を組み足元を見詰めていた。
どのくらいそのままでいたのだろう。
いつの間にか外はすっかり暗くなり、空には時々流れてくる雲に隠されながら月が浮かんでいた。

店のドアが開く気配がして、顔を上げる。
「いらっしゃいませ」　とクセで出そうになった言葉は、口から飛び出す前に止まった。

「あ・・・」
上手く言葉が出なかった。
何を言っていいのか分からなかった。

そこに、真理が立っていたのだ。

真理は秋光を見てから、何も言わずに壁側の冷蔵棚へと歩いて行った。
そこから小さなプリンを一つ持ってきて、レジカウンターへ無言のまま置く。
秋光はそれを驚いたように眺めていたが、取り敢えず立ち上がりレジの前に立った。
真理の顔を見た秋光は、ちょっと困ってしまう。

どう見ても、真理が怒った顔をしているのだ。

見舞いに行ってないから？

それとも、やっぱり見殺しにしようとした事を聞いたのか？

「真理さん。あの・・・」

秋光はが困った声を出すと、怒った真理の顔がフッと泣きそうに変わった。

「何か言ってよ」

「え？」

「これ、お夕飯代わりにしようと思って選んだんだから・・・。何か言って・・・」

「・・・・・」

秋光は戸惑いながらも、彼がよく真理の偏食を注意する時の口調で言った。

「あのね、プリンはデザートっ。こんなもん食事じゃ無いのっ。せめて、おにぎりとサラダくらいは食べなさい。サラダがイヤならゆで卵で勘弁してあげるから。ったくっ、こんな食生活してたら、いつか真理さん死ぬからねっっ」

すると、それを目の前で聞いていた真理の瞳から、ポロリ・・・っと涙が零れたのだ。

「秋光くん・・・」

秋光は言葉を止めた。

ぽろぽろぽろぽろ・・・。

真理の瞳からは、涙が休み無く零れ出して来る。

まるで雫を垂らすように、零れ転がってゆく。

「秋光くんが居なかったら・・・私、栄養失調で死んじゃうよ・・・」

「・・・・・」

「秋光くんが、居なかったら・・・。私・・・」

店を大切にするべき?店長?にあるまじき行為。
秋光はカウンターを踏み越えて、真理の前に立った。

「傍にいて・・・秋光く・・・」

真理の言葉も全て聞かないうちに、秋光は彼女を抱き締めた!

８０　幸せの決断（後書き）

＊次回更新３月２７日

＊「活動報告」の方に３／１５～２２まで、ｗｅｂ拍手で頂いたコメントのお返事を掲載させて頂いています。
　この間にコメントを下さった方。覗いてみて下さいませ。

ｈｔｔｐ：／／ｍｙｐａｇｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｍｙｐａｇｅｂｌｏｇ／ｖｉｅｗ／ｕｓｅｒｉｄ／２８２５４／ｂｌｏｇｋｅｙ／２８６４２／

　沢山の拍手を、いつも有難うございます！

81　星の幸せ

「真理ちゃん?」
病室の中は、電気が消えて真っ暗だった。
明日、正臣の命日にお参りに行く為、まだ入院中の真理は外泊許可を取った。
十九時頃迎えに行く役を尊が引き受け、午前中にそれを告げて、午後は外泊の身支度があるという真理に気を遣い、真臣をつれて一度帰り出直して来たのだ。

「真理ちゃん・・・」
尊はもう一度呼びかけて、病室の電気を点けた。
病室の中に真理の姿は無かった。もちろんベッドにも居ない。
いや、ベッドの上に一つ、何かが乗っている。
尊はベッドへと近付き、枕の上に乗せられたソレを手に取った。

綺麗なベルベットのリングケース。
中にはダイヤが三つ並んだ指輪が入ったまま・・・。

「・・・・・」
尊はしばらくソレを眺め、そしてパタンッと閉じた。
息を吐きながらケースを持つ手を下げ、病室の窓から夜空に目を向ける。

「何となく分かっていたよ・・・。こうなる事は」

雲に隠されながら、月が見ている・・・。

「私ね、死にそうになった時、正臣に会ったのよ」
秋光の腕に抱き締められながら、真理は幸せそうに話し出した。
「正臣は『おいで』　って言ってくれた。『幸せにしてあげる』って言ってくれた。凄く嬉しかったけど・・・あの正臣は本当の正臣じゃ無いの・・・」

死の淵で真理に手を差し伸べた正臣。
真理はあの時の気持ちを思い出していた。

「あれは・・・私が作り出した正臣。・・・正臣に幸せにしてもらいたくて、正臣が傍に居ないのが辛くて、いつの間にか私自身で私を受け入れてくれる正臣を作ってしまっていたの。・・・だって本当の正臣が、あんなに産まれてくるのを楽しみにしていた子供を残して、私が勝手に死ぬ事を許してくれるはずがないもん」
真理は秋光の背に腕を回し、彼の肩に嬉しそうに顔を付けた。
「それに気付かせてくれたのはね・・・小さな?まさおみ?と秋光君なんだよ」
「オレ?」
「そうよ」
真理は顔を離して秋光を見上げた。
「私、正臣の写真に埃なんてかけた事なかったの。・・・でも、秋光君に『好きだ』　って言ってもらえるようになってから、それが嬉しくて、秋光君と居られるのが楽しくて、・・・正臣の事を忘れて彼の写真を誇りだらけにしちゃった・・・」
恥ずかしそうに笑い、肩を竦める。

「秋光君の事・・・、本当に好きなんだ、って・・・気付いたの」

秋光は夢を見ている様な気分だ。
あれだけ想い焦がれた真理が、本当に好きだ、と、正臣を忘れるくらい好きだ、と、言ってくれている。

「秋光くんが、自殺しようとした私を見付けて、正臣の所へ行かせてくれようとした、って聞いた時、・・・嬉しかった」
「どうして？」
「だって、私が幸せになるなら、って思ってくれたんでしょう？私が正臣の所へ行って幸せなら。って」
「真理さん・・・」
自分は何て勝手な人間なんだろう。
秋光は自分で自分に呆れてしまった。
あれだけ真理を見殺しにしようとした事で悩んでいた自分。
なのに今、真理のたった一言で、その罪悪感は何処かに消えて行ってしまっている。

本当に、オレって単純・・・。
「真理さん！」
秋光は嬉しそうな声を上げて、思い切り真理を抱き締めた！

「あれぇ？　たけちゃん、ママはぁ？」
立花家に一人で戻った尊を出迎えたのは、真理が病院から外泊許可を貰って戻って来るのを心待ちに、玄関前の廊下に座って待っていた真臣だった。
真臣の不思議そうな声につられて、正孝と真澄もリビングから顔を出し首を傾げる。
玄関に立って、ちょっと気まずそうに真臣を見下ろしている尊。

しかし、真理は一緒ではない。
「ママはね、すぐ帰ってくるよ・・・」
尊は落ち着いた静かな声で、真臣に言う。
「・・・秋光君と一緒に」
まるで、自分にも言い聞かせるように。

正孝と真澄が顔を見合わせる。正孝は申し訳なさそうに眉を寄せた。
「秋パパと？　ホント？　秋パパもくるの？」
真臣は無邪気に訊いてくる。
秋光が一緒と聞き、大きく見開いた瞳を輝かせ笑顔を作るが、その笑顔が尊は胸に痛かった。

「・・・尊君」
正孝が尊に声を掛けると、尊はゆっくりと正孝を見た。
その表情は悲しそうだが、それを悟られまいと平静を装おうとする。
「実は、明日、君に会ってもらいたい人が居るんだ」
「誰に・・・ですか？」
「ウチの病院に、来年度から新しく来てもらう医師だよ」
「え？！」
尊は驚きの声を上げる。
立花医院の診察室は二つ。正孝と尊でそこは埋まっている。
「あ、臨時医師か何かですか？」
正孝は学会があったり、時々特別に往診に出たりして忙しい。その為によく病院を空けてしまうことがある。もしかしてその穴を埋める為だろうか？
そう考えた尊の考えは間違いではなかったらしく、正孝は笑顔で尊の傍に寄った。
「私も、往診を日常的に行いたいと思っているんだ。他に小さな子

供がいたり、介護や自分の病気なんかで、子供をなかなか病院に連れてこられない母親も意外に多いからね」

「じゃぁ、院長の代わりに・・・？」

「ああ。知り合いにも聞いたのだけど、凄く腕の良い小児科医だよ」

「そうですか・・・？」

無理もないが、今の尊はそんな事をあまり真剣に考える事は出来なかった。

相変わらず元気が無い尊を見ながら、正孝は何気なく咳払いをする。

「・・・真理を、救命救急センターに受け入れてくれた女性医師だ。・・・後で同期の教授に聞いたのだけど、君の知り合いなんだって？」

「・・・え？！」

尊は大きく目を見開いた。

「嬉しいよ！　オレ、本当に嬉しい！　大好きだよ真理さん！」

真理はクスクス笑いながら、見た事もないくらいハシャぐ秋光を抱き締めた。

「約束よ。絶対約束。・・・幸せにしてね、私も、真臣も、・・・月の正臣も」

真理は店の窓から外を見る。

雲に隠されながら見え隠れする月。

「それが出来るのは、秋光君しか居ないの・・・」

辛かった時、ずっと傍に居てくれた人。

ずっと生きる力になってくれた人。

真理に笑顔という光を貰い、いつも彼女を見守り想い続けた。

月に想いを注ぐ事で精一杯の太陽に、雫ほどの光を与えられ、輝き続けた星。

「真理さん・・・」

太陽の光は、今、その星に注がれる。

「オレ、正臣ほど頭も良くないし、要領も悪いし、単純だけど・・・」

星は応える。
精一杯の想いと。
ありったけの愛情で。

「でも、絶対、真理さんの事・・・真臣と、?正臣?も・・・」

雫ほどのか細い光を。
大きな光に変えて、太陽を支える。

「幸せにするから!!」

大きな目を潤ませた真理がニコッと微笑む。
それは、今まで正臣にだけ与えられていた?太陽の笑顔?

「もう一回言う!　結婚して下さい!!」

照れ隠しのように、秋光の唇が真理の唇に重なる。

それは、初めて唇を重ねた時と同じ、優しいキスだった。

81　星の幸せ（後書き）

次回エピローグ。

＊3月30日更新予定

エピローグ

「真臣―！　おーい！　真臣―！」
明るく元気な声が響き渡った。
その声を耳にして、幼稚園のお預かりルームにいた真臣は、読んでいた本からピクッと顔を上げる。
お迎えを知らせに保育士がやってくる前に、真臣は慣れた様子で制帽と鞄を引っつかみ、それを腕に抱えて部屋を飛び出すと、幼稚園の大きな玄関ホールへと走った。
「あ、来た来た。やっぱり耳がいいわ。真臣君」
ホールで、お迎えに来た青年と立ち話をしていた真理の親友の綾が、真臣に笑いかける。
「真臣君。お迎えよ。良かったね」
そして、青年を見てニヤッと笑った。
「今日は？パパ？がお迎えよ」

「正確には『もうすぐ本当のパパ』　だよ」
ちょっと照れくさそうに、秋光が頭を掻いた。

様々な問題を乗り越え、想いを一つにした真理と秋光。
そして、秋光が真理にプロポーズをした。
もちろんすぐに帰ってくる返事は「はい」　だと思っていた。
しかし、返ってきたのは・・・。
「まだダメっ」

これには秋光も拍子抜けだ。
それはそうだろう。せっかく想いが通じ合い、今すぐにでも結婚してしまいたいほど盛り上がっていたというのに。
すると真理は、笑顔で言ったのだ。
「真臣に訊かなきゃ。あの子が『いいよ』　って言ってくれなきゃ、結婚は出来ないわ」
真臣は秋光が大好きだ。
秋光が？パパ？になると知れば喜ぶに違いない。
期待を込めて、秋光は真臣に訊いたのだ。「オレ、本当のパパになってもいい？」　と。
真臣は、キョトンッとして答えた。
「え？　秋パパは秋パパでしょ？　もうパパだよ？」

考えてみれば、真臣にはよく分からないのだ。
本当の父親が出来る、というのがどういう意味なのか。
「本当のパパ」　それが、何を意味するのか。

すぐにでも真理と結婚したかった。
しかし秋光は少し待つ事にしたのだ。
真臣が自分を、「本当のパパ」　として受け入れてくれる気になるまで。

子供だって馬鹿ではない。
いくら小さな子供だって、「小さいから解からないだろう」　というのは間違いだ。
母親と特定の男性が、いつも一緒にいて仲良く笑い合っていれば、「ママはこの人が好きで、この人はママが好きなんだ」　と悟る事が出来るものだ。
真臣は気付く。

大好きなママが、？大好きになった人？を。
大好きなママの事を、自分と同じくらい？大好きだと思っている人？を。

「秋パパ、ぼくの本当のパパになるんだよね？」

待って半年。真臣からその言葉をもらい、やっと結婚話が進んだ。
そして、想いが通じ合い秋光が真理にプロポーズをしてから一年。
やっと二人は籍を入れ結婚する。

結婚後も、真理はナースとして働く予定だ。
年明けから着任した新医師、福田若菜も、院内で旨くやっている。
明るい気性で、今では真理に次いで二番目に子供達の人気者だ。
尊とも、同僚として友達として旨くやっているようだが、先日仕事帰り、コンビニに二人揃ってビールやらツマミやらを買いに来たらしい。
その際尊が「袋一つに入れていいよ」　と言い、会計も彼が済ませたらしい。
同僚や友達だけではない何かが、少々におい始めた雰囲気だったという。
何となく院内でもそんな雰囲気はあり、薄々気付いてはいたが、秋光からコンビニの一件を聞いて真理はちょっとホッとした。

「あー、ママー！」
幼稚園の園舎門の前に立ち、ジッと夜空を見詰めていた真理を見つけ、真臣は秋光の肩の上で無邪気な声を上げた。
その声に真理が振り向き、肩車で戻ってきた二人を見て苦笑いをする。

「もぅ、真臣ってば。いい加減、肩車はやめようよ。重たくなってきてるんだから、秋光君が辛いでしょ？」
「大丈夫だよ。このくらい」
秋光はそう言いつつも、笑いながら真臣を下ろす。
真臣は真理の傍へ駆け寄り、真理が見上げているのと同じ方向を見上げた。

そこには、大きな、明るい月が浮かんでいる。

「お月様、見てたの？　ママ」
真臣が真理を見ると、真理はニコッと笑って小さく頷いた。
「ママは、秋パパのお嫁さんになるんだよね？　だから、お月様にバイバイしてたの？」
真理は笑顔のまま、もう一度月を見上げる。

「そうね・・・。でも、バイバイじゃ、ないのよ・・・」

月を見詰める。
しかしそこに、正臣の姿は見えない。
「心の中に、ずっと、一緒なのよ・・・」

月を見上げるたびに聞こえていたはずの、正臣の声。

それが聞こえなくなったのは、太陽（まり）の光が星（あきみつ）へ注がれるようになった、あの日から。

「さっ、帰ろう」
秋光が真臣に手を差し出す。
「肩車するとママが心配するから、仲良くお手手繋いで帰ろうぜ」

真臣は大きく頷いて、秋光と手を繋いだ。
「ほら、真理さん。行こう」
笑顔で真理を促し、秋光は真臣と手を繋ぎ、子供の歩調でゆっくりと歩き出す。

真理は再び月を見上げた。
問い掛けるように、月を見上げる。

しかし、月の声は聞こえない。

「・・・ずっと・・・一緒だよ・・・」

真理はそう呟くと、両手を首の後ろへ回し、月の指輪を通したネックレスを外す。
それをコートのポケットに入れ、ポケットの中でキュッと一度握って、そして、手を離す。

「ママー、早くー」
まだ歩いてこない真理を待つように、秋光と真臣は道の途中で立ち止まり、真理を振り返った。
夜空を見上げていた真理が、正面を見詰めニコッと笑う。
真臣が、そして秋光が、・・・かつて、正臣が愛した「太陽の笑顔」で。

自分達の方へ走り出した真理を見詰めて、秋光は思う。

オレに、大きな力なんてないけど。
それでも精一杯、この人を守っていこう。
ずっと、ずっと、守っていこう。

月が与えた大きな愛に負けないように。
オレは、月ほど大きな存在にはなれないかもしれないけど、それでも・・・。
小さな星でも、精一杯、傍で支え続けよう。

オレは月に比べたら、本当に雫ほどの光しか持っていないかもしれないけど。
それでも、同じくらい、いや、それ以上、太陽を愛していくって、決めているから・・・。

真理が二人に追いつくと、彼女は秋光を見てニコッと笑う。
そして、真臣のもう片方の手を取り、手を繋いだ。

「わーい、パパとママのブランコだぁー」
両手をつながれた真臣が嬉しそうに左右の手を振ると、真理と秋光は顔を見合わせて笑った。

月の光に、三つの影。

寄り添い。

支えあい。

そして共に、いつまでも共に。

この月の下を、歩いてゆく・・・。――――――

【星の雫～太陽の愛　月の恋～】

―　ＥＮＤ　―

エピローグ　（後書き）

「あとがき・お礼」　へどうぞ！

「星の雫」　あとがき・お礼

こんにちは。玉紀　直です。

今回のエピローグを持ちまして、本作【星の雫～太陽の愛　月の恋～】　は完結となります。

また、前作「太陽の愛　月の恋」　に絡め、真理ちゃんの恋の結末も付いた・・・、という形になるでしょうか。

「真理ちゃんを少しでも、絶対に幸せにします」

それを公約に始めさせて頂き、「必ずハッピーエンド」　を謳っているのにも係わらず、ハッピーエンドの見えない展開に、苛々した方も多かったのではないかと思います。

実際、最初のうち「絶対、尊さんか秋光君と幸せに・・・」　と言ってくれていた方々も、途中から「真臣と二人で生きて行ったほうが幸せかも・・・」　に変わり、真理ちゃんが手首を切った辺りでは、「もぅいいから、天国で正臣と幸せに・・・」　に変わってしまっていました。（笑）

「ハッピーエンドなんですよね！！」　と何度も疑わせてしまってスミマセンでした。

結末は、正臣君の親友の秋光君と、幸せを掴んでいく。というものでした。

少々、正臣君より頼りっけないように見えてしまうかもしれませんが、彼はきっと、頑張ってくれるでしょう。

頑張るついでに、真理ちゃんの偏食も治してもらいましょうね。（笑）

何となく解かるかもしれないのですが、このエピローグだけでは、どうも伝え切れていない展開があるような気がします。

そう。尊さんですね。

あと、真理ちゃんと秋光君が、この後どう変わって行くのか。

すぐではありませんが、番外編を3本ご用意していますので、お付き合い頂けますか？

特に最後の三本目に予定している物は、前作を読んでここへ流れてくれた方、そして、前作で正臣君をとても好きになってくれた方には、絶対に見て欲しいと思います。（押し付けみたいでゴメンナサイ）

【星の雫】は完結ですが、その3本を、週一くらいでこっそり発表させて頂きます。

見付けた時は、是非、覗きに来てやって下さい。

活報でもお知らせしますね。

「書く！」　と公言していました

「正臣が生きていたヴァージョン・完全パラレル版」

を自分のサイトの方で連載します。

作品タイトルは　「幸せになろう」

掲載は4月1日の予定です。

まだ作っている最中のサイトですが、良かったら遊びに来て下さいね。

玉紀　直の小説サイト・「恋愛ｍｕｓｅｕｍ」

ｈｔｔｐ：／／ｎａｏｔａｍａｋｉ．ｂｌｏｇ１２９．ｆｃ２．ｃｏｍ／

まだ別連載の作品の転載中で、初めて作ったのでお見苦しいとは

思いますが・・・。（恥）

この1年間、沢山の感想やご意見、拍手やコメント、本当に有難う御座いました!!
皆さんに頂いたコメントは、宝物です。
いつもいつも、私が書き続ける力になってくれました。

完結まで一年かかってしまった作品ではありましたが、今までお付き合い頂き、本当に感謝しています。

最後までお読み頂き、本当に有難う御座いました。

また違う作品で。
きっと、あなたとお会いできますように。

感謝を込めて。

玉紀　直
２０１０，０３，３０

「星の雫」　あとがき・お礼（後書き）

ｗｅｂ拍手で頂いたコメントを、活報の方で順次お返しさせて頂きます。

作品は終了してしまいますが、番外編の件もありますので、活報をチェックしていただけると嬉しいです！

番外編・1　（ジャンケンから始めよう・・・）

「彼女の事を考えるなら、君は身を引くべきではないのかな？」
教授の声が、尊にはまるで悪魔の囁きのように聞こえた。
「結婚前だ。誰にだって過ちはある。息子だって自慢出来るような身持ちの人間ではないからね。若菜君の事だって、私は大目に見るつもりで居るよ」
自分の息子の婚約者でありながら、友人である男の子供を身篭った彼女を、将来の義父である教授は「許す」　というのだ。
何とも寛大な話ではないか。
「若菜君は実に優秀な女性だ。この大学病院の中に居る限り、将来的に小児科医としても良いところまでいけるだろう。・・・私の息子の？妻？でいればね」
教授は窓辺に立って、部屋の中央で身動きできないで居る尊を、意味ありげに見る。
「・・・彼女の将来を、潰すつもりではないだろう？・・・つまらない？責任？とやらで・・・」

高校時代からの、仲の良い友人。
そのまま進んできた関係だったはずなのに、いつの間にか肌を重ねる関係になってしまった二人。
最初、二人に恋愛感情など無かったはずだった。
婚約者の浮気癖に悩んでいた若菜が、他に優しさを求め・・・。
尊が優しさを与えてしまった・・・。
それだけのキッカケ。
しかしそれをキッカケに、二人の間には違う感情が芽生え始めた。
その感情が芽生え始めた頃に起こった出来事。

若菜が、妊娠をしたのだ。

若菜が小児科医になる事を夢見ていたのを、尊はよく知っている。最新の医療で子供を救いたい、と。だから、大学病院で頑張りたい、と。

尊が、子供が出来た事実に対して？責任？という物を振りかざせば、若菜は間違いなく病院をおわれる。それどころか尊さえも大学病院にはいられなくなるかもしれない。

若菜の夢を潰す事は、尊には出来なかった・・・。

「どうして・・・何も言ってくれないの？」
どんなに彼女に責められても。

「尊君は、私が好きだった訳じゃ無いんだよね？」
どんなに誤解を受けても。

「ただ、セックスしたいだけだったんだよね？」
どんなに彼女を傷付けても。

彼女の未来を、彼女の夢を、守りたかった・・・。

「ごめん・・・、若菜・・・」

彼女が居ないところで、何度この言葉を呟いただろう。
傷付けてしまった彼女に、何度詫びただろう。

完全にただの？同僚？となり、それ以上にもそれ以下にも・・・、
いや、？それ以下？の関係になってしまった二人。
ただ気まずいだけの職場。複雑な人間関係。
それに疲れた頃、教授が言った。
「園居君、友人の個人病院で、若い医者を欲しがっている所がある
んだが、考えてみないか？」

やっかい払い。
そんな意味も、もしかしたら教授の中にあったのかもしれない。
しかし、個人病院は昔から尊も希望していた。
彼が断る理由はなく。
彼は大学病院を辞め、個人病院へ転職した。

立花小児科医院へ。

人間関係や人の気持ちに疲れていた彼は。
そこで、太陽に出会う。
疲れた心を癒し、輝きをくれた太陽に。

彼は、その輝きを自分の物にしたかった。
しかしそれも・・・。
叶わぬ事となったのだ・・・。

そして、今。

「はい！　尊先生の負け―！」
かつて彼に後悔を抱かせ、心の中で何度も謝罪をさせた福田若菜

は、ジャンケンで勝者となった?チョキ?を顔の横で振りながら、ちょっとズルイ笑みを作った。
「休憩時間のジュースは尊先生のおごりっ」
「ごちそうさまで～す」
若菜の声に賛同するように、朝会議で処置室に集まっていたナースや事務の女性達からお礼の声が上がる。

ま、いいけどね・・・。
尊は、今若菜とジャンケンをして敗者となった?パー?で顔をパタパタと扇ぎながら、苦笑いを漏らした。
昨日が夏のボーナス支給日だったという事で、ナースより医者の方が金額は上だろうという話になり、「高給取りの尊先生か若菜先生に、ジュースをおごってもらおうっ」　と美鈴が提案をしたのだ。
そこでどちらがおごるか、尊と若菜のジャンケン対決となった訳だが。
「でも、若菜さん凄いよね。ジャンケンで、尊先生に負けたこと無いでしょう?」
美鈴が若菜の手元のチョキを覗き込んで言うと、若菜が自慢げに笑う。
「だってね、尊先生は『ナントカの一つ覚え』で、ジャンケンの最初にパーばっかり出すんだもの。学生時代からそうなのよ」
「へー、クセですか?」
「人ってね、ジャンケンの最初にグーを出す傾向が強いのよ。学生時代それを知って、ジャンケンの時にパーを出す癖がついてしまったのよ。ねっ?」
台詞の最後に尊を振り返り、同意を求める。
尊は「悪かったな」　と思いつつ、年が明けてからこの病院へ赴任してきて、今ではすっかり馴染みまくっている若菜を見ながら「まぁね」　と頭を掻いた。

この病院の雰囲気が気に入ったのか、若菜はここへ赴任してきてからとても明るい。
尊が知っている、大学病院での彼女とは大違いだった。
とその時、安静用ベッドの控えタオルを用意していた真理が、タオルを両手に抱えて尊の前へ寄って来た。
「尊センセっ、ジュースを買う時は、自販機じゃなくてコンビニまで行ってねっ。売り上げに協力してよっ」

「やだぁ、真理ちゃんっ、内助の功っっ」
周囲に冷やかされ、赤くなった真理の背中を美鈴がバンッと叩く。
「だって、これからコンビニの売り上げは生活に響いて来るんだもん。皆もよろしくねっ」
「はいはい」
真理の力説に、周囲は笑いながら同意する。
彼女は先日、正式にコンビニの店長である秋光との結婚が決まった。
様子待ちをしていた真理の一人息子の真臣が「パパになってもいいよ」　と秋光にO，Kを出したからだ。

かつて、秋光と真理を競い合った尊。
元恋人だった真理が居る職場でも、変わらず自分かやっていけるのは、院長の気遣いや、真理の明るさ。そして・・・。
「重そうだから、買いに行く時手伝うよ」
笑顔で若菜が尊の肩を叩く。
――――この、若菜のお陰かも知れなかった。

「尊君さぁ、ちゃんとご飯食べてる？」
「は？」
コンビニでジュースを買い込み、二人で袋を両手に提げて病院へ戻る途中、若菜が何気なく尊に訊いた。
「何で？」
「ん・・・、なんか、ちょっと痩せたかな？って。・・・忙しい忙しい、って言ってコンビニ弁当とビールで終わりなんじゃないかな、って思ったの」
「まぁ、そういう方が多いかな・・・」
すると若菜は、自分が持っていた袋を地面に下ろし、右手をキュッと握って振った。
「尊君っ、ジャンケン」
「は？」
「ジャンケンして尊君が勝ったら、ご飯作りに行ってあげる」
「・・・・・」
尊は言葉が出なかった。
これは・・・、どういう意味に取ったらいいんだろう・・・。
しかし若菜の事だ、恋人争奪戦に負けて仕事一筋に頑張っている尊を、からかっているのかもしれない。
尊も自分の袋を地面に置くと、右手を振る。
「じゃぁ、ジャンケンな」
きっと彼女は、いつも通り勝つだろう。
だって彼女は、尊のジャンケンの癖を知っている。
「ジャンケン・・・」
ジャンケンに勝って笑うのだろう。
「残念でしたー！」　と・・・。

「ポンッ」

いつものクセ。
尊はパー。
そして若菜はいつも通りの・・・。

「・・・・・」
尊は若菜の手を見詰める。
シッカリと握り締められた、彼女の手を。

「負けちゃった・・・」
若菜はちょっと照れくさそうに笑って、敗者となったグーを口元に当てる。
彼女は賭けたのだ。
尊がもし、自分がチョキを出す事を先読みしてグーを出せば、心の中に残る尊への想いは全て捨ててしまおうと。

「若菜の負けだからな・・・」
尊は若菜の顔を見ているのが照れくさくて、荷物を持ち背を向ける。
尊も賭けたのだ。　若菜が自分をからかうだけのつもりなら、いつも通りチョキを出すだろう、と。
そうしたら・・・。
もう二度と、若菜に昔の思い出を重ねる事はしない、と。

でも、出したのは・・・。

「ジャンケンのやり直しはしないからな」

尊はそう言って、ちょっと嬉しそうに歩き出した。
その背中を見る、若菜の視界がにじむ。
彼女は荷物を手に持って、彼の後ろを追って歩き出した。

そして、ジャンケン勝負のように、相手の出方を伺いながら今までの道を歩んできた二人の・・・。

これからの物語が始まる・・・・・。

・番外編1『ジャンケンから始めよう・・・』

―　ＥＮＤ　―

番外編・1　（ジャンケンから始めよう・・・）（後書き）

こんにちは。玉紀　直です。
番外編の1話目。
尊さんと若菜さんです。
中途半端で終わっていた二人。
二人の「これから」　が始まります。
「幸せ公約」　で始めた物語ですから。
こちらにも幸せになってもらわないと。

さて、次回の番外編は・・・。
何と言っても、真理ちゃんと秋光くん。
本編ではあまり無かった、甘々ベタベタな二人を、苦笑いをしつつご覧下さい。（笑）

では、また・・・。

番外編・2　（結婚式前日の太陽と星）

「真理さん！　あのさ！」
昔の彼からは想像も付かないような、それはそれは爽やかな笑顔で、秋光が真理に話しかける。
普通こんな嬉しそうな笑顔を向けられれば、女性としては同じく嬉しいはず。
しかしその瞬間、コンビニのカウンター越しに彼と話をしていた真理の表情は、一気に険しくなったのだ！

「初夜ナシ！！」
真理がプイッと横を向く。

「ええっ！！　ちょっと待った！！」
秋光は慌てて真理が立っているカウンターに手を付き、彼女に詰め寄った。

「待った、じゃない！　何回も言っているでしょう？！　『真理さん』　って呼んだら、初夜はお預けって！」
「だ、だって、クセでさぁ！」
「毎日言ってるのに、毎日呼ぶもん！　お願い利いてくれる気なんて無いんでしょう？！！」
「そんな事無いよ！　あるってば！！」
「明日、結婚式なのに！　結婚式の前日までに直す、って、約束したじゃない！」
「ご、ごめんっっ！！　今、気を抜いていて、つい！」
「もし明日も『真理さん』　って呼んだら、本当に初夜はお預けだ

からね！！」

「それだけは勘弁！　明日の為に一ヶ月我慢してるんだからっ！！

・・・勝手にしてくれ。

おそらく今、そばに尊でも居ようものなら、間違いなく眉をひそめてそう言ったに違いない。

以前真理を競い合った仲ではあるが、今では秋光と良い知人関係を築いている。秋口くらいから数回一緒に飲みに行った事もあるようだ。

尊自体が、今、若菜とうまくいっている。

もしかしたら来年当たり、立花小児科の医師同士が結婚してしまうかもしれない。

「い、いや、明日の為、ってのはおかしいけどさ！　でも、この一ヶ月忙しかったし、色々準備とか打ち合わせとか・・・。だから、ほら、・・・するコトもしてないしっ！」

言い方がおかしかったか？　と思い直し慌てて言い直す秋光だが、言えば言うほどおかしくなってくるような気がする。

「だからーぁ、えーと、何言ってんだオレっ、だからね、オレとしては、明日がすご〜く楽しみで、・・・いや、別に、一ヶ月ぶりにデキルから楽しみなんじゃなくてっっ、明日、結婚式だし！！」

明日はプロポーズから一年かかって、やっと二人の結婚式だ。

客足も途絶え、真臣も寝てしまった二十時過ぎ。真理は秋光に会いにきていたのだ。

結婚式の翌日から二人、いや、真臣も入れて三人で新婚旅行の予定だが、取り敢えず式当日の夜は、式を挙げるホテルのスイートに二人で泊まる事になっている。

もちろんそれが「新婚初夜」　という物になる訳だが・・・。

「初夜」　に当てはまるようなコトを、とっくにしてしまっているような関係なので「今更そんな楽しみにしなくても」　と言われればそれまでなのだが、しかしやっぱり結婚式の後で、おまけに「新婚初夜」　と言われれば気分も違う。

この一ヶ月、秋光が言う通り式の打ち合わせや新居の準備などで本当に忙しかったのだ。

真理も秋光も仕事がある。その忙しさに押されて、「明日」　「明日」　と言っているうちに肌を重ねる時間など取れなかったのが実情だ。

明日は結婚式の後、やっとゆっくりできる。

それも二人っきりで。

それを楽しみにしない男が、どこに居る・・・・・。

「でも、秋光、約束守ってくれないから初夜ナシだからねっ」

真理が大きな目を半分に細めて、冷たく秋光を見る。

「まりさぁん・・・」

「ほら！　また『さん』　つけた！」

秋光はバシッと音がする勢いで、自分の口をふさいだ！

「夫婦になるんだから、呼び捨てにしてね？　お願いよ？」

一ヶ月前、真理が恥ずかしそうにそう言ったのだ。

昔は「オネーサン」　だった。それが「真理さん」　に変わった時、なんともくすぐったかったのを覚えている。

秋光が自分の気持ちを伝えてくれて、「真理さん」　に変わった。

そして今度は、「夫婦」　という関係になる。

「真理」　呼び捨てでそう呼んで欲しい。
真理は秋光に、そうお願いをしたのだ。
「私も、『秋光』　って呼ぶからね」　恥ずかしそうに、ちょっと赤くなって、そう言った真理が、すごく可愛らしかった。

しかし・・・・・。

照れくさいのか、癖なのか、わざとなのか・・・いや、それは無い。
秋光の「真理さん」　呼びは変わらない。
そして2週間前、真理から爆弾発言。
「結婚式までに呼び方を直してくれなかったら、初夜はナシだからね」

これには秋光も大ショックだ。
最近忙しく、真理とゆっくり肌を重ねる事も出来てはいないのに、やっとゆっくり出来る初夜に「夫婦として初めてするイトナミは無し」　と告げられたのだから。

「・・・夫婦になるんだから・・・。照れないでよ。ホントにナシにしちゃうよ?」
真理がちょっと照れた声を出して、上目使いに秋光を見る。
その目は可愛いが、妙に色っぽい。当然だが一ヶ月お預けの秋光は、どうももやもやしてしまう。

これで?お預け?くらったら、オレ死ぬぜ。マジで・・・。

秋光はコホンとひとつ咳払いをすると、カウンターの上に置かれた真理の両手を握った。

「真理っ」

真理の目を見詰めて、勢いで呼んでみる。
意外にスルリと口から出たので、言った本人が驚いた。

「真理、明日、結婚式だし、頑張ろうな」
何を？　と訊かれそうだが、秋光は必死で言ってみる。
細まっていた真理の目が、ぱっと大きく開き、嬉しげな形を作った。

「もう一回、呼んで！」

「真理」
「もう一回！」
「真理」
「もう一回！」
「まりっ」
「もういっかいっっ！！」

秋光は腕を伸ばし、カウンター越しに真理を抱きしめた！

「あいしてるよっ！　まりっ！！」
「・・・・・」

ソコまでやるとは思わず一瞬言葉を失ったが、真理はすぐに秋光の背へ腕を回し、幸せそうに囁いた。

「あいしてるわっ。秋光」

真理に呼び捨てにされると、何となく身震いがしてしまう自分が居る。
秋光は心に誓った。
よしっ！　頑張るぞ！！
・・・何を？
は、言いっこなしで・・・・・。

番外編2「結婚式前日の太陽と星」

―　ＥＮＤ　―

番外編・2　（結婚式前日の太陽と星）（後書き）

こんにちは。玉紀　直です。

勝手にしてくれ・・・。

尊さん並にそう言われてしまいそうです。（笑）

本編では絶対になかった、べたべたな二人をお届けしました。

今、ちょうどサイトのほうの「パラレル版」で、正臣君と真理ちゃんのベタベタをやっているものですから、何か変な気分。（笑）

やっぱりね、このくらい幸せになりますよ・・・。っていうのは書いておかないと。

苦しい思いをしてきた真理ちゃん。

それを見守り続けた秋光君。

絶対に幸せになります！

さて、3本あります、とお伝えしてきました番外編。

最後の3本目ですが「あれ？」っていう内容です。

「なにこれ？」って思うかもしれない。

次回は「太陽の愛　月の恋」からこの話に入ってくれた方々、そして、秋光君と幸せにはなったけど、今でも正臣君と真理ちゃん「太陽と月」の愛を信じてくれている人達に見て欲しい話になります・・・。

ではまた・・・。

こっそり更新します。

番外編・3　（もうひとつの太陽と月）

「はぁーい、校門閉めますよぉー！」
良く通る、ソプラノ系の綺麗な声。
私立城南高校の朝は、？この声？から始めるのだ。
ガラガラガラガラ・・・・・。
油を差したばかりなのか、軽々と校門が閉まる。実際、今、閉めているのは女生徒。最後の声賭けをした三年生だ。
肩にかかるストレートの髪。身長は低く小柄。
左腕に？風紀委員長？の腕章。

「今日も遅刻者は無しか？　瀬川」
瀬川、と呼ばれた女子生徒と同じく、校門で遅刻者のチェックをしていた風紀顧問の川村が、訊くだけ無駄な質問をしながら近寄ってきた。
「当たり前ですよっ。遅刻なんて私が出しませんっ」
明るい笑顔で答える彼女。
城南高校、朝の恒例行事。？遅刻チェック？を行う風紀委員長。
瀬川マリだ。
「瀬川が頑張ってくれるから、春から本当に遅刻が無いよ。うちの高校は昔から本当に遅刻に厳しいから、生徒達も風紀委員長様々だろうな」
顧問の称賛を受け、マリは照れくさそうにちょっと舌を出して笑った。
真面目で明るい風紀委員長。毎日明るい笑顔で校門に立つ彼女は、密かに下級生達の人気者だ。

「今日も遅刻は無し・・・と」
チェックボードに?◯?を書く。何となくこの瞬間が誇らしい。
満足げにマリがそれを眺めていた時、ガシャンッ・・・という金属音が聞こえた。
それは恐らく、校門が揺れ動く音。何だろうと思いマリが振り向く。
「・・・!」
彼女は一瞬、大きな目を更に大きく見開いて、その光景を見詰めた。
校門の上から、きらりと光る物が落ちてきたのだ!

なに・・・?!

マリが目を見開いているうちに、?それ?は校門の中へ下り立った。

それは、一人の少年。

背の高い少年。恐らく百八十位はあるだろう。
制服は着ているものの、詰襟のボタンは全て外れ、中のシャツが見えている。
それよりも目を引いたのは、少年の髪の色。
ブロンズ系の金髪。左側にグレーのメッシュ。
さっきキラリと光ったのは、どうやら少年の髪の毛らしい。

わっ!　素行の良くない方々系?!　マリはちょっと緊張する。
この手のタイプはハッキリ言って苦手だ。
しかし、校門が閉まってから入ってきたのだ。これは遅刻になるだろう。
遅刻者には生徒手帳を出してもらわなければならない。マリは緊

張してゴクッと空気を飲み込んだ。

少年は先に鞄を投げ込んだらしい。落ちた鞄を拾い上げ、バンバンと砂埃を払うと、自分を見ている視線に気付いて顔を上げた。

少年と目が合ったマリは、もちろんビクッとしたがこれは風紀委員の仕事なのだ！　まずは遅刻を伝えなければ始まらない！

「あっ・・、あのっ、あなたっ！！」

「こら！　立花！　遅刻しておいて、何をセコイ事してるんだ！！」

マリが話しかけようとした瞬間、顧問の川村が少年に声をかけた。

「あ、先生。おはようサン」

「何が『おはようサン』だっ。校門は閉まっているだろう？　遅刻だぞ、遅刻っ」

「えぇー、勘弁してよー。無遅刻、無欠席、無早退、三冠目指してるんだからさぁ」

「遅刻は、遅刻」

「うちのコンビニの割引サービス券あげるから」

「教師を買収するな」

「じゃぁ、ウチのじーちゃんの小児科で、先生のところの娘ちゃんが予防接種受ける時、順番を優先してくれるように頼んであげるから」

非常に魅力的な取引条件ではあったが、やはり教師としてそれに乗る訳にはいかない。川村は少年の頭をポカッと一発叩くと、目を大きく開きながらこのやり取りを見ていたマリに向き直った。

「遅刻チェック表に書いておいてくれ。遅刻者一名。二年二組だ」

「せ、先生のクラスですね」

マリはチラッと、叩かれた頭を押さえる少年を盗み見てから、チェックボードにボールペンを走らせる。

「名前は、立花　真臣だ」

言われた通りに書いていたマリは、名前の漢字を訊こうと顔を上げ、ビクッと身体を震わせた！
少年本人が、いつの間にか自分の真正面に立って、自分の手元を覗きこんでいるのだ。
「普通の『立花』　に、真実の『真』　それと一般的な『臣』　解る？」
「わ・・・わかるっ」
マリは急いで顔を逸らし、チェックボードに視線を落とす。すると、目の前の真臣がクスッと笑った。
「そんなにおっかながんないでよ。別に取って食いやしないから」
くっ、食われたくないわよぉ！！
こんな風貌の少年に「おっかながるな」　と言われて「はい解りました」　と答えろと言う方が無理だ。
見るからに動揺しているマリを、見るに見かねた川村が笑いながら近付いてきた。

「安心しろ、瀬川。立花はな、こんな髪はしているが特に問題のある奴じゃない。成績もいいんだぞ。今の二年生の中では『国立ストレート間違いなし』　って言われている唯一の奴だ」
そう言いながら川村は、真臣の金髪を引っ張る。
「だからー、いい加減、この金髪は何とかしろよ。こんな髪してるから、お前、誤解されるんだぞ」
すると真臣は、ちょっと照れくさそうに髪を掻き上げた。
「父さんがやったんだよ。そうしたら母さんも気に入っちゃってさ。まっ、俺も気に入ってんだけど」
「内申の事も考えろ。医者になりたいんだろ？　おじいさんの病院を継ぐって言う夢があるなら、いつまでも馬鹿な事はするな。ちゃんと考えろ」
「・・・はい・・・」

真臣は素直に返事を返した。

何となくそれを呆っと眺めてしまったのはマリだ。どうやら見た目よりはしっかりとした少年らしい。

すると真臣がいきなりマリに目を向け、頭にポンッと手を置いた。

「あんた、ちっちぇーなぁ、何センチ？　百五十あんの？」

「そ、そのくらい、いいでしょっ。ほっといてよ」

「ウチの母さんもちっちゃいんだよな。アンタと同じくらい」

「そっ、そぅ・・・」

だから何なのよ！　関係ないでしょう？　そんな事！！

「父さんもさ、俺より小さいんだ。まぁ、それはしょうがないんだけど。・・・あっ、ウチさ、コンビニやってんだ。買い物来てよ。サービス券やろうか」

「いっ・・・いらないっっ」

なんなの！　こいつっっ！！

マリが知らず知らずに、警戒心剥き出しで真臣を見る。

それを感じて真臣はちょっと苦笑いをした。

「真臣。何やってんのさ」

その時校舎から、一人の少女が歩いてきた。

その少女を見て、マリはギョッと一歩引きそうになる。

真臣と同じような金髪。胸まで大きくカールした髪。着崩した制服に少々濃い化粧。

「よぉ。マコ」

「何さ？　遅刻？　何やってんの、珍しい」

マコと呼ばれた少女は、ちょっと煙たそうにチラッとマリを見た。

「いやぁ、父さんに店の軽トラで送ってもらったんだけど、間に合わなかった。お前こそ珍しいじゃん。朝から学校に居るなんて」

「アンタんとこの母さんに、うちのパパが怒られたんだよっ。アタ

シの素行が悪すぎる、って。・・・ったくぅ、何でウチのパパとママは、アンタのとこの母さんに弱いんだろうねっ」

「高校の先輩後輩だったらしいしさ。その辺の事もあるんじゃねぇ？　ウチの母さんは強いぞぉ。ハッキリ言って父さんより強いぞ。・・・まぁ、ウチの父さん、婿養子だし。・・・それは関係ないかなぁ？」

真臣は頭の後ろで両手を組んで声を上げて笑ってから、川村を振り返った。

「じゃぁ、先生。俺、教室に行くよ」

「おぅ。まぁ、今日は勘弁してやるから、とにかくその髪、何とかしろよ」

「らっきー。サンキューな、先生」

真臣は嬉しげにそう言うと、鞄を小脇に歩き出そうとしたが、思いついたように再びマリを振り返り顔を覗き込んだ。

「あんた、名前、なんてーの？」

「え？」

「名前」

マリはちょっと引きながら、小声で答える。

「・・・せ・・、瀬川　マリ」

「マリ？」

真臣は驚いた顔をしてマリの顔を見詰めた。

そしてフッと笑うと、マリのサラサラの髪に指を通して、スッと梳くように撫でる。そんな事をされるとは思わなかったマリがビクッと震えた。

「よろしくな。ちっちゃいセンパイ」

その笑い方が、どこか冷たくてキレイで・・・、マリは一瞬、不覚にもドキッとする。
しかしそれを打ち消すように、バインダーを片手に川村を振り返った。
「先生、私、バインダーを風紀委員室に置いて、教室に戻りますからっ」
真臣の横をスッと通り抜け、逃げるように走り出した。

何？　あの二年。
やだなぁ、何か、怖い・・・。
そう考えながらも、何となく気になりチラッと振り向く。
振り向いたマリの目に映ったのは、自分の姿をジッと見詰める真臣の姿だった。

――――でも・・・、何処か、気になる・・・。

「何見てんの？　真臣」
マコに声をかけられ、真臣はずっと見詰めていたマリから目を逸らした。
「・・・笑顔がいいな。・・・と思ってさ」
「はぁ？」
真臣はマコを追い抜き歩きながら、ボソッと呟く。
「・・・太陽みたいで・・・」

微かな笑顔を作って、再び校舎へ入るマリの後ろ姿を見詰める。

冷たい。月のような、キレイな目で・・・・・。

――太陽の光を浴びて、月は輝き始める・・・。

太陽と月の恋は

まだ、終わらない・・・――

番外編３「もうひとつの太陽と月」

―　ＥＮＤ　―

番外編・3　（もうひとつの太陽と月）（後書き）

こんにちは。玉紀　直です。

なんだ？これは？でしょ？

番外編を考え始めて、これが一番書きたかったような気がしてます。（笑）

真臣君の未来。

結ばれる事無く、その幸せを掴むことなく砕けた、月の忘れ形見です。

「星の雫」　が完結しても尚、正臣君を支持し続けてくれる方々に「正臣は死んでない」　と感じて欲しくて書きました。

・　・勝手な言い分ですけどね。

マコちゃん。

解りますか？

達也君と亜子ちゃんの娘です。

お話の中でも、４歳児検診を受けていたり、正臣君と同じ幼稚園に通っていたりしました。

色々と真臣君のその後や、会話の中に真理ちゃんや秋光君の事なんかも出てきたので、楽しんで頂けたかな？　なんて思っています。

さて、予定していた番外編。

３本を無事終えました。

これにて、本当の完結となります。

・　・でも、忘れた頃になんか書いちゃうかも？（笑）

番外編にまでお付き合い頂き、本当に有難うございました！！

感謝をこめて。

玉紀　直

＊＊連載を終了した３／３０分～頂いたｗｅｂ拍手のお返事を、活報のほうに掲載させて頂きます。

数日かかるとは思いますが、ちょくちょく見に来て頂けると嬉しいです。

とりあえずは「活動報告」の方に３／２７～２９まで、ｗｅｂ拍手で頂いたコメントのお返事を掲載させて頂いています。

この間にコメントを下さった方。覗いてみて下さいませ。

ｈｔｔｐ：／／ｍｙｐａｇｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｍｙｐａｇｅｂｌｏｇ／ｖｉｅｗ／ｕｓｅｒｉｄ／２８２５４／ｂｌｏｇｋｅｙ／３５１９５／

沢山の拍手を、いつも有難うございます！

番外編・４　（初夜）（前書き）

このお話は【Ｌｏｖｅ　Ｓｅｌｅｃｔ】となります。
？Ｒ－１８ヴァージョン？でもお楽しみ頂けます。
詳しくは「あとがき」で！

番外編・４　（初夜）

「嬉しいナァ・・・」
秋光の唇が、真理の左手薬指を咥えた。
左手の薬指。ゆっくりと唇から抜いた所に光る指輪。お揃いの指輪が、彼の指にもはまっている。
そう。結婚指輪だ。

「やっと・・・、この日になったんだ・・」
ベッドに腰掛ける真理の前に膝を付いて屈み、左手を握ったまま、裸の彼女を見上げる。
「恥ずかしいわ・・・何だか」
真理はちょっと赤くなって、秋光を見下ろしたまま首を横に傾けた。
真理自慢のキレイなストレートヘアが、肩に着くギリギリの長さでサラリと揺れた。

シニョンを付けられたり巻かれたり。ワックスやクリームなどで固められていた髪も、先ほどバスルームで綺麗に洗い落とし、ご丁寧にドライヤーで乾かしたので、今はキレイないつものサラサラヘアだ。

「真理・・・。凄く綺麗だった・・・」
秋光は空いたもう片方の手を伸ばし、真理の髪に差し込みながらスッと梳く。
「ウエディングドレス、似合ってた」

今日は二人の結婚式だったのだ。
一年前にプロポーズを受け、真理と秋光は、やっと今日、夫婦になった。
ただ、真理は?立花小児科医院?の一人娘。病院の将来的な事も考え、秋光が婿養子という形で「立花」　姓を名乗る事になった。
よく?婿養子?というと、男のプライドを取られたような気がして嫌がる男性は多いようだが、秋光の場合は「真理と居られるなら何でも良い!」　と即話は決まった。

「ドレスが借り物じゃなかったら、着たまま初夜したかったなぁ」
不謹慎な事を言いながら、秋光はベッドの上に肩膝を乗せ、淵に座っていた真理の身体をゆっくりとベッドの上へ倒す。
ぱふ・・・。っという柔らかい音と共に、真理の身体が緩くベッドの上で弾み、案の定、咎めるような真理の顔が秋光を見上げた。
「もぅっ、ヘンなＤＶＤの観過ぎっ。ドレスのままなんて出来る訳がないでしょうっ」
「健は『した』　って言ってたぞ。コスプレ好きだからなぁ。あそこ」
「・・・・・」
真理は少々言葉を失う。健といえば、親友である綾の旦那だ。
綾ってば・・・そんな事してるのぉ?
何気なく聞いてしまった親友の性生活。返す言葉が見つからず、真理は赤くなってしまった。
もっとも、スイートルームの暗くした寝室の中なので、あまりその色も分からなかったかもしれないが・・・。

「あっ、じゃぁさ、真理っ、今度ナース服着てよ。あれなら自分持ちだしっ」
「あ〜き〜み〜つ〜ぅっ」

怒る一歩手前の声を出され、秋光はハッと黙る。
新婚初夜に喧嘩はシャレにならない。
それがこじれて「おあずけ！」などなったら、もっとシャレにならない。

「まぁ、何でもイイや」
秋光は誤魔化し笑いをしながら、真理に身体を重ねる。
「脱がしちまうのは同じだもんな」
真理の腰の辺りをまさぐり、その手を徐々に上へ上げる。
結婚式の準備などで忙しく、二人が身体を重ねるのは実に一ヶ月ぶり。待ち侘びた感触に真理の身体も震えたが、秋光の精神状態も大いに昂ぶった。

「嬉しいなぁ・・・」
秋光はもう一度最初の言葉を繰り返す。
すると真理が冗談交じりに言った。
「一ヶ月ぶりなのが嬉しいの？」
「まりっ。ばかっっ」
秋光は軽く笑って、真理の唇にキスをした。

「真理と夫婦になれたのが嬉しいんだよっ」
ちょっと照れる。
しかし、本心。
好きな女性を一生自分の物に出来た喜びは、経験した男にしか解からない。

「私も・・・嬉しい」

太陽が微笑み、星が笑う。

結ばれた太陽と星の初めての夜に。
輝く月の祝福を。

「あきみつっ・・。はやくっ」
「言われなくてもっ」

・・・スル事は、スルのだが・・・。

番外編・４　（初夜）（後書き）

このお話は【Ｌｏｖｅ　Ｓｅｌｅｃｔ】となります。
？Ｒ－１８ヴァージョン？でもお楽しみ頂けます。
目次ページにある、
「玉紀　直の恋愛小説サイト・恋愛ｍｕｓｅｕｍ」から、
小説タイトル「Ｌｏｖｅ　Ｓｅｌｅｃｔ」へお進み下さい。

「Ｒ－１５でオッケーよ！！」と言う方は、ここでクローズ！！！
お好みで、セレクトして下さいね。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6893g/

星の雫～太陽の愛　月の恋～

2010年10月10日18時47分発行